長崎県文化財調査報告書　第189集

肥賀太郎遺跡

県道愛野島原線上流付替工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

長崎県教育委員会

肥賀太郎遺跡から普賢岳を望む

発刊にあたって

本書は，県道愛野島原線上流付替工事に伴い，国土交通省雲仙復興事務所の委託を受けて長崎県教育委員会が行った肥賀太郎遺跡の発掘調査報告書です。

発掘調査では，縄文時代晩期を中心とした約12,000点もの土器・石器が出土しました。なかでも米などの穀物に発生するコクゾウムシが土器に圧痕として確認されたことは，縄文時代における穀物の存在と農耕の可能性を示唆する発見であり，島原半島の歴史を解明していく上で重要な成果といえるでしょう。

肥賀太郎遺跡の発掘調査成果が，学術的資料として活用され，文化財の愛護に役立てていただければ幸いです。

最後になりましたが，本書の刊行にあたり，発掘調査や整理作業に従事された方々をはじめ，多大なご尽力をいただきました関係者各位に対しまして衷心から厚く御礼申しあげます。

平成18年３月31日

長崎県教育委員会教育長

立石　　暁

例　　言

1．本書は，県道愛野島原線上流付替工事に係る肥賀太郎遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は長崎県教育委員会が主体となり，島原市教育委員会の協力を得て，平成17年９月20日から同年12月20日にかけて実施した。

3．調査関係者は次の通りである。

調査担当　長崎県教育庁学芸文化課　文化財保護主事　和田政則
文化財保護主事　川口洋平
文化財保護主事　中尾篤志
文化財調査員　平田賢明
㈱埋蔵文化財サポートシステム　松崎卓郎

4．調査区周辺の地形測量・土層実測および航空写真は㈱埋蔵文化財サポートシステムに業務委託した。遺物出土状況のドットマップ作成は，松崎および和田・川口・中尾・平田・上川路直光・高塚輝美・中田裕樹・多々良正人・松本則子・松本由紀子・安達信行・宮川ひろみが行った。発掘現場での写真撮影は中尾・平田が行った。

5．遺物の実測は，土器については中尾および福山留美・今利陽子・久保美由紀・田中恵美・高橋享子・小川博美・浜崎美加・成田万里・中村千春・栄喜万里・野島愛子・松尾咲江・頭島直美・末吉紗矢香が行った。石器については，中尾・平田・竹田ゆかりが行った。トレースは中尾・竹田・浜崎・和田美加・横田愛子が行った。遺物写真撮影は平田が行った。製図作業やデータ整理は一瀬裕子・一瀬勇士・林田志保美の協力を得た。また，石器実測およびトレースの一部については，㈱国際航業に業務委託した。

6．本書に掲載した遺物・写真・図面は長崎県教育庁学芸文化課資料整理室で保管している。

7．発掘調査から報告書作成に至る過程で，以下の方々にはご助言・ご協力を賜った。

土橋啓介（島原市教育委員会），安楽哲史（雲仙市教育委員会），山口勝也・渡辺康行・松尾泰子（以上，㈱埋蔵文化財サポートシステム），高野晋司・宮崎貴夫・川道寛・古門雅高（以上学芸文化課），山崎純男・片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター），仙波靖子（熊本大学文学部４回生）

特に，山崎氏・片多氏には，レプリカ法による土器圧痕の観察方法をご教示いただくとともに，肥賀太郎遺跡出土土器圧痕に関する玉稿を執筆していただいた。また，仙波氏からは，肥賀太郎遺跡出土土器圧痕リストや走査電子顕微鏡写真の提供を受けた。あつく御礼申し上げます。

8．本書の編集は，竹田・平田の協力を得て中尾が行った。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯……1

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境……2

第Ⅲ章　調　　査……4
(1)　調査の方法……4
(2)　日誌抄録……4
(3)　基本土層……14

第Ⅳ章　遺　　物……15
(1)　遺物の分布……15
(2)　縄文土器……22
(3)　土製品……35
(4)　石器……39

第Ⅴ章　ま　と　め……67

附篇　長崎県肥賀太郎遺跡における土器圧痕の検討……95

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……1
第２図　周辺地形図および周辺遺跡分布図……3
第３図　調査区位置図……5
第４図　グリット配置図……6
第５図　調査区土層図①……7～9
第６図　調査区土層図②……10～12
第７図　調査区土層図③……13
第８図　出土土器分布図……16
第９図　遺物の接合関係①……17
第10図　遺物の接合関係②……18
第11図　遺物の接合関係③……19
第12図　遺物の接合関係④……20
第13図　遺物の接合関係⑤……21
第14図　出土土器実測図①……23
第15図　出土土器実測図②……24
第16図　出土土器実測図③……25
第17図　出土土器実測図④……26
第18図　出土土器実測図⑤……27
第19図　出土土器実測図⑥……28
第20図　出土土器実測図⑦……29
第21図　出土土器実測図⑧……31
第22図　出土土器実測図⑨……32
第23図　出土土器実測図⑩……33
第24図　出土土器実測図⑪および土製品実測図……34
第25図　出土石器分布図①……40
第26図　出土石器分布図②……41
第27図　出土石器分布図③……42
第28図　出土石器分布図④……43
第29図　出土石器分布図⑤……44
第30図　出土石器実測図①……46
第31図　出土石器実測図②……47
第32図　出土石器実測図③……48
第33図　出土石器実測図④……49
第34図　出土石器実測図⑤……50
第35図　出土石器実測図⑥……51

第36図　出土石器実測図⑦……52
第37図　出土石器実測図⑧……53
第38図　出土石器実測図⑨……54
第39図　出土石器実測図⑩……55
第40図　出土石器実測図⑪……56
第41図　出土石器実測図⑫……58
第42図　出土石器実測図⑬……59
第43図　出土石器実測図⑭……60
第44図　出土石器実測図⑮……62
第45図　出土石器実測図⑯……63
第46図　肥賀太郎遺跡と周辺地形……68
第47図　肥賀太郎遺跡出土土器型式組列および1987年度出土土器……70
第48図　島原半島北東部主要遺跡出土土器……72

表　目　次

第１表　土器観察表①……36
第２表　土器観察表②……37
第３表　土器観察表③……38
第４表　石器観察表①……64
第５表　石器観察表②……65
第６表　石器観察表③……66
第７表　出土石器組成表……73

図　版　目　次

図版１　肥賀太郎遺跡から北西を望む……75
図版２　発掘調査風景①～③……76
図版３　遺物出土状況・深鉢出土状況①・浅鉢出土状況①……77
図版４　深鉢出土状況②・浅鉢出土状況②・石器出土状況①……78
図版５　石器出土状況②～④……79
図版６　出土土器①……80
図版７　出土土器②……81
図版８　出土土器③……82
図版９　出土土器④……83
図版10　出土土器⑤……84
図版11　出土土器⑥……85
図版12　出土土器⑦……86
図版13　出土石器①……87
図版14　出土石器②……88
図版15　出土石器③……89
図版16　出土石器④……90
図版17　出土石器⑤……91
図版18　出土石器⑥……92
図版19　出土石器⑦……93
図版20　出土石器⑧……94

第Ⅰ章　調査に至る経緯

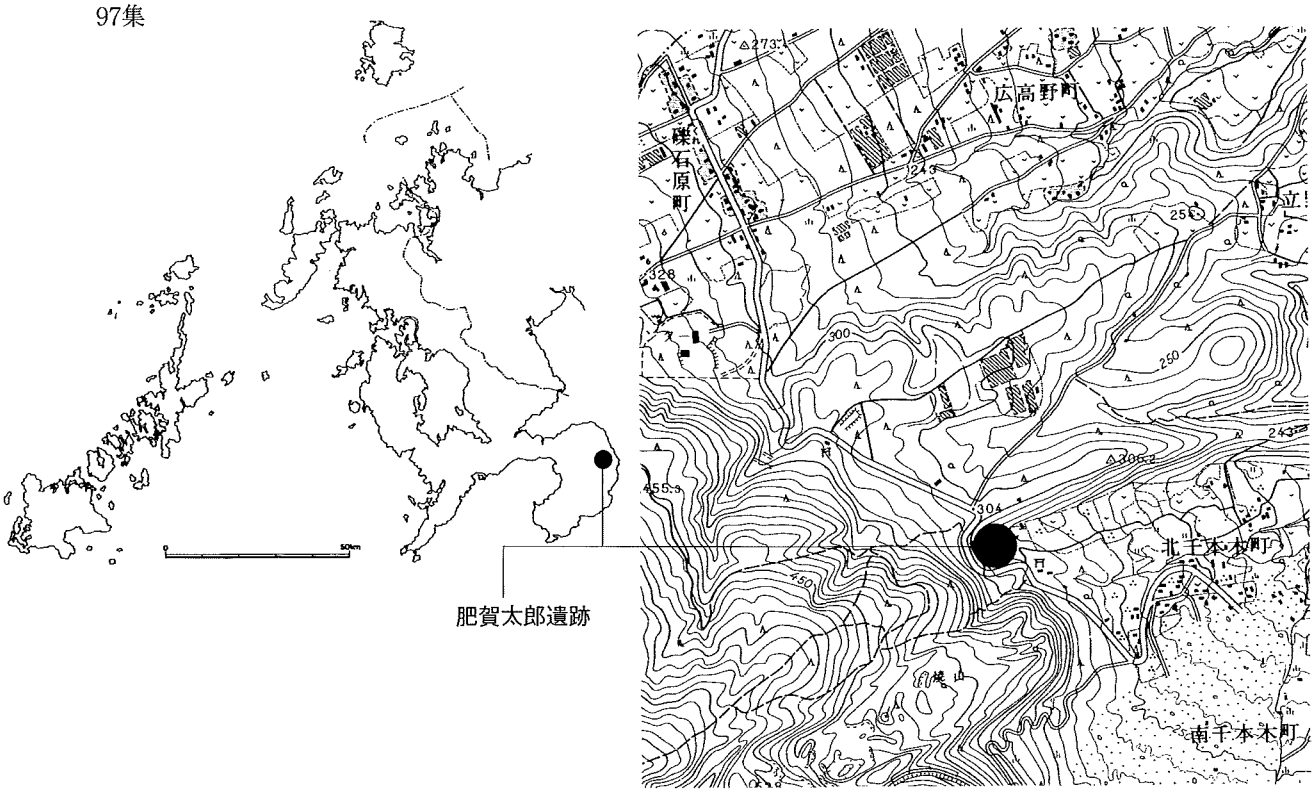
1990（平成２）年，島原雲仙普賢岳が噴火した。噴出した溶岩は火砕流となって斜面を流れ下り，甚大な被害をもたらした。島原市北西部に位置する北千本木地区も，火砕流によって県道愛野島原線が寸断され，交通に支障をきたすこととなった。その後道路は復旧したものの，今後も土石流などにより寸断される可能性があることから，国土交通省雲仙復興事務所では砂防ダムとともに避難道路建設を継続的に行ってきた。

今回発掘調査を実施した肥賀太郎遺跡は，島原市北千本木町地先に所在し，新設の避難用道路と既存の県道愛野島原線の合流地点に位置する。この遺跡は，1987（昭和63）年度に県道愛野島原線の拡幅に伴って発掘調査が行われ，縄文時代晩期を中心とした約3,700点の遺物が出土している（宮崎・伴編1990）。今回の工事予定地は広範囲にわたって遺跡と重複している可能性が高いため，事業主体の国土交通省雲仙復興事務所と協議を行ったところ，工事の計画変更は難しく発掘調査による記録保存をとることとなった。そこで，工事区域に係る遺跡の範囲を明確にするために，2005（平成17）年６月30日～７月15日にかけて島原市教育委員会主体で範囲確認調査を実施した。その結果，縄文時代晩期を中心とする土器・石器などの遺物が出土し，1,700㎡を対象に本調査が必要であるとの見解に達した。その後も雲仙復興事務所と継続的に協議を行い，長崎県教育委員会主体で本調査を実施することとなった。なお，本調査に際しては作業員の労務管理と機材のリース関連業務および地形測量・航空写真撮影について，（株）埋蔵文化財サポートシステムに業務を委託した。

本調査は2005（平成17）年９月20日～12月20日にかけて実施した。

【文献】

宮崎貴夫・伴耕一朗編1990「肥賀太郎遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報ＸⅢ』長崎県文化財調査報告書第97集



第１図　遺跡位置図（Ｓ＝１/2,000,000，１/25,000）

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

肥賀太郎遺跡の位置する島原半島北東部は，地形的には主として普賢岳を主峰とする雲仙火山群と，その裾に緩やかに広がる火山性山麓扇状地で構成される。雲仙火山群は県内唯一の活火山で，平成２（1990）年から平成７（1995）年にかけての普賢岳災害は記憶に新しい。この火山活動によって噴出した火砕流堆積物や，土石流による火山降下物の二次堆積により，水無川流域や南千本木地区を中心に甚大な被害をもたらすとともに，これらの地域の表層地質を大きく変貌させることとなった（第２図)。このような火山災害は有史以来たびたび文献にも登場しており，寛政４（1792）年には眉山の崩壊により島原が被災するとともに有明海の対岸・熊本にも津波が押し寄せ，「島原大変肥後迷惑」の言葉が残っている。この際の堆積物も九十九島をはじめ眉山の東側に顕著である。

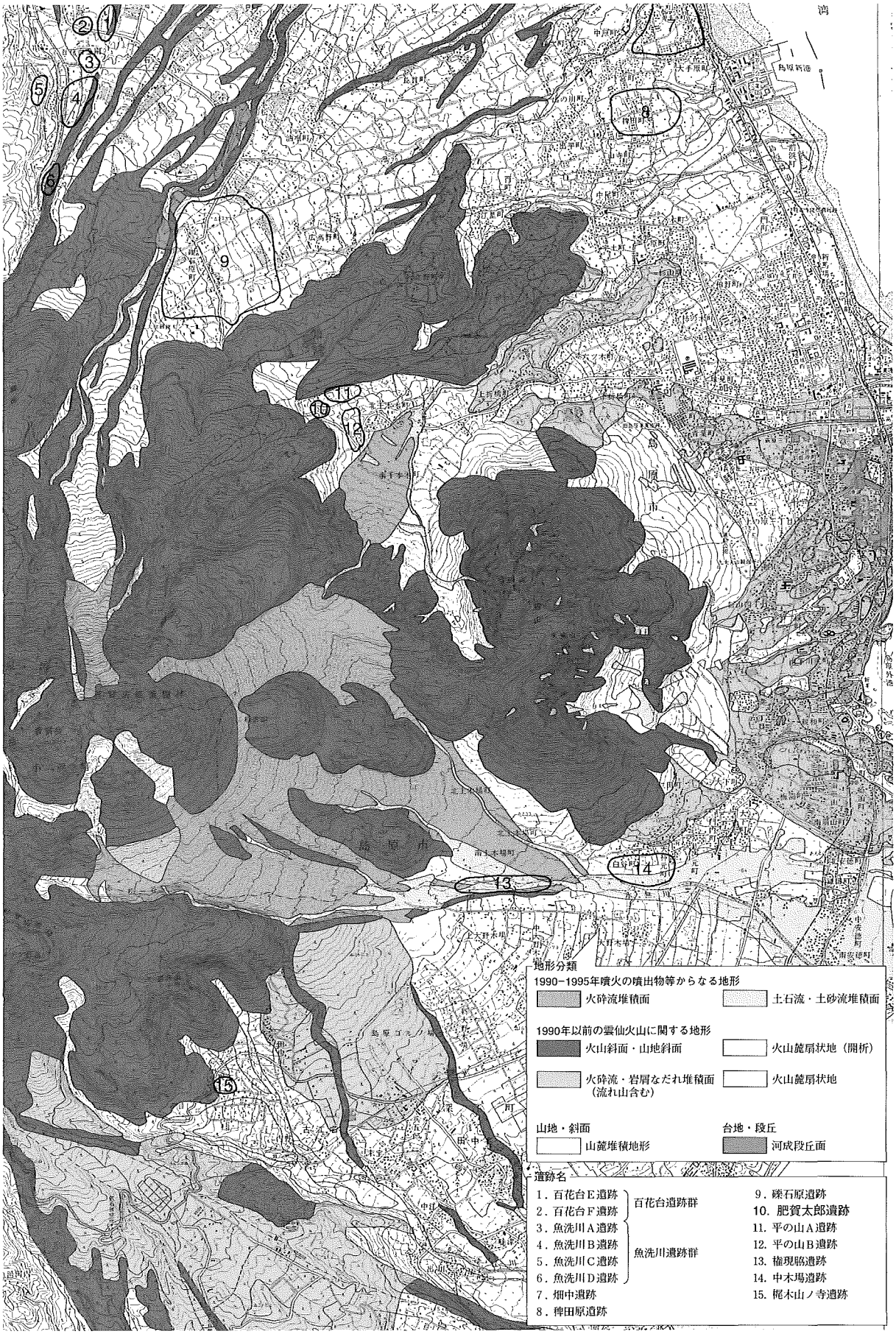
雲仙火山群の裾に広がる火山性山麓扇状地は，雲仙火山の基底を構成するもので，約25万年前の堆積とされる。これらの扇状地を土黒川をはじめとする小河川が開析し，樹枝状に深い浸食谷を形成している。これらの谷によって火山性山麓扇状地は分断されており，雲仙岳から放射状に配列する旧１市16町の行政区分もこの地形によるところが大きい。同様に，先史時代においても，このような独立性の高い火山性山麓扇状地形が遺跡群の動態に影響を与えたことは想像に難くない。

島原半島北東部では旧石器時代以降連綿とした人間の営みが確認できるが，ここでは肥賀太郎遺跡が主として営まれた縄文時代晩期および弥生時代早期に焦点を絞る（第２図・註１)。この時期は遺跡の立地変動が著しい時期で，晩期前半は標高100ｍの比較的低地部に立地する遺跡(畑中遺跡)と，200ｍを越える高所に立地する遺跡（百花台遺跡）の両者が認められるが，後半には高所に立地する遺跡が多くなり（礫石原遺跡・肥賀太郎遺跡)，弥生時代早期以降再び低地部へ進出する傾向があるが（権現脇遺跡)，一方で依然として高所に立地する遺跡も存在する（山ノ寺遺跡）（宮崎・伴編1990)。地理的区分では，いずれの遺跡も火山性山麓扇状地もしくはこれに準じる傾斜地に立地する点で共通するものの，河川による開析地形を考慮すれば，土黒川と湯江川に挟まれた山麓扇状地に百花台遺跡，湯江川と西川に挟まれた山麓扇状地に礫石原遺跡，焼山周辺の小規模な扇状地に肥賀太郎遺跡，水無川と深江川に挟まれた火山斜面に権現脇遺跡・山ノ寺遺跡がそれぞれ存在しており，地形や水系によってある程度区分された遺跡立地の在り方を垣間見ることができる。また，百花台遺跡や礫石原遺跡などはこの時期の拠点集落と考えられており，近年調査が行われた権現脇遺跡とともに，広大な緩斜面を控えた扇状地に大規模な遺跡が営まれる傾向にある。一方で，これら大規模遺跡の周囲にはごく短期間営まれた「小規模集落」が存在し，大規模遺跡との有機的な関係が想定されている（宮崎・伴編1990)。肥賀太郎遺跡は遺跡範囲も比較的狭く，時期も晩期後半にほぼ限定でき，遺構も存在しない点で「小規模集落」に属するが，このような遺跡が本格的に調査された例はほとんど無く，その意味で，肥賀太郎遺跡の調査は周辺遺跡群の動態とその意味を考える上で大きな意義を持つものである。

【註１】 縄文時代晩期は山内清男の定義に則って「亀ヶ岡式並行期」とし，肥後編年の「古閑式」から黒川式並行期までとする。また，刻目突帯文土器は「弥生時代早期」とする。

【文献】

宮崎貴夫・伴耕一朗編1990「肥賀太郎遺跡」『長崎県文化財調査集報ＸⅢ』長崎県文化財調査報告書第97集



第２図　周辺地形図および周辺遺跡分布図（Ｓ＝１/50,000）

第Ⅲ章　調　　査

(1)　調査の方法

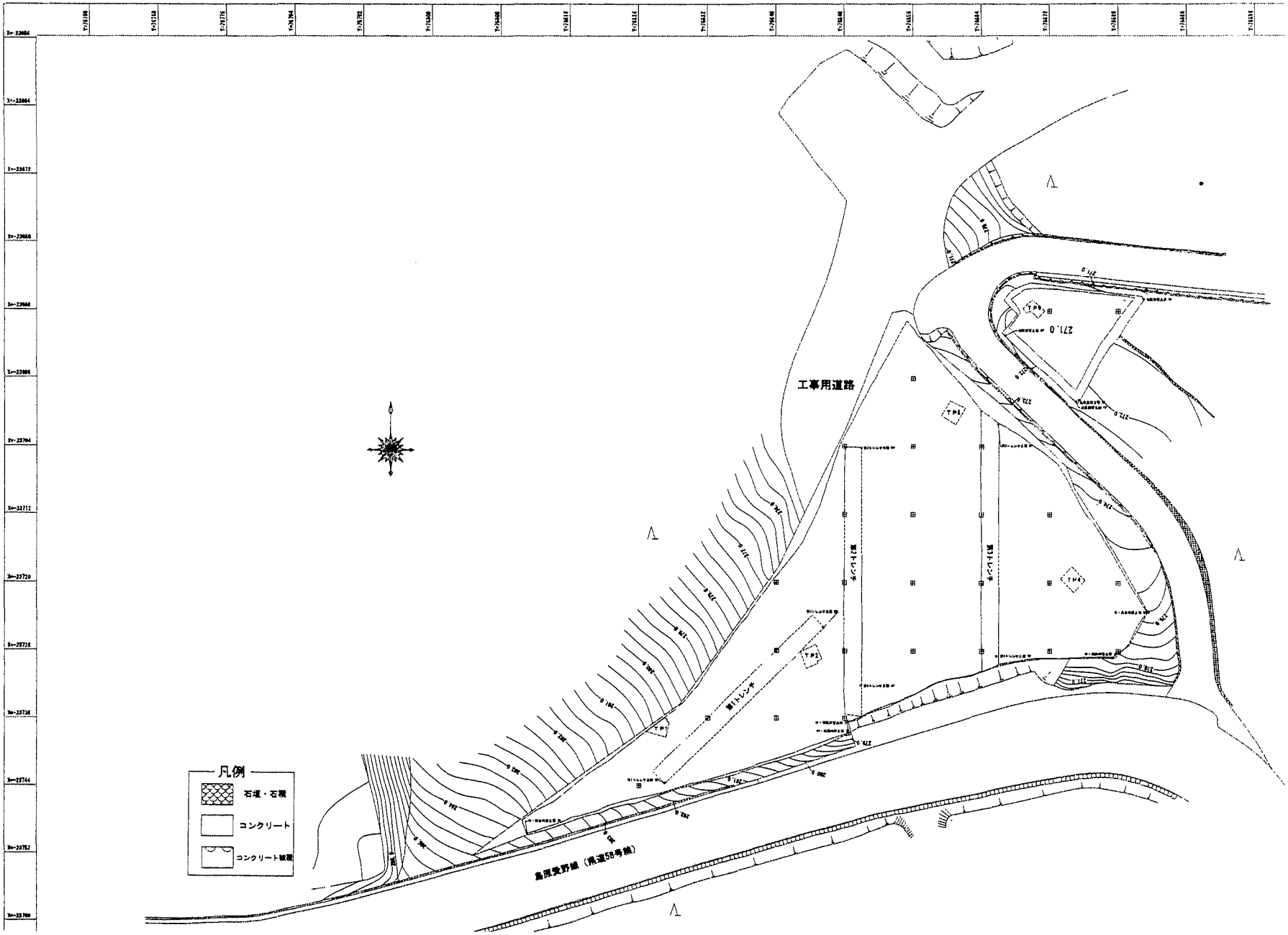
試掘調査の成果により，本調査の対象となったのは1,700㎡である。調査対象地は北側に傾斜する緩斜面で，調査前はヒノキ林であった。工事対象地に沿って略三角形と略方形の調査区を隣接して設定し，それぞれ南区・北区と呼称した（第３図)。この調査区全体に渡って国土座標に則って８ｍ間隔のグリットを設定し，南北方向に北からＡ～Ｊ，東西方向に西から１～11の記号をつけた(第４図)。

試掘調査の所見では，Ⅱ層下部からⅢ層上面にかけて遺物が集中していたことから，本調査では，重機によりⅠ層を除去した後，調査区全体に渡ってⅡ層を手掘りで掘り下げ，Ⅲ層上面を検出した。北区についてはⅡ層～Ⅳ層の撹乱が著しく，撹乱土を除去してⅤ層を検出した。南区ではその後，Ⅲ層以下の土層堆積や遺物の包含状況を確認するために，調査区の傾斜に沿って幅２ｍのトレンチを３本設定し，西から第１トレンチ・第２トレンチ・第３トレンチとした（第３図)。また，北区でも土層確認を目的としたトレンチを調査区東壁・南壁沿いに設置し，それぞれ南北トレンチ・東西トレンチと呼称した。北区では遺物は確認できなかったが，南区では各トレンチを掘り下げた結果，いずれのトレンチでもⅢ層～Ⅴ層上面にかけて遺物の出土が確認できたため，調査区全体をⅤ層上面まで掘り下げた。

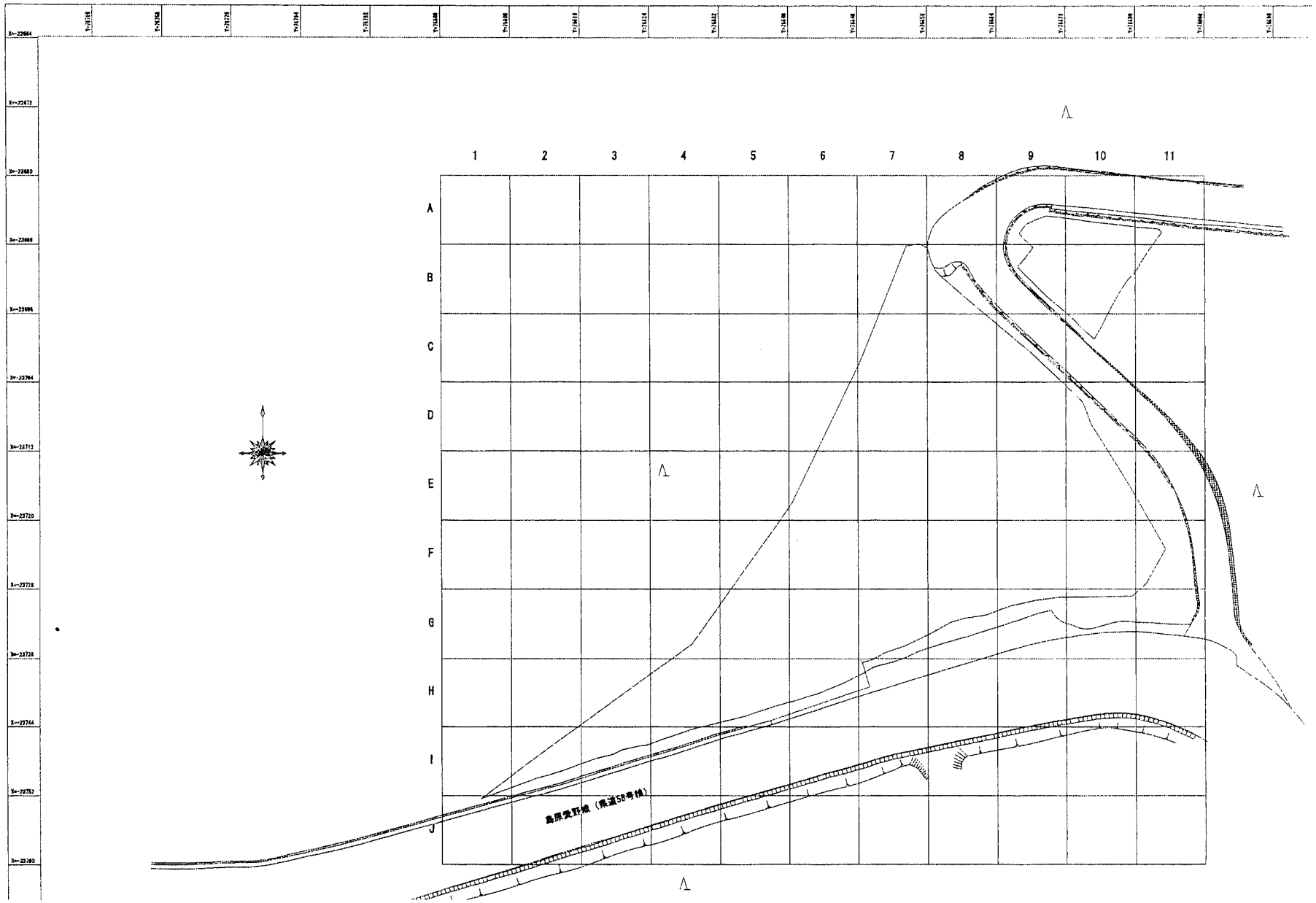
調査に際しては，各層上面で遺構検出を目指して精査を行ったが，ヒノキの樹根やヤマイモ掘削坑などによる撹乱が著しく，遺構の存在は確認できなかった。しかし，遺物は縄文時代晩期を中心とした土器・石器が約12,000点出土した。掘り下げは移植ごてによる手掘りを基本としたが，Ⅳ層下位～Ⅴ層の掘削およびベルトの掘り下げについては，日程が差し迫ったため唐鍬による掘削を行った。水洗選別は行っていない。遺物の取り上げに際しては，基本的に光波測距器により出土地点を記録しながら取り上げたが，指頭の大きさに満たない小型の土器胴部片については，グリット毎・層位毎に一括して取り上げた。

(2)　日 誌 抄 録

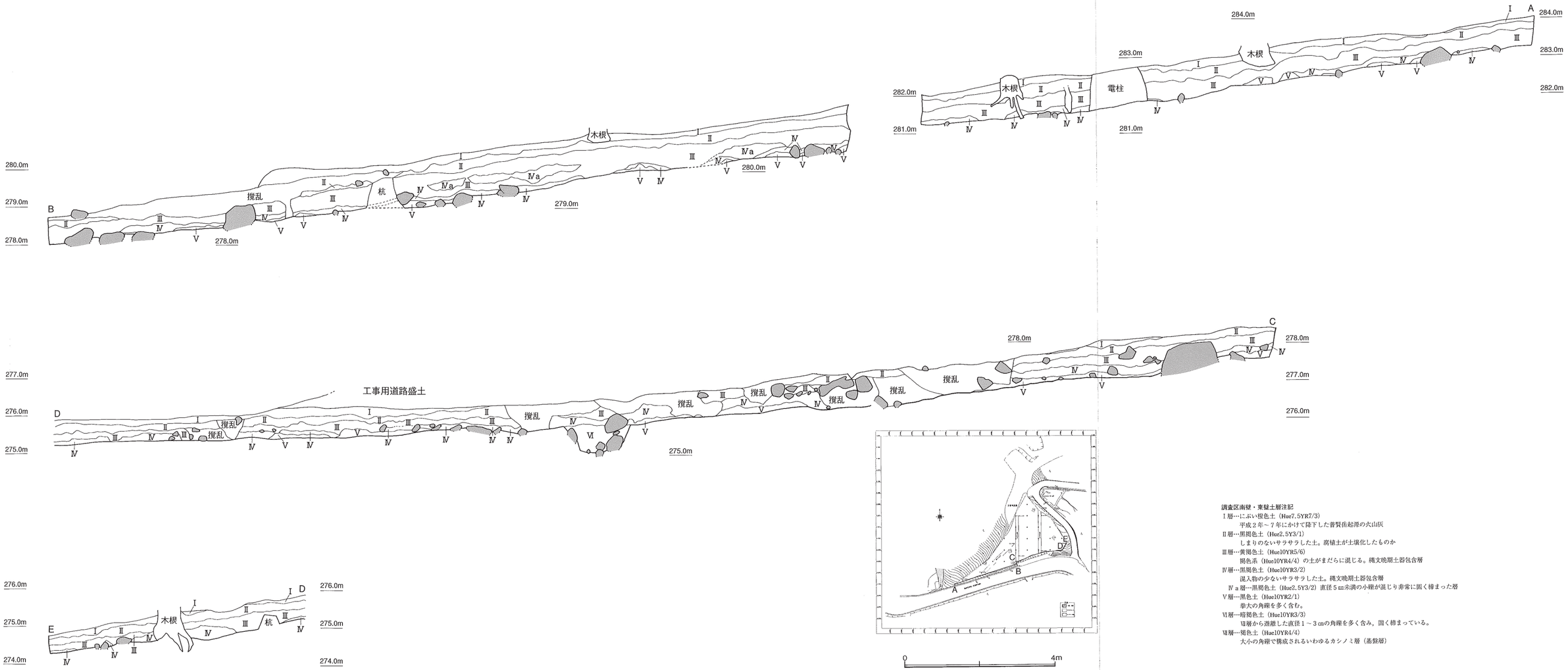
・９月20日…ユニットハウス・簡易トイレの設置。バックホーを搬入し表土剥ぎ開始
・９月26日…作業員による北区Ⅱ層掘り下げ作業開始。縄文時代晩期土器出土
・10月４日…バックホーによる表土剥ぎほぼ終了。調査区全面でのⅢ層上面検出作業開始
・10月７日…調査区内にグリット設置
・10月17日…第２トレンチ掘り下げ開始
・10月24日…北区ほぼ完掘
・10月27日…Ｅ９区～Ｅ10区周辺で縄文時代晩期の大型土器片がまとまって出土
・10月31日…第１トレンチ掘り下げ開始
・11月２日…第２トレンチⅣ層中より縄文時代晩期土器がまとまって出土し，Ⅳ層まで同期の包含層であることを確認
・11月８日…第１トレンチⅤ層より縄文時代早期押型文土器が出土し，同期の包含層確認。第３トレンチ掘り下げ開始



第３図　調査区位置図（Ｓ＝１/600）



第４図　グリット配置図（Ｓ＝１/600）



調査区南壁・東壁土層注記

Ⅰ層…にぶい橙色土（Hue7.5YR7/3）
　平成２年～７年にかけて降下した普賢岳起源の火山灰

Ⅱ層…黒褐色土（Hue2.5Y3/1）
　しまりのないサラサラした土。腐植土が土壌化したものか

Ⅲ層…黄褐色土（Hue10YR5/6）
　褐色系（Hue10YR4/4）の土がまだらに混じる。縄文晩期土器包含層

Ⅳ層…黒褐色土（Hue10YR3/2）
　混入物の少ないサラサラした土。縄文晩期土器包含層

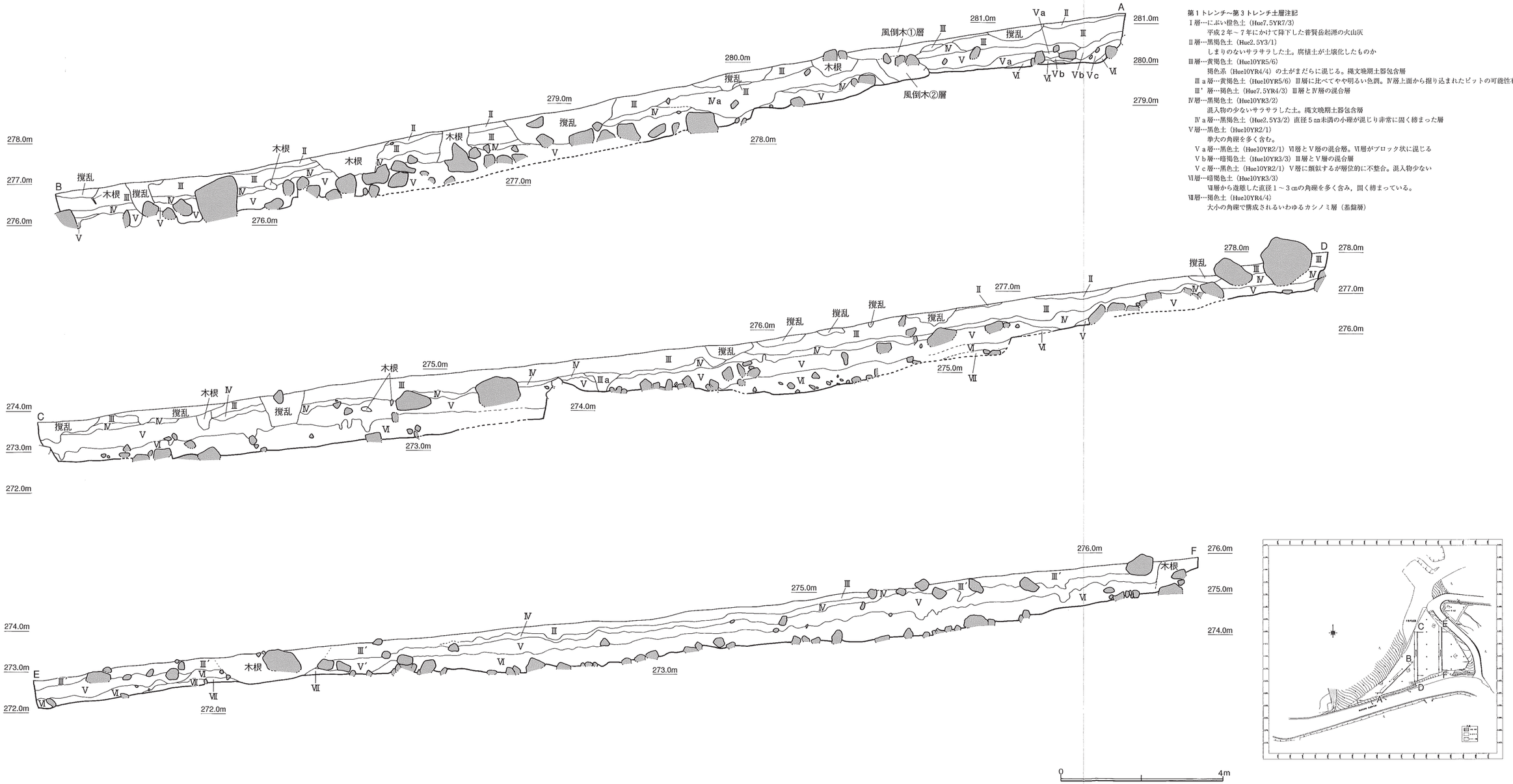
Ⅳａ層…黒褐色土（Hue2.5Y3/2）直径５㎝未満の小礫が混じり非常に固く締まった層

Ⅴ層…黒色土（Hue10YR2/1）
　拳大の角礫を多く含む。

Ⅵ層…暗褐色土（Hue10YR3/3）
　Ⅶ層から遊離した直径１～３㎝の角礫を多く含み，固く締まっている。

Ⅶ層…褐色土（Hue10YR4/4）
　大小の角礫で構成されるいわゆるカシノミ層（基盤層）

第５図　調査区土層図①（Ｓ＝１/80）※アミカケは礫



第１トレンチ～第３トレンチ土層注記

Ⅰ層…にぶい橙色土（Hue7.5YR7/3）
　平成２年～７年にかけて降下した普賢岳起源の火山灰

Ⅱ層…黒褐色土（Hue2.5Y3/1）
　しまりのないサラサラした土。腐植土が土壌化したものか

Ⅲ層…黄褐色土（Hue10YR5/6）
　褐色系（Hue10YR4/4）の土がまだらに混じる。縄文晩期土器包含層

Ⅲ a 層…黄褐色土（Hue10YR5/6）Ⅲ層に比べてやや明るい色調。Ⅳ層上面から掘り込まれたピットの可能性有り

Ⅲ' 層…褐色土（Hue7.5YR4/3）Ⅲ層とⅣ層の混合層

Ⅳ層…黒褐色土（Hue10YR3/2）
　混入物の少ないサラサラした土。縄文晩期土器包含層

Ⅳ a 層…黒褐色土（Hue2.5Y3/2）直径５㎝未満の小礫が混じり非常に固く締まった層

Ⅴ層…黒色土（Hue10YR2/1）
　拳大の角礫を多く含む。

Ⅴ a 層…黒色土（Hue10YR2/1）Ⅵ層とⅤ層の混合層。Ⅵ層がブロック状に混じる

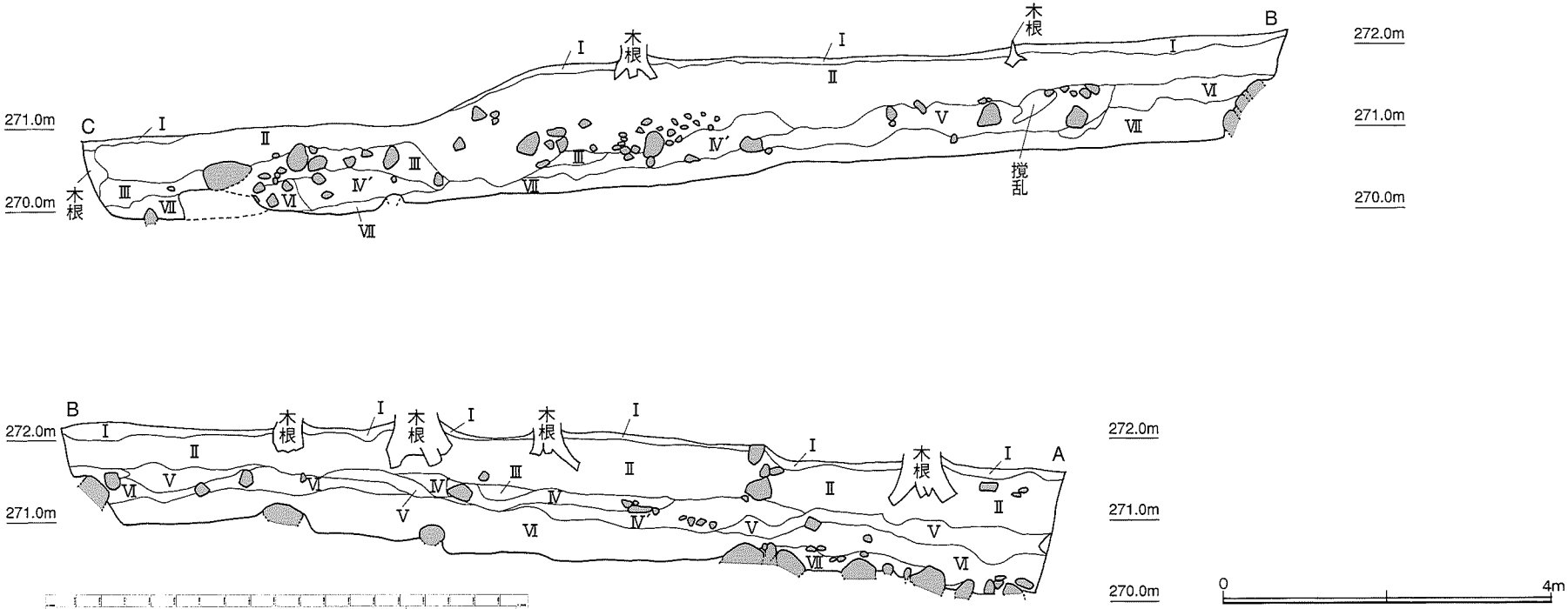
Ⅴ b 層…暗褐色土（Hue10YR3/3）Ⅲ層とⅤ層の混合層

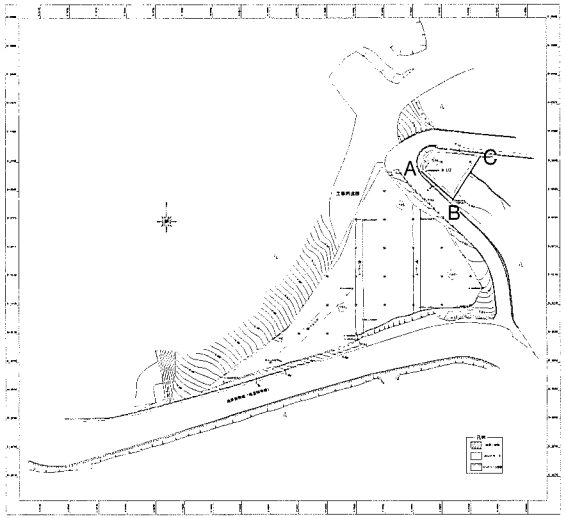
Ⅴ c 層…黒色土（Hue10YR2/1）Ⅴ層に類似するが層位的に不整合。混入物少ない

Ⅵ層…暗褐色土（Hue10YR3/3）
　Ⅶ層から遊離した直径１～３㎝の角礫を多く含み，固く締まっている。

Ⅶ層…褐色土（Hue10YR4/4）
　大小の角礫で構成されるいわゆるカシノミ層（基盤層）

第６図　調査区土層図②（Ｓ＝１/80）※アミカケは礫





北区東壁・南壁土層注記

Ⅰ層…にぶい橙色土（Hue7.5YR7/3）
　平成２年～７年にかけて降下した普賢岳起源の火山灰

Ⅱ層…黒褐色土（Hue2.5Y3/1）
　しまりのないサラサラした土。宅地化に伴う撹乱層含む

Ⅲ層…黄褐色土（Hue10YR5/6）
　褐色系（Hue10YR4/4）の土がまだらに混じる。縄文晩期土器包含層

Ⅳ層…黒褐色土（Hue10YR3/2）
　混入物の少ないサラサラした土。縄文晩期土器包含層。

Ⅳ'層…黄褐色砂質土。直径１～５cmの砂利で構成

Ⅴ層…黒色土（Hue10YR2/1）
　拳大の角礫を多く含む。

Ⅵ層…暗褐色土（Hue10YR3/3）
　Ⅶ層から遊離した直径１～３cmの角礫を多く含み，固く締まっている。

Ⅶ層…褐色土（Hue10YR4/4）
　大小の角礫で構成されるいわゆるカシノミ層（基盤層）

※ ● は石

第７図　調査区土層図③（Ｓ＝１/80）

・11月14日…Ⅲ層～Ⅳ層掘り下げ開始。縄文時代晩期土器・石器出土
・11月21日…第１～第３トレンチ完掘。調査区全面Ⅴ層上面検出作業を本格的に開始
・11月28日…類橿原式文様の付いた鉢が出土
・12月７日…光波測距器による遺物取り上げが１万点を突破
・12月19日…調査区全面Ⅴ層上面を検出して完掘。調査区の土層実測
・12月20日…航空写真撮影。撤収

(3) 基本土層（第５図～第７図）

土層は大きく６層に大別できる。Ⅰ層は平成２年～平成７年にかけて降灰した普賢岳起源の灰白色火山灰である。調査区全体に渡って厚さ約10cmで堆積していた。Ⅱ層は黒褐色土で，縄文時代晩期の遺物包含層である。ただし北区では近現代の茶碗などが出土しており，聞き取りでも宅地として近年まで利用されていたことが確認できたため，北区についてはⅡ～Ⅳ層まで人為的攪乱で著しく破壊されていると判断した。Ⅲ層は黄褐色土で，もっとも多くの遺物が出土している縄文時代晩期の包含層である。Ⅳ層は黒褐色土で，Ⅲ層とⅤ層の混合層である。縄文時代晩期の遺物を中心に，下部からは縄文時代早期の押型文土器も出土している。Ⅴ層は黒色土で非常にきめが細かい。人頭大以上の大型の安山岩が伴っており，これらの礫とともに堆積したことがわかる。第１トレンチ以西を中心に縄文時代早期押型文土器がまとまって出土している。Ⅶ層はカシノミ層で，Ⅵ層はカシノミ層の遊離層である。ともに遺物は出土していない。

Ⅴ層上面の検出時点で，南区北端部付近で南北にのびる浅い谷状地形を検出している。この谷状地形と関連するとみられる落ち込みは，第１トレンチ南壁土層の西端部付近で，平場からの落ち込みとして確認されており，大型礫の混入状況やⅤ層下面の標高を加味すれば，この谷は第１トレンチに沿って南西～北東方向に下った後，第２トレンチ付近で北側に向きを変え，北側に延びていたものと推測される。Ⅴ層はこの谷を埋める形で堆積したものと考えられ，南区北端で検出した谷状地形もⅤ層堆積段階で埋まりきれなかった谷の名残と考えられる。今回の調査地点は，土層および地形の観察から，緩斜面の傾斜に沿った南から北への土砂の供給により埋没していることが推測される。

第Ⅳ章　遺　　物

(1)　遺物の分布

先述の通り，今回の調査ではできる限り出土位置を記録して遺物を取り上げた。遺物の個別説明に入る前に，ここでは土器・石器の接合関係について述べておきたい。

土器接合例は228例ある。このうち，２点間接合例が168例，３点以上の多点間接合例が70例であった。出土位置を記録した土器6,994点のうち，571点が接合したことになり，割合としては１割にも満たない。ただし，時間がごく限られた整理作業内での接合作業であったため，実際の接合例はより多いであろうし，また接合例同士でさらに接合する可能性も考えられるが，現時点でも概要は十分把握できるものと考えられる。

層位別の接合状況としては，同一層位での接合例に止まらず，Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳ層間で接合する例も認められた（第１表～第３表)。これらはいずれも縄文時代晩期の土器であることから，土層の特徴は異なるものの，Ⅱ層～Ⅳ層は縄文時代晩期の一連の包含層であることが理解できる。

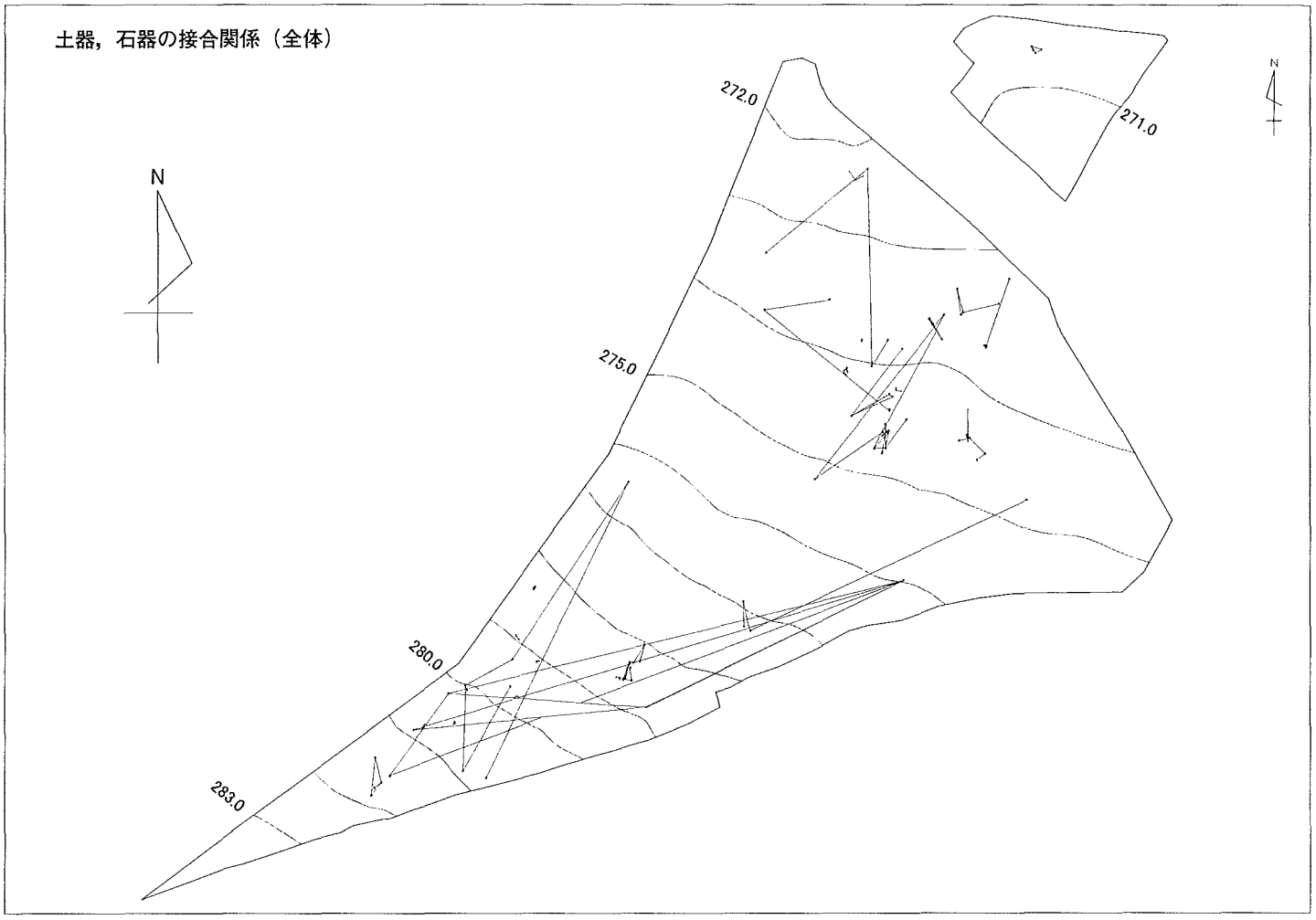
実際の遺物全体の出土状況を，Ⅱ層～Ⅳ層とⅤ層に分けて図化したのが第８図である。Ⅱ層～Ⅳ層では調査区全体からまんべんなく出土しているが，土器の集中度合いからは標高275mの等高線付近を境に南北で分布が分かれる傾向が認められる。４点間以上の多点間接合例を検討すると，土器の分布で北側の集中域，南側の集中域内でそれぞれ接合しており，それぞれの集中域を越えて接合する例は認められない（第９図)。したがって，分布集中域の北側と南側で時間的な差もしくは機能的な差が存在する可能性が考えられる。また，遠距離間での接合例は，谷状地形埋没域と考えられる調査区南側に多く，自然の営力による移動を思わせる。個別の接合例では，同一個体が等高線の傾斜に沿って接合する例が圧倒的に多い（第10図～第13図)。土器自体の観察では，二次堆積に伴う摩滅痕や摩耗痕はほとんど観察されないことから，縄文時代に土器を廃棄する際に投棄されて埋没した状況に近いものと推測される。

石器の接合に関しては礫石器を対象として検討した。剥片石器類については詳細な検討ができていないため，石器出土総点数3,642点に対して接合例は２例７点と非常に少ない結果となった。いずれも石皿で３点以上の多点間接合である。等高線に直行するように分布していることから傾斜に沿って自然堆積により埋没したことが考えられる。

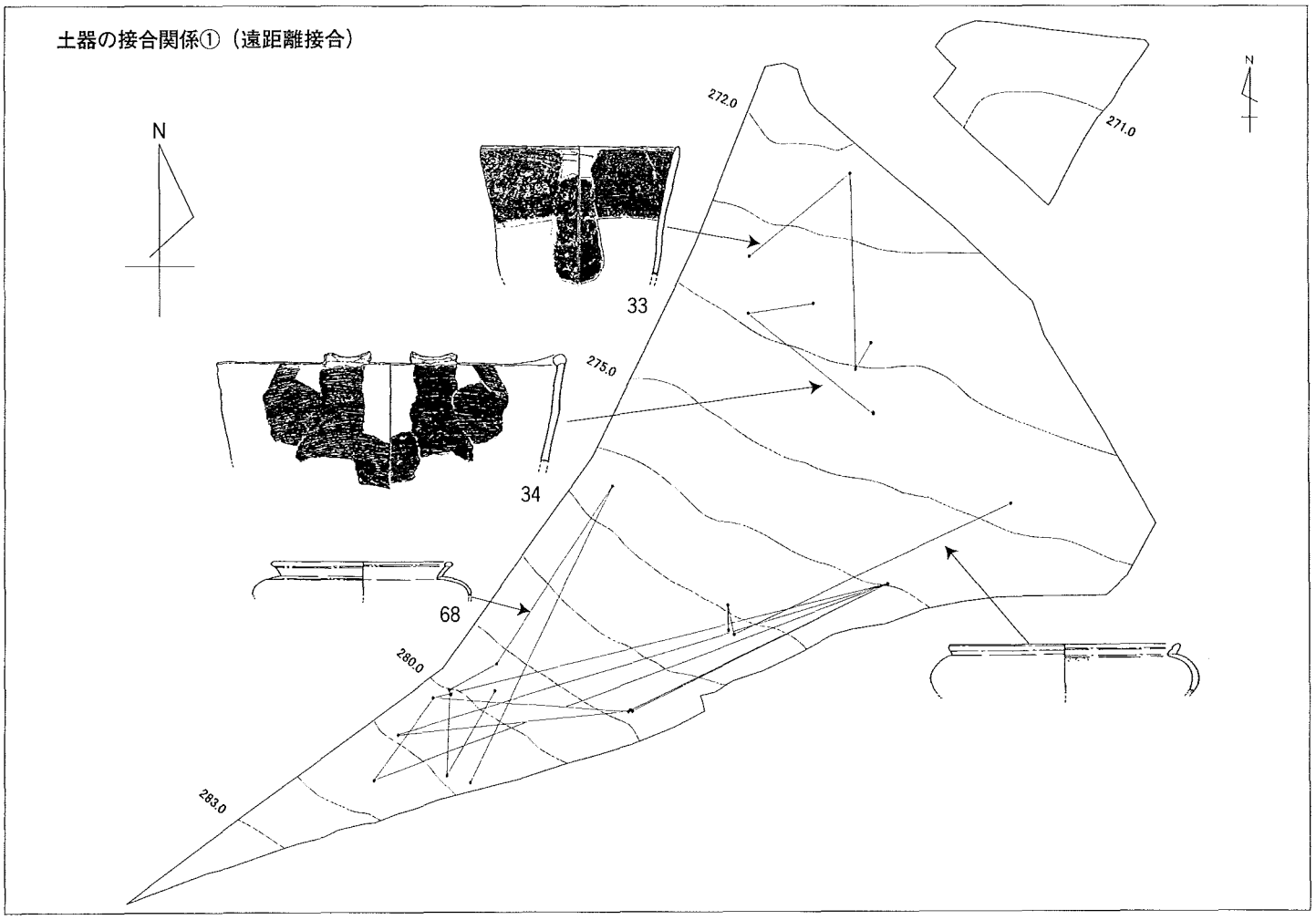
以上のように,遺物の接合関係からは,自然の営力による斜面の上方から下方への土砂の堆積に伴って遺物が埋没する際に移動が起こった可能性が考えられる。一方で，土器にみられるような遠距離間での接合のあり方からは，埋没後の再移動に伴う拡散も想像できる。しかし，遠距離接合は比較的急傾斜の調査区南側に集中し，また南北それぞれの土器集中ゾーンをまたいで接合する例は皆無であり，摩滅痕が顕著な土器もほとんど認められない。さらにⅡ～Ⅳ層の堆積土も土石流に伴うとみられる大型の礫はほとんど確認できない。したがって，仮に後世の二次堆積があったとしても大規模かつ遠距離からの移動は考えにくい状況である。ここでは，後世の二次堆積による移動の影響は比較的少なく，遺物の分布に現れた南北で二分した在り方は，縄文時代に遺跡内で行われた活動の内容差や時期差をある程度反映している可能性があることを確認しておきたい。

第８図　出土土器分布図（Ｓ＝１/500）※上段：Ⅱ～Ⅳ層，下段：Ⅴ層

土器，石器の接合関係（全体）

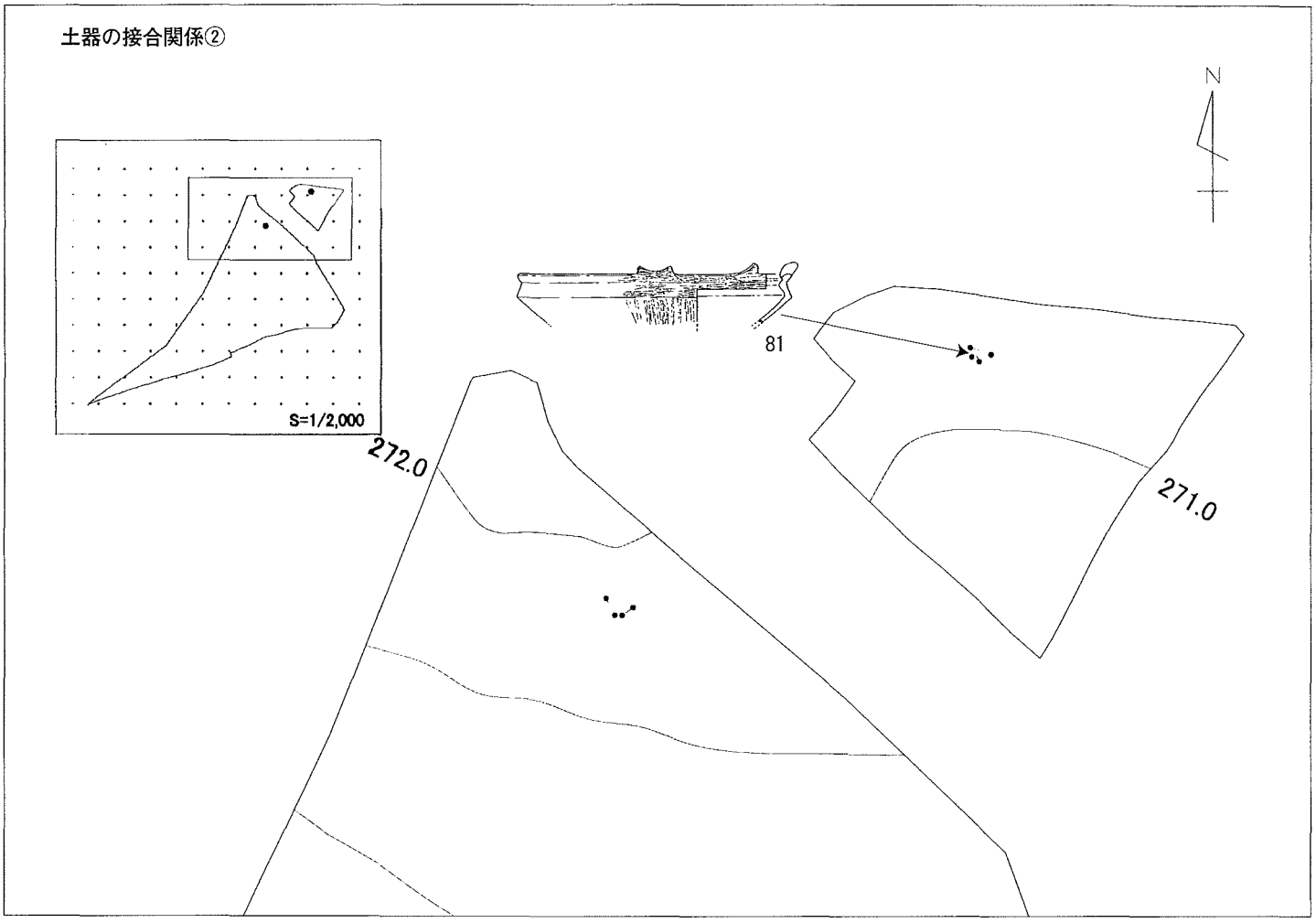


土器の接合関係①（遠距離接合）

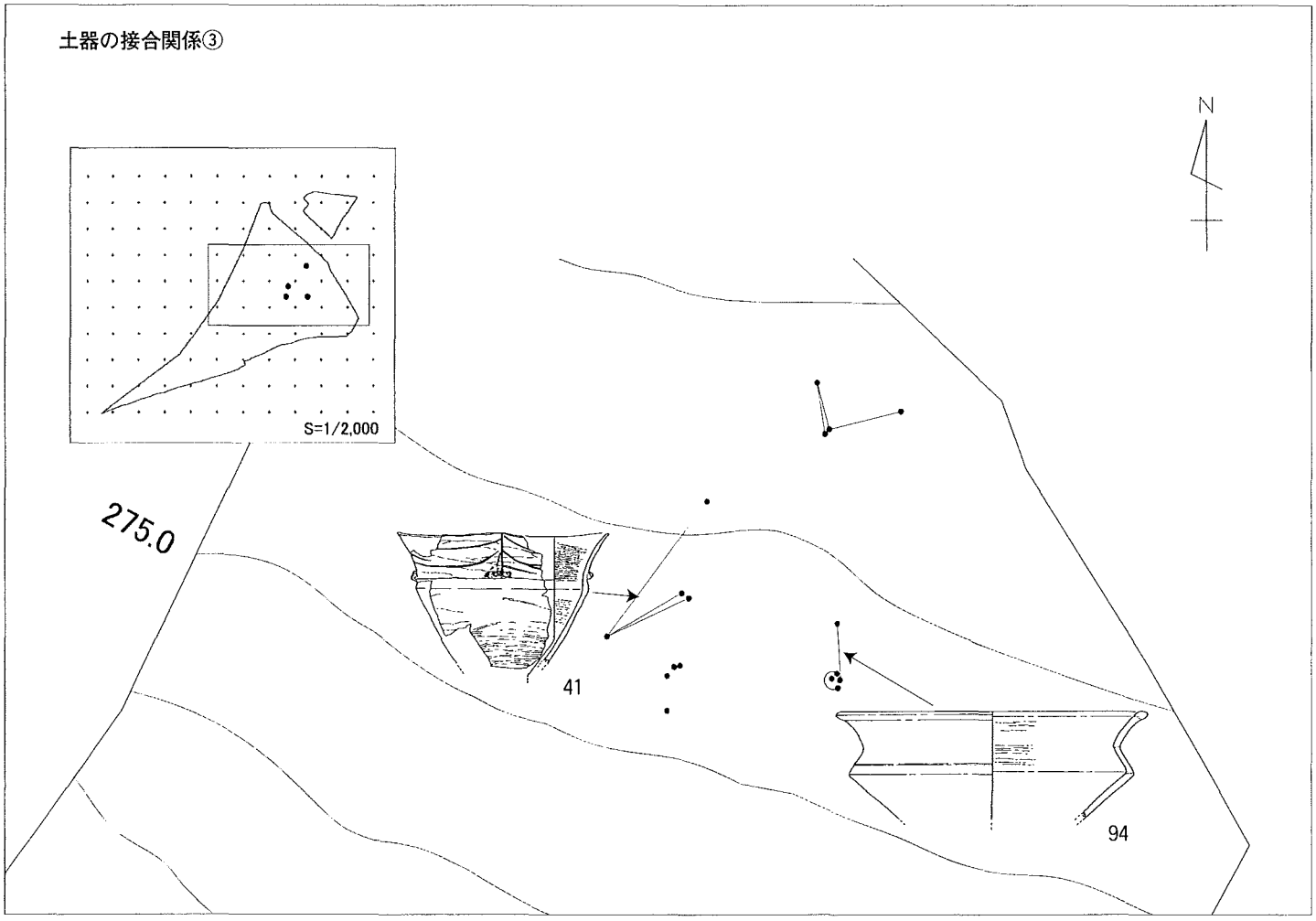


第９図　遺物の接合関係①（Ｓ＝１/500）※数字は実測図掲載番号

土器の接合関係②

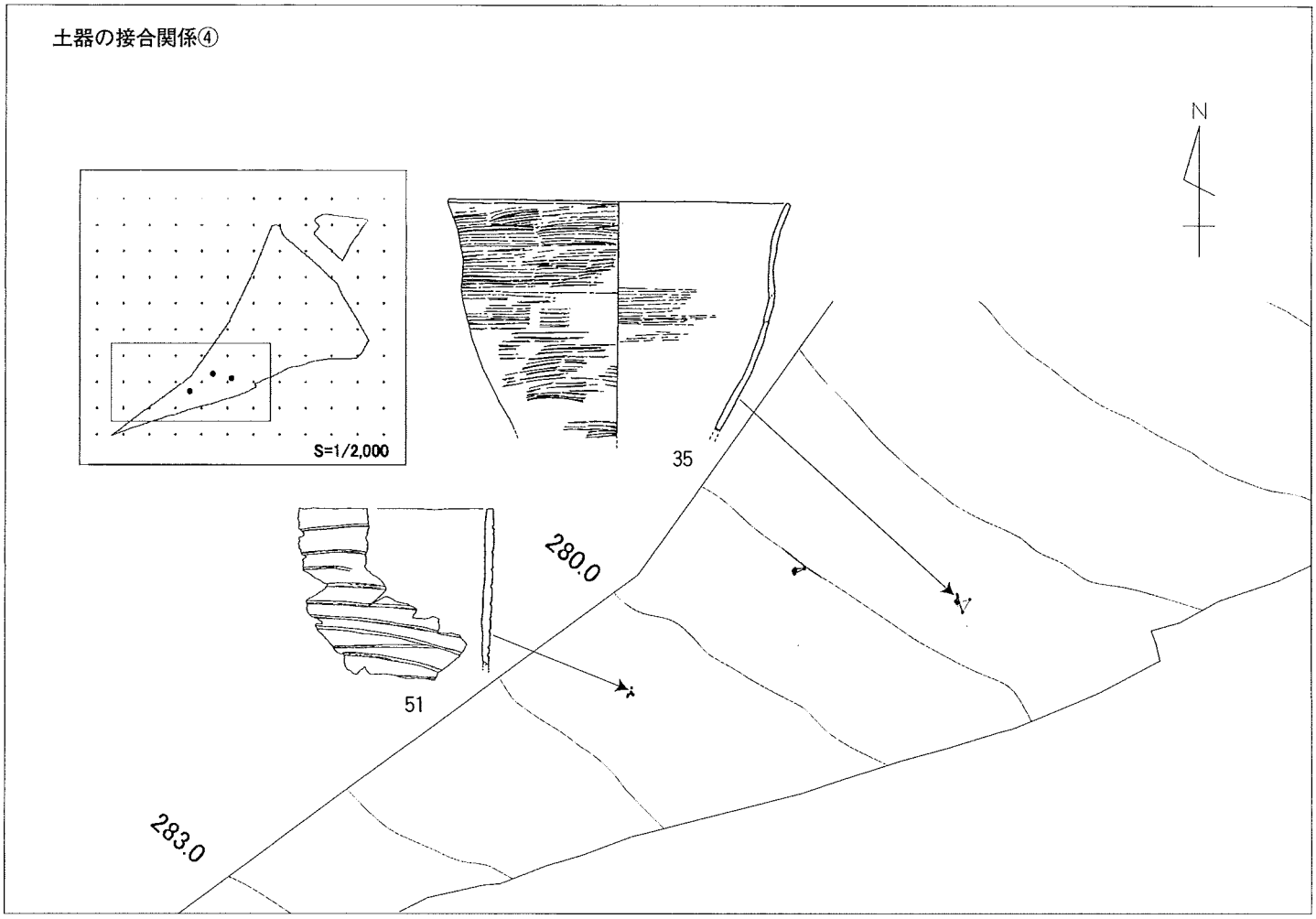


土器の接合関係③

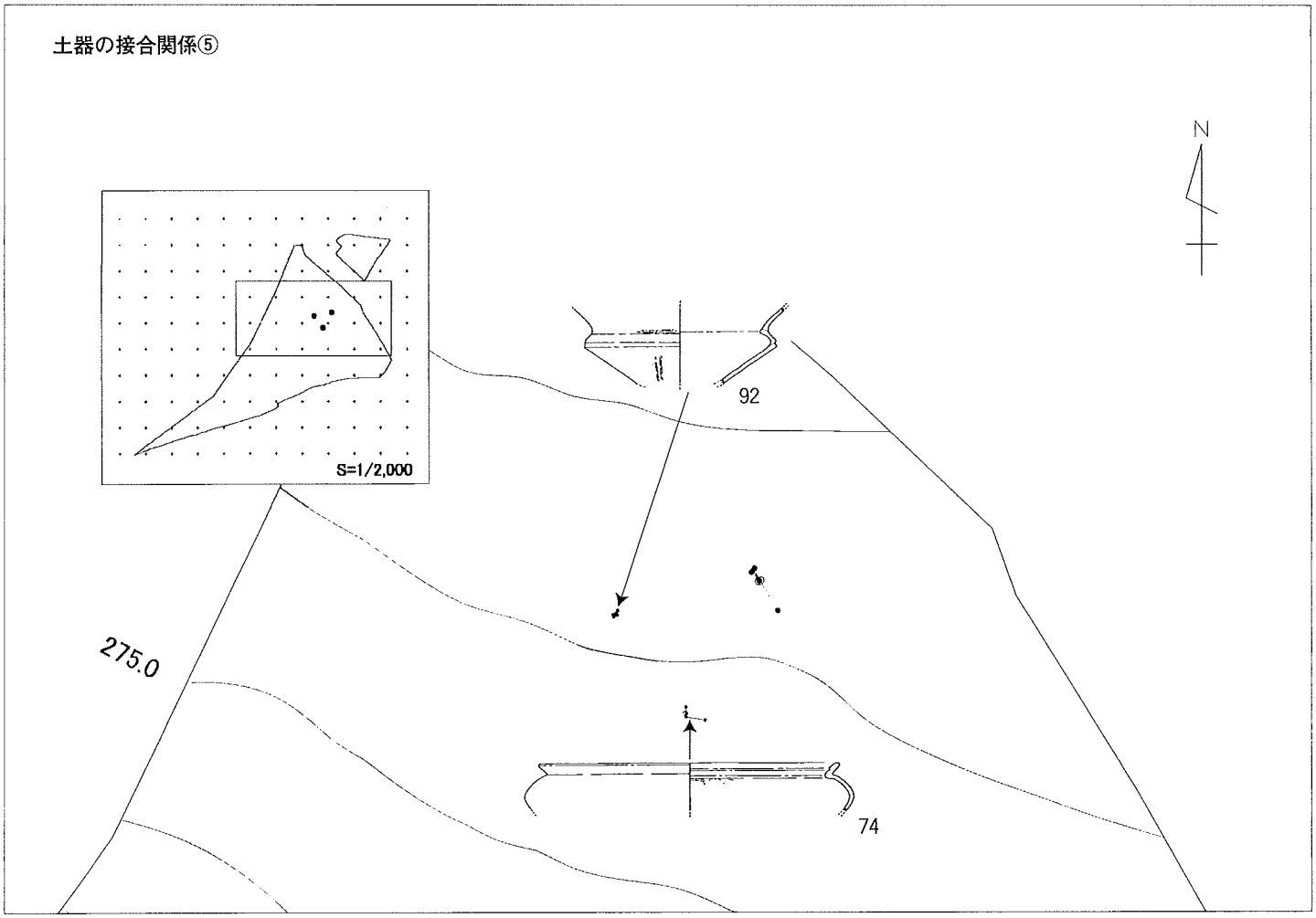


第10図　遺物の接合関係②（S＝1/250）※数字は実測図掲載番号

土器の接合関係④

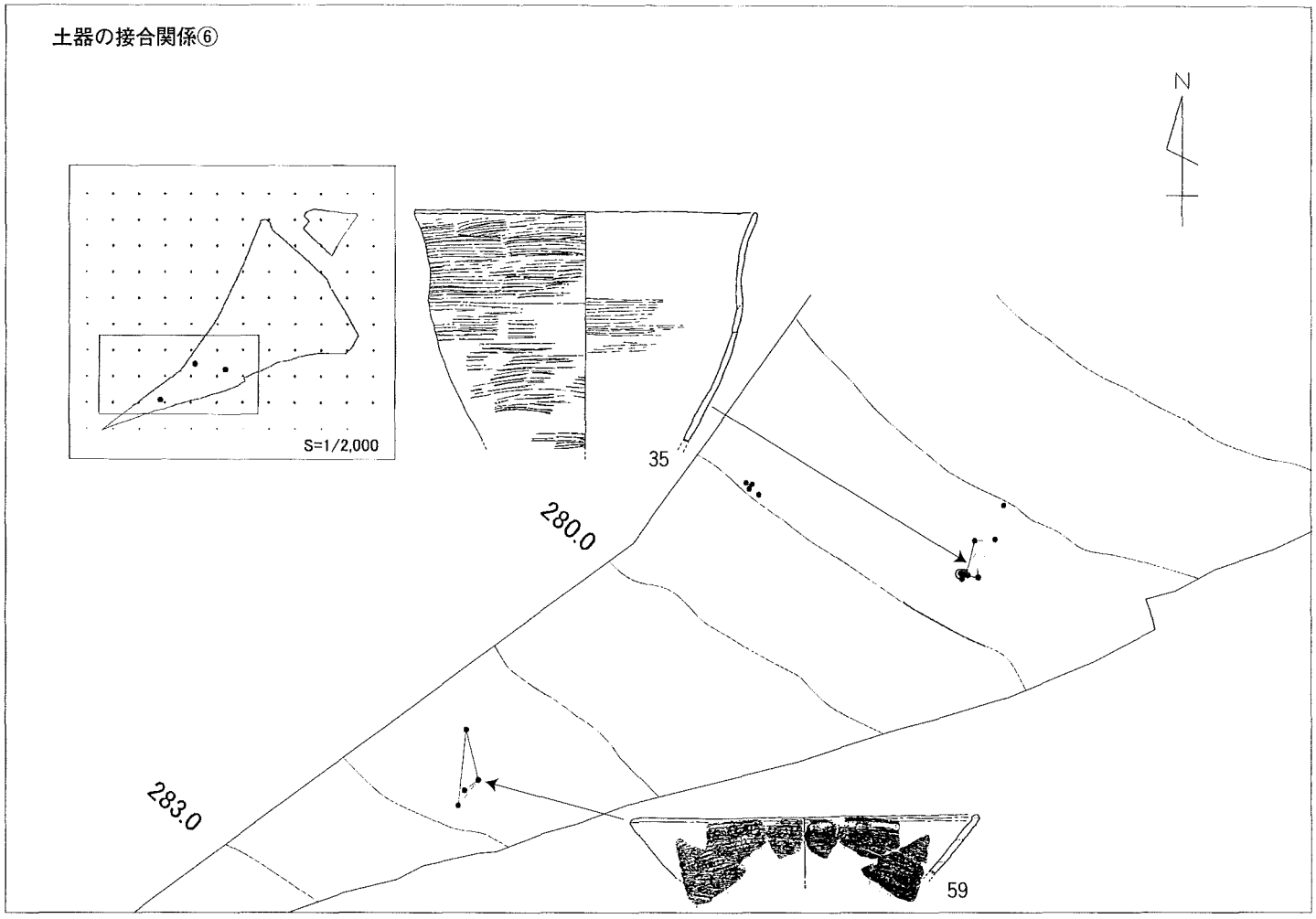


土器の接合関係⑤

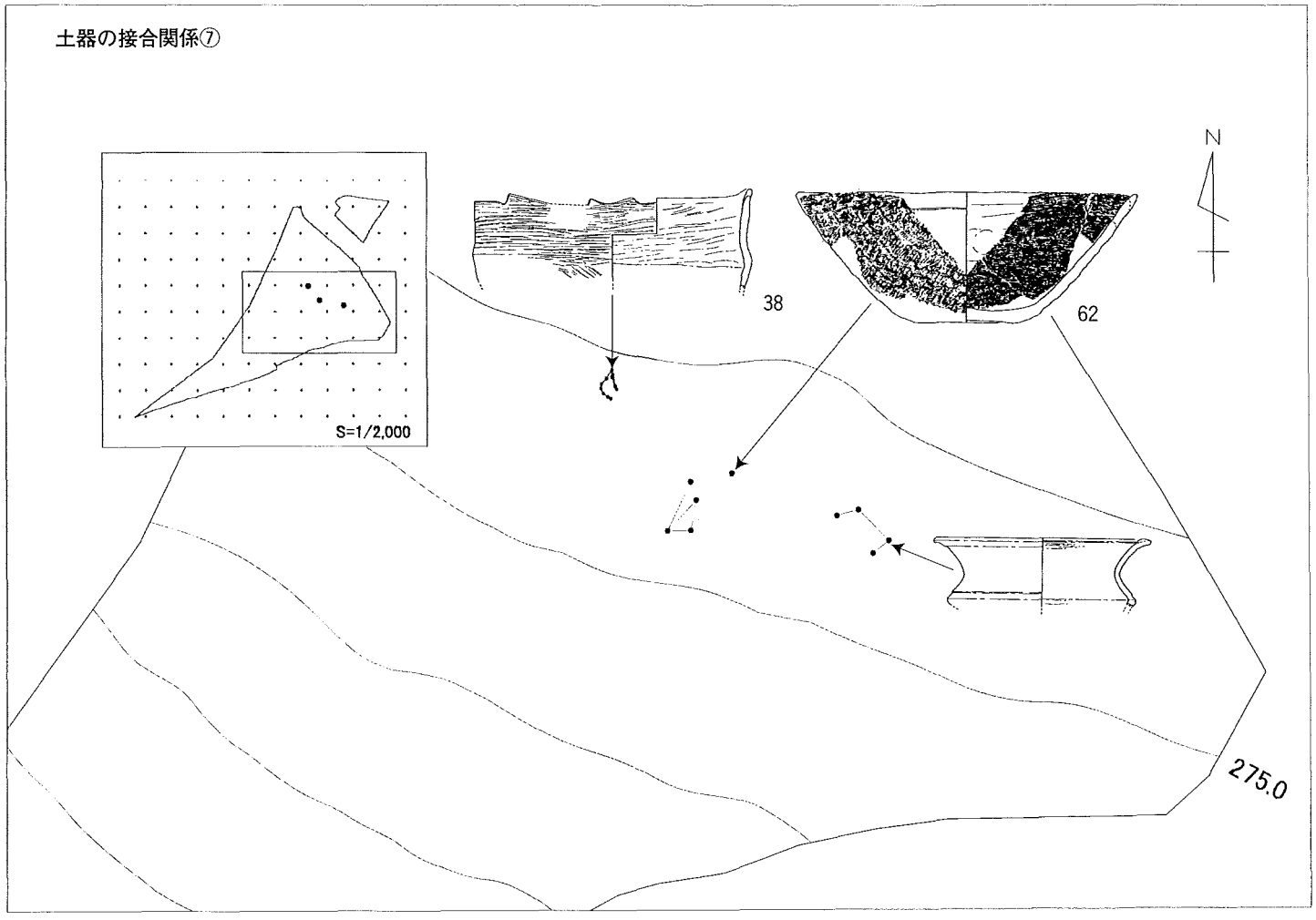


第11図　遺物の接合関係③（S＝1/250）※数字は実測図掲載番号

土器の接合関係⑥

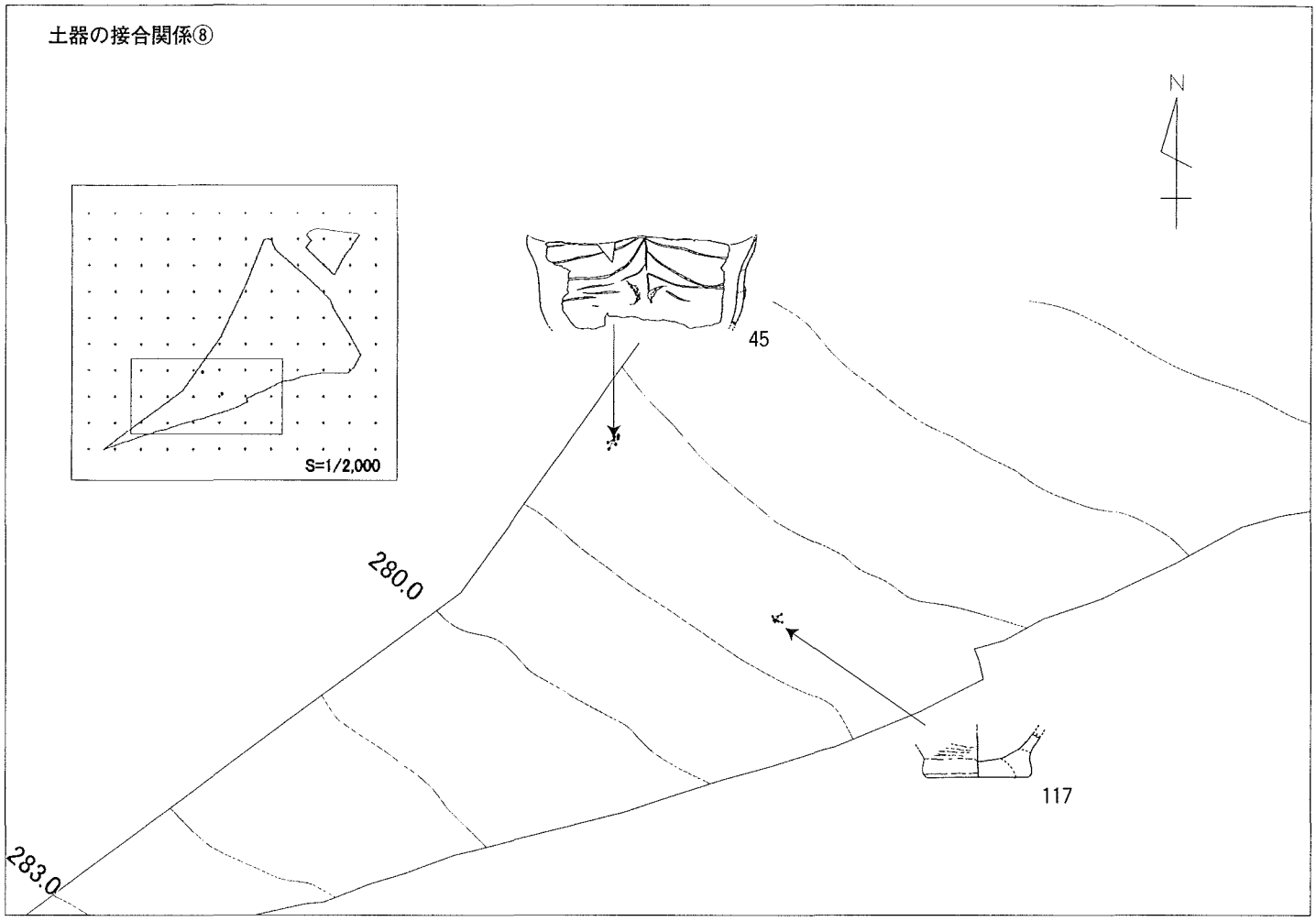


土器の接合関係⑦

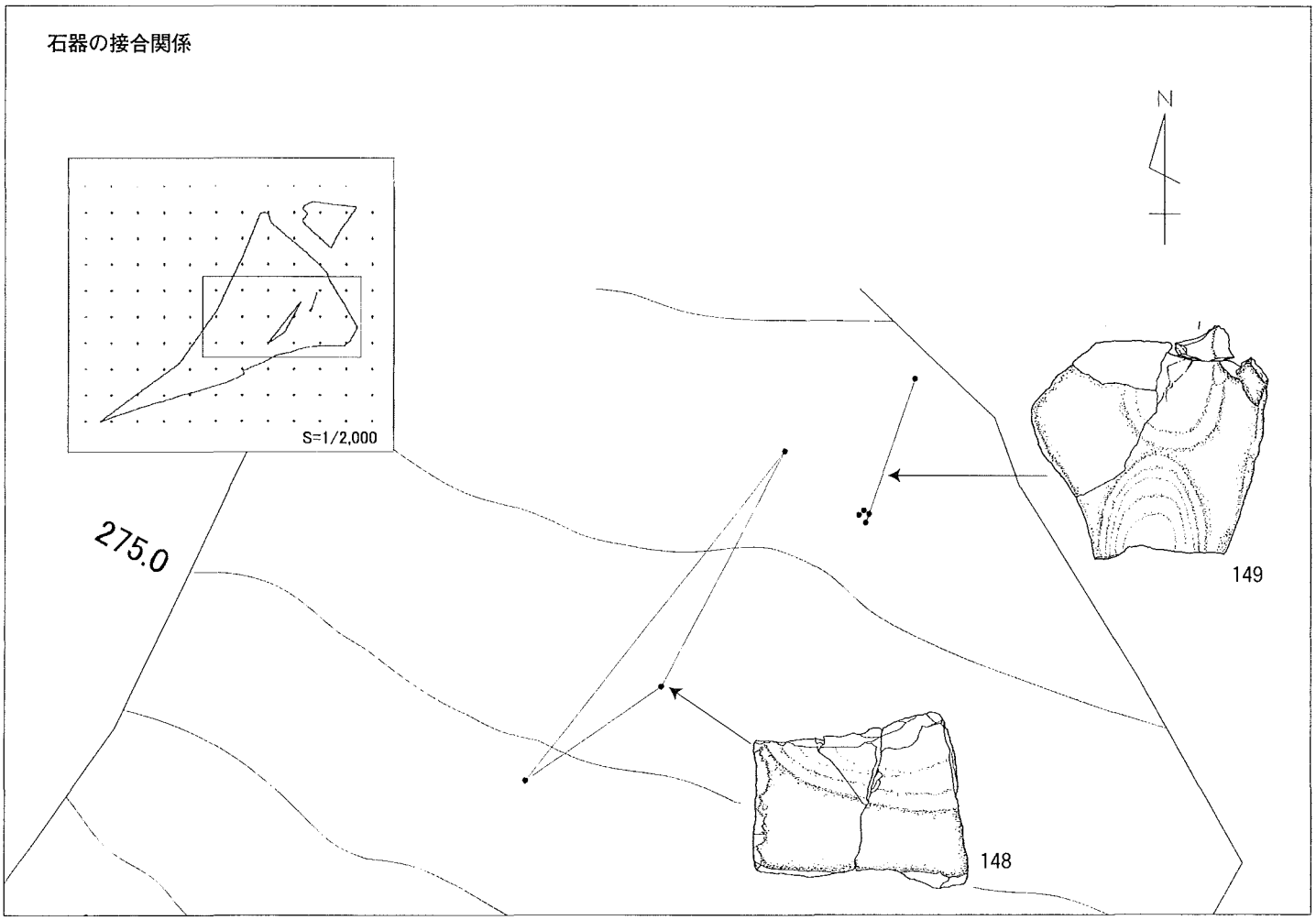


第12図　遺物の接合関係④（S＝1/250）※数字は実測図掲載番号

土器の接合関係⑧



石器の接合関係



第13図　遺物の接合関係⑤（S＝1/250）※数字は実測図掲載番号

(2) 縄文土器

今回の調査で出土した土器は，縄文時代晩期の土器を中心に縄文時代早期の土器や古墳時代の土師器と思われる土器もわずかに出土している。土師器については小片が多く図化に耐えうるものはなかったため，縄文土器を中心に報告する。

①縄文時代早期の土器（第14図）

早期後半の押型文土器の一群である。出土した土器のうち27点を図化した。ほとんどが器壁が1㎝を越える厚手の土器である。文様には楕円文（1～16）と山形文（17～26）があるが，特に楕円文については大型化し粗雑化の傾向が強い。1および17は外反する口縁部付近の破片で，内面にそれぞれ楕円文・山形文を横位に施文している。胴部片の中には同一個体と思われる破片も多く，個体数はそれほど多くないものと思われる。これらは東九州の田村式に併行する押型文土器後半の土器群に相当しよう。島原半島では弘法原遺跡でまとまった出土例がある。

27は胴部片で撚糸文を縦位に施文する。比較的薄手で他の早期土器群とは明らかに特徴が異なる土器である。雲仙市国見町の百花台遺跡でまとまって出土している土器で，塞ノ神式系統の石坂上式土器であろう。ラッパ状に外反する口縁部直下の胴部片であろうか。

②縄文時代晩期～弥生時代早期の土器

今回の調査で最も多く出土した土器群である。特に，縄文時代晩期の土器は，出土土器片数の割合では全体の99％以上を占めており，ほぼ単純遺跡に近い様相である。土器の図化に際しては，反転復元できる個体を基本とし，重要な土器については小片も図化した。また，接合はしないものの，明らかに同一個体と考えられる破片を複数図上で復元して図化したものもある（35・36・39・44・46・56・99）。ここでは器種別に説明を加える。

・深鉢

器形から以下のように分類する。

A類　口縁部下位が肥厚して頸部との間に段を有するいわゆる「タガ状口縁」となるもの。

B類　胴部から口縁部にかけて単純に広がる器形となるもの。

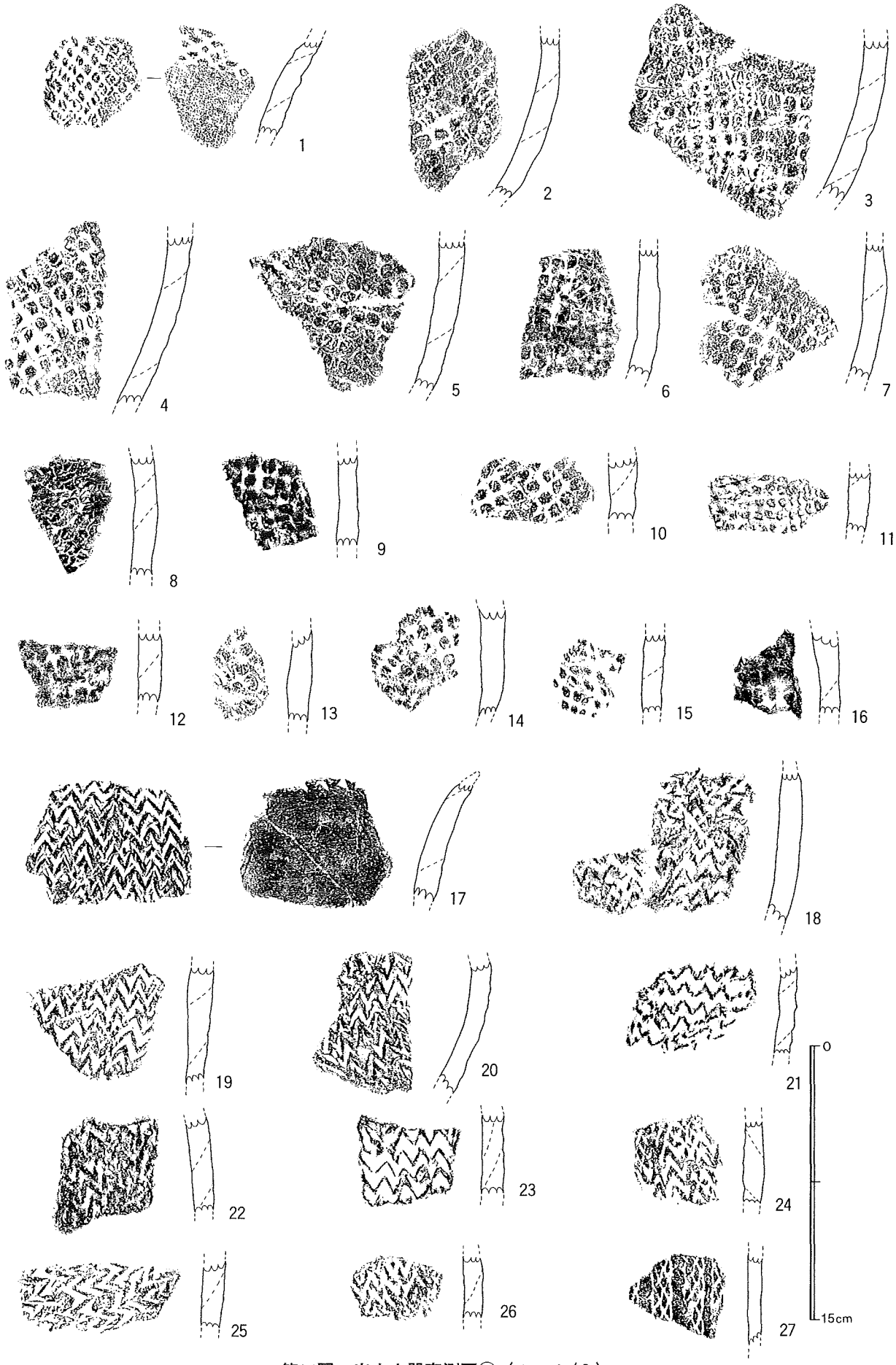
C類　胴部最大径付近で内湾してくびれ，口縁部にかけて緩やかに外反するもの。

D類　胴部最大径で内側に鋭く短く屈曲し，外反して口縁部に至るもの。

胴部から頸部にかけての屈曲が鋭く稜線が明瞭なものをD１類，屈曲が緩やかになり稜線が不明瞭なものをD２類とする。

E類　胴部で屈曲する器形はC類と共通するが，口縁部直下や屈曲部に刻目突帯を貼り付けるもの。

A類の出土はわずかである。確認できた３点を図化した（第15図）。28は口縁部が大きく外反し口縁部下部がわずかに肥厚するものの，頸部との境の段は不明瞭である。他のA類深鉢よりも若干先行する土器の可能性がある。口縁端部に低い突起を確認できる。29は口縁端部片で頸部にかけて肥厚し外面には４条の沈線が走る。30は口縁部と頸部との境界付近の破片で，段によって明瞭に区別される。いずれも縄文時代晩期前葉の土器群で，肥後編年の古閑式（古閑Ⅱ式），水ノ江編年の「百花台段階」に相当する（水ノ江1997）。島原半島では島原市畑中遺跡や雲仙市国見町百花台遺跡でまとまった出土例がある。



第14図　出土土器実測図①（S＝1／3）

B類には口縁端部がやや内湾するもの（第16図31）や直立するもの（32），外反するもの（33・34）がある。ほとんどが縄文時代晩期の土器であるが，31は厚さ１cmを越える厚手の土器で，縄文時代早期の無文土器の可能性もある。調整は条痕調整を残すものもあるが（34），ケズリや擦過など板状工具による調整を多用する土器もある（32・33）。34の口縁頂部にはリボン状の突起がつく。

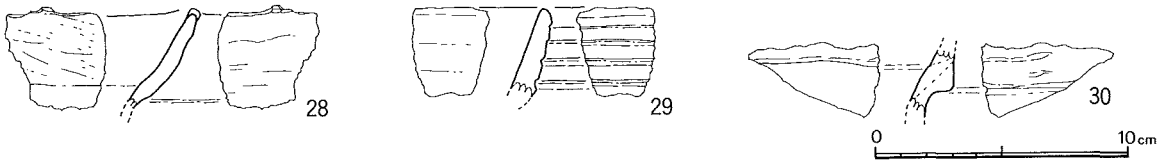
C類は比較的多く出土しているが，図上での反転復元が可能な土器のみ図化した（第16図35・36，第17図37～40）。比較的口径の大きな個体が多い。屈曲部が明瞭なもの（36～40）のほか不明瞭なもの（35）も存在するが，屈曲部が明瞭な土器も外面のみで，内面の稜線は目立たない個体が多い。調整は条痕およびナデを多用する傾向にある。緩やかな波状口縁となるものや（40），口縁端部にリボン状や鰭状の突起を持つものもある（37～39）。なお，36の頸部表面には斜行沈線が３条確認できる。

D類は41を典型とし，島原半島の黒川式並行期でもっとも特徴的な器形の深鉢である（41～48）。口径25cm前後の中型の深鉢が主体で，緩やかな波状口縁を呈するものが多く，波頂部から頸部へ沈線を垂下し，この垂下沈線を軸にして頸部全体に放射状に沈線を巡らす。また，垂下沈線の延長上の屈曲部直上に貼り付け突起を貼り付ける。41のように，刻目突起を貼り付け，沈線文による同様のモチーフを描く土器は，肥賀太郎遺跡の近隣の礫石原遺跡でも出土しており，この地域に特徴的な深鉢といえよう。調整は条痕調整を残すもののほか，ケズリや擦過など板状工具による調整を多用する土器もあるが，屈曲部の突起貼り付け部分を丁寧になでる点で共通する土器が多い。Ｄ１類とＤ２類は屈曲部の器形で区別したが，このほかにもＤ２類では貼り付け突起の高さが低くなり，沈線によるモチーフも粗雑になる傾向が指摘できる（45）。47は大振りの刻目突起を頸部に貼り付けたＤ１類である。突起直上に半円形に巡る沈線文が描かれている。48も同様にＤ１類であるが，非常に大きな蝶ネクタイ状突起を貼り付けている。器壁も厚く，かなり大型の土器に復元できる。

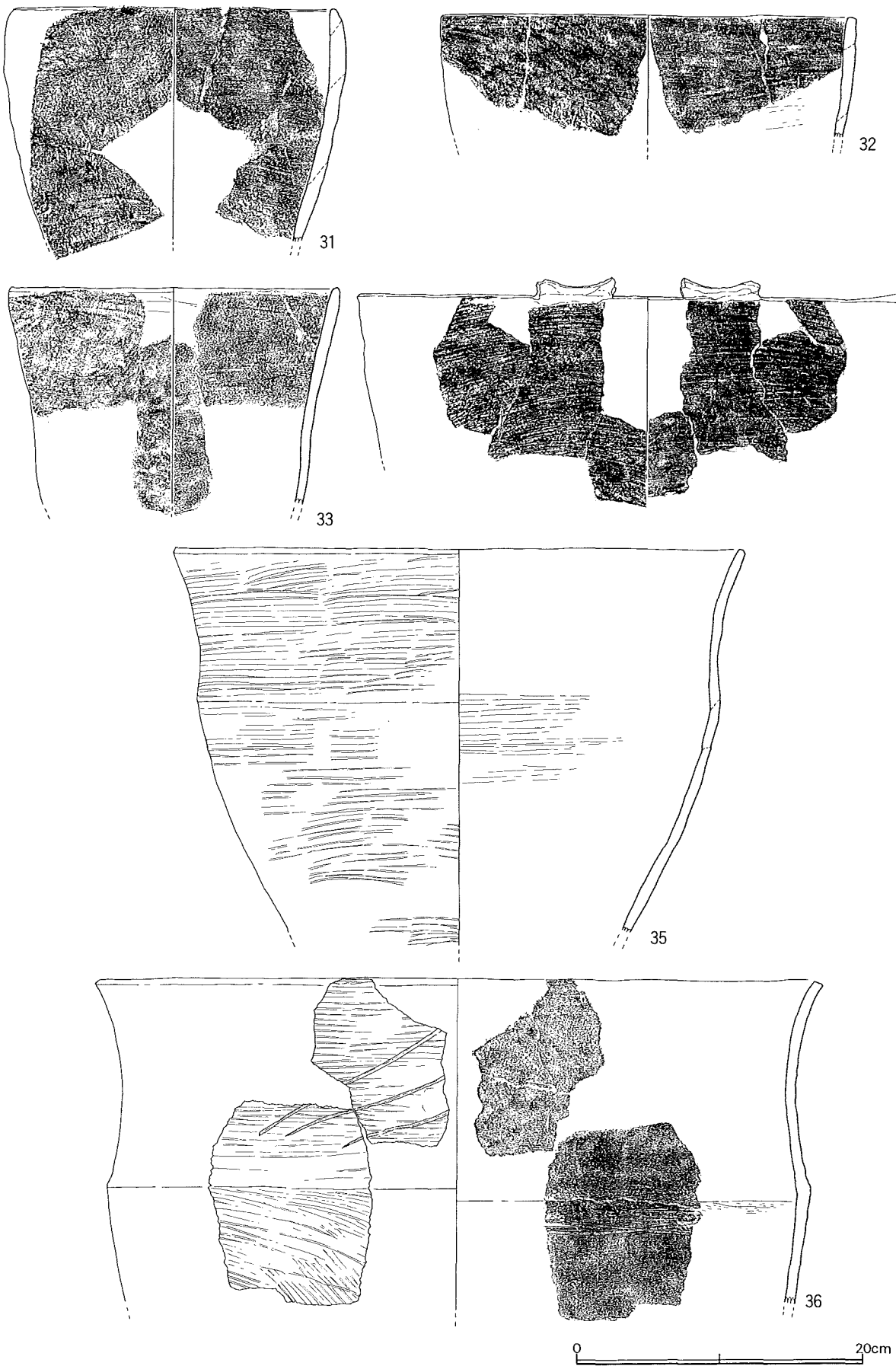
49～54は沈線文系の土器群である。口縁部付近のみの個体が多く全体の器形を知り得ないが，同一個体とみられる土器片から推測すると，本来はD類の器形を呈していた個体が多いと思われる。平縁で口縁部と水平もしくは斜位に沈線を多条に巡らす土器のほか（49～52），緩やかな波状口縁で波頂部を指押さえでくぼませる土器もある（53・54）。53は凹みのある波頂部から胴部に垂下沈線を施し，これと直行するように平行沈線を多条に巡らしている。

55はＢ類土器の口縁部片であるが，やや内湾する口唇部に斜位の刻みを持つものである。調整は外面に板状工具による擦過，内面は条痕をナデ消している。Ｅ類につながる土器として注目される。

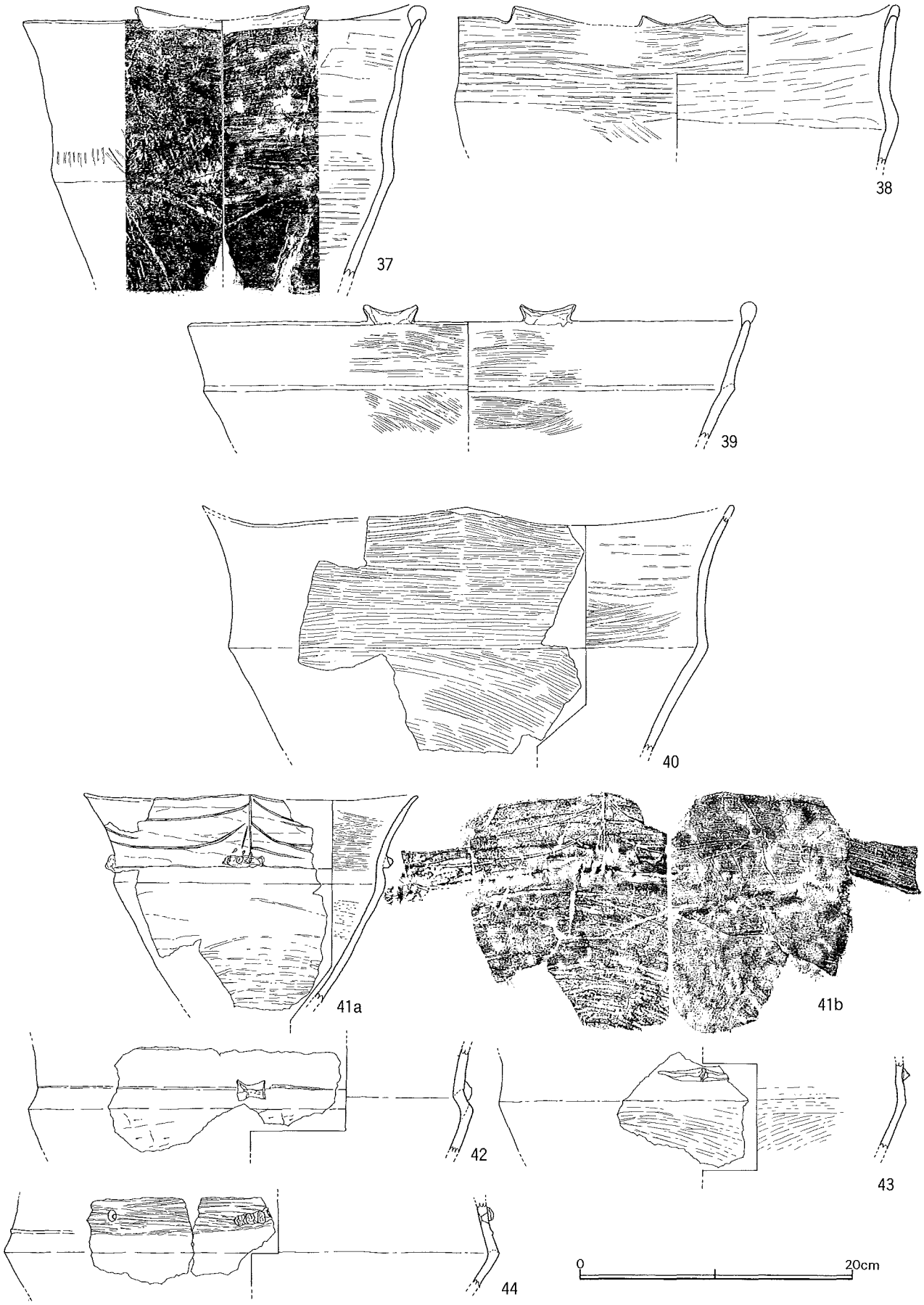
Ｅ類は弥生時代早期の刻目突帯文土器で，いずれも屈曲タイプである。第19図56は屈曲部に１条幅広の突帯を貼り付け，指頭による大振りの刻みを施す。器壁は厚く，口縁頂部の一部が突起状に張り出して頂部がやや凹む。山ノ寺式に該当するが，器形および突帯の特徴から刻目突帯文土器の中でも古相に位置づけられよう。57・58は56に比べて胴部の屈曲が緩やかで，特に内面は丸みを帯びて稜線



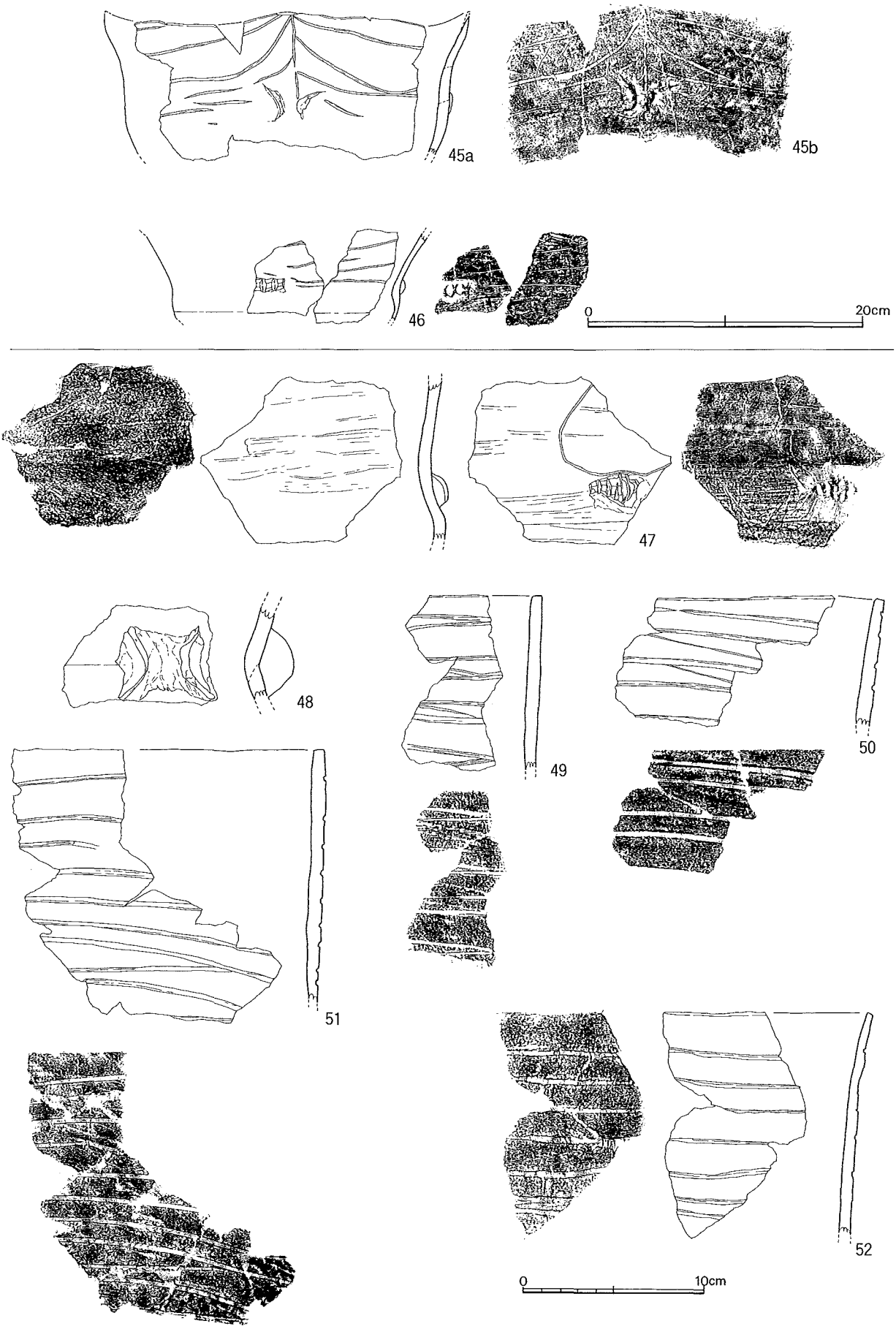
第15図　出土土器実測図②（Ｓ＝１／３）



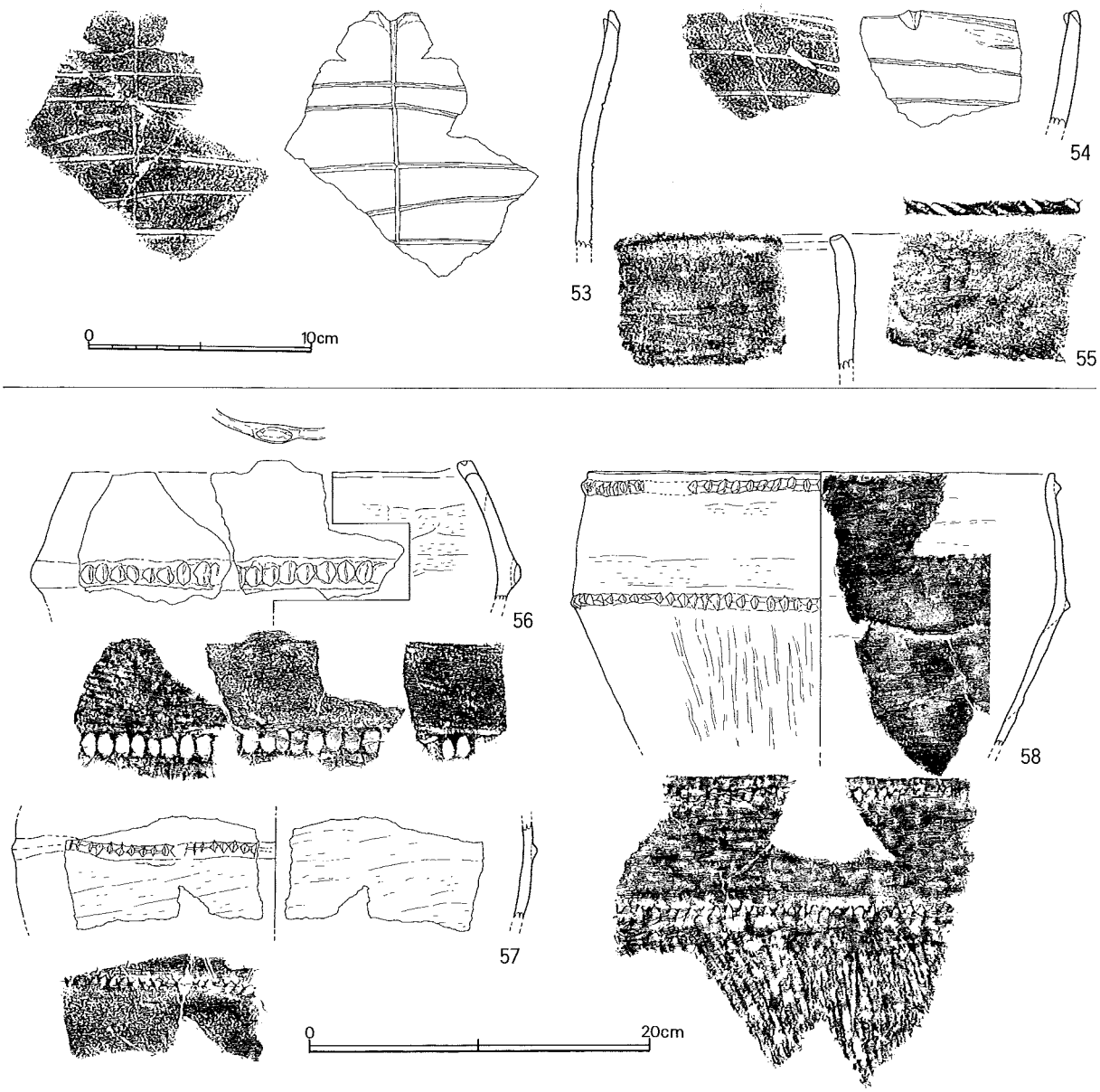
第16図　出土土器実測図③（S＝1／4）



第17図　出土土器実測図④（S＝1／4）



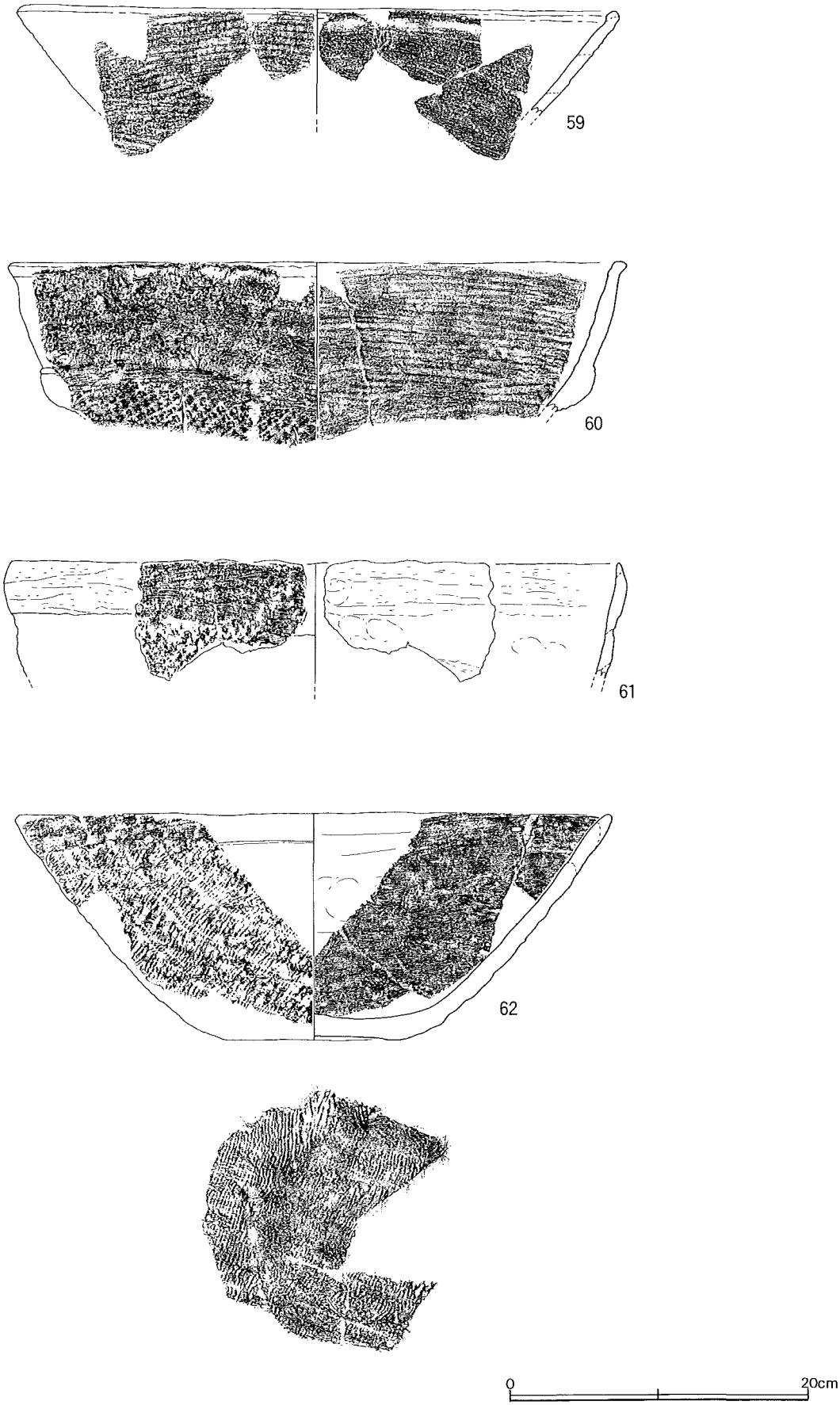
第18図　出土土器実測図⑤（S＝1／4，1／3）



第19図　出土土器実測図⑥（S＝1/3，1/4）

が目立たない。原山式に位置づけられる。57は屈曲部付近の破片で，ヘラ刻みによる低い刻目突帯が屈曲部を巡る。58は二条突帯の深鉢で，突帯はヘラ刻みである。頸部の調整は擦過を丁寧にナデ消しているが，屈曲部以下には荒い縦位の条痕を残す。口縁端部はやや面取り気味である。

第20図は大型の鉢類である。59は口径の割に器高の低い鉢で，口縁部内面が半円形に張り出す点が特徴である。外面には荒い横位の条痕を残すものの，内面は丁寧にナデている。60～62は組織痕土器である。いずれも口縁部直下に無文帯を残し，胴部以下に組織痕を残している。60・61は網目状，62はスダレ状の圧痕が顕著である。特に62は底部まで復元でき，全体の器形や文様の展開が観察できる。約2.5cm間隔で斜位に並列する縦糸に横糸が密に絡んでいる。内面は荒い条痕を丁寧にナデ消して平滑に整えている。



第20図　出土土器実測図⑦（S＝1／4）

・浅鉢

器形を基準にして以下のように分類する。

A類　胴部が大きく張り出してくびれ，短い玉縁状の口縁部がつくもの。口縁部の沈線の有無および胴部の器形により細分される。

Ａ１類…玉縁状口縁の内外面に沈線が巡り，胴部が大きく張り出すもの。胴部最大径は上位にある（63～73・85）。

Ａ２類…玉縁状口縁の内面のみ沈線が巡り外面は平滑。胴部は大きく張り出すものの最大径は中位から下位に下がる（74～79・83）。

Ａ３類…玉縁状口縁で内面に段を持ち外面は平滑。胴部の張り出し部に稜線を持ち，胴部最大径と口径の差は少ない（80～82・87）。

Ａ４類…大きく張り出した胴部から口縁部が短く立ち上がるもの。口縁部内外面の沈線および段が消失し，頸部との区別がなくなったもの（86）。

B類　胴部で屈曲し口縁部にかけて大きく外反するもの。口縁部および屈曲部の形態により細分する。

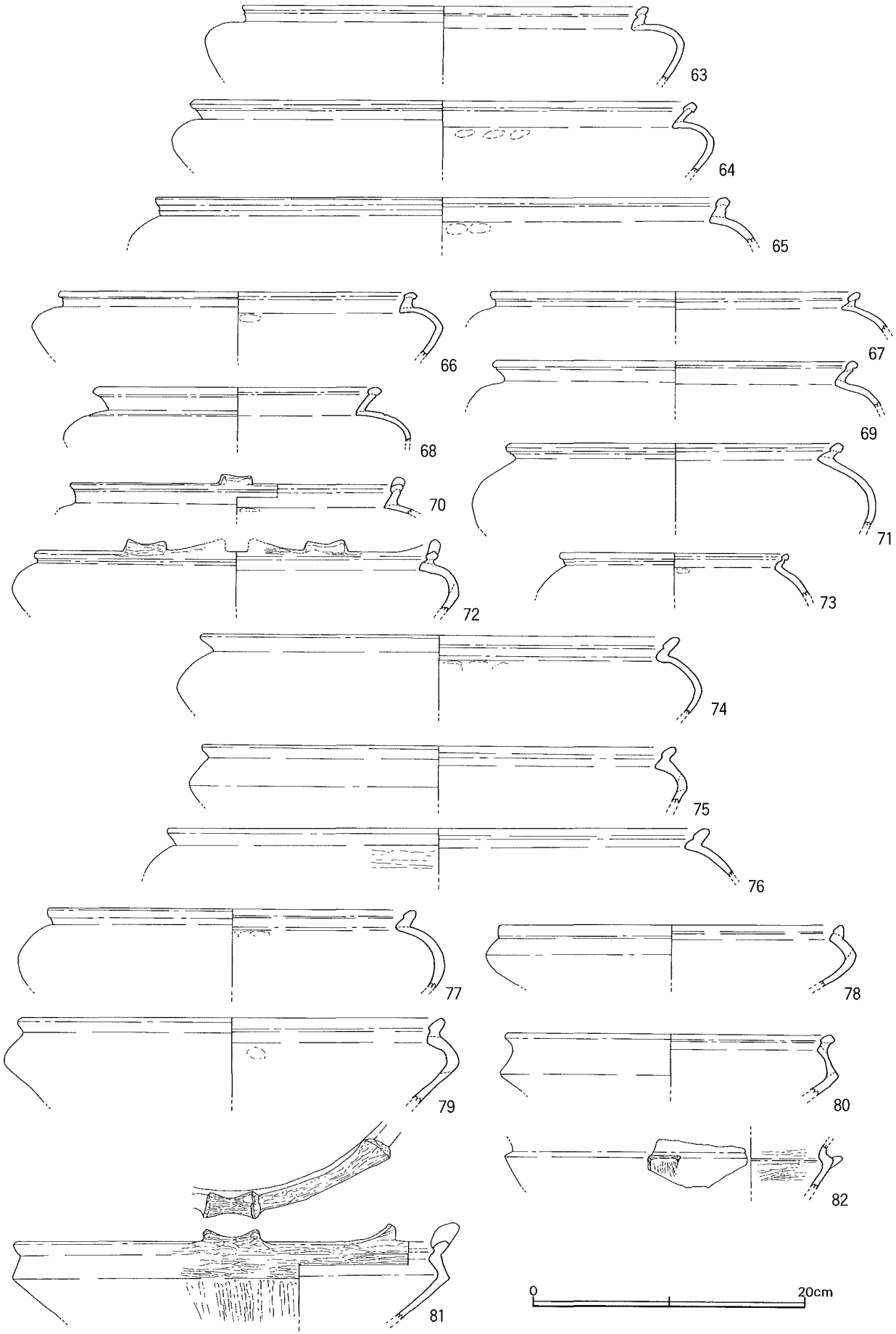
Ｂ１類…屈曲部が短く内傾し口縁部は外面に沈線，内面に段をつくって頸部と区別するもの（88～91）。

Ｂ２類…屈曲部が長く内傾し口縁部は内面・外面ともに段がつく（92～94・97）。

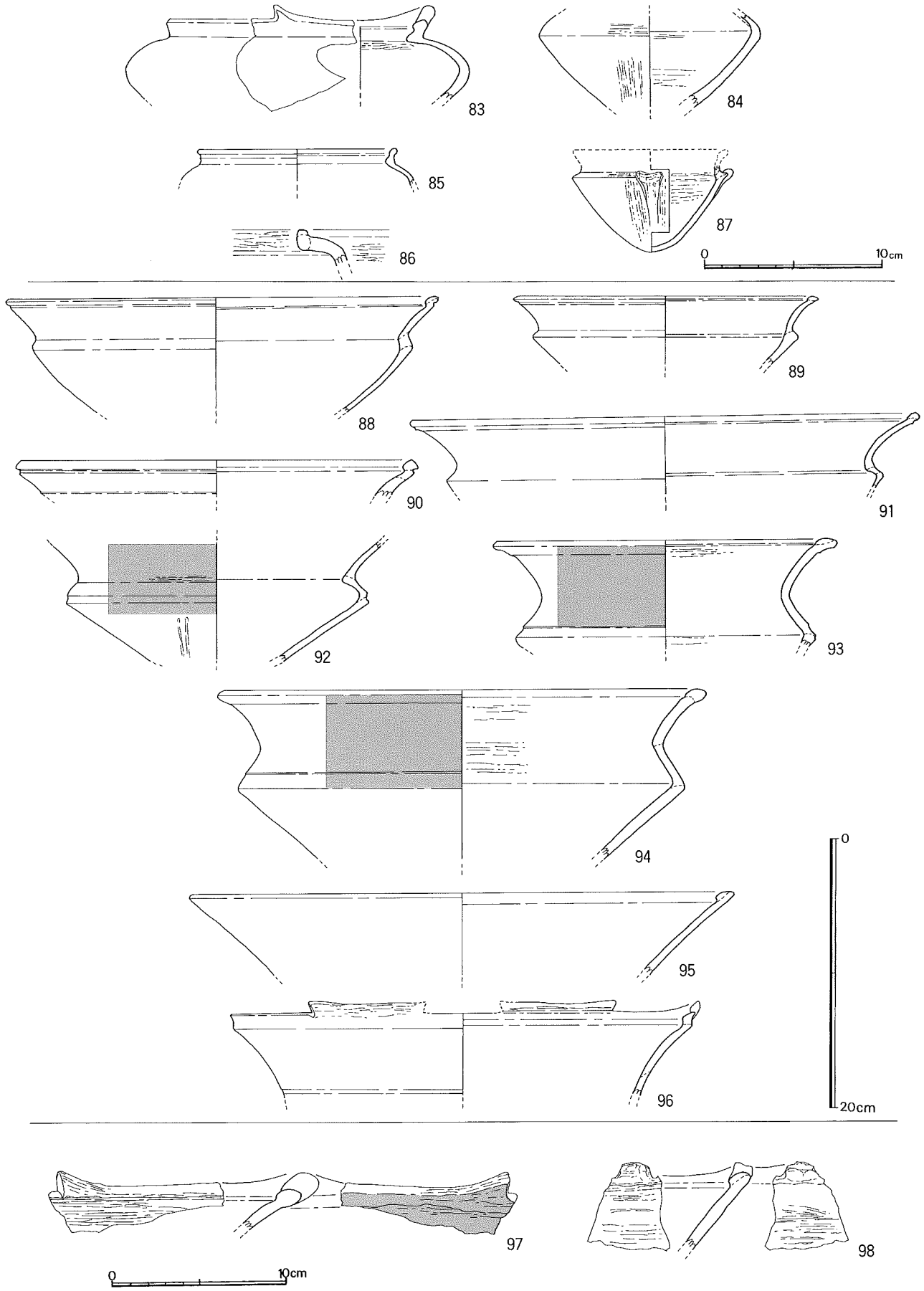
Ｂ３類…胴部の器形は不明だが，頸部が長く伸びる厚手の土器群（95・96・98）。

A類は非常に多く出土している。口径にはばらつきがあり非常に大型のものからミニチュア土器と呼ぶべき小型の個体まで存在する（85・87）。いずれもヘラミガキによる丁寧な調整である。色調は黒褐色系のものが目立つが，褐色系の明るい発色の土器もわずかに存在する。Ａ１類は薄手で焼成も良好であるのに対して，Ａ２類・Ａ４類はやや厚手になる傾向がある。口縁端部に突起をつける例はＡ１類～Ａ３類で確認できるが，特にＡ３類は大振りの突起を複数つける例（81）や胴部最大径付近に突起をつける例（82・87）が目立つ。87はＡ３類のミニチュア土器で，口縁部を欠失するものの全体の器形がうかがえる資料である。尖底気味の丸底で胴部上位で短くくびれ，口縁部は短く外反するものと考えられる。くびれ部に蝶ネクタイ状の突起を貼り付けている。非常に薄手で丁寧に製作している。Ａ４類は小片がごく少量出土している（86）。玉縁状の特徴的な口縁部のみならず口縁部自体が短く退化したもので，他のA類よりも新しい特徴を備えている。

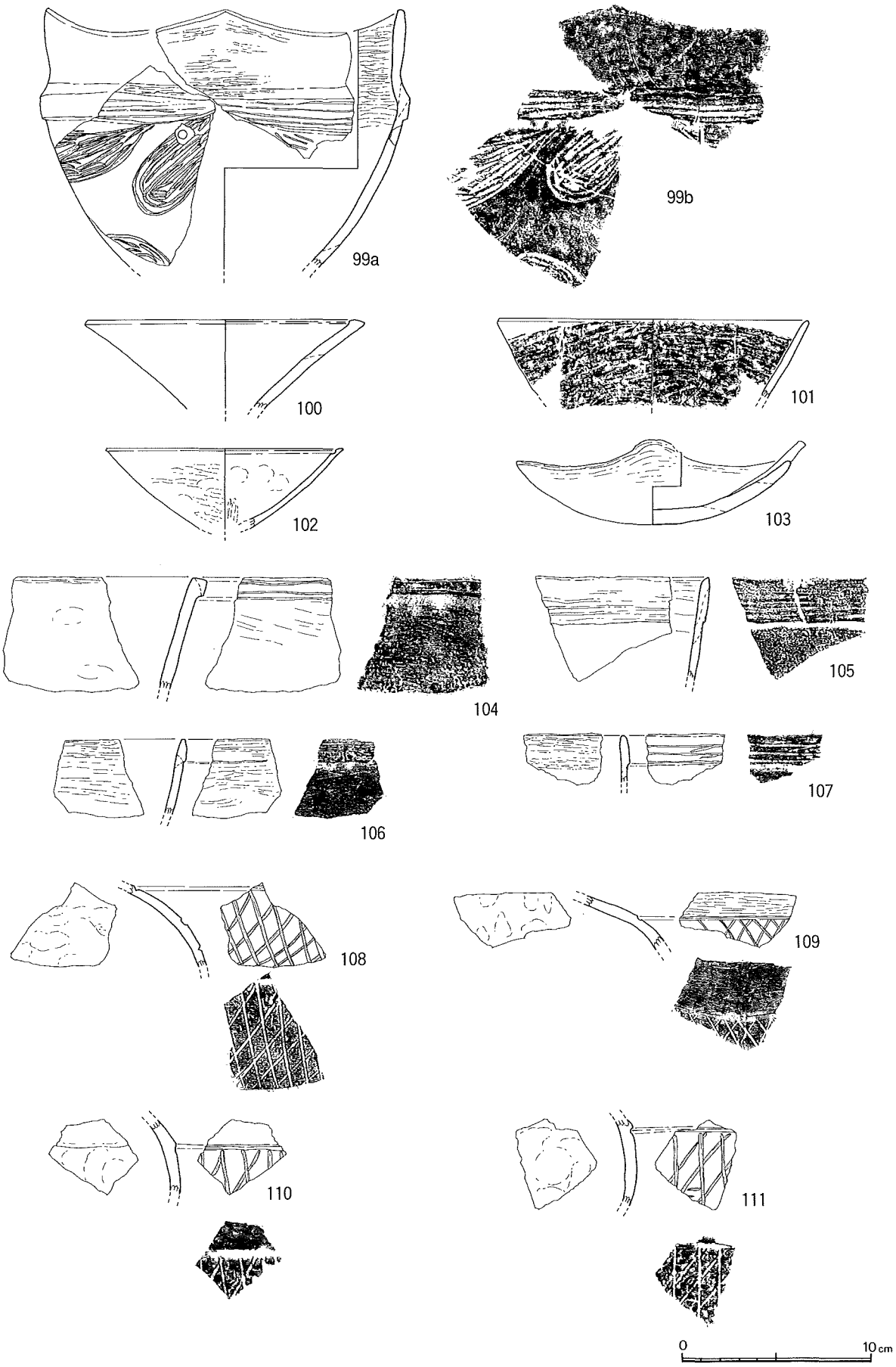
B類は玉縁状の口縁部やヘラミガキを多用する丁寧な作りはA類と共通するものの，褐色系の色調の土器が比較的多い点は異なる。Ｂ１類の口縁部は玉縁状であり，Ａ１類の口縁部に類似する。屈曲部はいずれも鋭く内傾し，外面に稜線が残る点は共通するが，内面にも稜線を残す例のほか(88・91)，内面に稜線を残さずなめらかに湾曲して口縁部に至る例も存在する（89）。Ｂ２類は頸部より上位の外面に赤色顔料を塗布する例が多い点が特徴である。屈曲部は段を持ちつつ丸みを帯びて内傾するもの（92）や，内傾部分が長く間延びしたもの（93・94）があり，後者は器壁も厚手でぼってりした印象を受ける。口縁部は平縁のほか，大振りな鰭状突起をつける例もある（97）。Ｂ３類は口縁部から頸部にかけての破片のみで，全体の器形をうかがえる資料はない。口縁部形態は外面は平滑で内面に段を持ち，内側に半円形に突出したような形態となるもの（95・98）と，頸部から短く屈曲して立ち上がるもの（96）の二者がある。96は口縁端部に横長の方形突起を貼り付け，98は円形突起を貼り付



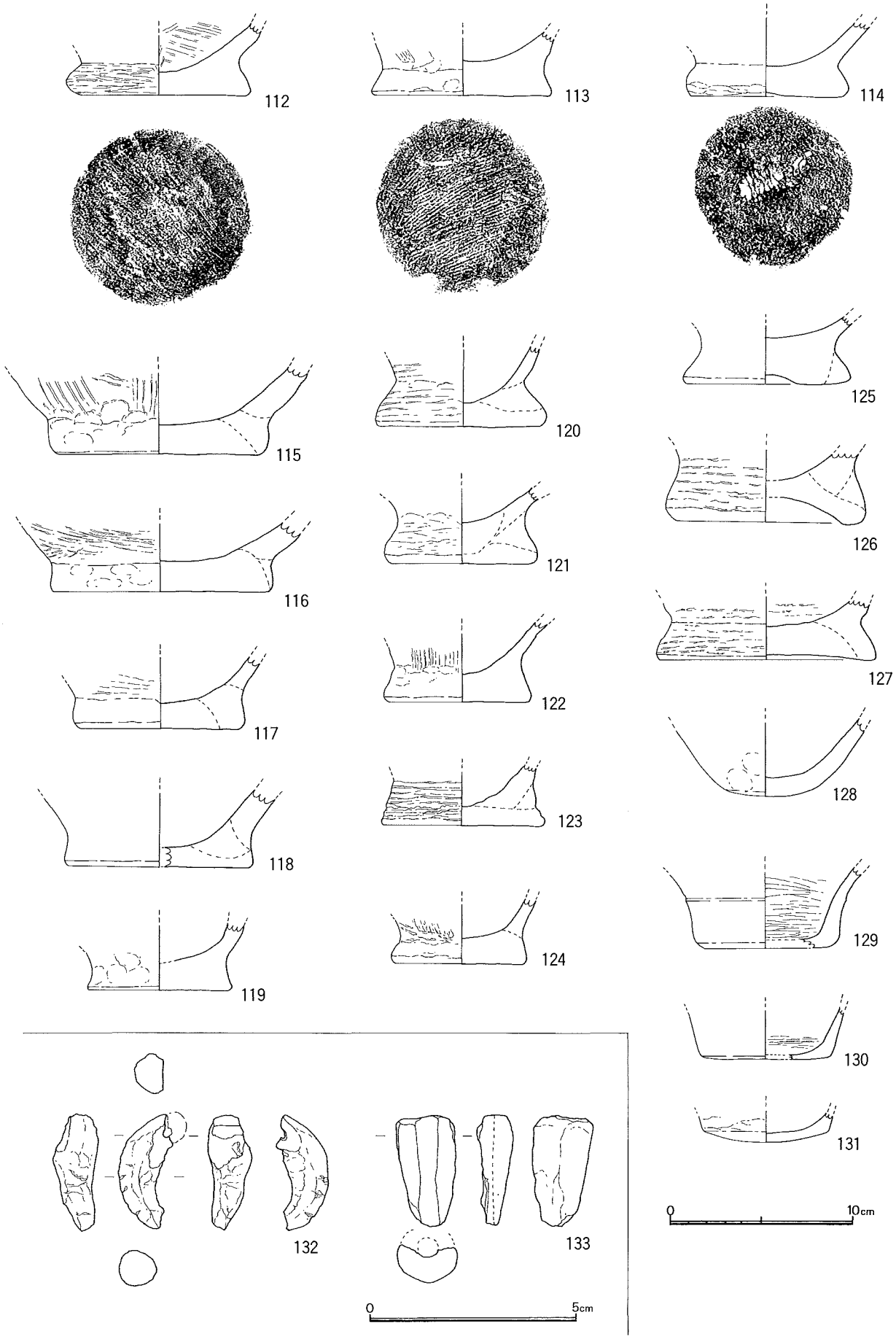
第21図　出土土器実測図⑧（S＝1／4）



第22図　出土土器実測図⑨（S＝1/3，1/4）



第23図　出土土器実測図⑩（S＝1／3）



第24図　出土土器実測図⑪（S＝1／3）および土製品実測図（S＝3／4）

けている。

第23図にはその他の器種を一括掲載した。98は波状口縁を有する鉢である。胴部と頸部の境に断面幅広台形の突帯を貼り付けるが，波頂部直下に向けて徐々に幅狭となる。突帯上には横位の二枚貝条痕が巡り，沈線状の文様効果をあげている。丸みを帯びた突帯下の胴部には，水滴形の区画内を斜行沈線で充塡した特徴的な篦描文様が展開する。これらの文様は，波頂部を境に左右に展開し，突帯直下から胴部方向に展開する文様のほか，底部から胴部に向けて展開する文様の一部も確認できる。突帯直下には補修孔が１個あく。調整は頸部以上を中心に内外面ともヘラミガキで，胴部以下は丁寧にナデている。器壁は浅鉢に比べるとやや厚手であるが，胎土は精良できめが細かい。このような器形・文様を持つ土器は島原半島ではこれまで例がなく，特に特徴的な篦描文様は，いわゆる橿原式文様の在地的な受容のあり方を示すものとして注目される。100～102は底部から口縁部にかけてラッパ状に開く鉢形の土器である。丁寧なナデもしくはヘラミガキで整えた精製品（100・102）のほか，粗雑なヘラミガキで整えたものもある（101）。いずれも口径の小さな小型の器種である。103は波状口縁を呈す皿状の土器である。波頂部の長さは一様ではなく，１カ所が半円形に長く伸びている。調整は丁寧なヘラミガキで，器壁はやや厚めであるが胎土は精良である。104～107は口縁部が肥厚する一群である。小片が多く器形はよくわからないが，口縁部から胴部にかけては直線的な形態となる。口縁部が矩形にしっかりと張り出す厚手の土器（104）と，口縁部が幅広でわずかに肥厚する薄手の土器があり，いずれも口縁部には横走するヘラ描き多条沈線もしくは条痕調整が残る。調整は比較的丁寧で，106・107はヘラミガキとナデにより浅鉢と遜色ない薄手の精製品である。108～111は格子目沈線文を持つ土器である。沈線文はヘラ描きで，縄文時代早期の格子目文の押型文土器や晩期の組織痕土器とは明らかに異なる。破片資料のみで全体の器形はうかがえないものの，全体的に湾曲しており丸みを帯びた器形となる。調整はヘラミガキもしくはナデで丁寧に調整し，内面には指頭圧痕を残す。沈線もしくは段を境に胴部全面に文様が展開するが，このような胴部の上位に沈線もしくは段を持つ土器は浅鉢Ａ１類で確認でき（第21図68），丸みを帯びた器形とともに両者の関連が推測できる。

第24図112～131は底部である。底部外面が三角形に外側に張り出すものが主体となるが，底面から直立気味に立ち上がるものも存在する（115～119）。また上げ底（126・127），凹み底（114・125）もわずかながら出土している。112・113は底面にケズリ痕およびハケ目に類似した調整痕がそれぞれ観察できる。114はヘラ押さえにより楕円形の凹みを作り出している。128～131は浅鉢の底部である。丸底の128はＡ類浅鉢の底部であろう。129は平底であるが，直立気味に立ち上がる底部とラッパ状に開く胴部を浅い段で区切っている。130・131は不安定な丸底であるが，胴部の立ち上がり部分は明瞭な稜線を伴って屈曲している。

(3) 土　製　品

132は土製勾玉である。頭部の穿孔部分を一部欠損する。粘土紐を若干湾曲させ，頭部を平坦に整えて穿孔している。穿孔は直線的で焼成前に穿たれている。湾曲部分の背面には，粘土紐を湾曲した際にできた粘土の亀裂がそのまま残っている。全体的に指押さえおよびナデにより丁寧に製作している。133は管状土製品である。穿孔部分が幅広であるため土錘としたが，平面形が上下でアンバランスであることから管玉の可能性もある。ナデによる丁寧な調整を施す。

第１表　出土土器観察表①

図	番号	グリットNo	層位	器種	部位	色調 外面	色調 内面	胎土	調整 外面	調整 内面	備考
14	1	E-7	Ⅴ	深鉢	口	橙色(Hue7.5YR7/6)	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	ナデ	楕円押型文
	2	H-4	Ⅳ	深鉢	胴	褐色(Hue7.5YR4/6)	暗褐色(Hue7.5YR3/3)	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	ナデ・指おさえ	楕円押型文
	3	H-4	Ⅴ	深鉢	胴	橙色(Hue7.5YR6/6)	にぶい赤褐色(Hue5YR4/3)	石英・長石・金雲母・角閃石	ナデ	ナデ	楕円押型文
	4	H-4	Ⅳ	深鉢	胴	明赤褐色(Hue5YR5/6)	灰褐色(Hue5YR4/2)	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	ナデ	楕円押型文
	5	H-4	Ⅴ	深鉢	胴	橙色(Hue5YR6/6)	にぶい赤褐色(Hue5YR5/3)	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	ナデ	楕円押型文
	6	G-4	Ⅳ	深鉢	胴	橙色(Hue5YR6/6)	明赤褐色(Hue5YR5/6)	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	ナデ	楕円押型文
	7	G-4	Ⅲ.Ⅳ	深鉢	胴	橙色(Hue7.5YR6/6)	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	石英・長石・金雲母・角閃石	ナデ	ナデ	楕円押型文
	8	H-5	Ⅳ	深鉢	胴	橙色(Hue7.5YR6/6)	にぶい褐色(Hue7.5YR5/4)	石英・長石・金雲母・黒雲母	ナデ	指おさえ・ナデ	楕円押型文
	9	G-5	Ⅴ	深鉢	胴	にぶい赤褐色(Hue5YR4/4)	灰褐色(Hue5YR4/2)	石英・長石・金雲母・角閃石	ナデ	指おさえ・ナデ	楕円押型文
	10	H-4	Ⅴ	深鉢	胴	橙色(Hue5YR6/6)	灰褐色(Hue5YR4/2)	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	ナデ	楕円押型文
	11	F-5	Ⅲ	深鉢	胴	にぶい赤褐色(Hue5YR5/3)	にぶい橙色(Hue7.5YR7/4)	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	ナデ	楕円押型文
	12	F-6	Ⅳ	深鉢	胴	橙色(Hue5YR7/6)	橙色(Hue5YR6/6)	石英・長石・金雲母・角閃石	ナデ	ナデ	楕円押型文
	13	G-5	Ⅴ	深鉢	胴	にぶい赤褐色(Hue5YR5/4)	橙色(Hue7.5YR6/6)	石英・長石・雲母・角閃石	指おさえ・ナデ	指おさえ・ナデ	楕円押型文
	14	G-5	Ⅴ	深鉢	胴	橙色(Hue5YR6/8)	橙色(Hue7.5YR7/6)	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	ナデ	楕円押型文
	15	G-5	Ⅴ	深鉢	胴	明赤褐色(Hue5YR5/6)	橙色(Hue5YR6/6)	石英・長石・雲母・角閃石	指おさえ	ナデ	楕円押型文
	16	G-5	Ⅴ	深鉢	胴	にぶい赤褐色(Hue5YR5/4)	明赤褐色(Hue5YR5/6)	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	指おさえ・ナデ	楕円押型文
	17	G-5	Ⅲ.Ⅳ	深鉢	口	橙色(Hue7.5YR7/6)	明黄褐色(Hue10YR7/6)	石英・長石・金雲母・角閃石	ナデ	ナデ	山形文
	18	G-5	Ⅴ	深鉢	胴	橙色(Hue5YR6/8)	橙色(Hue7.5YR7/6)	石英・長石・金雲母・角閃石	ナデ	ナデ	山形文
	19	G-5	Ⅴ	深鉢	胴	橙色(Hue5YR6/6)	橙色(Hue5YR7/6)	石英・長石・金雲母・角閃石	ナデ	ナデ	山形文
	20	G-5	Ⅳ	深鉢	胴	黄橙色(Hue7.5YR7/8)	橙色(Hue7.5YR7/6)	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	ナデ	山形文
	21	G-5	Ⅳ	深鉢	胴	明赤褐色(Hue5YR5/6)	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	指おさえ・ナデ	山形文
	22	G-5	Ⅳ	深鉢	胴	橙色(Hue5YR7/6)	浅黄橙色(Hue10YR8/4)	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	ナデ	山形文
	23	G-5	Ⅴ	深鉢	胴	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	黄橙色(Hue10YR8/6)	石英・長石・金雲母・角閃石	ナデ	ナデ	山形文
	24	F-5	Ⅴ	深鉢	胴	橙色(Hue7.5YR7/6)	橙色(Hue7.5YR5/6)	石英・長石・金雲母・角閃石	ナデ	ナデ	山形文
	25	G-5	Ⅳ	深鉢	胴	橙色(Hue7.5YR7/6)	浅黄橙色(Hue10YR2/4)	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	ナデ	山形文
	26	G-5	Ⅴ	深鉢	胴	明赤褐色(Hue5YR5/6)	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	石英・長石・金雲母・角閃石	ナデ	ナデ	山形文
	27	D-10	Ⅳ	深鉢	胴	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	浅黄橙色(Hue7.5YR8/4)	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	ナデ	山形文
15	28	D-9	Ⅳ	深鉢	口	浅黄橙色(Hue10YR8/4)	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	石英・長石・雲母	ケズリ→ナデ	ケズリ→ナデ・板ナデ	
	29	G-4	Ⅲ	深鉢	口	橙色(Hue5YR6/6)	にぶい橙色(Hue7.5YR6/4)	石英・長石・雲母	ナデ	ナデ	
	30	F-8	Ⅲ	深鉢	口	赤褐色(Hue2.5YR4/6)	橙色(Hue5YR6/6)	石英・長石・雲母	ナデ	ナデ	
16	31	I-2	Ⅲ	深鉢	口	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	石英・長石・雲母	擦過→ナデ	擦過	
	32	E-8	Ⅲ	深鉢	口	褐色(Hue7.5YR4/3)	褐色(Hue7.5YR4/6)	石英・長石・雲母・角閃石	擦過→ナデ	擦過→ナデ	
	33	D-8.C-8.C-7	Ⅲ.Ⅳ	深鉢	口	褐色(Hue7.5YR7/6)	浅黄橙色(Hue10YR8/4)	石英・長石・金雲母	擦過	板ナデ→ナデ	
	34	D-8.E-8.D-7	Ⅲ.Ⅳ	深鉢	口	明黄褐色(Hue10YR7/6)	浅黄橙色(Hue10YR8/3)	石英・長石・雲母	条痕	条痕ナデ消し	
	35	G-6.H-6/G-6	Ⅲ	深鉢	口	にぶい橙色(Hue7.5YR7/4)	褐灰色(Hue10YR4/1)	石英・長石・雲母	条痕	ナデ・条痕→ナデ	
	36	E-8	Ⅲ	深鉢	口	褐色(Hue7.5YR7/6)	にぶい黄橙色(Hue10YR5/3)	石英・長石・雲母	条痕	ナデ	
17	37	C-7	Ⅳ	深鉢	口	黒褐色(Hue10YR3/1)	暗褐色(Hue10YR3/3)	石英・長石・金雲母	条痕→ナデ消し	ケズリ・条痕→ナデ消し	
	38	D-8.E-8.G-6	Ⅲ.Ⅳ	深鉢	口	灰褐色(Hue7.5YR4/2)	橙色(Hue7.5YR7/6)	石英・長石・雲母	条痕	条痕→ナデ消し	
	39	C-8	Ⅳ	深鉢	口	明黄褐色(Hue10YR6/6)	明黄褐色(Hue10YR7/6)	石英・長石・雲母	条痕→ナデ	条痕→ナデ	
	40	D-10.C-9	Ⅲ.Ⅳ	深鉢	口	橙色(Hue7.5YR6/6)	にぶい橙色(Hue7.5YR6/4)	石英・長石・金雲母	条痕	一部ナデ	
	41	E-8.E-10.D-8	Ⅲ	深鉢	口	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	褐灰色(Hue10YR4/1)	石英・長石・雲母	条痕・ナデ・板ナデ	条痕・板ナデ	
	42	G-6	Ⅲ	深鉢	胴	赤褐色(Hue5YR4/8)	橙色(Hue7.5YR6/8)	石英・長石・雲母	ケズリ→ナデ・ナデ	ナデ	

第2表　出土土器観察表②

図	番号	グリットNo	層位	器種	部位	色調 外面	色調 内面	胎土	調整 外面	調整 内面	備考
17	43	I-3	Ⅲ	深鉢	胴	黒褐色(Hue7.5YR3/1)	灰褐色(Hue7.5YR4/2)	石英・長石・雲母	条痕・ナデ	擦過・条痕・ナデ	
	44	H-5	Ⅲ	深鉢	胴	にぶい褐色(Hue7.5YR5/4)	橙色(Hue7.5YR6/6)	石英・長石・雲母	条痕・ナデ	ナデ	
18	45	G-5	Ⅲ.Ⅳ	深鉢	口	黒褐色(Hue10YR3/1)	灰褐色(Hue10YR4/2)	石英・長石・雲母	ナデ	ナデ	
	46	F-7/G-6	Ⅲ	深鉢	胴	黒褐色(Hue10YR3/2)	暗赤褐色(Hue5YR3/6)	石英・長石・雲母	ナデ	ナデ	
	47	H-6	Ⅲ	深鉢	胴	明赤褐色(Hue5YR5/8)	橙色(Hue5YR6/6)	石英・長石・雲母・角閃石	ヘラナデ→ナデ	ヘラナデ→ナデ	
	48	G-7	Ⅲ	深鉢	胴	黒褐色(Hue7.5YR3/1)	にぶい黄橙色(Hue10YR7/2)	石英・長石・雲母	ナデ	ナデ	
	49	H-4	Ⅲ	深鉢	口	暗赤褐色(Hue5YR3/2)	橙色(Hue7.5YR6/6)	石英・長石・雲母	ナデ	ナデ	
	50	G-8.G-7.F-7	Ⅲ.Ⅳ	深鉢	口	にぶい赤褐色(Hue5YR4/3)	明赤褐色(Hue5YR5/6)	石英・長石・雲母	ナデ	ナデ	
	51	H-4.H-7	Ⅲ	深鉢	口	暗赤褐色(Hue5YR3/6)	橙色(Hue7.5YR6/6)	石英・長石・雲母	ナデ	ナデ	
	52	H-5	Ⅲ	深鉢	口	にぶい赤褐色(Hue5YR4/4)	褐色(Hue7.5YR4/6)	石英・長石・雲母	ナデ	ナデ	
19	53	H-5	Ⅳ	深鉢	口	暗赤褐色(Hue5YR3/6)	にぶい橙色(Hue7.5YR6/4)	石英・長石・雲母	ナデ	ナデ	
	54	H-4	Ⅲ	深鉢	口	暗赤褐色(Hue5YR3/6)	暗褐色(Hue7.5YR3/4)	石英・長石・雲母	ナデ	ナデ	
	55	F-7	Ⅲ	深鉢	口	褐色(Hue10YR4/4)	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	石英・長石・雲母	擦過	条痕ナデ消し	
	56	E-7	Ⅳ/Ⅲ/Ⅱ	深鉢	口	褐色(Hue7.5YR4/3)	褐色(Hue7.5YR4/4)	石英・長石・雲母	ナデ	擦過→ナデ	
	57	F-8	Ⅲ.Ⅳ	深鉢	胴	褐色(Hue7.5YR4/6)	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	石英・長石・雲母	擦過・ナデ	擦過	
	58	F-8	Ⅲ	深鉢	口	褐色(Hue7.5YR4/3)	明黄褐色(Hue10YR7/6)	石英・長石・黒雲母・金雲母	擦過→ナデ・条痕	条痕ナデ消し・板ナデ	
20	59	H-3.I-3	Ⅲ.Ⅳ	鉢	口	黒褐色(Hue10YR3/2)	明赤褐色(Hue5YR5/8)	石英・長石・雲母・角閃石	条痕	ナデ	組織痕あり
	60	C-8.E-10	Ⅲ.Ⅳ	鉢	口	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	赤褐色(Hue5YR4/6)	石英・長石・雲母	ナデ	条痕	組織痕あり
	61	E-8	Ⅲ	鉢	口	黒褐色(Hue10YR3/1)	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	石英・長石・雲母	擦過	擦過・ナデ→指おさえ	組織痕あり
	62	E-8/E-8	Ⅱ.Ⅲ.Ⅳ/Ⅲ.Ⅳ	鉢	口	褐色(Hue10YR4/4)	黒褐色(Hue10YR3/2)	石英・長石・金雲母	ナデ	擦過→ナデ・指おさえ	組織痕あり
21	63	F-5	Ⅲ	浅鉢	口	灰褐色(Hue7.5YR4/2)	にぶい褐色(Hue7.5YR5/3)	長石・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	64	G-8	Ⅱ.Ⅲ	浅鉢	口	灰黄褐色(Hue10YR4/2)	黒褐色(Hue10YR3/1)	長石・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ・指おさえ	
	65	F-5	Ⅲ	浅鉢	口	黒褐色(Hue10YR3/1)	褐灰色(Hue10YR4/1)	石英・長石・雲母	ヘラミガキ	指おさえ→ヘラミガキ	
	66	H-5	Ⅳ	浅鉢	口	橙色(Hue7.5YR7/6)	橙色(Hue7.5YR7/6)	雲母・石英	ヘラミガキ	ヘラミガキ・指おさえ	
	67	G-8	Ⅲ	浅鉢	口	黄橙色(Hue10YR7/8)	にぶい黄橙色(Hue10YR6/4)	雲母・砂粒	ナデ	ナデ	
	68	F-6.G-5.H-4.H-5	Ⅱ.Ⅲ.Ⅳ	浅鉢	口	にぶい黄橙色(Hue10YR6/4)	褐灰色(Hue10YR4/1)	石英・長石・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	69	H-5	Ⅲ	浅鉢	口	黒褐色(Hue7.5YR3/1)	褐灰色(Hue7.5YR4/1)	雲母・砂粒	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	70	H-4	Ⅲ	浅鉢	口	褐灰色(Hue10YR4/1)	褐灰色(Hue10YR4/1)	長石・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ・指おさえ	
	71	G-5	Ⅲ	浅鉢	口	黒褐色(Hue10YR3/2)	暗褐色(Hue10YR3/3)	雲母・砂粒	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	72	I-3	Ⅲ	浅鉢	口	褐灰色(Hue7.5YR4/1)	褐灰色(Hue7.5YR5/6)	石英・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ・ケズリ→ナデ	
	73	E-10	Ⅳ	浅鉢	口	黒色(Hue7.5YR1.7/1)	黒色(Hue7.5YR1.7/1)	雲母・砂粒	ヘラミガキ	ヘラミガキ・指おさえ	
	74	E-8	Ⅳ	浅鉢	口	黒褐色(Hue10YR3/1)	黒褐色(Hue10YR3/1)	雲母・砂粒	ヘラミガキ	ヘラミガキ・指おさえ	
	75	B-9	Ⅱ	浅鉢	口	にぶい黄橙色(Hue10YR7/3)	灰黄褐色(Hue10YR6/2)	長石・雲母	ナデ	ナデ	
	76	E-8	Ⅳ	浅鉢	口	黒褐色(Hue10YR3/1)	褐灰色(Hue10YR4/1)	雲母・砂粒	ヘラミガキ	ヘラミガキ・ナデ	
	77	F-10.G-7	Ⅲ.Ⅳ	浅鉢	口	灰黄褐色(Hue10YR4/2)	にぶい黄橙色(Hue10YR7/3)	雲母・角閃石・砂粒	ヘラミガキ	ヘラミガキ・指おさえ	
	78	D-7	Ⅳ	浅鉢	口	にぶい黄橙色(Hue10YR7/3)	にぶい黄橙色(Hue10YR7/3)	石英・長石・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ・ナデ	
	79	H-4	Ⅳ	浅鉢	口	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	橙色(Hue7.5YR7/6)	石英・長石・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ・指おさえ	
	80	E-10	Ⅲ	浅鉢	口	明赤褐色(Hue5YR5/6)	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	石英・長石・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	81	A-10	Ⅱ	浅鉢	口	黒褐色(Hue10YR2/3)	黒褐色(Hue10YR2/3)	石英・長石・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	82	I-3	Ⅲ	浅鉢	胴	黒色(Hue10YR2/1)	黒色(Hue10YR1.7/1)	石英・雲母	ナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ	
22	83	F-10	Ⅲ	浅鉢	口	黒褐色(Hue10YR3/1)	褐灰色(Hue10YR4/1)	石英	ヘラミガキ	ヘラミガキ・ナデ	
	84	E-10	Ⅳ	浅鉢	胴	にぶい黄橙色(Hue10YR6/4)	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	85	G-7	Ⅲ	浅鉢	口	灰黄褐色(Hue10YR4/2)	灰黄褐色(Hue10YR4/2)	砂粒・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	86	E-7	Ⅳ	浅鉢	口	褐灰色(Hue10YR4/1)	褐灰色(Hue10YR4/1)	石英・長石・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	87	I-3	Ⅲ	浅鉢	胴	褐色(Hue7.5YR4/3)	明赤褐色(Hue5YR5/6)	石英・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	88	H-5	Ⅲ	浅鉢	口	褐色(Hue10YR4/6)	にぶい黄褐色(Hue10YR4/3)	雲母・砂粒	ヘラミガキ	ヘラミガキ	

第3表　出土土器観察表③

図	番号	グリットNo	層位	器種	部位	色調 外面	色調 内面	胎土	調整 外面	調整 内面	備考
22	89	I-3	Ⅳ	浅鉢	口	にぶい黄褐色(Hue10YR5/4)	黒色(Hue10YR2/1)	石英・長石・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	90	H-6	Ⅲ	浅鉢	口	黒褐色(Hue10YR3/1)	黒褐色(Hue10YR3/1)	石英・長石・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	91	H-4	Ⅳ	浅鉢	口	にぶい黄橙色(Hue10YR6/4)	灰褐色(Hue7.5YR4/2)	長石・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	92	D-8	Ⅳ	浅鉢	胴	黒褐色(Hue10YR3/1)	褐灰色(Hue10YR4/1)	石英・雲母	ヘラミガキ	ナデ	赤色顔料付着
	93	E-9	Ⅳ	浅鉢	口	にぶい黄褐色(Hue10YR5/3)	にぶい黄褐色(Hue10YR6/4)	石英・長石・雲母	ナデ	ヘラミガキ・ナデ・ケズリ→ナデ	赤色顔料付着
	94	E-9	Ⅲ.Ⅳ	浅鉢	口	にぶい黄橙色(Hue10YR6/4)	にぶい黄褐色(Hue10YR5/3)	石英・長石	ヘラミガキ・ナデ	ヘラミガキ・条痕→ナデ	赤色顔料付着
	95	E-10	Ⅲ	浅鉢	口	黒褐色(Hue10YR3/1)	灰黄褐色(Hue10YR4/2)	長石・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	96	E-11.E-9	Ⅲ	浅鉢	口	浅黄色(Hue2.5Y7/4)	明黄褐色(Hue2.5Y7/6)	石英・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	97	D-9	Ⅳ	浅鉢	口	にぶい黄橙色(Hue10YR6/3)	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	長石・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ	赤色顔料付着
	98	D-9	Ⅱ	浅鉢	口	にぶい橙色(Hue7.5YR7/4)	浅黄橙色(Hue10YR8/3)	石英・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
23	99	G-7	Ⅲ	鉢	口	にぶい黄褐色(Hue10YR5/4)	にぶい黄橙色(Hue10YR7/3)	石英・金雲母	ナデ・ヘラミガキ	ナデ・ヘラミガキ	
	100	E-8	Ⅲ	鉢	口	褐色(Hue7.5YR4/4)	褐色(Hue7.5YR4/3)	雲母・砂粒	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	101	D-9	Ⅲ.Ⅳ	鉢	口	橙色(Hue7.5YR7/6)	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	石英・長石・雲母	条痕→ナデ	条痕→指おさえ→ナデ	
	102	H-4	Ⅳ	鉢	口	にぶい黄橙色(Hue10YR6/4)	灰黄褐色(Hue10YR6/2)	雲母	ヘラミガキ	ナデ・指おさえ	
	103	E-8	Ⅲ	Ⅲ	口	橙色(Hue5YR6/6)	赤褐色(Hue5YR4/8)	石英・長石・雲母	ケズリ→ヘラミガキ→ナデ	ケズリ→ヘラミガキ→ナデ	
	104	C-8	Ⅳ	鉢	口	橙色(Hue7.5YR6/6)	黒褐色(Hue10YR3/1)	石英・雲母	条痕→ナデ	ヘラミガキ・ケズリ→ナデ	
	105	B-8	Ⅳ	鉢	口	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	浅黄橙色(Hue10YR8/3)	石英・金雲母	条痕→ナデ	条痕→ナデ	
	106	F-11	Ⅱ	鉢	口	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	褐灰色(Hue10YR4/1)	長石・雲母	ヘラミガキ・条痕	ヘラミガキ	
	107	F-8	Ⅳ	鉢	口	にぶい黄橙色(Hue10YR7/3)	灰黄褐色(Hue10YR6/2)	長石・雲母	ナデ	ヘラミガキ	
	108	F-6	Ⅲ	浅鉢	胴	灰黄褐色(Hue10YR4/2)	にぶい橙色(Hue7.5YR7/4)	長石・雲母	ナデ	ナデ	
	109	G-7	Ⅲ	浅鉢	胴	褐灰色(Hue10YR4/1)	明黄褐色(Hue10YR7/6)	長石・雲母	ヘラミガキ・ナデ	指おさえ→ナデ	
	110	F-8	Ⅱ	浅鉢	胴	橙色(Hue7.5YR6/6)	にぶい橙色(Hue7.5YR7/3)	長石・雲母	ヘラミガキ	ナデ・指おさえ→ナデ	
	111	G-8	Ⅲ	浅鉢	胴	明褐色(Hue7.5YR5/6)	橙色(Hue7.5YR6/6)	長石・雲母	ナデ	指おさえ→ナデ	
24	112	E-10	Ⅲ	深鉢	底	にぶい赤褐色(Hue5YR5/4)	褐灰色(Hue5YR4/1)	石英・長石・雲母	条痕・擦過→ナデ消し	条痕→ナデ	
	113	G-9	Ⅱ	深鉢	底	明黄褐色(Hue10YR7/6)	浅黄橙色(Hue10YR8/3)	石英・長石・金雲母	指おさえ・条痕・ナデ消し	ナデ	
	114	E-10	Ⅲ	深鉢	底	橙色(Hue5YR6/6)	にぶい黄褐色(Hue10YR5/3)	石英・長石・雲母	擦過・ヘラナデ・ナデ・指おさえ	ナデ	
	115	E-8	Ⅲ.Ⅳ	深鉢	底	橙色(Hue5YR6/6)	黒褐色(Hue10YR3/1)	石英・長石・雲母	条痕→ナデ・指おさえ→ナデ	ナデ	
	116	E-9.E-8	Ⅲ.Ⅳ	深鉢	底	浅黄橙色(Hue10YR2/4)	褐灰色(Hue10YR4/1)	石英・長石・雲母・角閃石	条痕・指おさえ・ナデ	ナデ	
	117	G-6	Ⅲ	深鉢	底	橙色(Hue7.5YR7/6)	灰黄褐色(Hue10YR4/2)	石英・長石・雲母	条痕ナデ消し・ナデ	ナデ	
	118	D-6	Ⅳ	深鉢	底	橙色(Hue5YR6/6)	赤褐色(Hue2.5YR4/6)	石英・長石・雲母	ナデ	ナデ	
	119	G-6.H-5	Ⅲ	深鉢	底	明赤褐色(Hue5YR5/8)	灰褐色(Hue7.5YR4/2)	石英・長石・雲母	ナデ・指おさえ	ナデ・指おさえ	
	120	D-8	Ⅲ	深鉢	底	橙色(Hue5YR7/6)	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	石英・長石・雲母	条痕ナデ消し・ナデ	ケズリ→ナデ	
	121	D-10	Ⅱ.Ⅳ	深鉢	底	橙色(Hue5YR6/6)	にぶい褐色(Hue7.5YR5/4)	石英・長石・雲母	指おさえ・ケズリ	ナデ	
	122	C-8	Ⅳ	深鉢	底	橙色(Hue5YR6/6)	褐灰色(Hue10YR4/1)	石英・長石・雲母	条痕・ナデ	ナデ・指おさえ	
	123	C-9	Ⅳ	深鉢	底	橙色(Hue5YR7/6)	灰褐色(Hue7.5YR5/2)	石英・長石・雲母	条痕→ナデ	ナデ	
	124	G-7	Ⅳ	深鉢	底	暗赤褐色(Hue5YR3/6)	暗赤褐色(Hue5YR3/2)	石英・長石・雲母	条痕ナデ消し・指おさえ・ナデ	ナデ	
	125	D-10	Ⅲ	深鉢	底	橙色(Hue7.5YR7/6)	褐灰色(Hue7.5YR4/1)	石英・長石・雲母	ナデ	ナデ・指おさえ	
	126	F-10	Ⅱ	深鉢	底	浅黄橙色(Hue7.5YR8/6)	にぶい黄橙色(Hue10YR7/2)	石英・長石・金雲母	条痕ナデ消し・ナデ・擦過	ナデ	
	127	D-10	Ⅳ	深鉢	底	明赤褐色(Hue5YR5/8)	赤褐色(Hue5YR4/6)	石英・長石・雲母	条痕→ナデ	条痕→ナデ	
	128	B-10	Ⅱ	浅鉢	底	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	にぶい黄橙色(Hue10YR6/3)	石英・長石・雲母	指おさえ・ナデ	ナデ	
	129	G-8	Ⅱ	浅鉢	底	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	黒色(Hue10YR2/1)	石英・長石・雲母	擦過→ナデ	ヘラミガキ	
	130	D-9	Ⅱ	浅鉢	底	黒褐色(Hue10YR3/1)	褐灰色(Hue10YR4/1)	長石・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	131	B-10	Ⅱ	浅鉢	底	にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	灰黄褐色(Hue10YR5/2)	石英・長石・雲母	擦過	ヘラミガキ	

土製品

図	番号	グリットNo	層位	器種	胎土	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
24	132	E-10	Ⅲ	勾玉	石英・長石・雲母	2.8	1.0	1.1	2.5	
	133	G-5	Ⅲ	土錘	石英・長石・雲母	2.7	1.5	0.9	2.4	管玉の可能性あり

(4) 石　　器

①器種別の分布

個別の説明に入る前に，石器の主要器種の出土状況を確認しておく。石器は総数3,642点が出土している。調査区全面からまんべんなく出土しているが，Ⅱ層～Ⅳ層出土石器については，土器の分布と同様，標高275m付近を境に北側と南側で分布が大きく二分する傾向にある（第25図）。Ⅴ層出土石器は南西側，特に第１トレンチ周辺に集中する傾向にあり（第26図），これは縄文時代早期押型文土器の分布とも重なる。

器種別の分布としては，基本的にどの器種も調査区全体に渡って散漫に分布するが（第27図～第29図），打製石斧については調査区の北東側に集中する傾向にある（第28図）。また，磨石・石皿・敲石の分布は，土器・石器全体の出土状況で認められた南北に二分した分布のあり方を色濃く反映している（第29図）。これらの石器の分布は，土器の接合関係でとらえた傾向と同様，場の機能や時期差をある程度反映しているものと考えられる。

①剥片石器

・剥片（第30図・第31図）

石器全体の76％を占める2,759点が出土している。石材は黒曜石・玄武岩がほとんどで，両者の比率は黒曜石83％，玄武岩16％となり，黒曜石製が圧倒的に多い。黒曜石製剥片の形状は縦長剥片が主体で，これらの一部には，鋭い両側縁に二次加工もしくは使用によるものとみられる微細剥離を認めることができる（**1・2・10～13・18**）。これらは，作業面の打撃の向きが主要剥離面と同じもの（**1～9**），90°異なるもの（**10～16**），180°異なるもの（**17～19**），求心状となるもの（**20・21**）などがある。また，数は少ないものの横長剥片も散見される（**22**）。玄武岩製剥片は，黒曜石製と共通する小型の剥片も多いが，厚手で大型の剥片もまとまって出土している。**23・24**のような縦長剥片や**26・27**のような横長剥片もあり，形態としては多様である。両石材は石器の器種によって採用される比率が異なっており，剥片の大きさや形態もこれを反映したものとなっている。

・石錐（第31図）

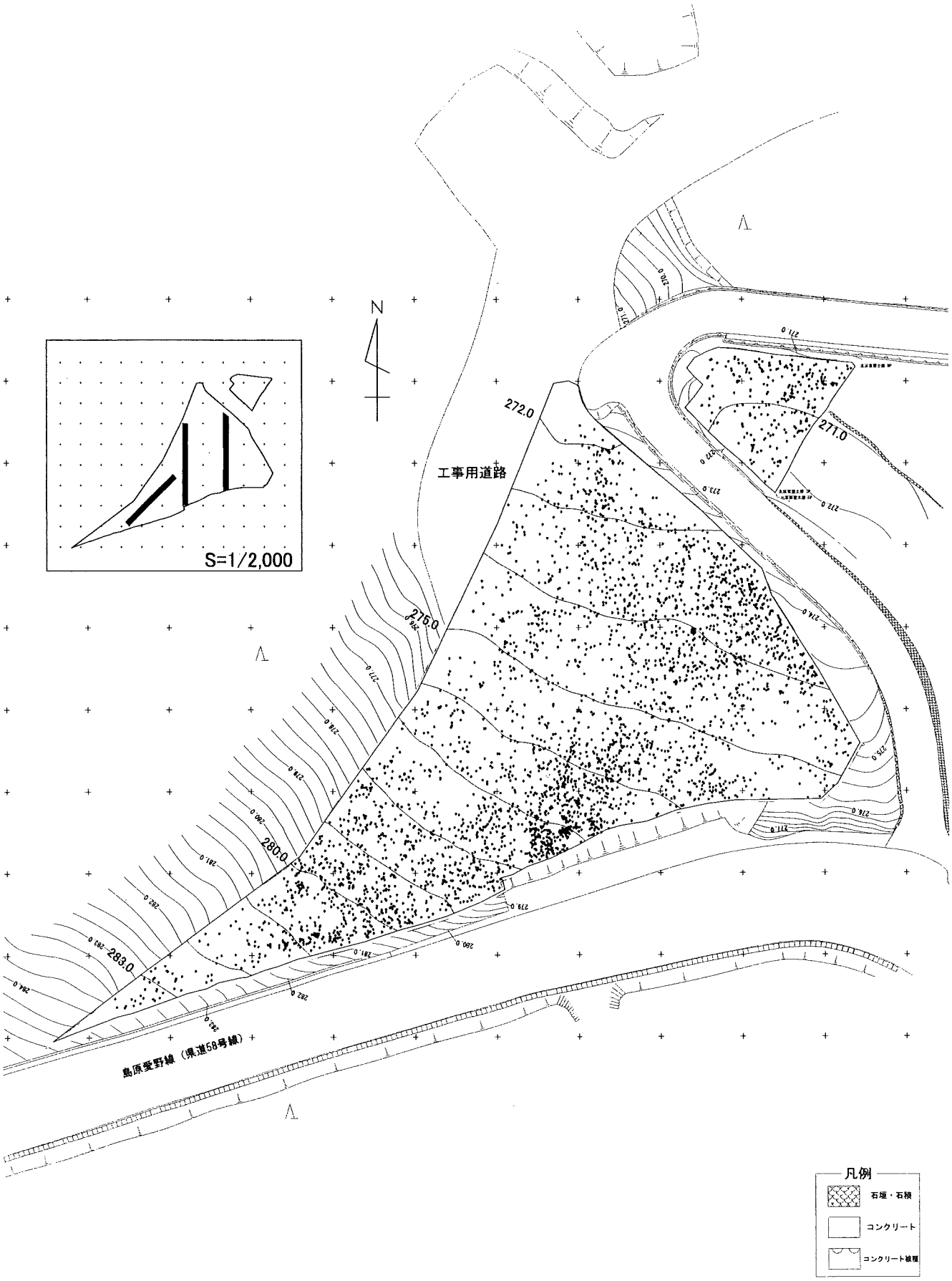
２点出土している。**28**は玄武岩製で，厚手の剥片の一端に調整剥離を加えて機能部とする。**29**は黒曜石製。剥片の両側縁から調整を加えて機能部を作り出すが，特にａ面右側縁はノッチ状に抉っており，結果として機能部も湾曲している。

・楔形石器（第31図）

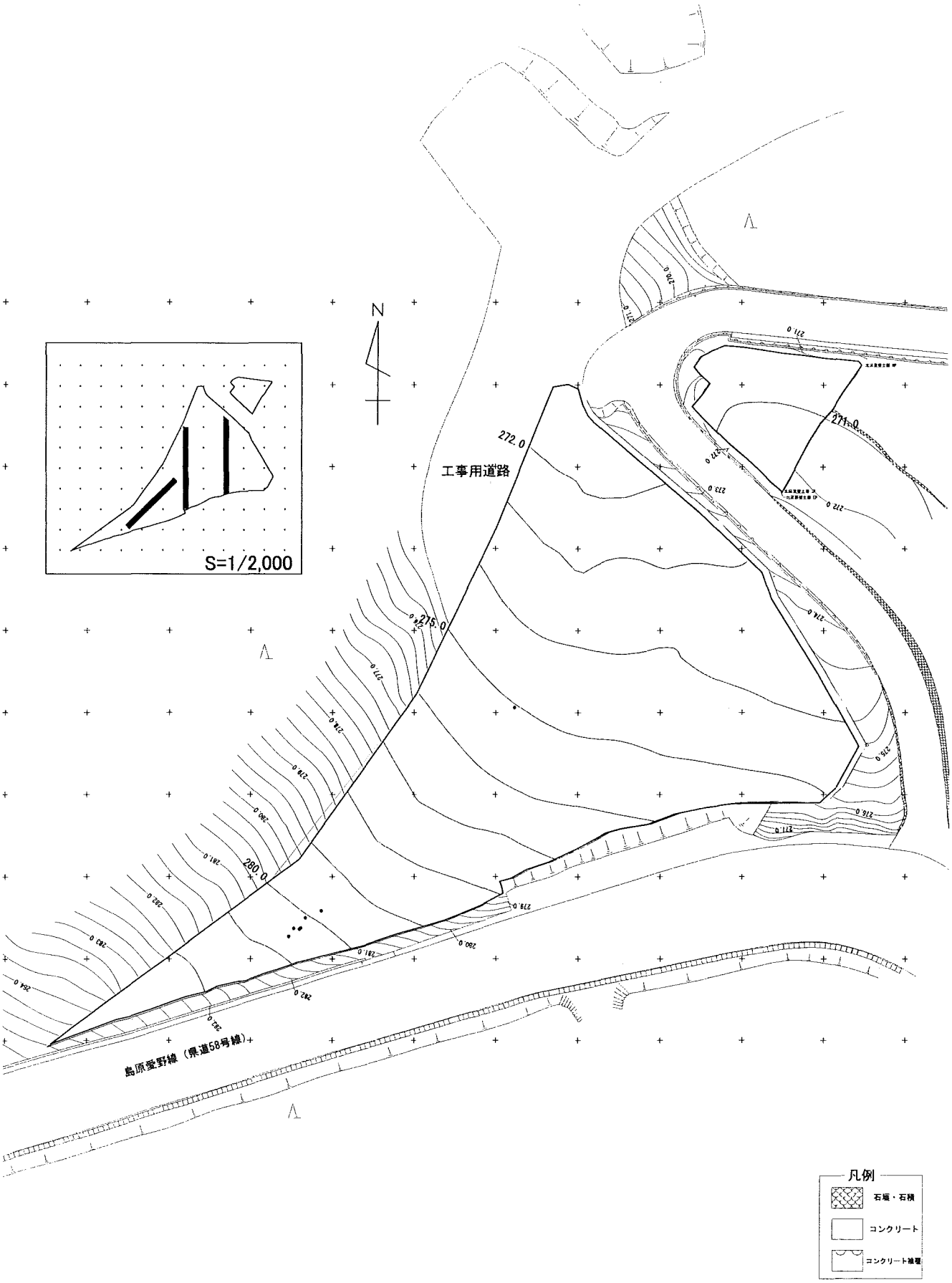
４点出土しているがそのうちの１点を図化した（**30**）。黒曜石製で角柱状の短軸両端に上下方向からの剥離面が確認できる。下半部に自然面を残す。

・石鏃（第32図・第33図）

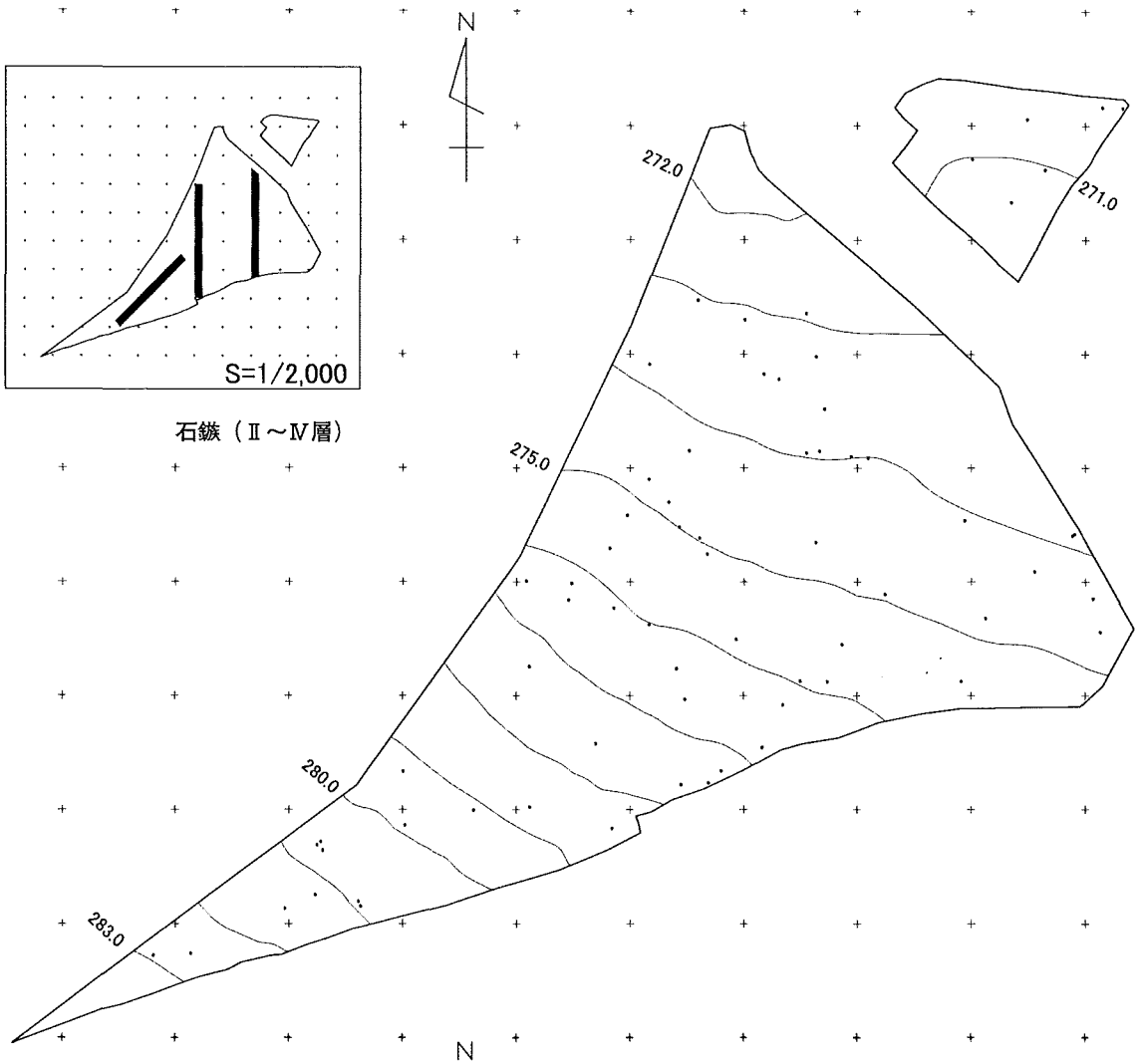
69点出土しているが，このうち完形もしくは完形に近い39点を図化した。石材は黒曜石が全体の83％を占めて圧倒的に多い。形態的には以下のように分類できる。



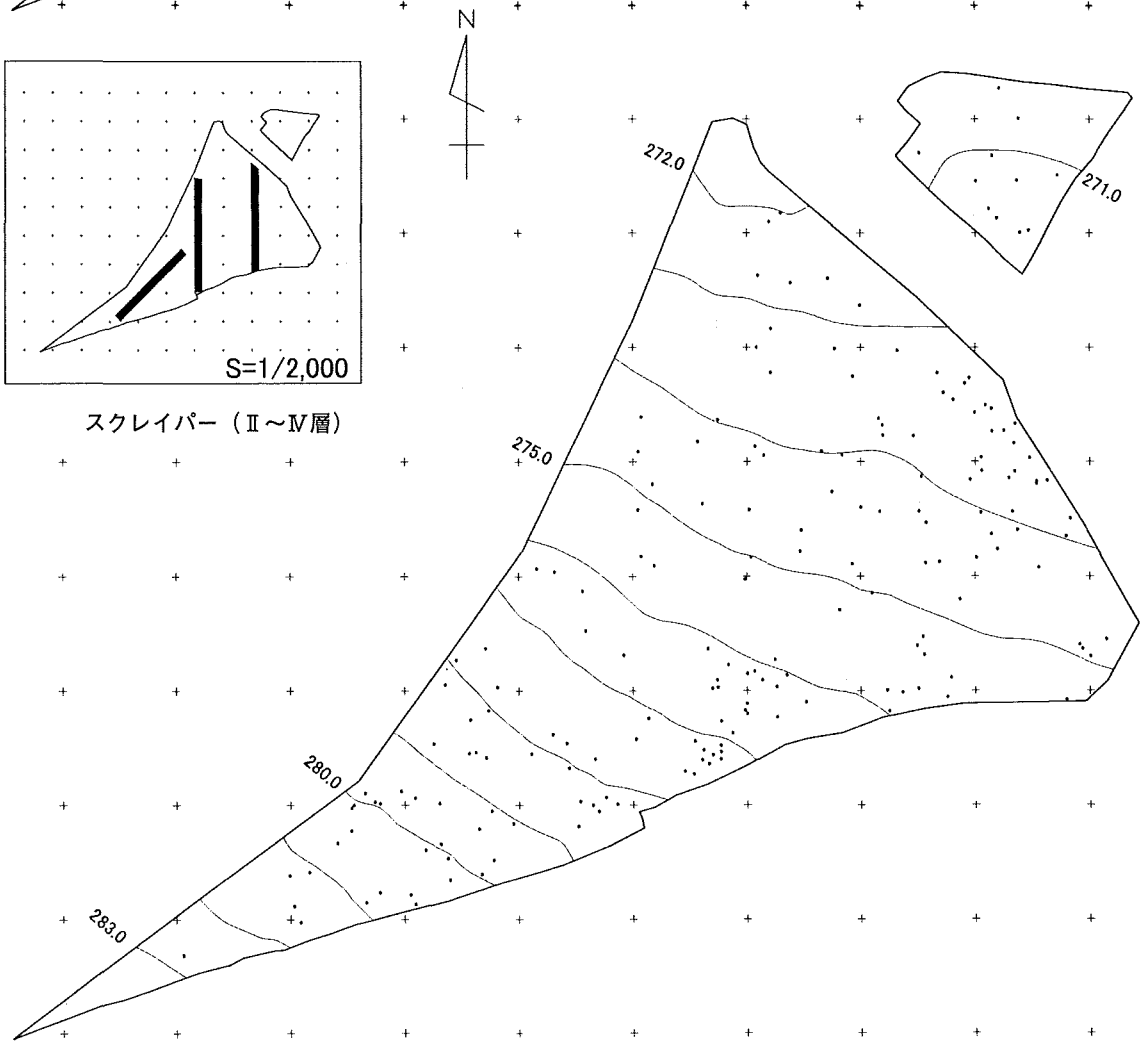
第25図　出土石器分布図①（Ⅱ～Ⅳ層）（S＝1/500）



第26図　出土石器分布図②（Ⅴ層）（S＝1/500）

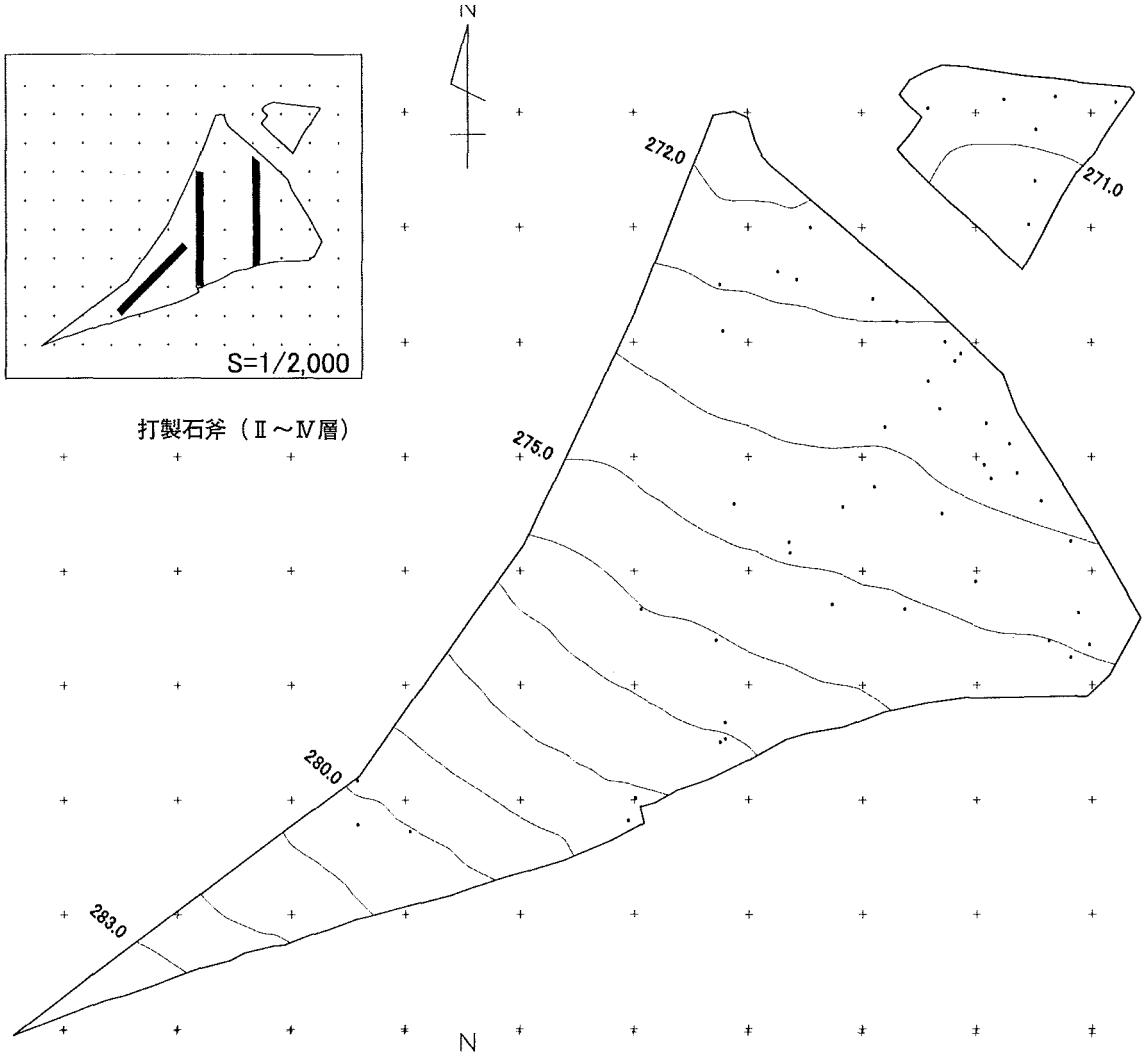


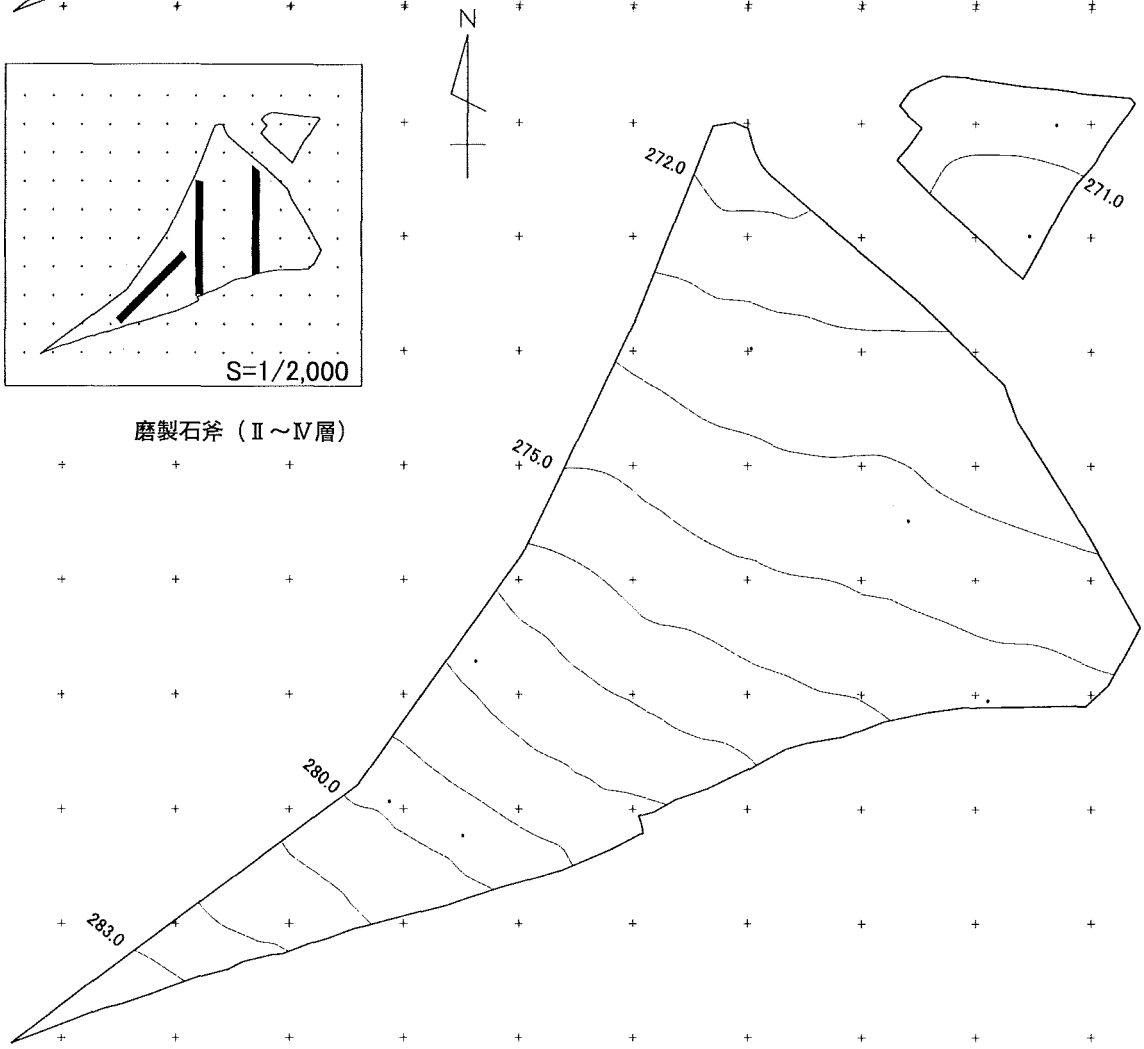
石鏃（Ⅱ～Ⅳ層）



スクレイパー（Ⅱ～Ⅳ層）

第27図　出土石器分布図③（S＝1/500）

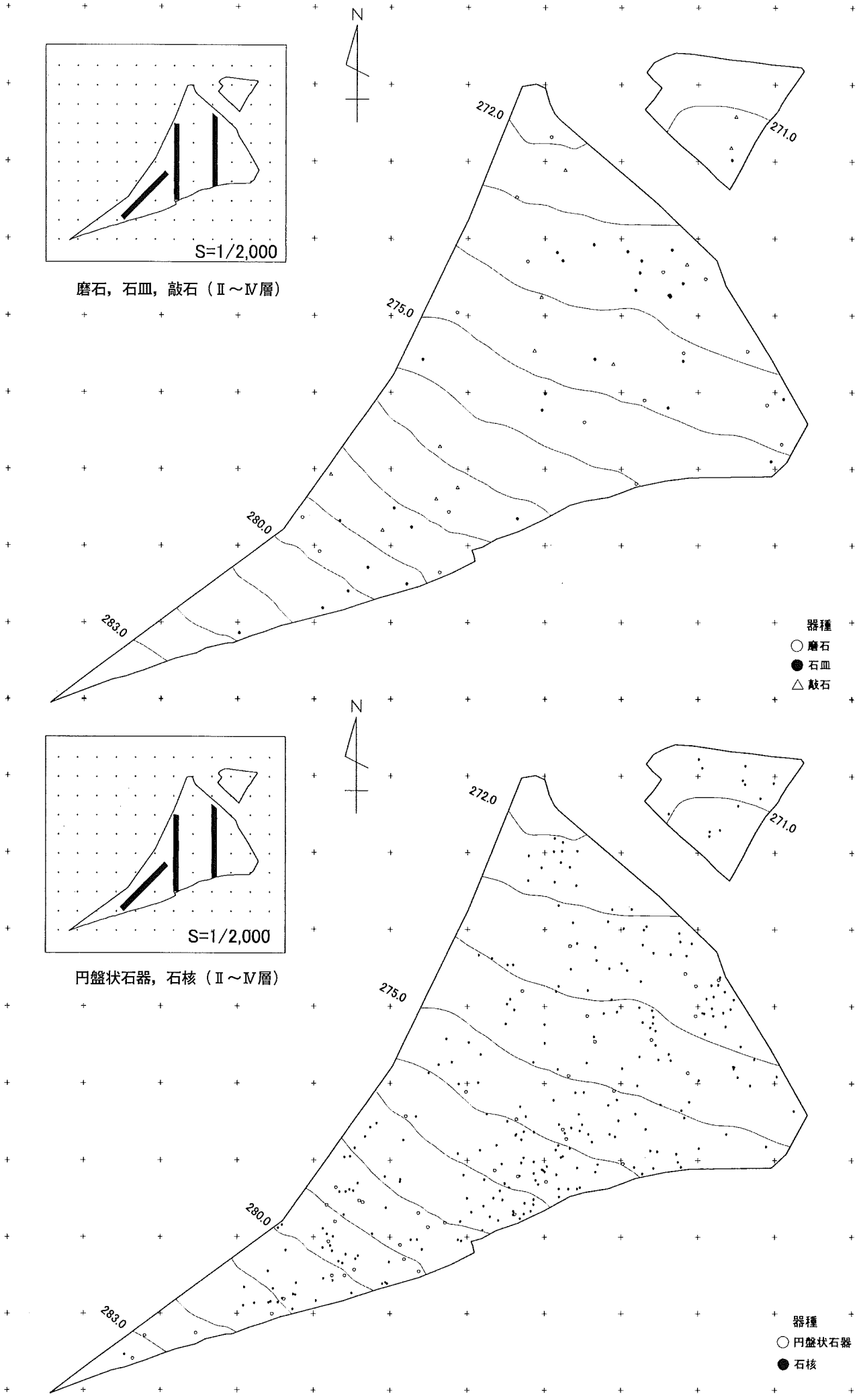




第28図　出土石器分布図④（S＝1/500）

磨石，石皿，敲石（Ⅱ～Ⅳ層）

円盤状石器，石核（Ⅱ～Ⅳ層）



第29図　出土石器分布図⑤（S＝1/500）

A類　三角形凹基鏃（31～33・35～45）
B類　三角形平基鏃（34・46～49・51）
C類　五角形平基鏃（52～55・65）
D類　五角形凹基鏃（56～61）
E類　柳葉形鏃（62・63）
F類　その他（64・66～69）

A類・B類のうち，31～33のように抉りの深いものや，34・35のように体部を平坦に研磨した局部磨製石鏃などは，縄文時代早期に該当する可能性が高い。また，36のように体部に素材の主要剥離面を残す大型の三角形凹基鏃も，縄文時代後期以降認められる形態である。また，42・43のような超小型も存在する。

この遺跡で特徴的な石鏃は，C類・D類・E類である。特にC類・D類の出土量は多く，形態がわかる個体のうち実に約1／3を占めている。これらの特徴は，石鏃の中軸線と平行になるように基部の両側縁を平行に整える点にある。そのため，側縁に角が立つものが多く，側縁が丸みを帯びるものも基部側縁が平行になるように横方向からの入念な調整剥離が顕著である。おそらく装着を意識した加工と思われる。E類は上下対称なもの（62），下ぶくれ気味のもの（63）の2者がある。いずれも両側縁から入念に調整を加えるが，先端部は丸みを帯びて鋭さは感じられない。64は横長の凹基鏃で先端部は丸みを帯びている。66・67は素材の形状を生かした石鏃でいずれも主要剥離面の一部を残し，打面側を基部にして加工を加えている。66は黒曜石製，67は頁岩製である。68・69は未成品と考えられる。68はb面に素材の主要剥離面の一部を残し，a面は先端部から基部に抜ける大きめの剥離を行ったのち，周縁から押圧剥離による調整を加えたものである。69は玄武岩製で，周縁から荒い剥離調整を加えているが，先端部が欠損している。

・石匙（第34図）

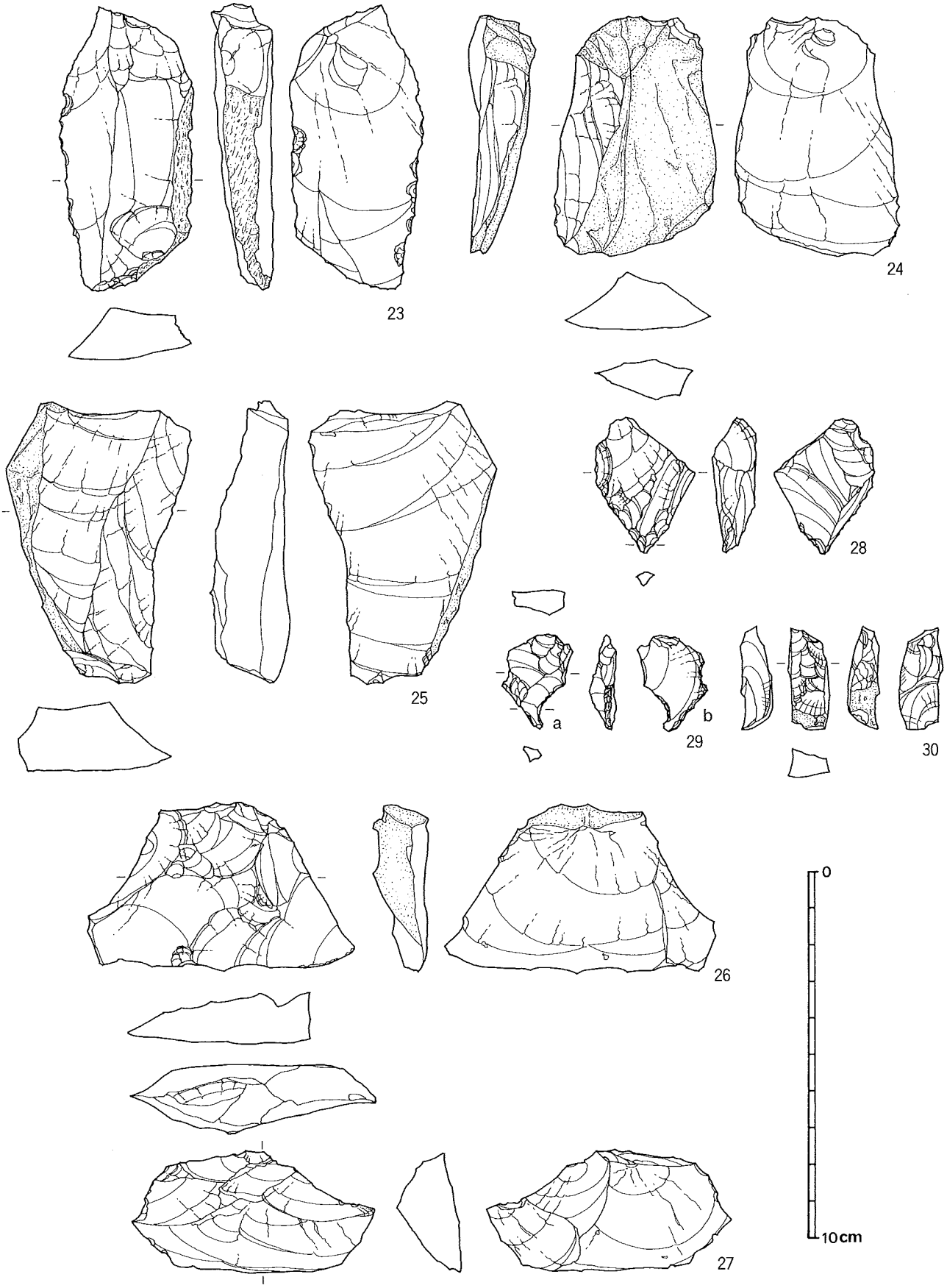
6点出土しているが，そのうち5点を図化した。いずれも玄武岩製で横長（70～72）と縦長（73・74）がある。つまみの形状も幅広（70・71・73）と幅狭（72・74）がある。71は刃部に対して斜め方向につまみがつく。72は一部欠損するものの，素材を折断したのち刃部およびつまみの周囲のみ加工したもので，素材剥片の形状を生かした作りである。刃部は73をのぞいてすべて表裏両面からの調整で形成されるが，73はb面を中心とした加工で刃部を作り出している。

・スクレイパー（第34図～第37図）

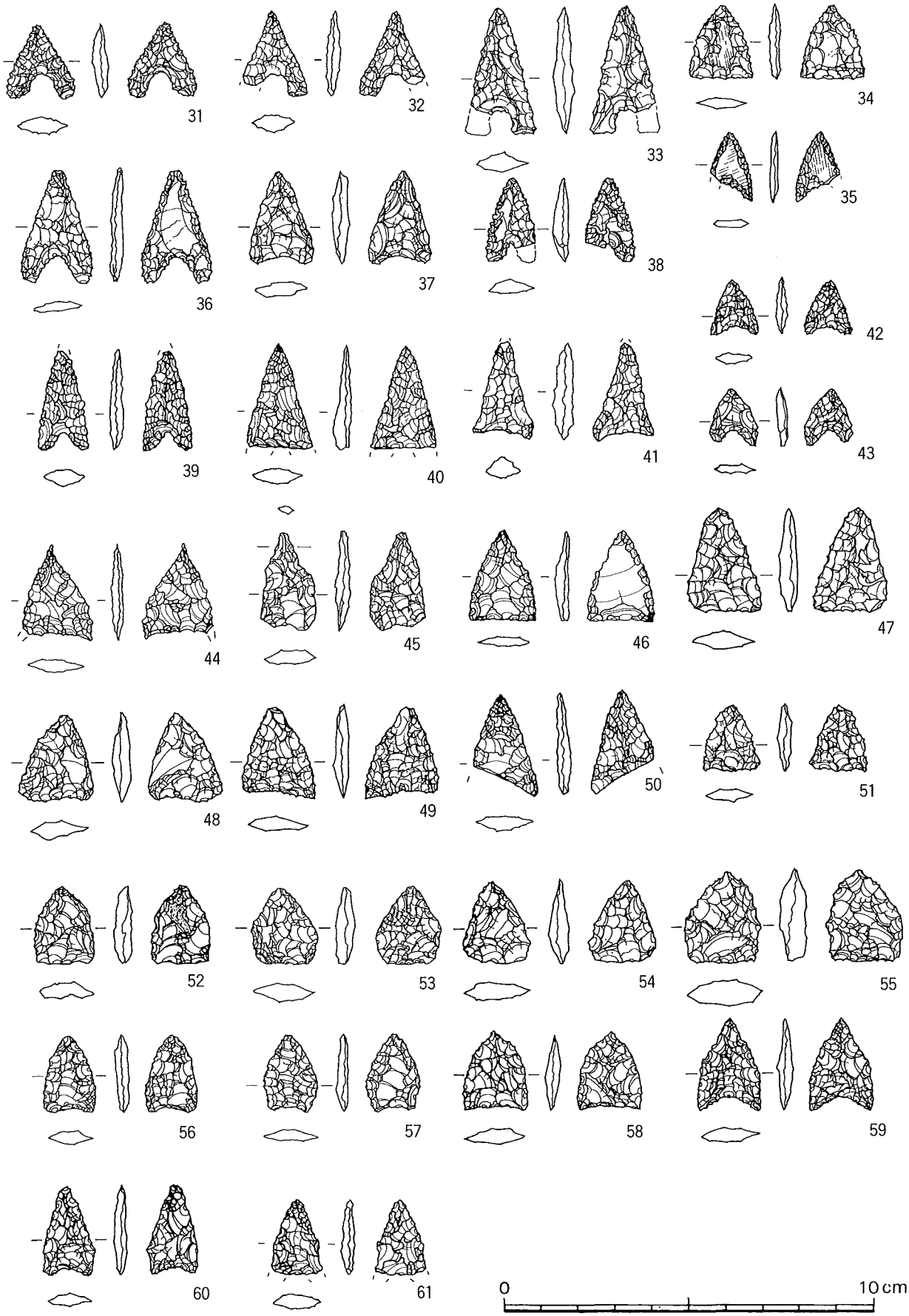
185点出土している。石材別では黒曜石製が108点と最も多く，玄武岩製は72点である。黒曜石製は小型の掻器類やノッチ状のスクレイパーが目立つのに対して，玄武岩製は掌大の大型スクレイパーが多い。

第34図下には黒曜石製小型掻器類を図化した。素材剥片の形状を生かして縁辺の一部に急角度の調整剥離を施して刃部とするものが多いが（75・76・79～81），素材剥片を折断して折断面に急角度の調整剥離を施すものもある（77）。刃部の位置は剥片の下端部（75～78），側縁部（79），打面付近（80・81）がある。特に80・81は打面付近の打瘤の厚みを利用して急角度で細長い調整剥離を加えて幅広の

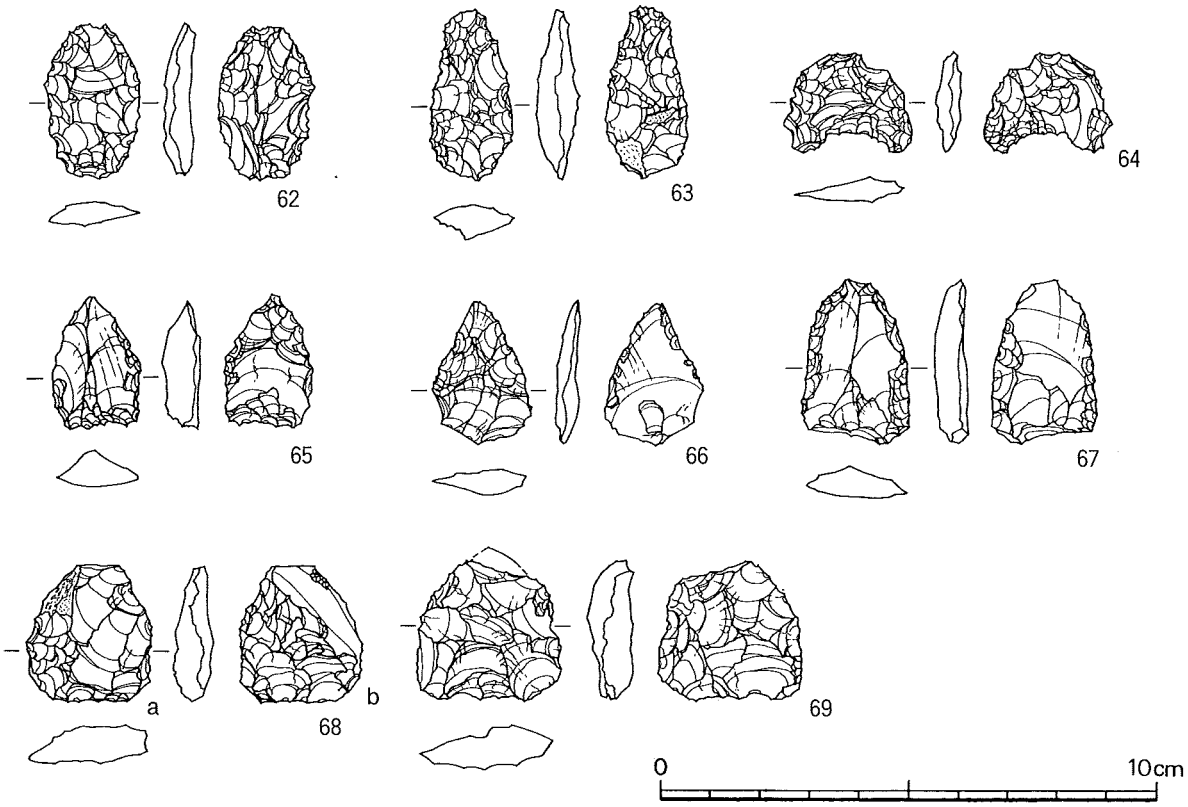
第30図　出土石器実測図①（S＝2／3）



第31図　出土石器実測図②（S＝2／3）



第32図　出土石器実測図③（S＝2／3）



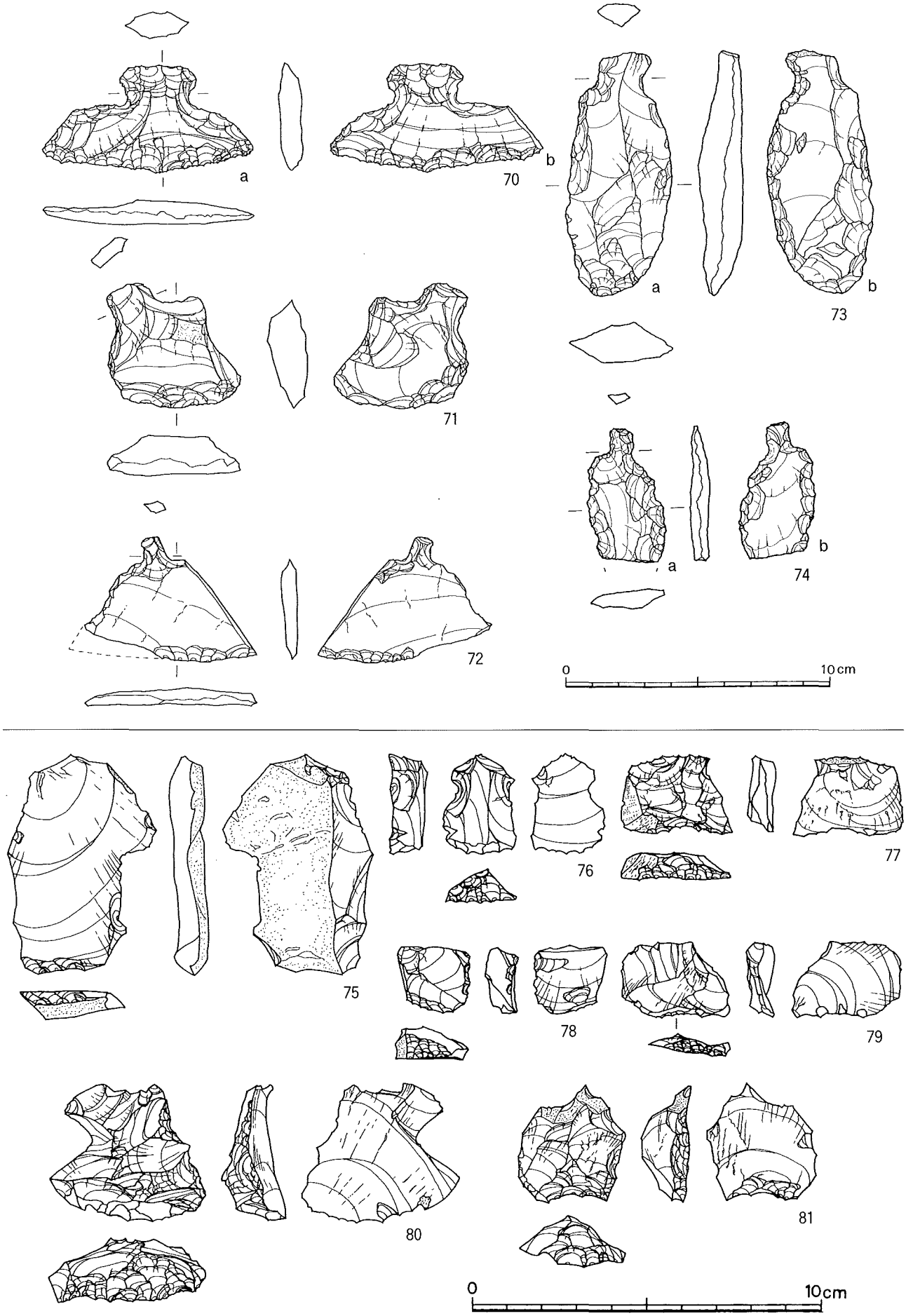
第33図　出土石器実測図④（S＝2／3）

刃部を作り出している。

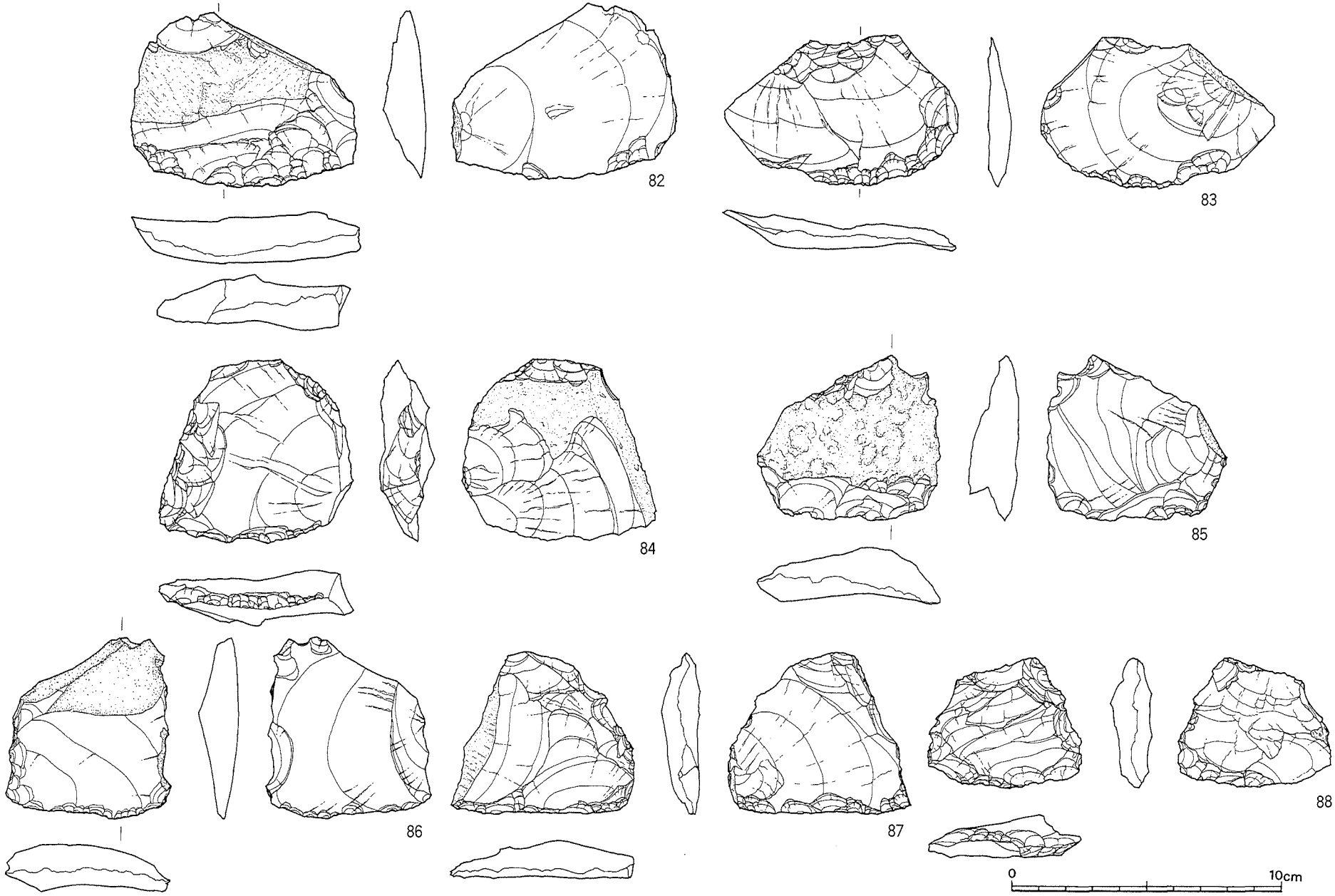
第35図は玄武岩製スクレイパーである。縦長もしくは横長の厚手の剥片を素材とし，縁辺に調整を加えて直線的な刃部を作り出している。大きさは掌にすっぽり収まる大きさで，平面形は刃部に最大幅を持ち徐々にすぼまって頭部が平坦となる略台形である点も共通点が多い。刃部は平坦剥離による削器状の刃部のほか，急角度の調整剥離による掻器状の刃部を持つものもある（84）。一部に礫面を残す点も特徴であろう。

第36図は横長のスクレイパーである。厚さが薄いもの（89・93・94）と分厚いもの（90～92・95）に大別できる。89は一部欠損するものの凝灰岩製のスクレイパーである。横長剥片を素材とし，打面に荒い調整を加えて打瘤を除去し，縁辺に細かい調整を加えて刃部とする。刃部の一部は摩耗して丸みがあり光沢を帯びている。93は欠損するものの横長の素材の長軸両端に刃部を形成するものである。94は横長剥片の周縁に細かい調整剥離を丁寧に施し，長軸両辺に刃部を形成する。これらは形態的特徴から栽培植物の収穫具の可能性が考えられる。90は厚手・板状の礫素材に周囲から調整剥離を施したものである。打製石斧と類似するが，一般的な打製石斧の石材とは異なる硬質砂岩製で，長軸両端の縁辺が非常に鋭いことからスクレイパーとした。刃部には部分的につぶれが観察でき，使用痕の可能性もある。92は折損するものの，丁寧な調整剥離により長軸両端に直線的な刃部を作り出している。89などと同様収穫具の可能性を持つものである。91・95は厚手の玄武岩礫の長軸一端に荒い刃部を作るもので，背面は幅広の自然面もしくは節理面となり断面はくさび形を呈する。

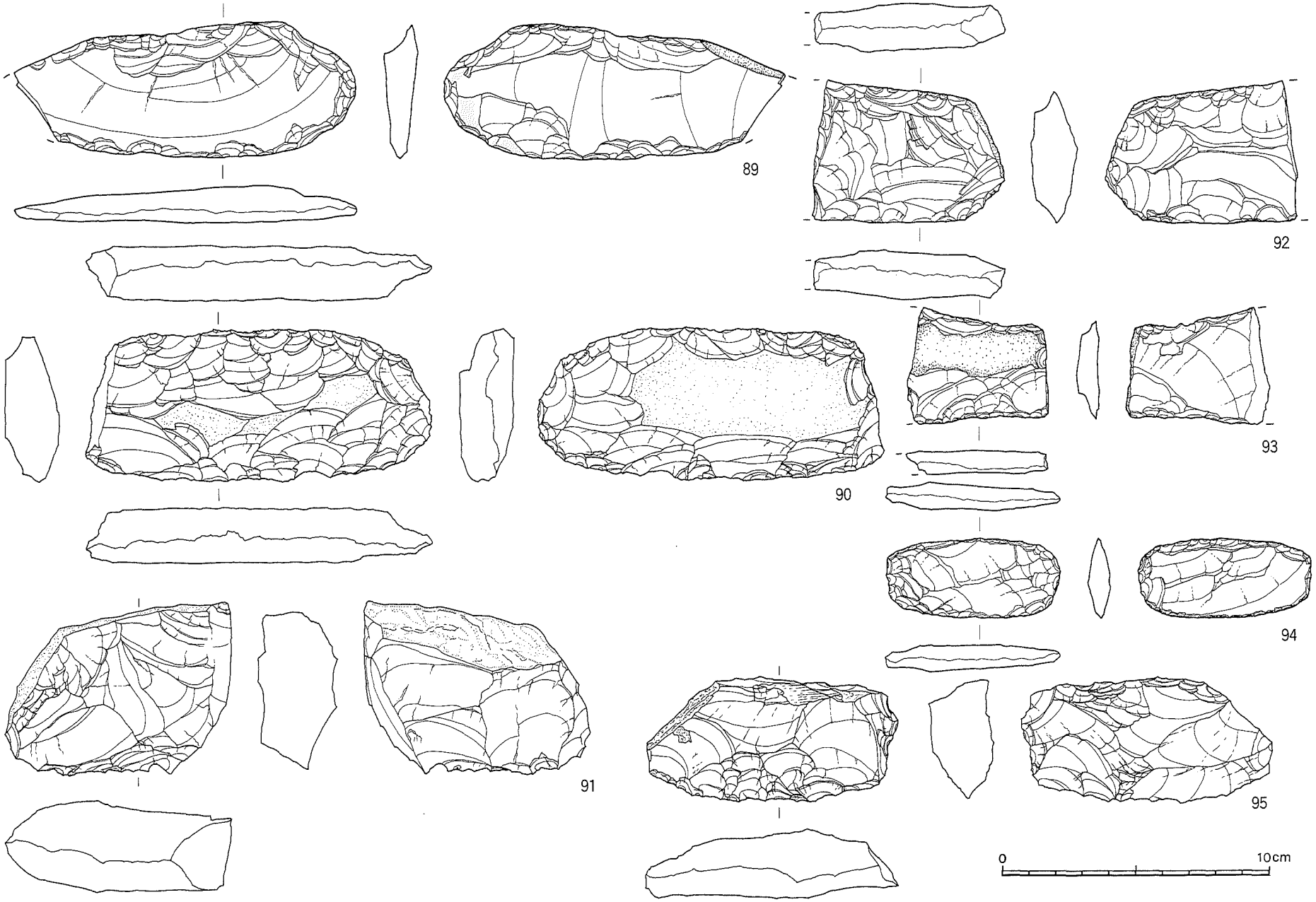
第37図にはその他の玄武岩製スクレイパー類を一括掲載した。縦長のスクレイパー（96～100・102）と横長のスクレイパー（101・103～106）に大別できる。縦長スクレイパーには削器状の刃部を持つ



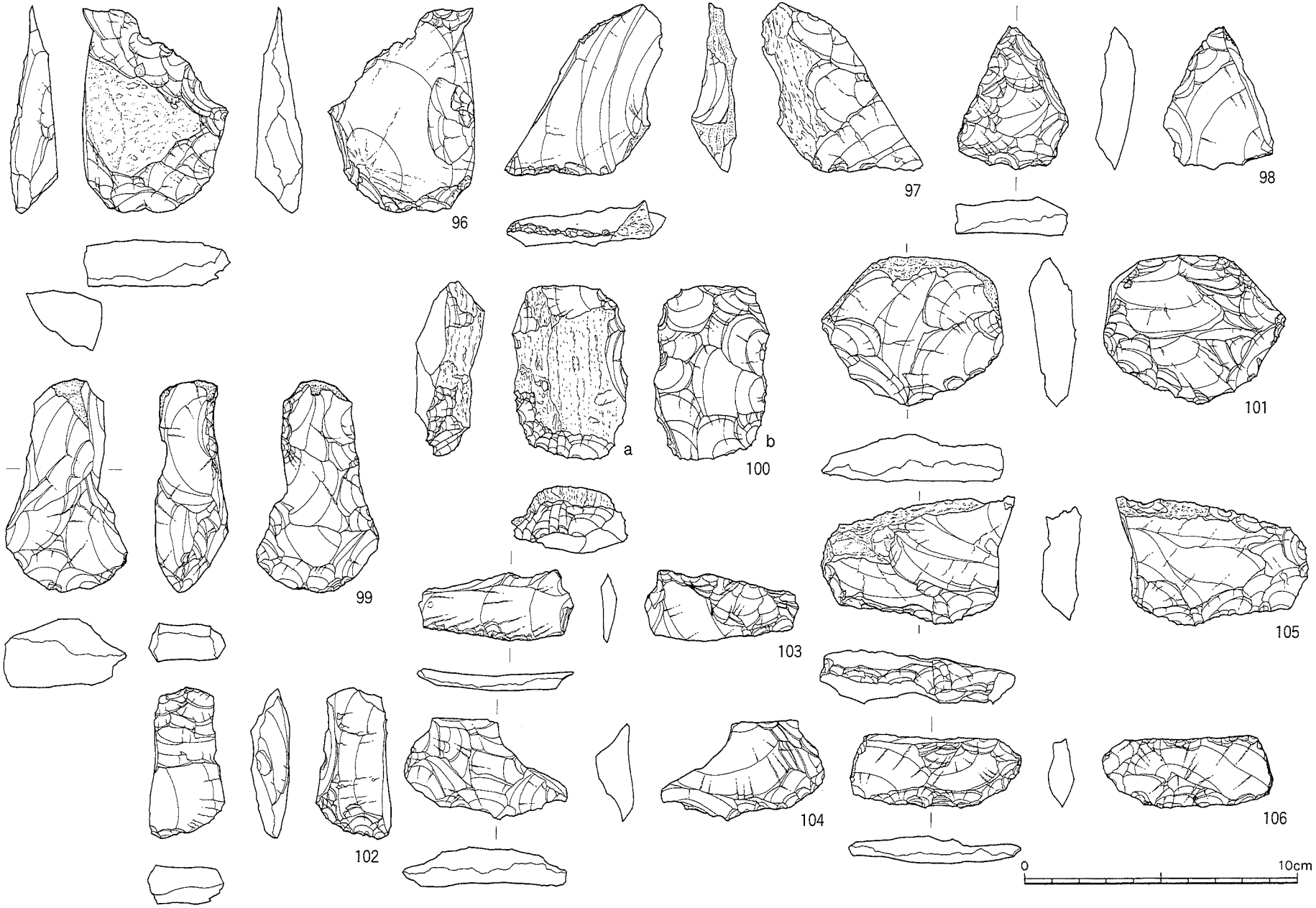
第34図　出土石器実測図⑤（S＝1/2，2/3）



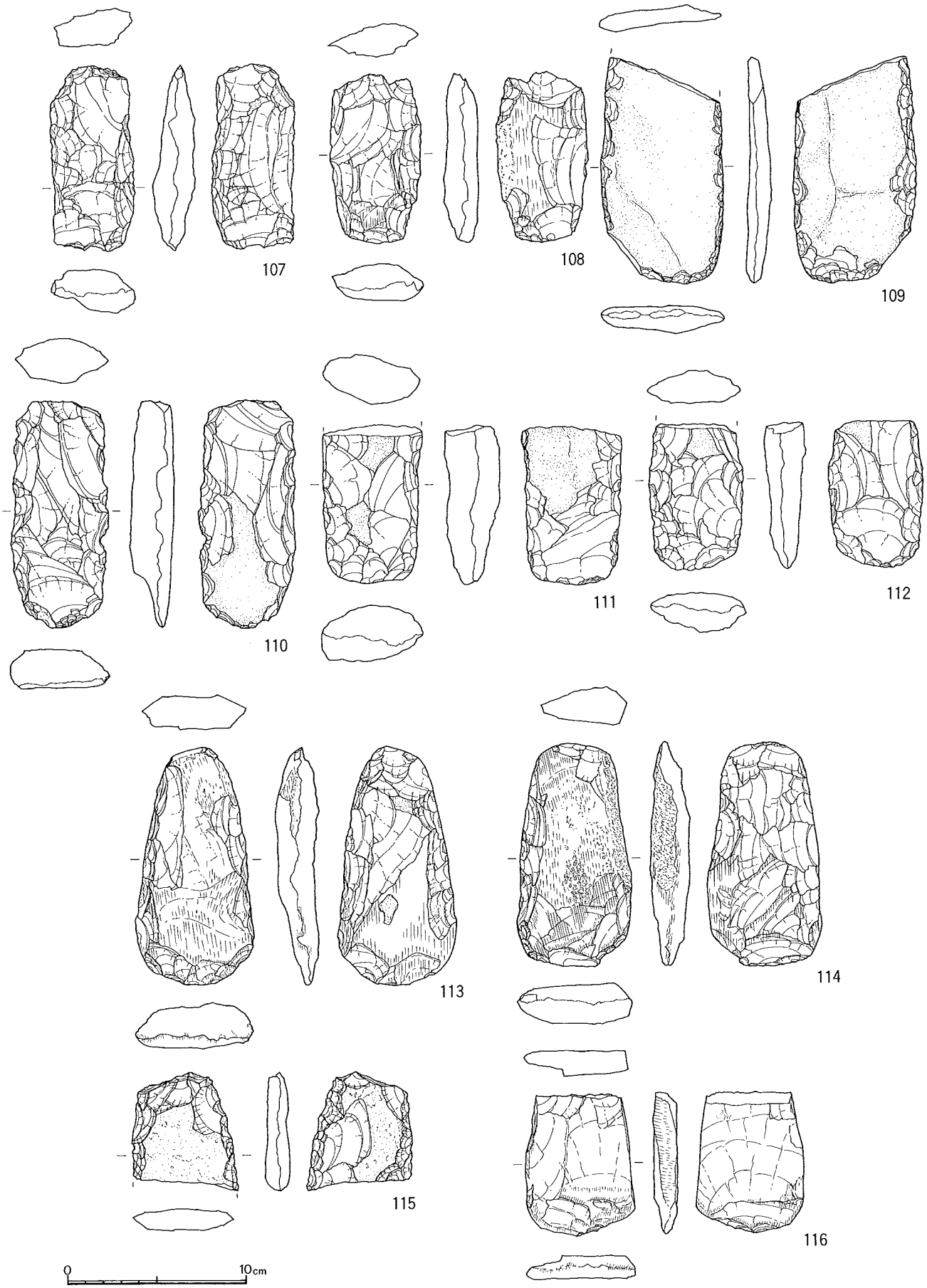
第35図　出土石器実測図⑥（S＝1／2）



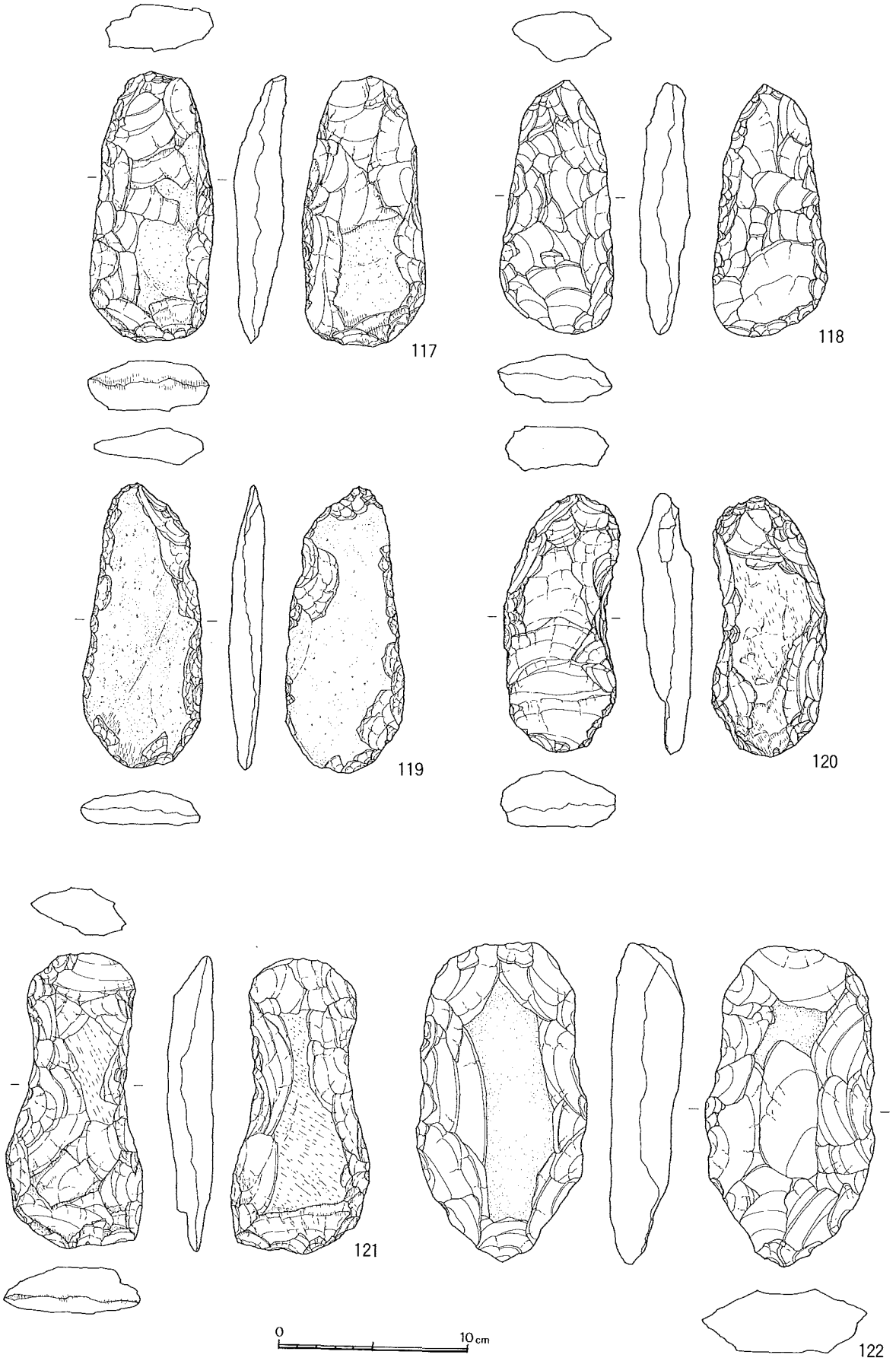
第36図　出土石器実測図⑦（S＝1／2）※アミカケは磨耗痕



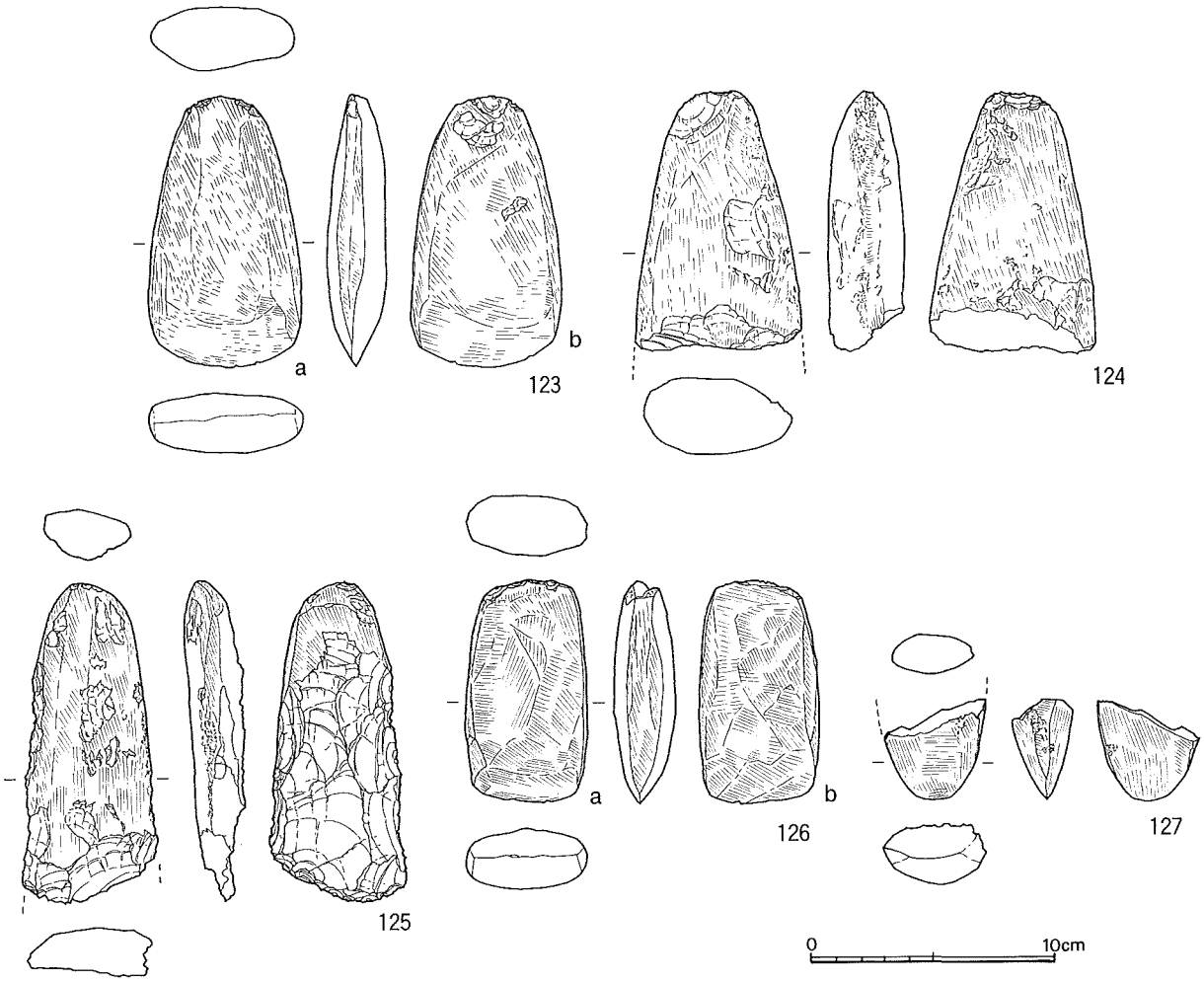
第37図　出土石器実測図⑧（S＝1／2）



第38図　出土石器実測図⑨（S＝1／3）



第39図　出土石器実測図⑩（S＝1／3）



第40図　出土石器実測図⑪（S＝1／3）

もの（96・98・99・102）のほか，掻器状の刃部となるもの（97・100）もある。99は形態的には鎌崎型スクレイパーに類似するが，角柱状の石核を転用した可能性も考えられ，一般的な鎌崎型スクレイパーとは製作技術の上では異なる。同様に，100のｂ面は求心状の剥離が顕著で，石核を転用している可能性が高い。102はスクレイパーとしたが楔形石器の可能性もある。101は楕円形のスクレイパーで刃部はやや尖る。103・106は小型の横長スクレイパーである。形態的には収穫具の可能性もある94とも類似するが，調整剥離が荒くあまり丁寧でない。105は掻器状の急角度の刃部を持つ。

②礫石器

・打製石斧（第38図・第39図）

50点出土している。在地の安山岩系の石材を利用する例が多く，表面に自然面を残すものが多いことから，棒状の礫素材を加工して使用していたことがわかる。平面形態により以下のように分類できる。

A類　両側縁が平行になるもの（107～112）

B類　基部から刃部にかけて幅広となるもの（113～119）

C類　両側縁が内湾し撥形となるもの（120・121）

D類　両側縁は平行であるが刃部が先細りになるもの（122）

Ａ類は全長10cm前後の小型と13cm前後の大型に細分できる。比較的扁平なものが多いが，110・111のように厚手の一群も存在する。周縁を荒く打ち欠いて整形し，表面に礫面を残すものが多い。107は礫面を残さず，石材も他と異なることから剥片素材の可能性もある。Ｂ類はもっとも出土例が多く，大きさも13cm前後にまとまる。棒状の礫素材を周辺から打ち欠いて整形している。刃部付近を中心に摩滅痕が顕著で刃部と直行する線状痕が観察できる例もある（113・114・116・117）。114は体部中央および側面に敲打痕が顕著で，磨製石斧の未成品を打製石斧に転用した可能性もある。116は側面を研磨して平滑にしており，石材も蛇紋岩であることから磨製石斧製作時の破損品を転用した可能性がある。Ｃ類は121を典型とする。両側縁が内湾してくびれており，刃部付近は摩滅して刃部と直行する摩滅痕が顕著である。120は一方の側縁のみ内湾し，全体として湾曲した平面形となるものの，側縁の内湾を重視してＣ類とした。刃部付近の厚みが薄く刃部と斜行する線状痕がわずかに残る。

Ｄ類は１点のみである（122）。厚みがあり重量感のある大型品である。周縁を中心に荒い調整剥離を加えて整形し，刃部は尖り気味となる。

・磨製石斧（第40図）

６点出土しているがそのうちの５点を図化した。基部から刃部にかけて幅広になるもの（123～125）と，基部幅と刃部幅がほぼ同じで両側縁が外湾するもの（126）がある。127は先細り気味の刃部片で比較的厚みがあり，ノミ状石斧の可能性がある。123・126は完形である。126はａ面の体部がフラットに研磨されており，この面が前主面に相当しよう。124は重量感があり伐採斧であろう。125は欠損品であるが，刃部再生を意識した調整剥離が残る。

・円盤状石器（第41図）

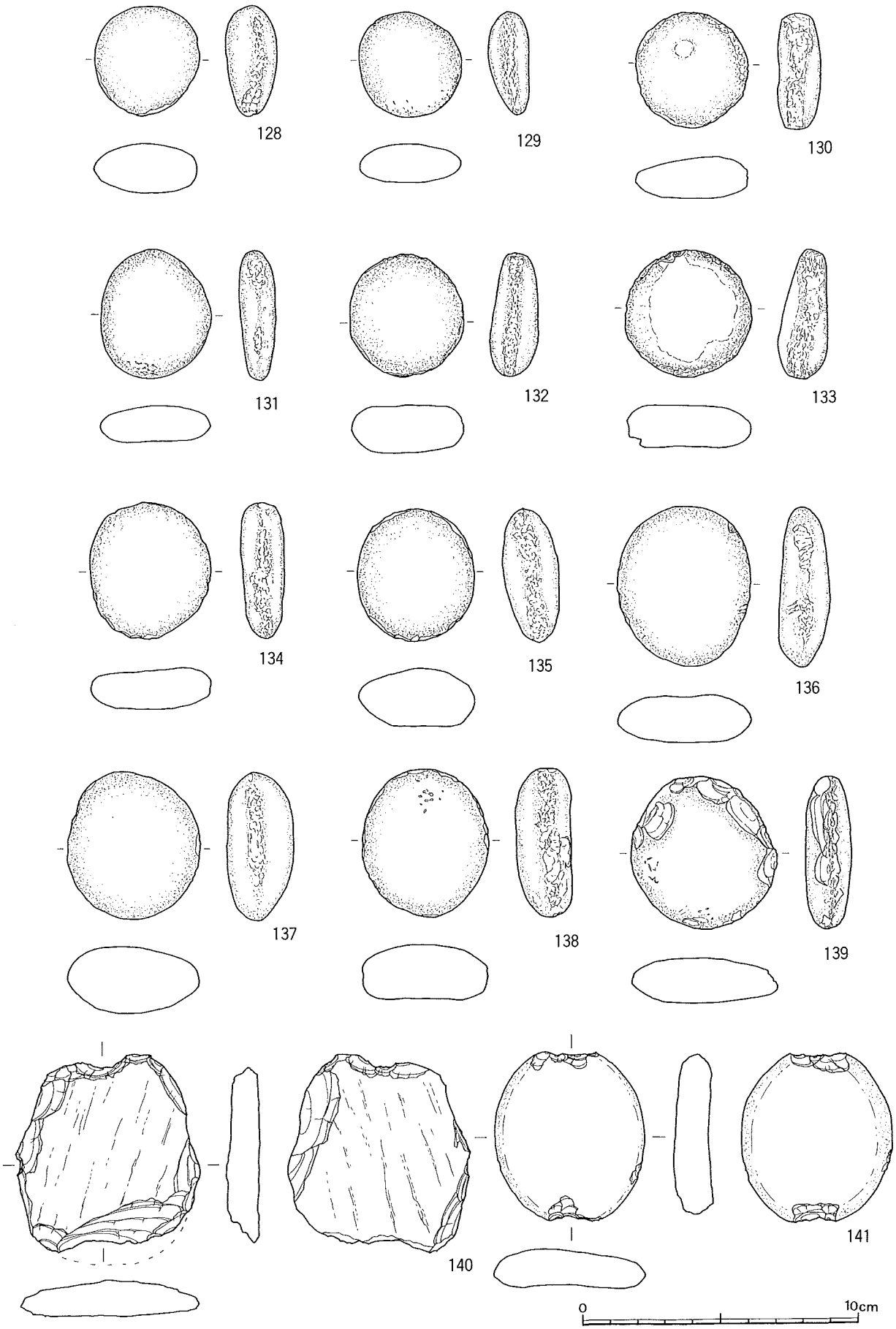
小円礫の周囲に敲打痕を残すものを一括した。42点出土している。直径の違いで小型（128～130），中型（131～135），大型（136～139）に分けられる。あばた状の敲打痕を伴う例もあるが，強い衝撃による剥離痕を残すものが比較的多い。139は特に剥落痕が顕著である。これらは従来土器の研磨具などとされてきたが，このような敲打痕を持つ例に関しては，後述する石核のあり方からも，石器製作用のパンチの可能性を考える必要があろう。

・石錘（第41図）

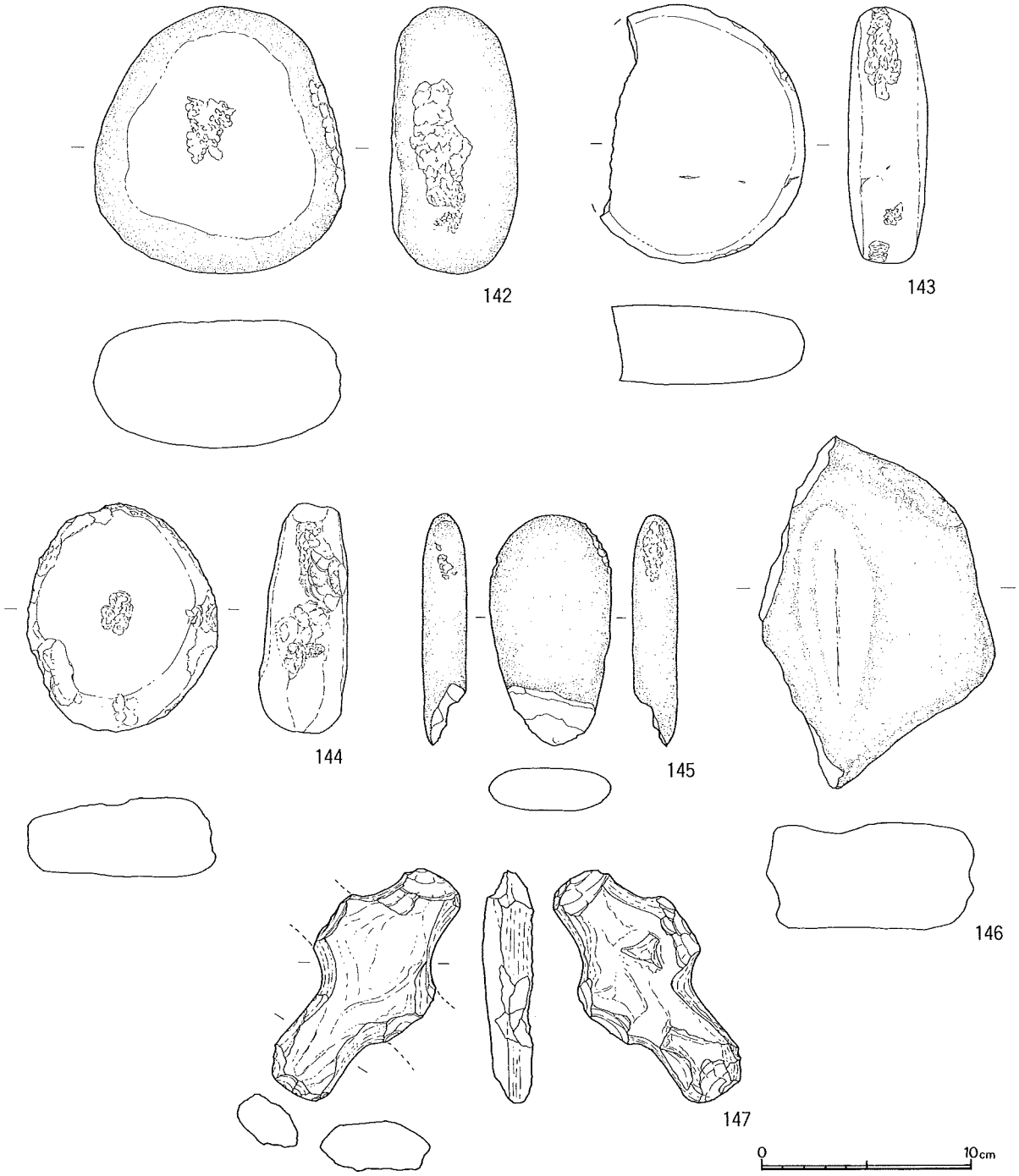
５点出土しているがそのうちの２点を図化した。いずれも打ち欠き石錘である。140は扁平な結晶片岩製で，周囲を荒く打ち欠いて整形しており，下端部を欠失するものの上端に剥離による凹みを確認できる。141は扁平な円礫の長軸両端を打ち欠いて凹部を作っている。いずれも100ｇ未満と軽量である。

・磨石類（第42図）

磨石・敲石を一括して磨石類とした。17点出土しているがその内の４点を図化した。142～144は円礫の平坦面にフラットな摩滅痕が広がるタイプである。特に143・144には顕著に確認でき，摩滅面と側面の境に稜線がたつほどである。142・144には摩滅面と同一面に敲打痕も集中して確認でき，磨る・



第41図　出土石器実測図⑫（S＝1／2）



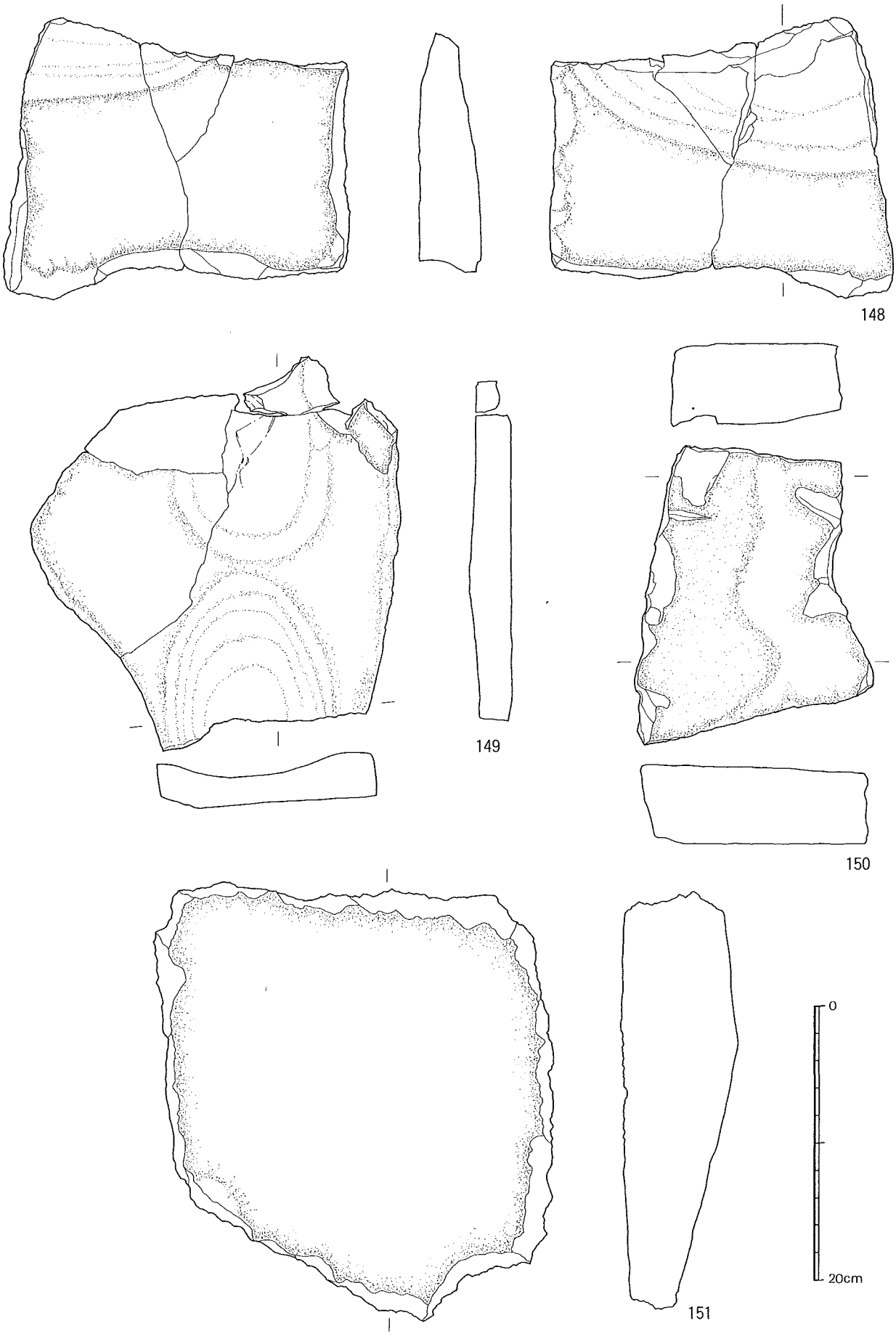
第42図　出土石器実測図⑬（S＝1／3）

敲くを繰り返す作業に使われたものと考えられる。いずれも表裏面に摩滅面が広がり，側面には敲打痕を残している。

145は側面に敲打痕を持つ敲石である。平面楕円形の扁平礫で，最大幅付近の両側縁に敲打痕が認められる。この敲打痕は剥落を伴っており，石器製作用の敲石と考えられる。

・砥石（第42図）

12点出土しているが小片が多く図化したのは１点のみである。**146**はきめの粗い砂岩製で，長軸に沿って使用による浅い凹みが確認できる。



第43図　出土石器実測図⑭（S＝1／4）

・**十字形石器**（第42図）

１点のみの出土である。**147**は緑色片岩製で４カ所の突起を確認できるが，うち２カ所は欠損している。４カ所の突起は直角に交わっておらず，平面Ｘ字状であったものと推測される。周縁を剥離整形し，湾曲部分は摩滅して平滑になっている。

・**石皿**（第43図）

31点出土し，うち４点を図化した。砂岩製がほとんどである。**148**は体部中央から側面にかけて摩滅した機能面が傾斜しているもので，表裏両面に同様の摩滅面が展開している。**149**は円形の凹みを２カ所持ち，凹部は摩滅して非常に平滑である。**150**は自然面と異なるなめらかな摩滅面をもつ。**151**は厚手で非常に重量感があり，平坦面全体に摩滅痕が広がるが，中央部分に特に顕著である。

・**石核**（第44図・第45図）

268点出土している。黒曜石・玄武岩があるが，両者の内訳は前者が82％を占め，後者の割合は18％である。剥片剥離の違いにより以下のように分類できる。

Ａ類　単設打面で剥片剥離を行うもの。

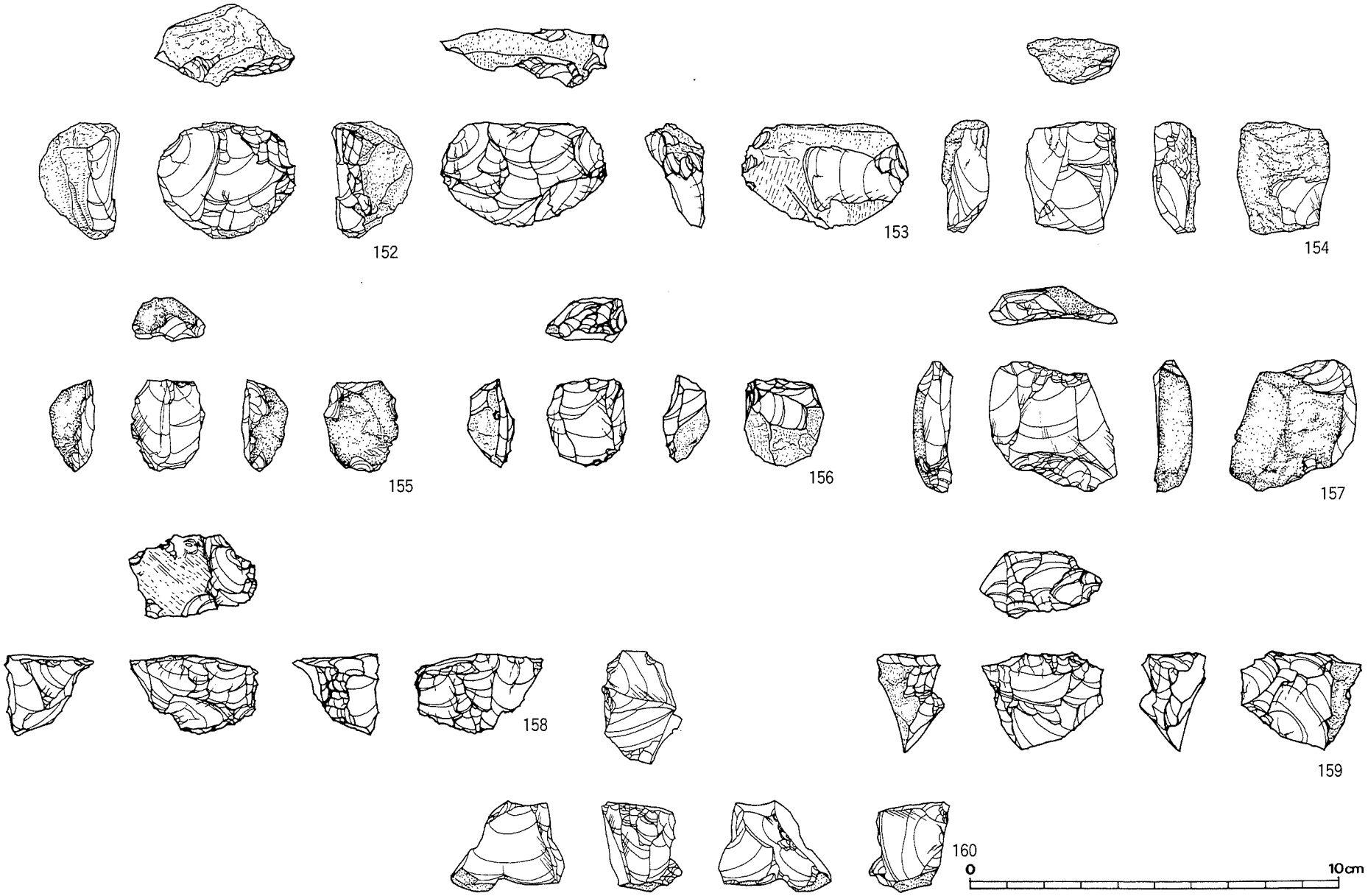
Ｂ類　打面を頻繁に転移して剥片剥離を行うもの。

Ｃ類　Ｂ類と同様に打面転移するものの作業面を固定し，結果として求心状の剥片剥離となるもの。

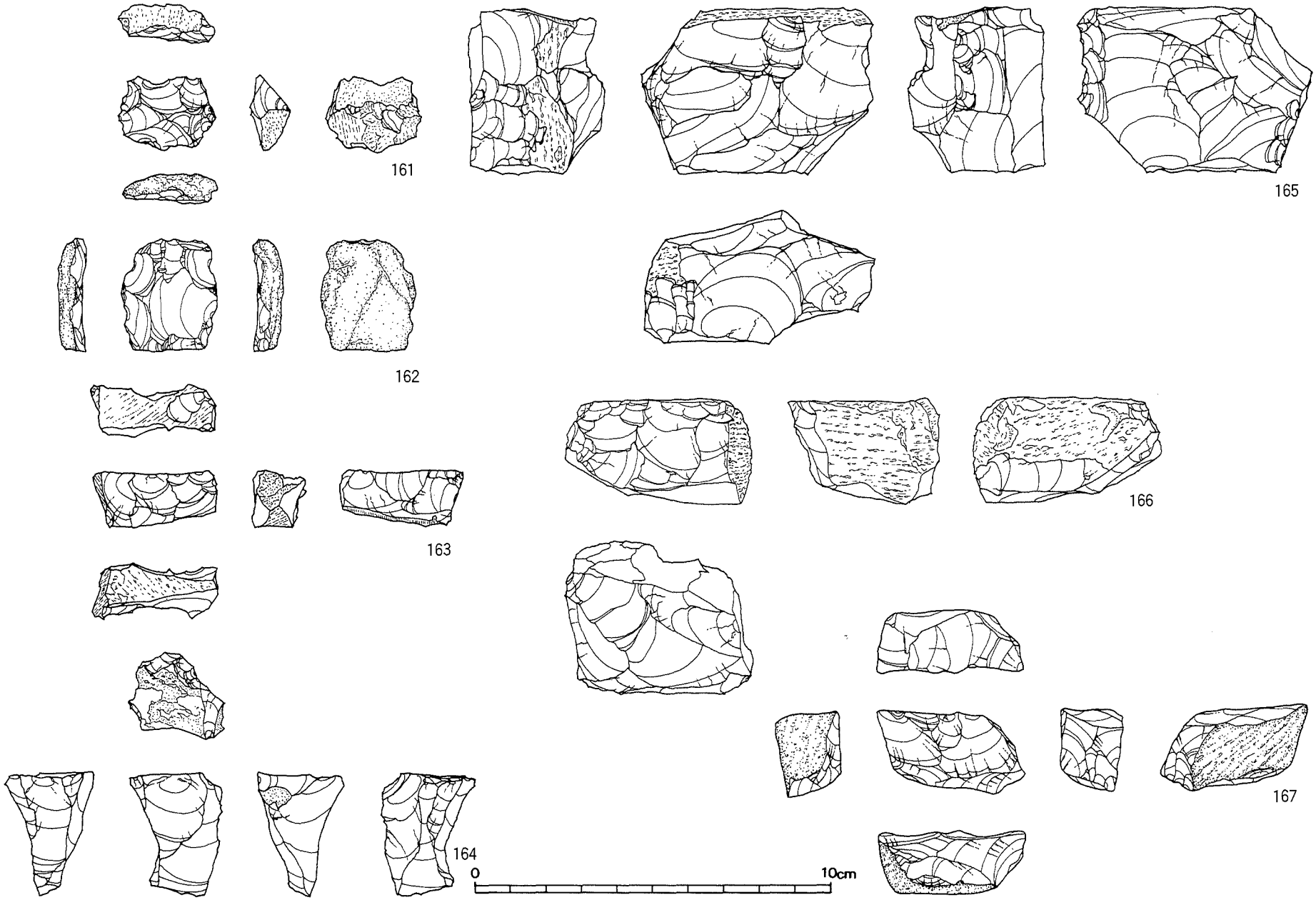
Ａ類は，作業面を一面に固定するものが最も多く（**152～156**），これらは一様に扁平で自然面を一部に残す。打面は自然打面（**152～154**）と調整打面（**155・156**）があるが，調整打面は小型の石核に多いことから，自然面を打面として剥片剥離を繰り返し，打面再生してさらに剥片剥離を行ったことが推測される。**164**は同一打面で４面の作業面を持つ例である。自然打面で角錐状の形態となる。

Ｂ類は非常に多く出土している。打面転移に規則性はなくランダムに剥片剥離を繰り返すことから，形態的なバリエーションも非常に多く分類が困難である。打面を上下２面に据えて同一作業面で剥片剥離を繰り返す例（**157**）は一応Ｂ類としたが，剥片剥離が進行していないＣ類とも考えることができる。**159**は上下に打面を設定し，表裏両面に作業面を持つ例である。２面の作業面で剥片剥離を行うため扁平となる。**160**は４面の作業面を持つＡ類に近いが，最終的に90°の打面転移により剥片剥離を行う。**163**は２面の作業面を持つＡ類から90°打面転移をして３～４枚の小型剥片を剥出している。Ｃ類は礫素材の黒曜石の周縁から同一作業面で剥片剥離を行うもので，扁平で背面には礫面を残している（**161・162**）。これらの黒曜石製石核は，Ａ類は大型の石核が多いのに対してＢ・Ｃ類は比較的小型であり，Ａ類とＢ類の剥片剥離の比較から推測すれば，自然面打面のＡ類から大型の剥片を剥出し，大型の剥片がとれなくなると，打面再生して同一打面で剥片剥離を行う（Ａ類），打面転移を繰り返して複数の作業面で剥片剥離を行う（Ｂ類），打面転移を繰り返しながらも同一作業面で剥片剥離を行う（Ｃ類）のいずれかを選択して，小型剥片の剥出を行っていたことがうかがえる。

165～167は玄武岩製石核である。いずれも打面転移を繰り返すＢ類である。玄武岩製石核は黒曜石製に比べて大型のものが多く，小型の剥片まで執拗に剥出した石核は比較的少数に止まっている。これはスクレイパーなど大型の剥片石器素材として供されたことが原因と考えられ，剥片石器の石材利用と関連した剥片剥離技術のあり方を示しているといえよう。



第44図　出土石器実測図⑮（S＝2／3）



第45図　出土石器実測図⑯（S＝2／3）

第4表　出土石器観察表①

図	番号	グリットNo	層位	器　種	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
30	1	F-8	Ⅱ	剥片	黒曜石	4.7	1.7	0.8	4.8	
	2	E-8	Ⅳ	剥片	黒曜石	5.1	1.5	0.6	4.3	
	3	B-10	Ⅱ	二次加工ある剥片	黒曜石	3.6	2.3	1.3	8.2	
	4	D-8	Ⅳ	剥片	黒曜石	4.4	1.8	0.6	4.1	
	5	F-7	Ⅲ	剥片	黒曜石	3.7	2.6	1.0	6.7	
	6	G-6	Ⅱ	二次加工ある剥片	黒曜石	3.5	3.4	0.9	5.2	
	7	E-9	Ⅳ	剥片	黒曜石	2.4	2.4	1.0	3.9	
	8	C-8	Ⅳ	剥片	黒曜石	2.7	1.4	0.4	1.0	
	9	G-7	Ⅲ	剥片	黒曜石	2.3	1.3	0.3	0.9	
	10	G-7	Ⅲ	二次加工ある剥片	黒曜石	2.7	1.4	0.6	1.5	
	11	D-8	Ⅳ	剥片	黒曜石	3.9	1.6	0.8	3.3	
	12	G-7	Ⅱ	剥片	黒曜石	3.4	1.2	0.5	1.3	
	13	E-9	Ⅳ	剥片	黒曜石	3.7	2.5	0.7	6.7	
	14	H-5	Ⅲ	剥片	黒曜石	2.7	2.0	1.1	4.6	
	15	C-8	Ⅳ	剥片	黒曜石	3.1	2.7	7.5	4.7	
	16	E-10	Ⅲ	剥片	黒曜石	2.4	2.3	1.0	5.5	
	17	E-10	Ⅱ	剥片	黒曜石	4.8	3.0	1.4	11.5	
	18	F-8	Ⅱ	剥片	黒曜石	3.2	2.0	0.8	3.6	
	19	G-5	Ⅲ	剥片	黒曜石	3.5	1.6	0.8	2.6	
	20	G-8	Ⅲ	剥片	黒曜石	3.5	2.1	0.9	4.8	
	21	G-5	Ⅲ	剥片	黒曜石	2.4	2.4	6.5	1.9	
	22	C-7	Ⅳ	剥片	黒曜石	2.7	4.4	1.0	9.6	
31	23	E-10	Ⅳ	剥片	玄武岩	7.8	3.6	1.6	50.3	
	24	I-2	Ⅲ	剥片	サヌカイト	6.5	4.5	1.8	42.7	
	25	E-9	Ⅲ	剥片	サヌカイト	7.7	4.9	2.2	74.2	
	26	D-9	Ⅳ	剥片	玄武岩	4.6	7.2	1.5	36.7	
	27	D-10	Ⅲ	剥片	玄武岩	3.2	6.7	1.9	30.4	
	28	H-6	Ⅱ	石錐	玄武岩	3.7	2.7	1.2	8.8	
	29	G-6	Ⅲ	石錐	黒曜石	2.6	1.9	0.7	2.2	
	30	G-7	Ⅲ	楔形石器	黒曜石	2.8	1.2	8.5	2.9	
32	31	F-6	Ⅳ	石鏃	黒曜石	2.0	1.8	0.5	1.0	
	32	F-6	Ⅳ	石鏃	玄武岩	3.5	1.6	0.6	1.9	
	33	E-7	Ⅲ	石鏃	黒曜石	2.3	1.8	0.4	0.9	
	34	D-7	Ⅱ	石鏃	玄武岩	2.0	1.7	0.3	1.0	局部磨製
	35	F-6	Ⅲ	石鏃	黒曜石	1.9	1.0	0.2	0.4	局部磨製
	36	E-7	Ⅲ	石鏃	玄武岩	3.1	1.9	0.3	1.4	
	37	G-7	Ⅲ	石鏃	玄武岩	2.5	1.7	0.5	1.6	
	38	F-7	Ⅲ	石鏃	黒曜石	2.3	1.3	0.4	0.8	
	39	A-11	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.7	1.4	0.4	1.0	
	40	C-7	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.8	1.8	0.5	1.6	
	41	F-7	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.6	1.7	0.6	1.5	
	42	D-8	Ⅱ	石鏃	黒曜石	1.5	1.3	0.3	0.4	
	43	G-5	Ⅲ	石鏃	玄武岩	1.6	1.3	0.3	0.5	
	44	F-9	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.6	1.9	0.3	1.2	
	45	F-8	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.7	1.5	0.5	1.6	
	46	C-8	Ⅱ	石鏃	サヌカイト	2.5	1.8	0.4	1.2	
	47	G-8	Ⅱ	石鏃	頁岩	2.8	2.0	0.5	2.0	
	48	E-6	Ⅳ	石鏃	黒曜石	2.4	2.0	0.5	1.8	
	49	F-6	Ⅲ	石鏃	黒曜石	2.5	1.9	0.4	1.5	
	50	A-11	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.8	1.7	0.4	1.2	
	51	E-10	Ⅲ	石鏃	黒曜石	1.8	1.5	0.4	0.8	
	52	G-8	Ⅲ	石鏃	黒曜石	2.1	1.6	0.5	1.6	
	53	H-4	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.1	1.7	0.6	1.7	
	54	D-7	Ⅱ	石鏃	玄武岩	2.2	1.8	0.8	1.7	
	55	I-3	Ⅲ	石鏃	黒曜石	2.5	2.0	0.8	3.5	
	56	E-6	Ⅳ	石鏃	黒曜石	2.1	1.4	0.4	1.0	
	57	H-5	Ⅳ	石鏃	黒曜石	2.1	1.5	0.3	0.8	

第５表　出土石器観察表②

図	番号	グリットNo	層位	器　種	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
32	58	D-8	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.2	1.7	0.4	1.1	
	59	E-6	Ⅳ	石鏃	黒曜石	2.5	1.7	0.4	1.3	
	60	H-4	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.4	1.4	0.4	0.9	
	61	F-8	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.0	1.4	0.4	0.9	
33	62	E-7	Ⅳ	石鏃	黒曜石	3.1	1.9	0.6	3.6	
	63	G-7	Ⅱ	石鏃	黒曜石	3.4	1.6	0.8	3.6	
	64	B-10	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.0	2.6	0.5	1.8	
	65	F-8	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.6	1.7	0.8	2.7	
	66	H-4	Ⅳ	石鏃	黒曜石	2.9	2.0	0.5	2.2	未製品
	67	H-4	Ⅲ	石鏃	頁岩	3.3	2.2	0.7	4.7	
	68	E-7	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.8	2.5	0.8	5.4	未製品
	69	C-8	Ⅲ	石鏃	玄武岩	2.8	2.9	6.9	7.7	未製品
34	70	G-5	Ⅳ	石匙	玄武岩	4.1	8.0	1.0	24.9	
	71	E-8	Ⅲ	石匙	玄武岩	5.7	5.0	1.6	35.0	
	72	I-3	Ⅲ	石匙	玄武岩	6.5	4.7	0.6	17.2	
	73	F-7	Ⅱ	石匙	サヌカイト	9.2	4.0	1.7	56.7	
	74	E-9	Ⅱ	石匙	サヌカイト	2.9	5.0	0.7	10.8	
	75	G-10	Ⅲ	スクレイパー	黒曜石	6.3	4.2	1.1	23.1	
	76	D-7	Ⅱ	スクレイパー	黒曜石	2.8	2.1	1.1	5.8	
	77	E-8	Ⅱ	スクレイパー	黒曜石	2.3	3.1	0.7	5.4	掻器
	78	F-9	Ⅳ	スクレイパー	黒曜石	1.9	2.0	0.9	4.2	
	79	E-10	Ⅱ	スクレイパー	黒曜石	2.2	3.1	0.5	3.2	掻器
	80	D-10	Ⅱ	スクレイパー	黒曜石	3.9	4.5	1.8	19.8	
	81	G-6	Ⅱ	スクレイパー	黒曜石	3.3	3.0	1.5	9.9	
35	82	E-8	Ⅲ	スクレイパー	玄武岩	6.3	8.2	1.7	97.3	
	83	E-7	Ⅲ	スクレイパー	玄武岩	8.7	5.4	1.2	46.9	削器
	84	D-9	Ⅳ	スクレイパー	玄武岩	6.8	7.2	2.1	85.2	
	85	D-10	Ⅱ	スクレイパー	サヌカイト	6.8	6.1	2.0	68.2	削器
	86	F-10	Ⅱ	スクレイパー	サヌカイト	6.7	6.2	1.8	63.2	削器
	87	E-9	Ⅳ	スクレイパー	玄武岩	6.0	6.8	1.4	47.0	
	88	C-8	Ⅲ	スクレイパー	玄武岩	4.7	5.7	1.6	36.8	
36	89	F-10	Ⅱ	スクレイパー	凝灰岩	12.9	5.1	1.4	90.3	掻器
	90	E-10	Ⅲ	スクレイパー	硬質砂岩	13.0	5.7	2.1	208.9	打製石包丁
	91	E-10	Ⅳ	スクレイパー	玄武岩	6.3	8.1	3.4	213.3	
	92	A-10	Ⅱ	スクレイパー	頁岩	7.2	5.3	1.7	82.9	掻器
	93	A-10	Ⅱ	スクレイパー	片岩？	5.3	4.3	0.8	23.5	掻器
	94	E-9	Ⅱ	スクレイパー	片岩？	6.5	3.0	1.0	22.2	収穫具か？
	95	C-8	Ⅳ	スクレイパー	玄武岩	9.4	4.6	1.6	120.3	
37	96	E-7	Ⅲ	スクレイパー	玄武岩	7.6	5.4	1.7	72.8	
	97	F-9	Ⅱ	スクレイパー	玄武岩	5.6	4.4	1.4	40.4	掻器
	98	B-10	Ⅱ	スクレイパー	サヌカイト	4.0	5.3	1.3	26.7	削器
	99	D-9	Ⅲ	スクレイパー	サヌカイト	4.5	7.8	2.7	80.1	削器？
	100	F-6	Ⅲ	スクレイパー	玄武岩	6.4	4.1	1.2	63.1	掻器
	101	H-5	Ⅲ	スクレイパー	玄武岩	9.7	5.5	1.7	61.8	
	102	G-5	Ⅲ	スクレイパー	玄武岩	5.3	2.7	1.4	24.0	
	103	D-8	Ⅱ	スクレイパー	サヌカイト	5.7	2.5	0.6	9.3	削器
	104	G-5	Ⅱ	スクレイパー	サヌカイト	6.0	3.8	1.4	26.9	削器
	105	F-9	Ⅲ	スクレイパー	玄武岩	6.5	4.5	1.9	60.4	
	106	G-6	Ⅱ	スクレイパー	サヌカイト	6.3	2.7	1.0	17.8	削器
38	107	E-8	Ⅲ	打製石斧	片岩系	10.3	4.6	2.3	109.5	緑色片岩？
	108	F-10	Ⅲ	打製石斧	安山岩	9.6	5.1	2.1	115.7	
	109	F-10	Ⅱ	打製石斧	砂岩	12.6	6.8	1.5	133.2	
	110	F-10	Ⅲ	打製石斧	片岩系	12.6	5.4	2.5	190.2	
	111	A-10	Ⅱ	打製石斧	砂岩	8.8	5.6	3.0	190.6	
	112	B-10	Ⅱ	打製石斧	砂岩	8.1	5.3	2.3	114.8	
	113	E-10	Ⅲ	打製石斧	安山岩	13.2	6.5	2.4	229.2	
	114	B-10	Ⅱ	打製石斧	硬質砂岩	12.4	6.3	2.2	206.4	

第6表　出土石器観察表③

図	番号	グリットNo	層位	器　種	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
38	115	A-11	Ⅱ	打製石斧	安山岩	6.6	5.9	1.4	72.0	
	116	D-9	Ⅳ	打製石斧	蛇紋岩	7.9	6.0	1.3	105.8	
39	117	E-10	Ⅳ	打製石斧	安山岩	14.0	6.2	2.5	276.6	
	118	E-10	Ⅱ	打製石斧	砂岩	13.1	6.0	2.6	199.7	
	119	F-10	Ⅱ	打製石斧	砂岩	14.9	6.2	1.8	172.6	
	120	D-10	Ⅲ	打製石斧	頁岩	13.4	5.7	2.7	241.8	
	121	E-9	Ⅲ	打製石斧	安山岩	15.4	7.1	2.2	307.6	
	122	D-9	Ⅲ	打製石斧	砂岩	16.6	8.9	3.7	678.5	未製品
40	123	G-4	Ⅲ	磨製石斧	蛇紋岩	18.5	6.1	2.4	261.4	
	124	G-10	Ⅲ	磨製石斧	蛇紋岩	10.4	6.7	3.1	336.9	
	125	B-10	Ⅱ	磨製石斧	蛇紋岩	12.8	5.2	2.2	213.6	
	126	H-5	Ⅲ	磨製石斧	蛇紋岩	8.9	4.9	2.4	191.3	
	127	F-5	Ⅲ	磨製石斧	頁岩	4.0	4.1	2.4	36.6	
41	128	H-5	Ⅲ	円盤状石器	安山岩	4.0	3.8	1.9	37.0	
	129	F-8	Ⅲ	円盤状石器	安山岩	3.8	3.7	1.5	30.7	
	130	E-9	Ⅳ	円盤状石器	安山岩	4.2	4.1	1.6	35.1	
	131	G-8	Ⅱ	円盤状石器	安山岩	4.7	4.0	1.3	35.7	
	132	G-5	Ⅱ	円盤状石器	安山岩	4.4	4.0	1.8	48.7	
	133	F-6	Ⅳ	円盤状石器	安山岩	4.6	4.5	1.8	52.9	
	134	D-9	Ⅱ	円盤状石器	花崗岩	5.0	4.4	1.6	50.7	
	135	D-10	Ⅱ	円盤状石器	安山岩	4.8	4.2	2.1	62.7	
	136	G-5	Ⅲ	円盤状石器	安山岩	5.8	4.8	2.0	79.1	
	137	H-6	Ⅲ	円盤状石器	安山岩	5.4	4.8	2.4	76.9	
	138	I-2	Ⅲ	円盤状石器	安山岩	5.4	4.6	2.1	72.9	
	139	G-7	Ⅳ	円盤状石器	砂岩	5.5	5.2	1.7	68.5	
	140	D-8	Ⅲ	石錘	結晶片岩	7.2	6.7	1.2	75.1	
	141	B-8	Ⅱ	石錘	安山岩	6.2	5.5	1.4	73.4	
42	142	G-6	Ⅱ	磨石	安山岩	12.5	10.7	6.0	1280.0	
	143	E-9	Ⅳ	磨石	安山岩	12.0	9.0	3.7	675.0	
	144	F-8	Ⅳ	磨石	安山岩	10.7	8.9	3.7	417.7	
	145	G-5	Ⅲ	敲石	砂岩	12.8	5.8	2.1	173.4	
	146	E-10	Ⅲ	砥石	砂岩	16.5	10.6	5.0	1108.0	
	147	D-10	Ⅲ	十字形石器	緑色片岩	13.1	6.1	2.3	209.2	
43	148	D-8·E-8·F-8	Ⅲ	石皿	砂岩	20.4	25.0	4.6	3560.0	
	149	C-9·D-9	Ⅳ	石皿	砂岩	26.5	26.8	3.0	3375.0	
	150	I-4	Ⅳ	石皿	砂岩	21.7	17.4	5.8	3190.0	破片
	151	E-9	Ⅱ	石皿	デイサイト	32.0	29.0	8.5	12600.0	
44	152	E-9	Ⅲ	石核	黒曜石	3.2	3.8	2.1	23.2	
	153	F-8	Ⅱ	石核	黒曜石	2.9	4.5	1.5	15.4	
	154	G-7	Ⅱ	石核	黒曜石	3.1	2.6	1.3	10.5	
	155	F-7	Ⅱ	石核	黒曜石	2.5	2.0	1.3	4.8	
	156	G-5	Ⅱ	石核	黒曜石	2.4	2.1	1.3	6.8	
	157	G-8	Ⅱ	石核	黒曜石	3.6	3.5	1.1	10.9	
	158	F-8	Ⅱ	石核	黒曜石	2.2	3.4	2.3	12.8	
	159	G-7	Ⅱ	石核	黒曜石	2.7	3.3	1.7	12.9	
	160	F-9	Ⅱ	石核	黒曜石	2.5	2.2	3.1	12.4	
45	161	H-5	Ⅲ	石核	黒曜石	2.1	2.7	1.1	5.0	
	162	G-4	Ⅱ	石核	黒曜石	3.2	2.7	0.9	7.1	
	163	H-5	Ⅲ	石核	黒曜石	1.6	3.4	1.5	9.0	
	164	C-8	Ⅱ	石核	黒曜石	3.5	2.6	2.5	12.4	
	165	D-10	Ⅲ	石核	玄武岩	4.7	6.4	3.7	142.6	
	166	H-5	Ⅲ	石核	玄武岩	3.0	5.3	4.3	87.0	
	167	B-10	Ⅱ	石核	玄武岩	2.4	4.1	1.8	21.2	

第V章　ま　と　め

(1)　遺跡内における調査地点の位置づけ

今回の肥賀太郎遺跡の調査で，調査面積1,700㎡に対して縄文時代晩期を中心に12,000点もの遺物の出土をみた。ここでは，前回調査分を含む肥賀太郎遺跡全体を視野に入れて，今回の調査地点の位置づけを試みたい。

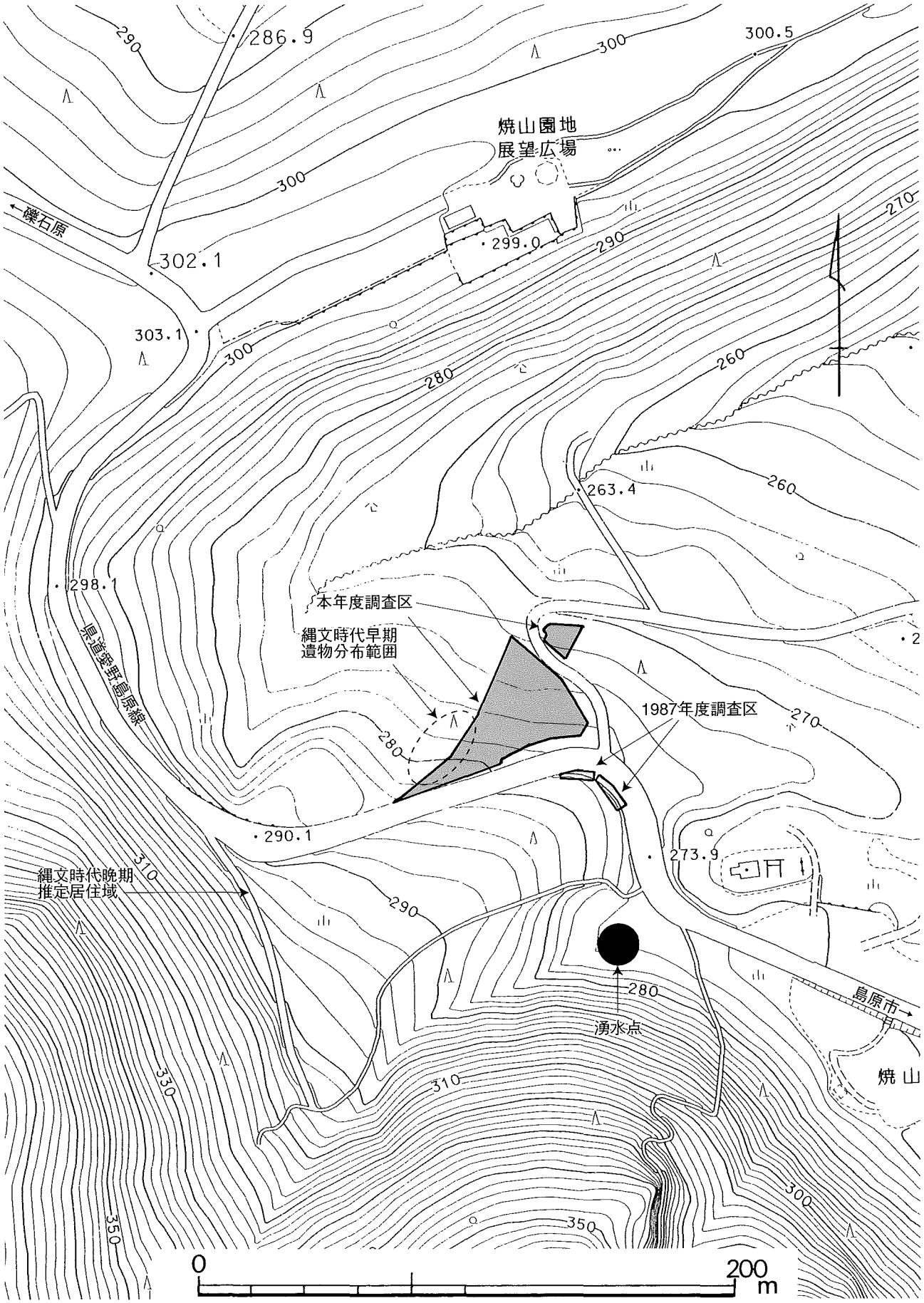
肥賀太郎遺跡周辺の地形と，調査地点の位置関係を示したのが第46図である。北側から西側を山塊が取り囲み，南西側の山塊から北東側に伸びる２本の谷によって挟まれた，北向きの緩斜面に遺跡が営まれていることがよくわかる。また，遺跡を挟む南東側の谷筋には湧水点が存在し，この点も遺跡が形成された背景として重要なポイントになろう。今回の調査地点は遺跡内でも北寄りに位置し，遺跡の中でも標高が低くかつ比較的傾斜のきつい部分に相当する。発掘調査でもＶ層堆積以前（縄文時代早期）には南から北へ伸びる谷状の落ち込みが確認されており，包含層の堆積も傾斜に沿って南から北へと堆積したことが推測できた。また，晩期土器を中心とした遺物の接合関係を検討したところ，等高線と直行するような接合関係を把握することができ，土層の堆積と同様に南北方向への移動を確認することができた。しかし，大量の遺物から推測される人間の活動とは裏腹に，遺構は全く検出されていない点は問題である。

ところで，今回調査地点の南側には，比較的傾斜の緩やかな平場が存在する。東西100m，南北120m，面積にして6,000㎡程度の広がりをもつ。この地域では発掘調査は行われていないものの，切り通しからは縄文時代晩期の土器や石器を採集でき，遺跡の範囲内であることは間違いない。周辺の地形環境も考慮すると，このエリア一帯が縄文時代晩期における居住域として最も適当な場所であろう。この推測に基づけば，今回の調査地点は推定居住域から不要な土器や石器を投棄した場所，すなわちゴミ捨て場と考えることができる（註１）。まとまった量の遺物が出土しているにもかかわらず，遺構を全く検出できなかった点もこれで理解できるであろう。前回調査地点は推定居住域に近いものの，推定居住域よりも比較的急傾斜であることから，今回調査地点と同様の機能が推定できる。

縄文時代早期についてはどうであろうか。今回の調査地点ではこの時期の遺物の出土状況に地理的な偏りが認められる。すなわち，第１トレンチと調査区西壁に挟まれたエリアでまとまって出土しているのである。今回の調査により，縄文時代早期の遺物を包含するＶ層黒色土は，大型の礫とともに調査区内を南北に貫く谷状遺構を埋めるように堆積したことが判明している。このことから，この時期に調査区東側への展開が散漫である背景には，この谷状遺構の存在が無視できないであろう。この点を考慮すると，肥賀太郎遺跡における縄文時代早期の遺物は，今回調査地点内の谷状遺構と，遺跡北西側の深い谷とに挟まれた南北に細長いエリアを中心に展開していることが推測できる。以上の点を総合すれば，肥賀太郎遺跡の広がりは南北約180m，東西約100mの範囲が想定できよう。

(2)　肥賀太郎遺跡出土土器の編年的位置づけ

ここでは，縄文時代晩期土器を中心に若干の検討を加える。今回の報告では，出土土器を深鉢・浅鉢・その他の土器と大きく３つの器種に分け，特に前二者については器形によりそれぞれ細分した。これらの土器は，口縁部に突起を貼り付ける土器の存在や組織痕土器が組成に加わる点から，大局的



第46図　肥賀太郎遺跡と周辺地形（S＝1/2,000）

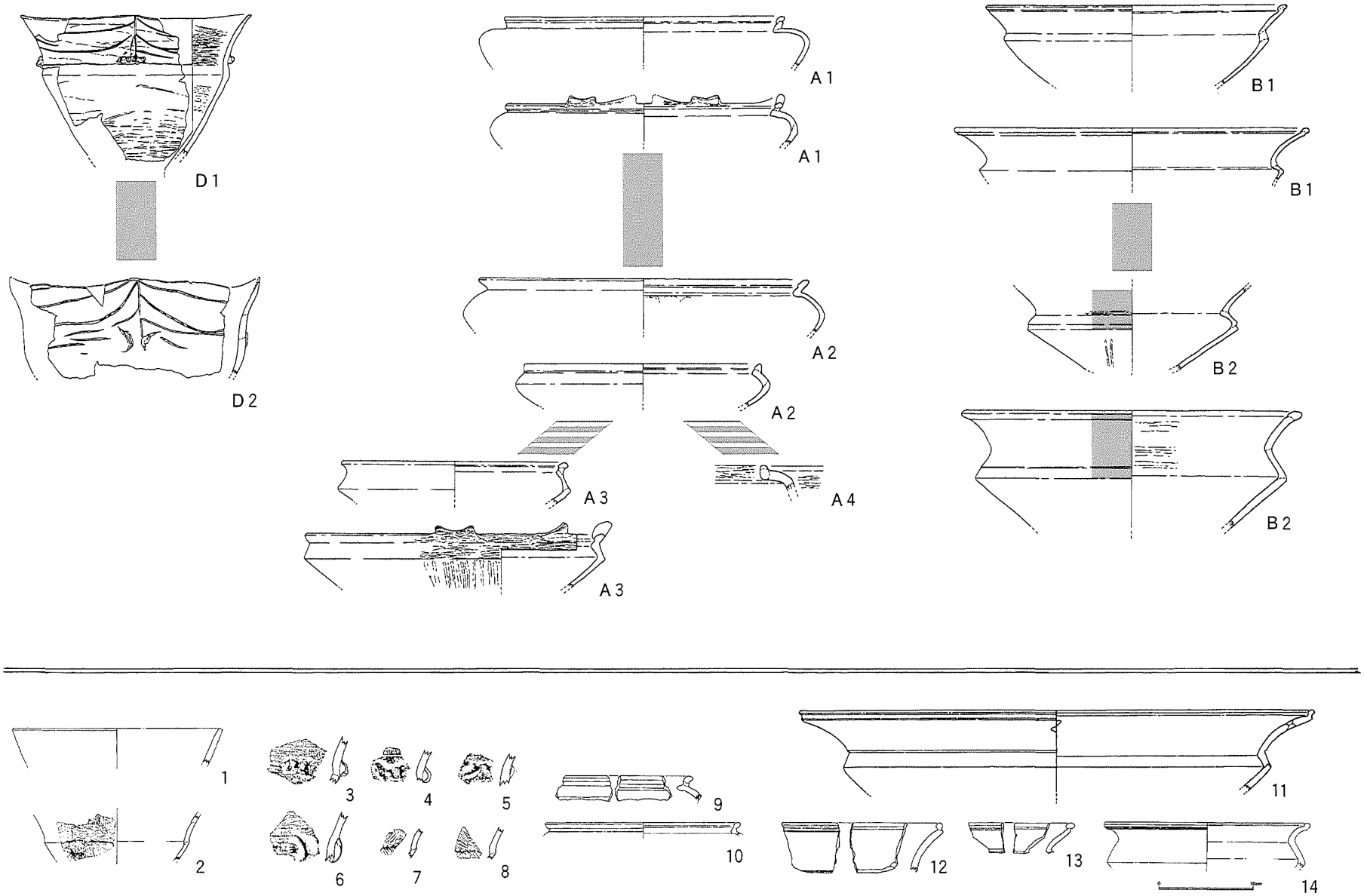
には南九州地域の「黒川式」，肥後地域の「ワクド石段階」，西北九州地域の「宮ノ本段階（宮ノ本式）」，「黒丸段階」に併行する土器群で，近畿編年の滋賀里Ⅲｂ式，あるいは篠原式に相当しよう。

さて，家根祥多氏による近畿地方晩期中葉・篠原式の設定と細分以後（家根1996），各地でこの時期の土器を細分する動きが顕著である。九州地方では，水ノ江和同氏による地域差を意識した編年研究や（水ノ江1997），清田純一氏による肥後地域の後期末～晩期土器編年（清田1998）などが挙げられる。長崎県内では，島津義昭・山崎純男両氏により，佐世保市宮ノ本遺跡出土土器に基づいて設定された「宮ノ本式」（水ノ江編年の「宮ノ本段階」）や「礫石原式」，また，大野安生氏による大村市黒丸遺跡出土土器の編年案（大野2001）があるものの，型式内容に関しては不明な点も多く，島原半島で適用可能な型式かどうかは検討が必要である。実際，島原半島地域の該期土器編年に関しては，島津・山崎両氏は「宮ノ本式」とは別に，島原半島で独自に「礫石原式」を設定するのに対して，水ノ江氏は九州西岸地域として島原半島をとらえ，「宮ノ本段階」および「黒丸段階」の範疇で理解している。この時期の土器編年は，深鉢や浅鉢の一部に九州から近畿まで広域に共通する特徴的な形態の土器が存在するため，地域ごとの型式設定に際しては個別器種の細分だけでなく各器種の組み合わせがもっとも重視される。島原半島出土土器の検討に際しても，各器種のセット関係をふまえた周辺地域との比較が必須であろう。

そこで，改めて肥賀太郎遺跡出土土器を検討しよう（第47図）。深鉢Ｂ類は口縁端部の形状で細分可能であるが，縄文時代後期以降一貫して存在するタイプであるため，時期差をとらえることは難しい。Ｃ類も黒川式並行期の中では明確な時期差を見いだしがたい。Ｄ類は屈曲部が稜線を持って鋭く屈曲するＤ１類と，丸みを持って緩やかにくびれるＤ２類に細分した。これらの土器は，器形以外にも沈線文がシャープ（Ｄ１類）と粗雑（Ｄ２類），貼り付け突起が高い（Ｄ１類）と低い（Ｄ２類）といった相違点があり，器形の変化と連動した時期差として捉えることができる。浅鉢では，玉縁状口縁の形態や胴部の特徴に着目して型式変化をたどることができる。Ａ類は内外面に沈線を持つ玉縁状口縁（Ａ１類）から，内面のみ沈線を持つ玉縁状口縁（Ａ２類）を経て，内面のみ沈線を持つ玉縁状口縁で胴部の張り出しが少なくなったもの（Ａ３類）もしくは，内外面とも沈線の消失した口縁部が短く立ち上がるもの（Ａ４類）に至る，Ａ１類→Ａ２類→Ａ３類・Ａ４類の変化が想定可能であろう。同様に，玉縁状口縁の形態変化に着目すると，Ｂ類は内面に段，外面に沈線を持つ玉縁状口縁で屈曲部は短く内傾したのちなめらかに外反するＢ１類から，内外面とも段を持つ口縁部で屈曲部がやや間延びしたＢ２類への変化が想定できる。このように，深鉢・浅鉢の型式学的検討からは，少なくとも２時期に細分できる可能性がある。

次に，これらの器種のセット関係を検討する。今回の調査により，縄文時代晩期の土器はⅡ層からⅣ層にかけて出土し，これら３層にまたがって接合する例も認められることから，層位別の出土状況が時期差を反映しないことは明らかである。そこで地点別の出土状況を検討する。今回出土した土器群は，南北で分布が二分する傾向があり，それぞれ時期差を反映している可能性が考えられるが，出土量が膨大であることから未だ詳細な検討はできていない。そこで，今回調査区の南東に位置する1987年度調査時の出土土器を検討しよう。

1987年度出土土器には，深鉢ではＢ類・Ｃ類・Ｄ類，浅鉢ではＡ１類・Ｂ１類がある（第47図）。深鉢Ｄ類は屈曲部付近の良好な資料はないものの，刻目突起は指刻みである点から，Ｄ１類に該当す



第47図　肥賀太郎遺跡出土土器型式組列（上段，縮尺不同）および1987年度出土土器（下段，S＝1／6）

る可能性がある。浅鉢Ｂ１類は内外面に沈線を持つ玉縁状口縁であるが，11・12のように頸部から直立気味に立ち上がる口縁部は，やや古相の特徴を残している点が注目される。14は口縁部の特徴から浅鉢Ｂ１類に分類できるが，屈曲部がやや間延びした特徴からＢ１類でも新相に相当しよう。このように，1987年度出土土器は今回出土した土器の中でも古相の一群で占められ，時期的に限定できる資料といえる。

ここで，島原半島北東部の代表的な遺跡での縄文晩期土器の出土状況を概観しておこう。

①稗田原遺跡（第７図，第48図）

島原市北部，標高15～45mの火山性山麓扇状地上の緩斜面に立地する遺跡である。東西約600m，南北約400mの広がりを持つ。６次にわたる調査により，縄文時代晩期の土器がまとまって出土している。出土した土器は，タガ状口縁を持つ深鉢Ａ類および口縁端部が屈曲して短く立ち上がる古手の浅鉢で構成される一群と，深鉢Ｂ類・Ｃ類・Ｄ２類・組織痕土器および浅鉢Ａ２類・Ａ３類・Ｂ２類で構成される一群がある。また，浅鉢では胴部で屈曲して口縁部が内傾する刻目突帯文土器に伴う土器も出土している。

②畑中遺跡（第７図，第48図）

稗田原遺跡の北側に隣接し，標高30m前後の扇状地に立地する遺跡である。タガ状口縁の深鉢Ａ類をはじめ，これに伴う浅鉢群がまとまって出土しており，縄文時代晩期でも時期の限定できる土器群である。浅鉢はＢ１類も若干含まれるが，Ｂ１類の口縁端部が屈曲して直立するタイプが主体となる。また，胴部の張り出しが弱い浅鉢Ａ類に先行する土器も多い。

③百花台遺跡（第７図，第48図）

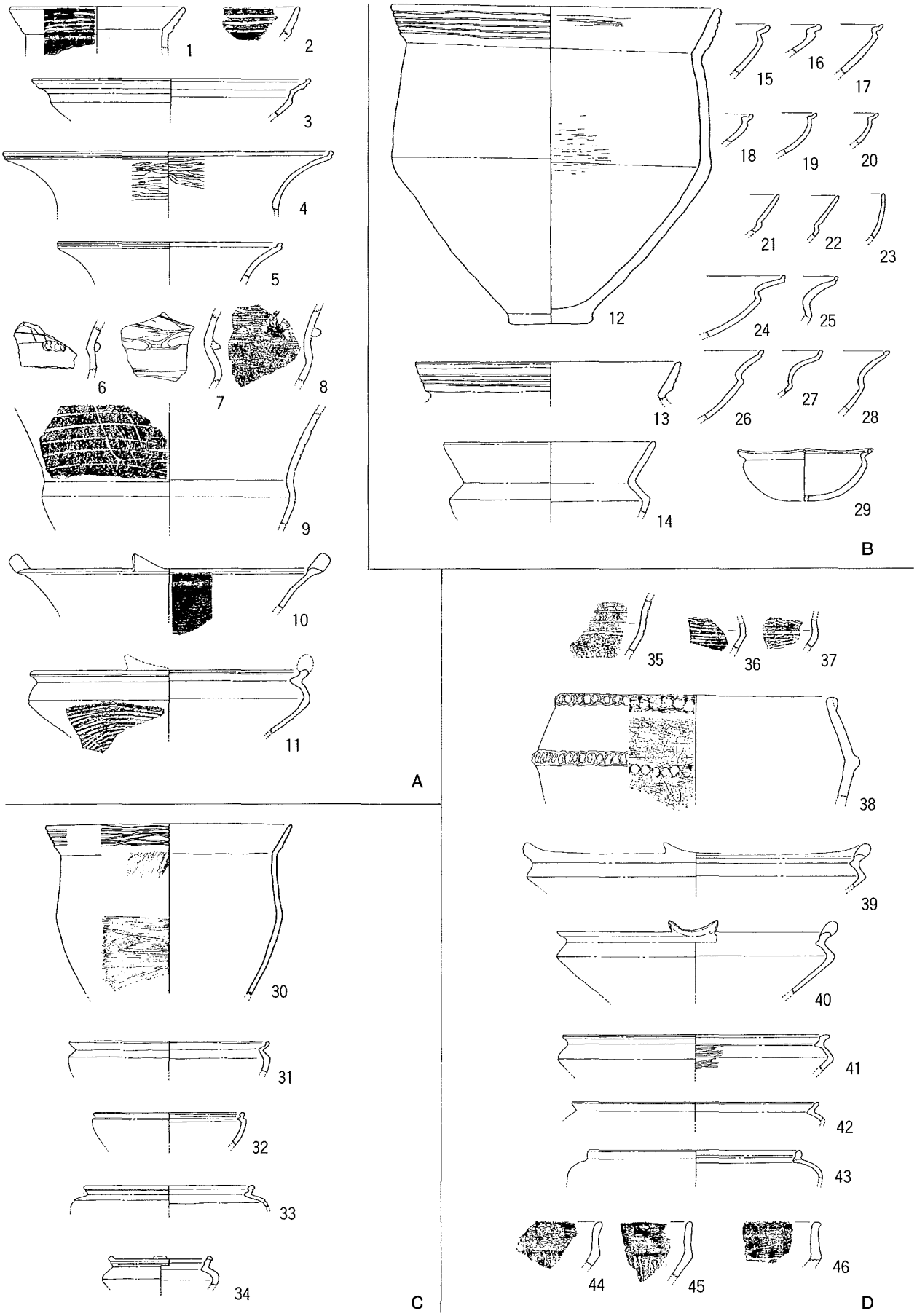
雲仙市国見町の標高200m付近に広がる山麓扇状地一帯に展開する遺跡である。旧石器時代から縄文時代にかけておびただしい量の遺物が出土しているが，縄文時代後期末から晩期にかけての土器もまとまって出土している。晩期の土器では，タガ状口縁を持つ深鉢Ａ類および口縁端部が屈曲して短く立ち上がり胴部の張りが弱い浅鉢が多く出土している。このほか，浅鉢ではＡ１類・Ａ２類もわずかに出土している。

④礫石原遺跡（第７図）

標高200m付近の山麓扇状地に立地し，周辺の緩斜面に約1.1㎢に渡って展開する大規模な遺跡である。肥賀太郎遺跡からは山塊を挟んで直線距離で約１㎞北方に位置する。土器は縄文時代晩期全般に渡って出土しているものの，弥生時代早期の刻目突帯文土器は出土していないようである。

⑤中木場遺跡（第７図，第48図）

水無川下流域に面した標高100mほどの扇状地上に立地する遺跡である。平成４年度の調査で，縄文時代晩期から弥生時代早期にかけての土器がまとまって出土している。深鉢ではＡ類・Ｂ類・Ｃ類・Ｅ類・組織痕土器が出土しているが，Ｂ類およびＥ類が比較的多い。Ｅ類は棒状工具による刻みを持つものが主体である。浅鉢では口縁部が屈曲して短く立ち上がる古手のタイプのほか，Ａ１類・Ａ２類・Ａ３類が出土しているが，量的にはＡ２類・Ａ３類が多い。また，屈曲タイプの浅鉢や夜臼系の丹塗壷も出土している。



第48図　島原半島北東部主要遺跡出土土器（S＝1／6）

A：稗田原遺跡，B：畑中遺跡，C：百花台遺跡，D：中木場遺跡

以上が各遺跡での出土状況である。今回の調査で出土した土器群との関連では，畑中遺跡でタガ状口縁深鉢Ａ類に伴って深鉢Ｄ１類や浅鉢Ｂ１類がわずかに出土しており，これらの土器は肥賀太郎遺跡出土土器の中でも古く位置づけられる。また，突帯文土器がまとまって出土している中木場遺跡では，浅鉢Ａ２類・Ａ３類が出土し，これらの浅鉢は新相を示すものであろう。以上の検討から，島原半島北東部では縄文時代晩期を大きく３期に分けることができそうである。

１期　タガ状口縁を持つ深鉢Ａ類や口縁端部が屈曲して短く立ち上がる浅鉢および胴部の張りが弱いボウル状の浅鉢を指標とする土器群。畑中遺跡・稗田原遺跡・百花台遺跡でまとまって出土している。

２期　深鉢Ｄ１類・浅鉢Ａ１類・浅鉢Ｂ１類を指標とする土器群。礫石原遺跡・肥賀太郎遺跡でまとまって出土している。

３期　深鉢Ｄ２類・浅鉢Ａ２類・浅鉢Ａ３類・浅鉢Ｂ２類を指標とする土器群。稗田原遺跡・礫石原遺跡・肥賀太郎遺跡・中木場遺跡でまとまって出土している。

１期は肥後編年の古閑Ⅱ式に併行し，水ノ江編年の「百花台段階」に相当する。２期は肥後編年の「無刻目突帯文１期」に併行し，水ノ江編年の「宮ノ本段階」，大野編年の「KOB７段階」に相当する。３期は肥後編年の「無刻目突帯文２期」に併行し，水ノ江編年の「黒丸段階」，大野編年の「KOB２下段階」から「KOB650-１段階」の一部に相当する。肥賀太郎遺跡出土土器は２期から３期にほぼ位置づけられ，これらの時期を構成する各器種がセットで出土している点は特筆されよう。今回は特徴的な深鉢・浅鉢について検討を加えてきたが，このほかにも鉢・皿などもあり，セット関係の把握にはさらなる検討が必要である。また，今回肥賀太郎遺跡から出土した土器群の分布は，２期と３期の区分や両者のセット関係を把握するうえで重要な情報を提供する可能性がある。未だ不十分で中途半端な点は否めないが，今後の責としたい。

(3)　肥賀太郎遺跡出土石器の位置づけ

今回出土した石器の総数は，出土地点の記録分だけでも3,642点である。これらのうち，ツール類を中心とした石器組成を第７表にまとめた。Ⅴ層は縄文時代早期の包含層であるが剥片７点のみの出土である。Ⅱ層～Ⅳ層出土の石器群については，石鏃の一部など縄文時代早期までさかのぼる可能性のある石器が含まれるが，大半は縄文時代晩期と考えることができる石器群である。ここでは，出土量が多く器種も豊富なⅡ層からⅣ層の石器群について簡単に触れておく。

第７表　肥賀太郎遺跡出土石器組成表

	石器製作加工具			狩猟具	植物採集加工具					漁撈具	工具						その他
	石核	剥片	円盤状石器	石鏃	打製石斧	磨石	敲石	凹石	石皿	石錘	磨製石斧	石匙	スクレイパー	楔形石器	石錐	砥石	十字形石器
Ⅱ層～Ⅳ層	268	2752	43	69	50	17	12	1	26	5	8	6	185	4	2	12	1
Ⅴ層		7															

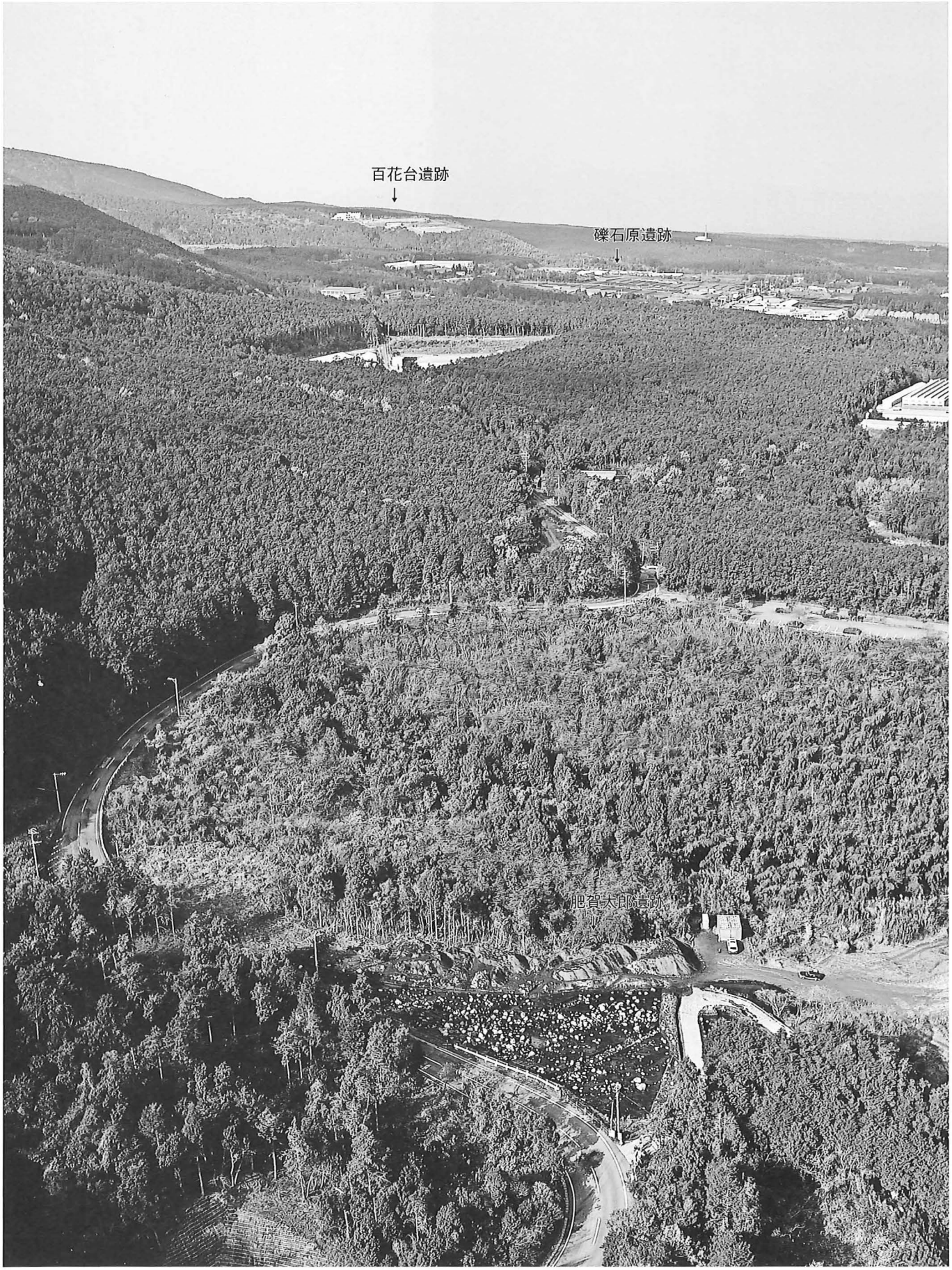
最も多く出土しているのは剥片類で，総出土数の76％を占める。これに対応するように石核も多く出土しており，剥片剥離に関連すると考えられる円盤状石器の出土量も多い。ツール類ではスクレイパーの割合が最も高く，狩猟具・植物採集加工具・漁撈具・工具を含むツール類全体の46％を占めている。ついで石鏃（17％），打製石斧（12％），石皿（６％）の順となる。狩猟具とスクレイパー類が多い点は，活発な狩猟活動を思わせるものである。また，植物採集加工具の出現頻度が高い点も注目される。特に打製石斧は根茎類の採集のほか，耕作具としての機能も推測され，スクレイパー類に散見される収穫具とおぼしき遺物の存在や，附篇で述べられる土器圧痕資料からも畑作を含む農耕の存在を考える必要があろう。

島原半島北東部では，縄文時代後期後葉から晩期にかけての遺跡群の動態についてすでに検討されている（宮崎・伴編1990）。これは，遺跡の立地，遺跡の規模，遺跡の構造（遺構の有無），継続期間を軸に検討されたもので，この時期のダイナミックな遺跡群の展開の一端を明らかにしている。一方で，晩期２期から３期は，島原半島に限らず県内全域で遺跡数の増加や遺跡立地の変動が認められ，大きな画期と捉えることができる。今後は遺跡の継続期間や遺跡群の併存関係を把握するための土器編年を整備するとともに，具体的な活動内容を探るために石器組成の分析を通して検証していく必要があろう。また，土器圧痕の分析は，従来石器の分析から類推されてきた農耕の存在に関して，「いつ」，「何を」栽培していたかを明らかにするものであり，縄文時代の「農耕」の実体や弥生時代への移行に関して具体的に一歩踏み込んだ議論を展開するためにも，今後重要な研究視点となろう。問題点の列挙に終始したが，今後これらの問題を改めて検討する機会を持って責任を果たしたい。

【註１】 推定居住域は今回調査した地点に比べて標高が高いことから，今回調査地点出土遺物も居住域からの流れ込みによる二次堆積遺物の可能性も考えられる。しかし，今回出土した土器には流れ込みに伴う摩滅痕は皆無で，接合面もしっかりとした例が多い。また，遺物の分布は南北に二分される傾向にあり，接合関係もこの二分化された分布を踏襲することから，この分布には機能差や時期差など人為的な要因が絡んでいる可能性が高い。したがって，流れ込み堆積の遺物が存在する可能性は完全に否定できないものの，大半の遺物は居住エリアが機能していた段階で，居住者が今回調査地点へ投棄した結果を反映していると考える方が現時点では妥当であろう。

【文献】

大野安生2001「黒丸遺跡沖田地区出土土器の検討」『西海考古』第４号　西海考古同人会
清田純一1998「縄文後・晩期土器考」『肥後考古』11　肥後考古学会
島津義昭・山崎純男1981「九州の土器」『縄文文化の研究』４　雄山閣
水ノ江和同1997「北部九州の縄文後・晩期土器」『縄文時代』８　縄文時代文化研究会
宮崎貴夫・伴耕一朗編1990「肥賀太郎遺跡」『長崎県文化財調査集報ＸⅢ』長崎県文化財調査報告書第97集
家根祥多1996「篠原式の提唱」『縄紋晩期前葉－中葉の広域編年』平成４年度科学研究費補助（総合Ａ）研究成果報告書
※なお，各報告書については紙面の都合上割愛した。



肥賀太郎遺跡から北西を望む

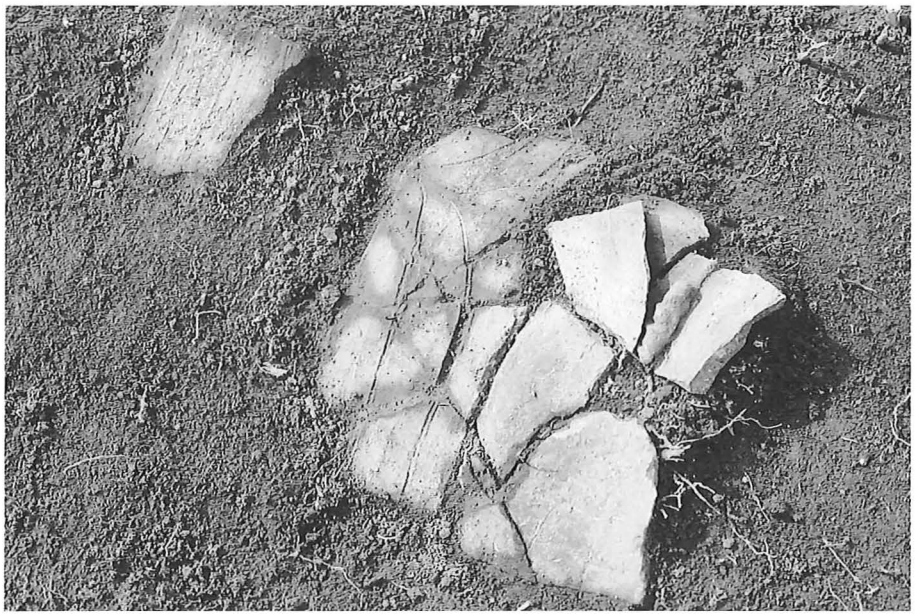
図版 2

発掘調査風景①

発掘調査風景②

発掘調査風景③

遺物出土状況

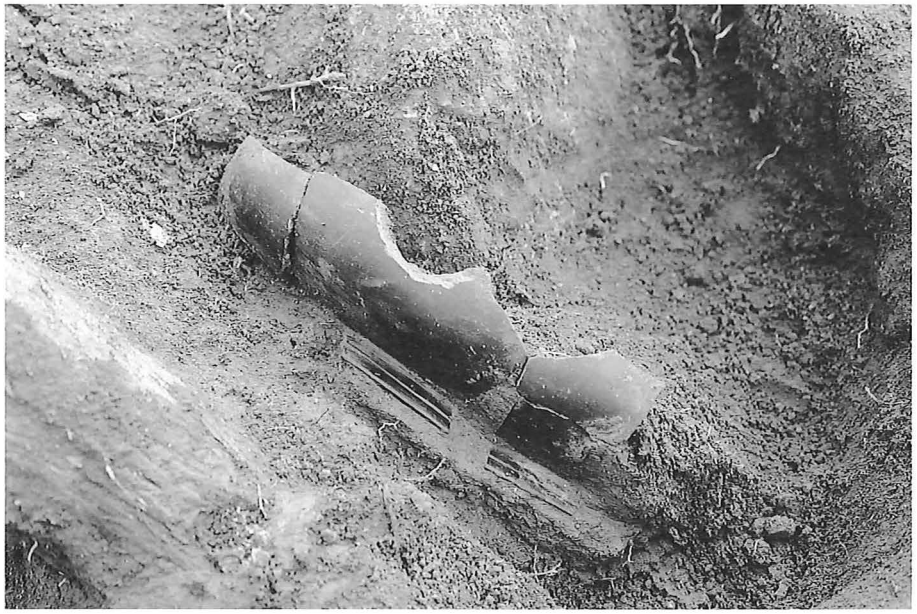


深鉢出土状況①

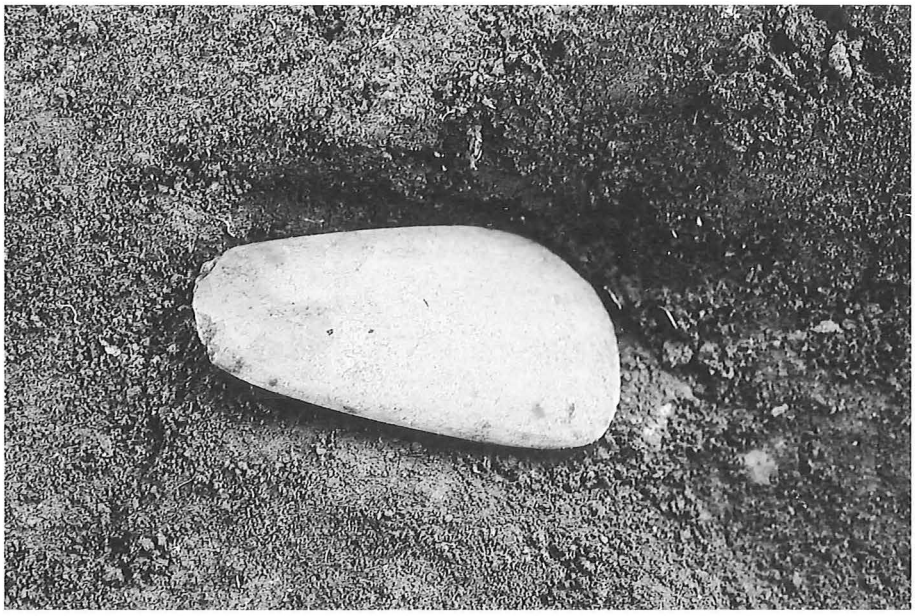
浅鉢出土状況①

図版 4

深鉢出土状況②

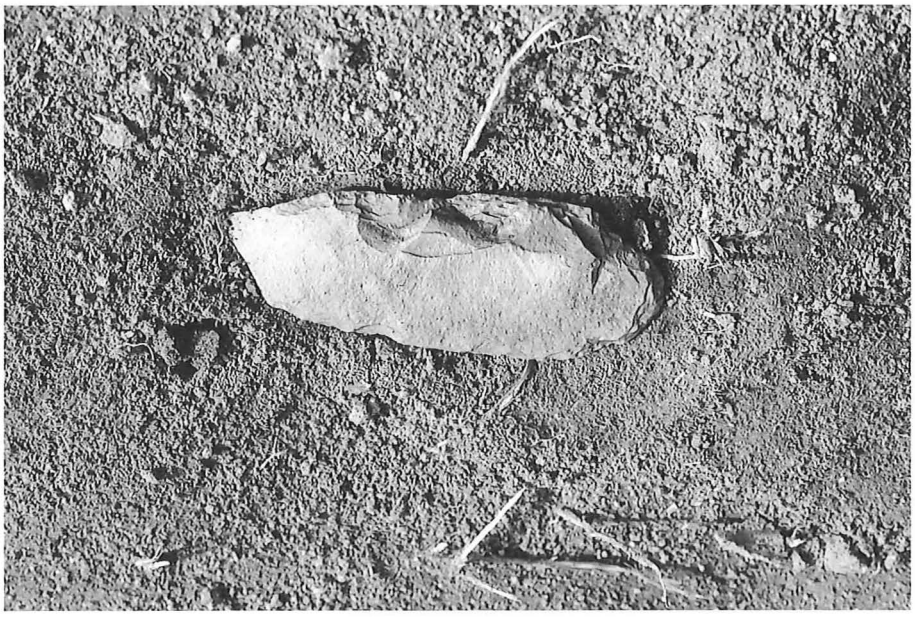


浅鉢出土状況②

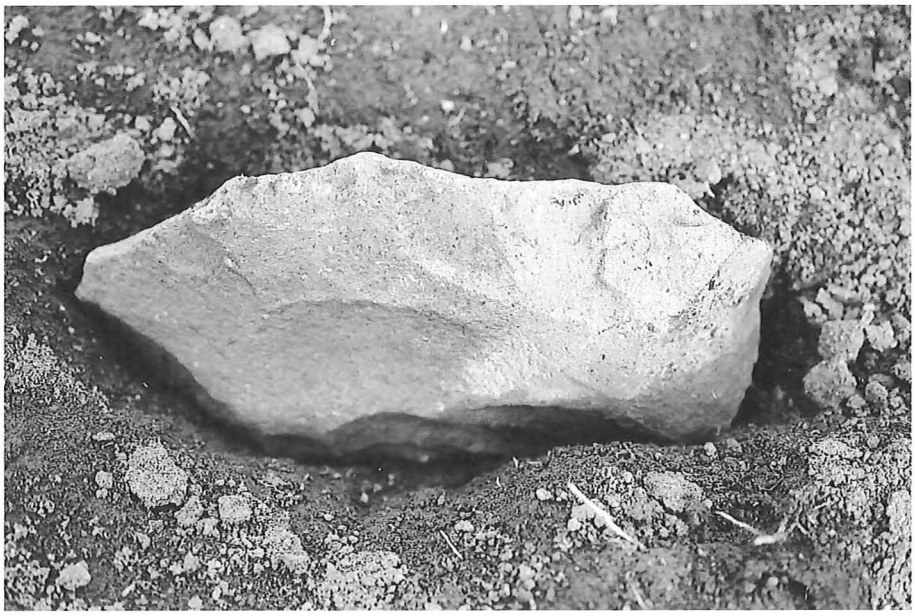


石器出土状況①

石器出土状況②

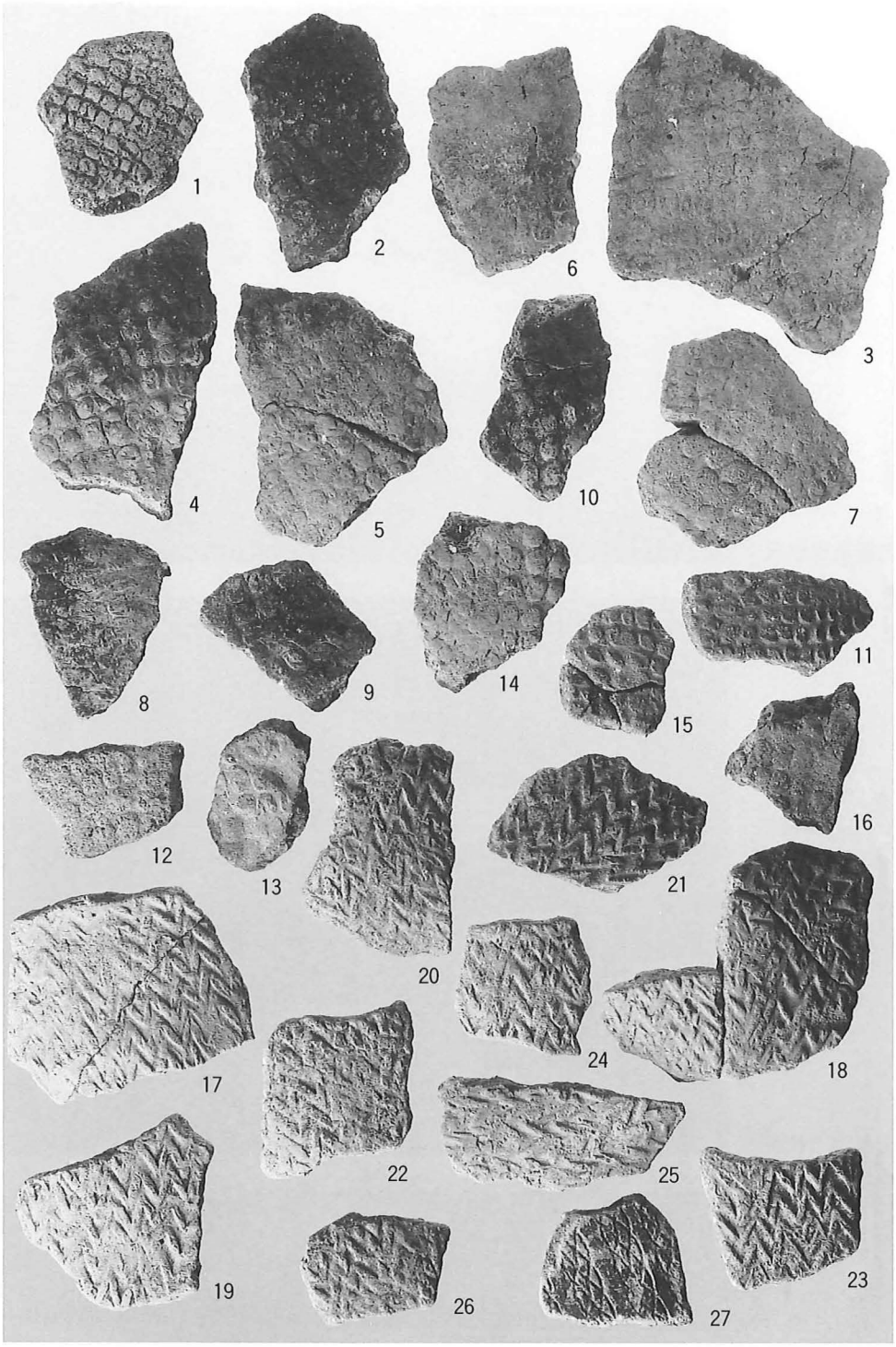


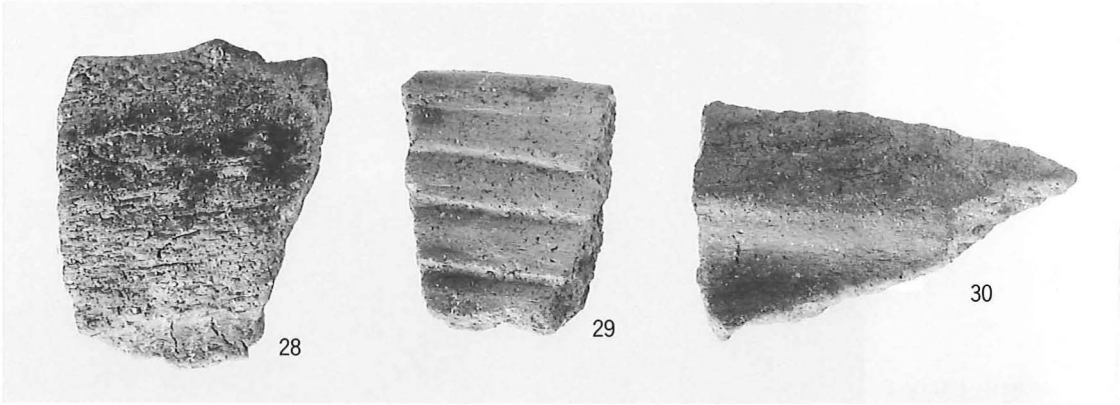
石器出土状況③



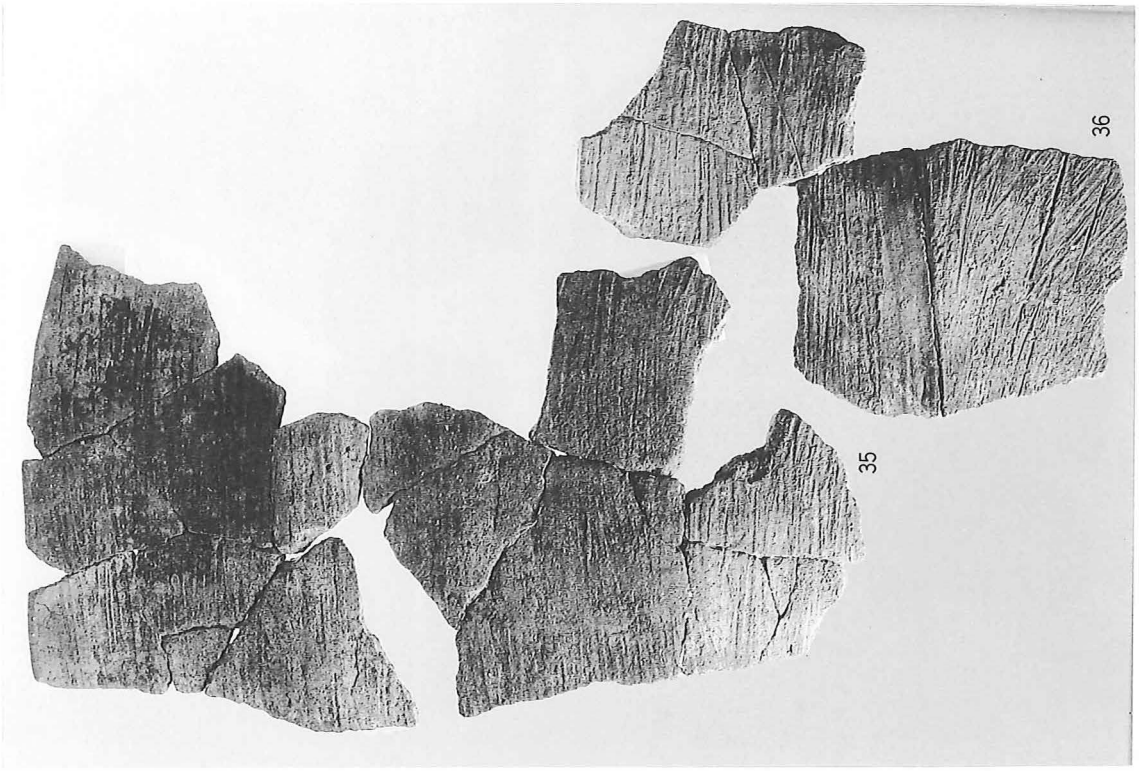
石器出土状況④

図版 6


1
2
6
3
4
5
10
7
8
9
14
15
11
12
13
16
21
20
17
24
18
22
25
19
26
27
23

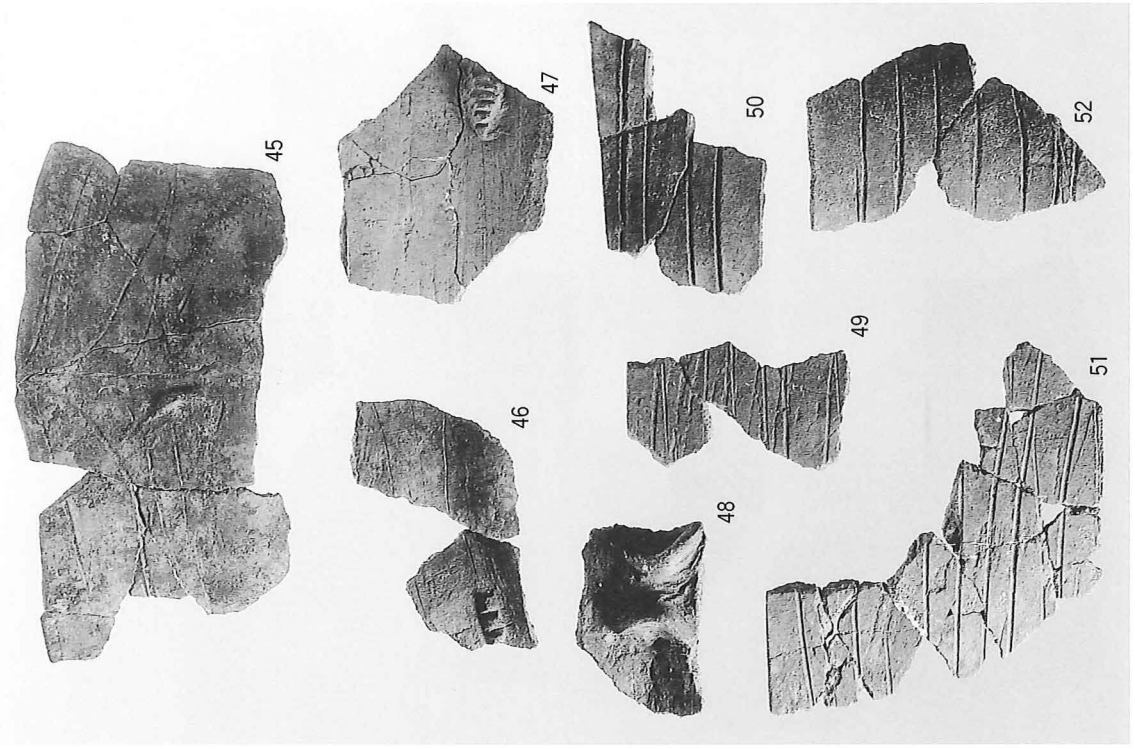

28
29
30

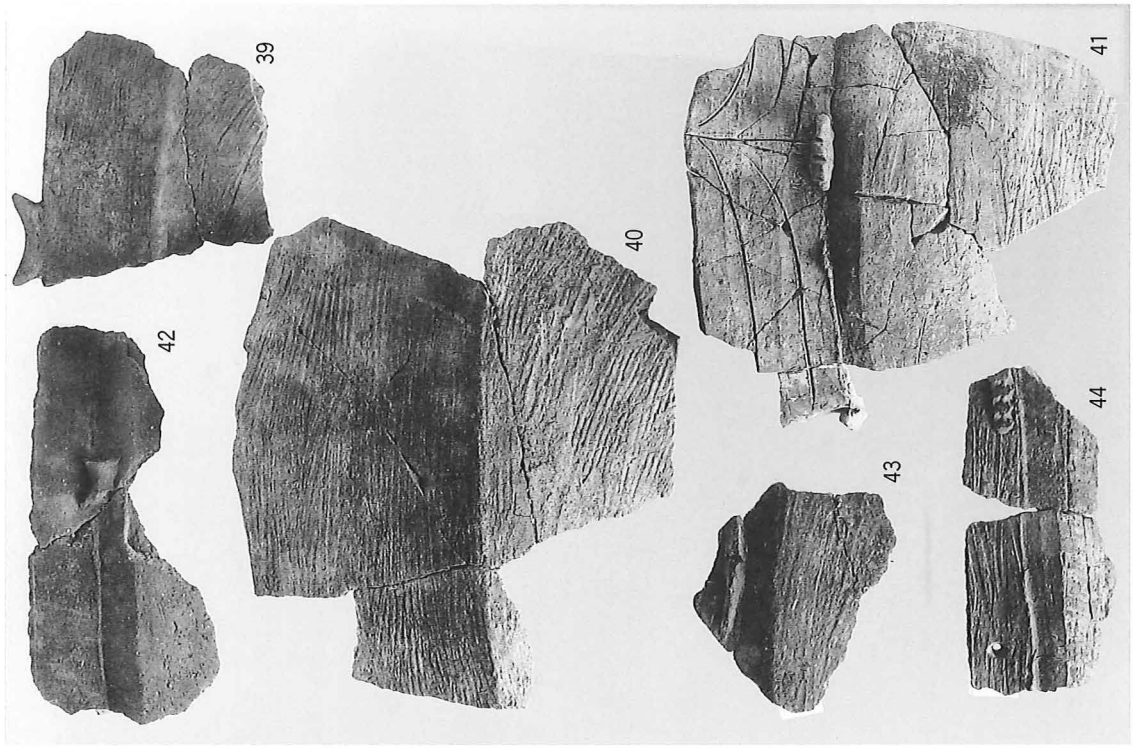
出土土器①



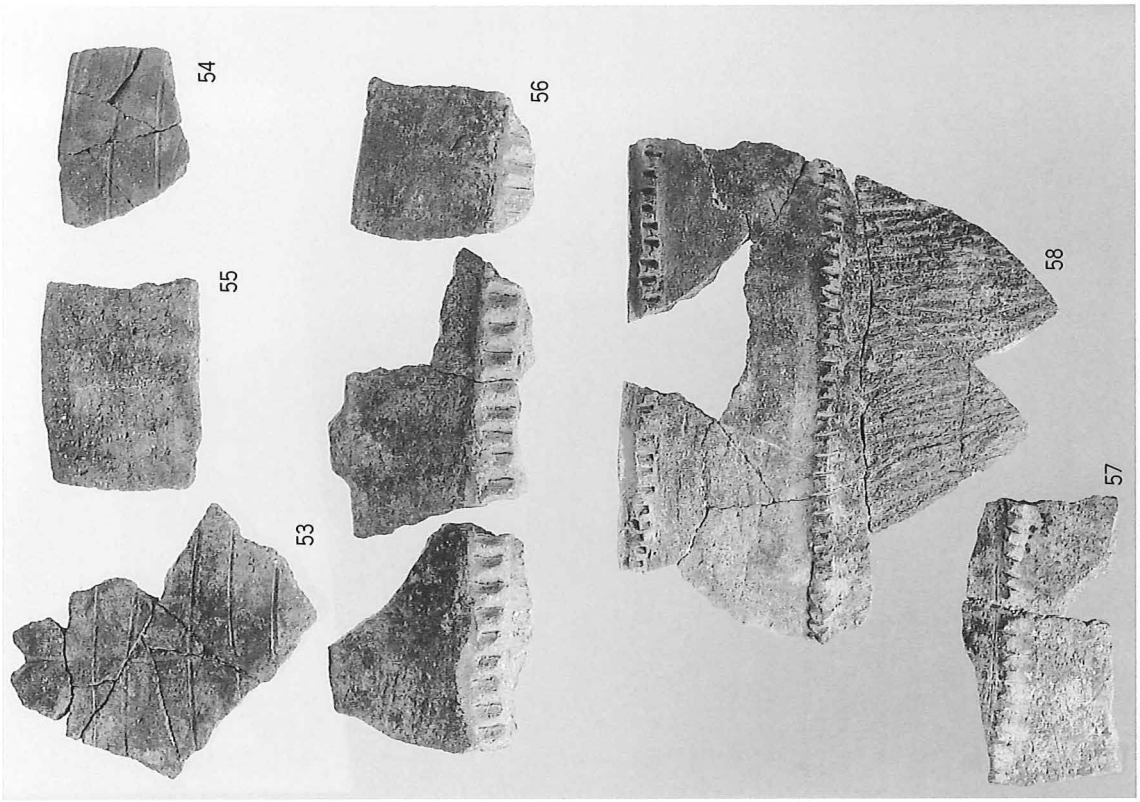
出土土器②

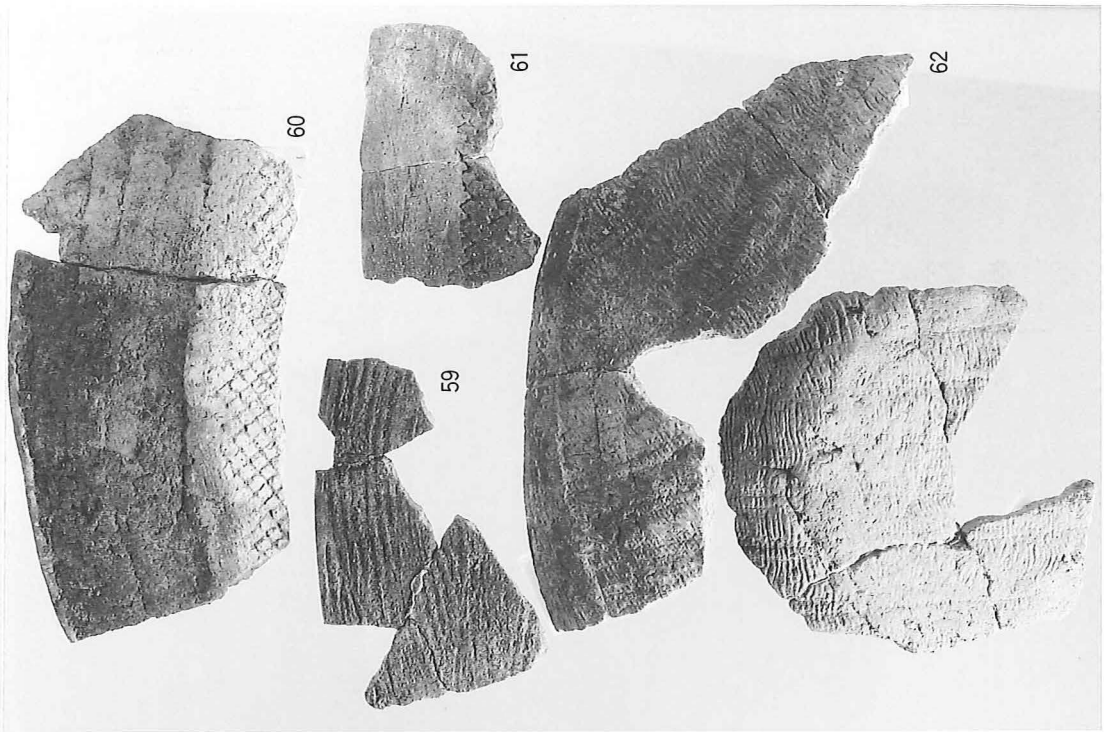
図版 8





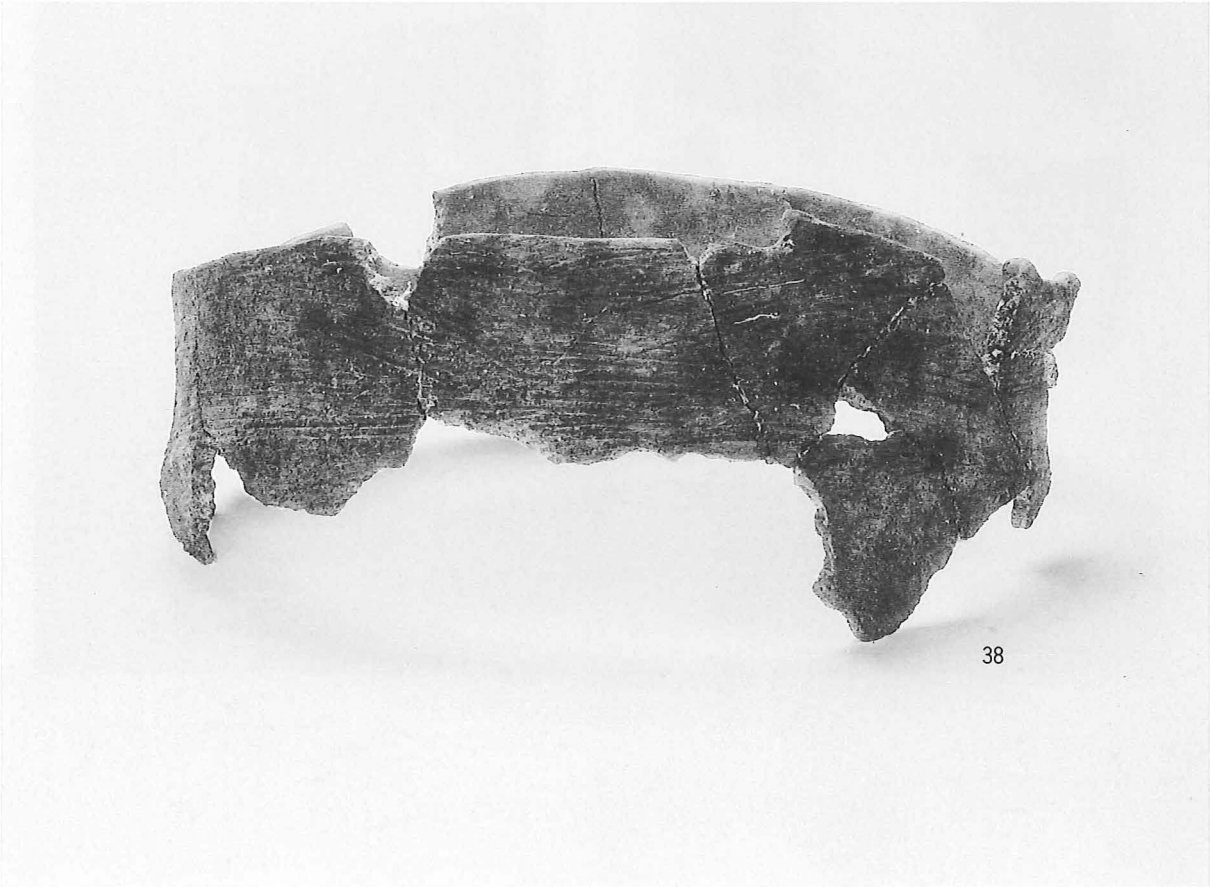
出土土器③



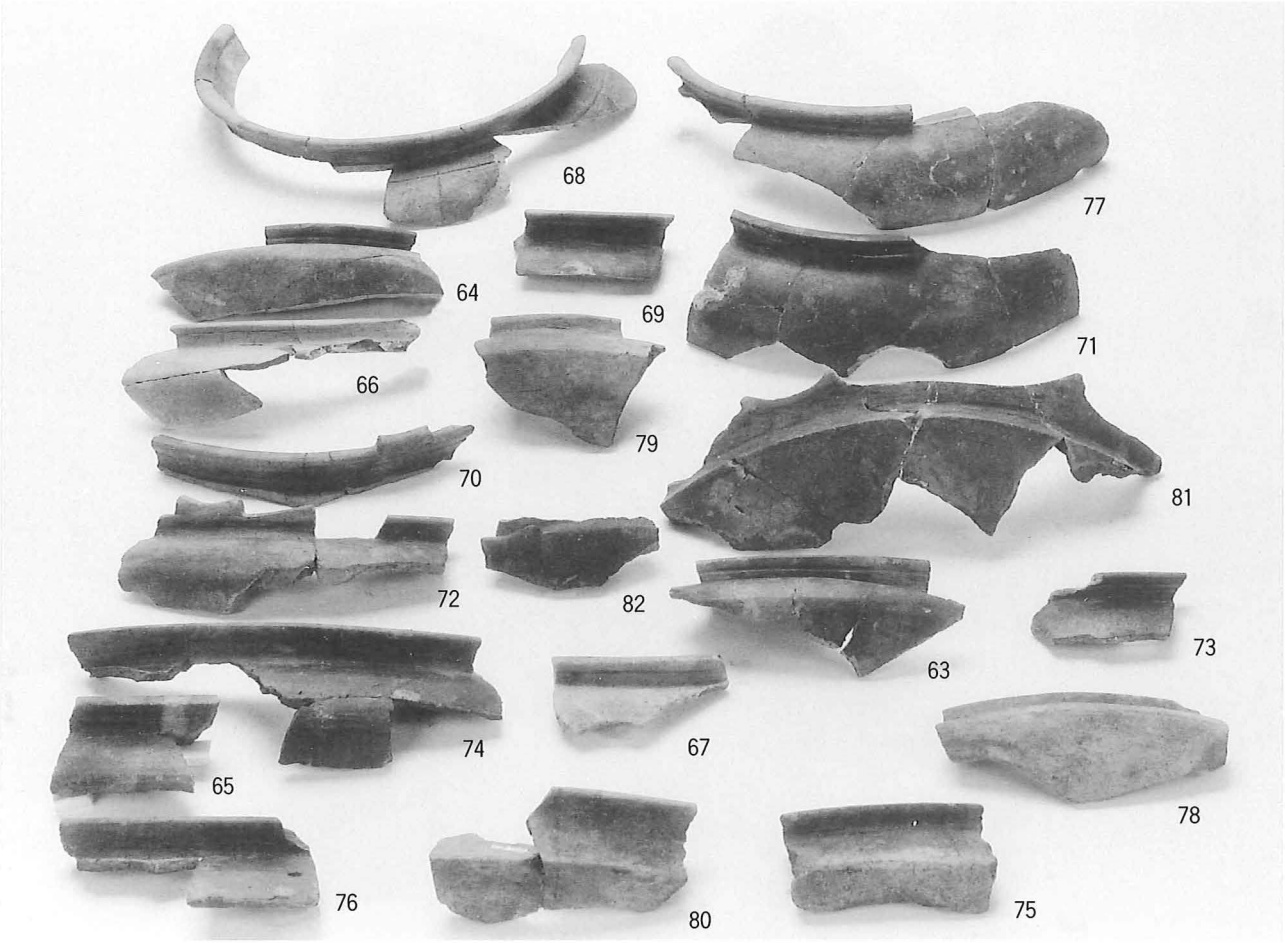


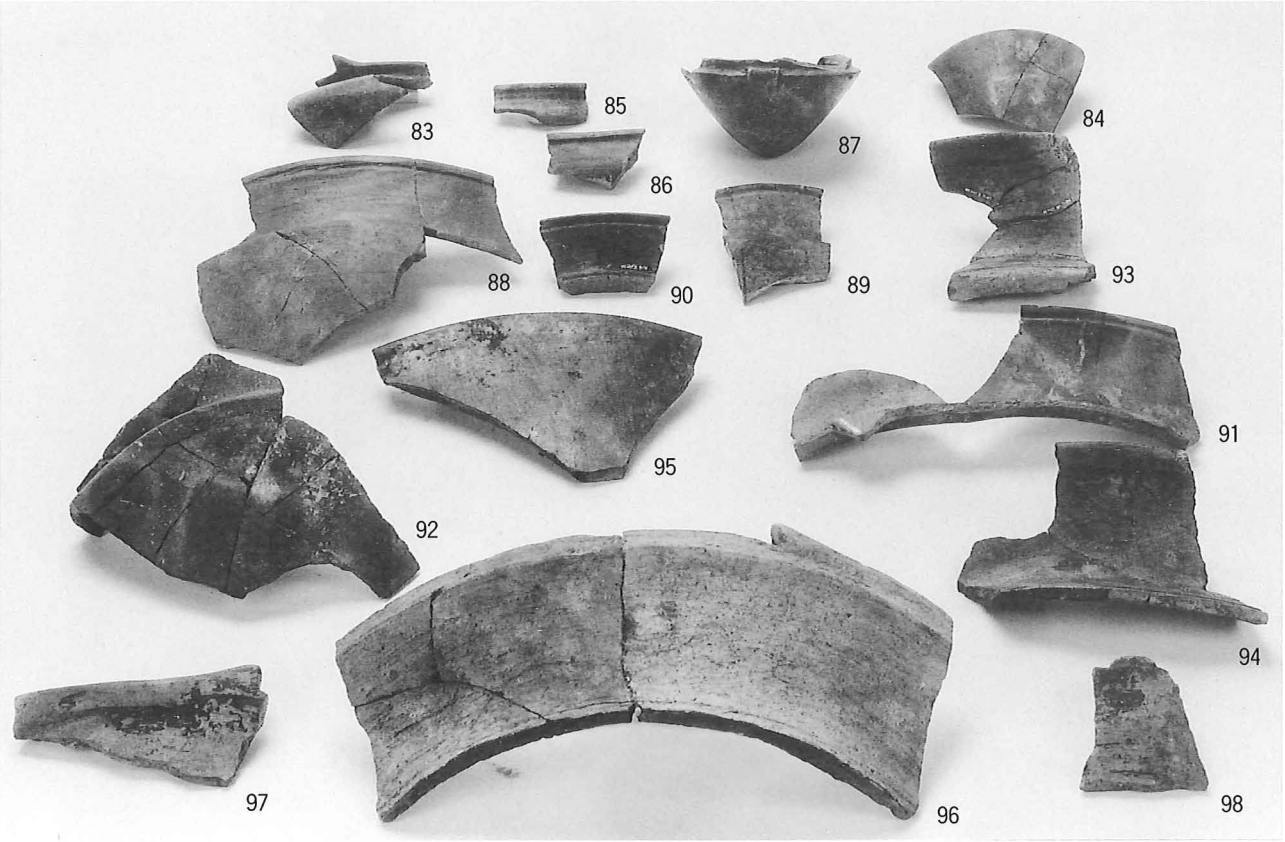
出土土器④

図版10

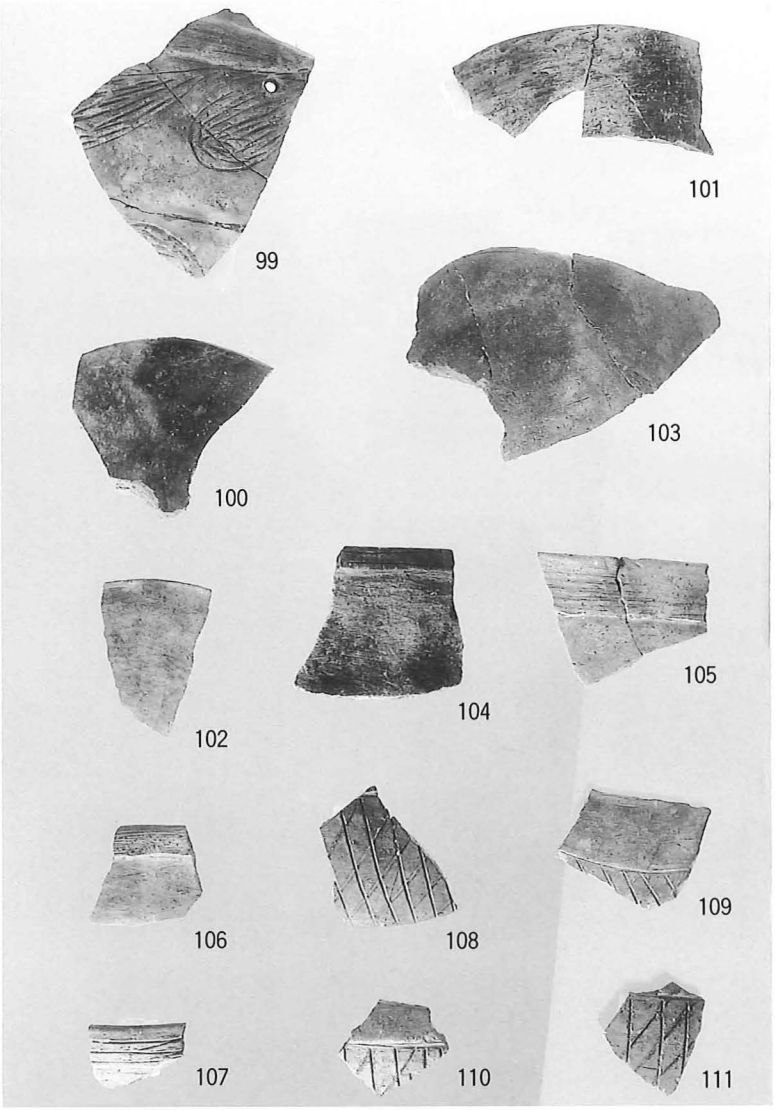


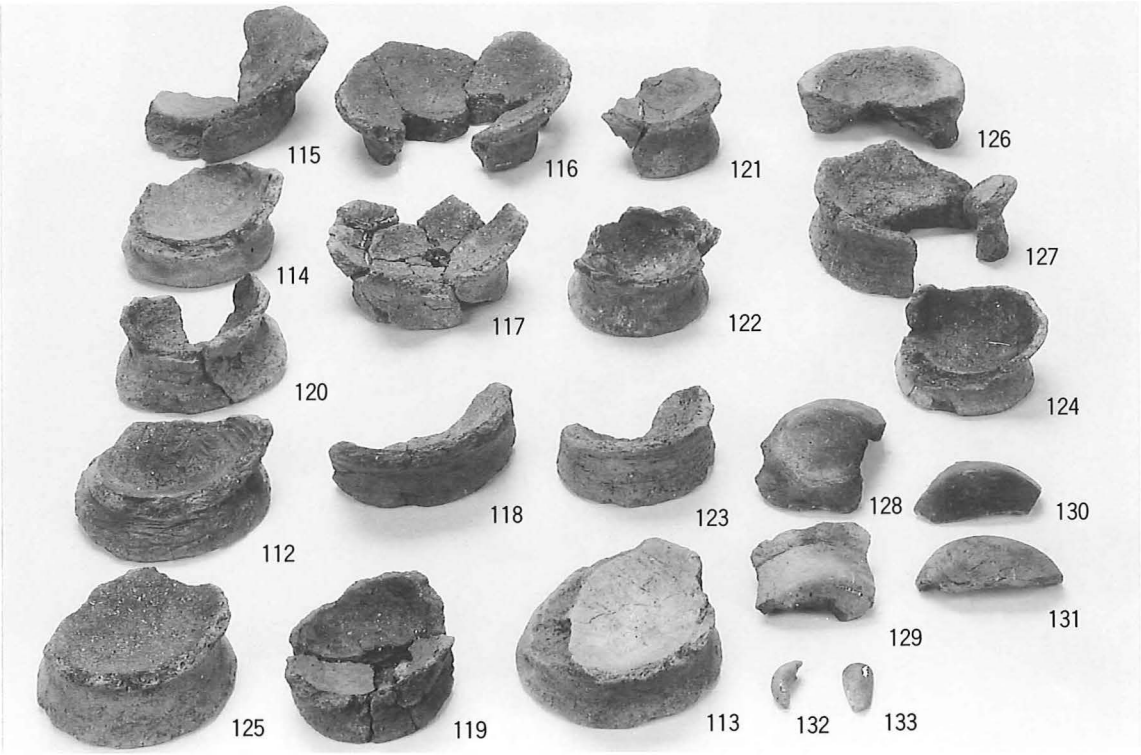
出土土器⑤


68
77
64
69
71
66
79
70
81
72
82
73
63
74
67
65
78
76
80
75

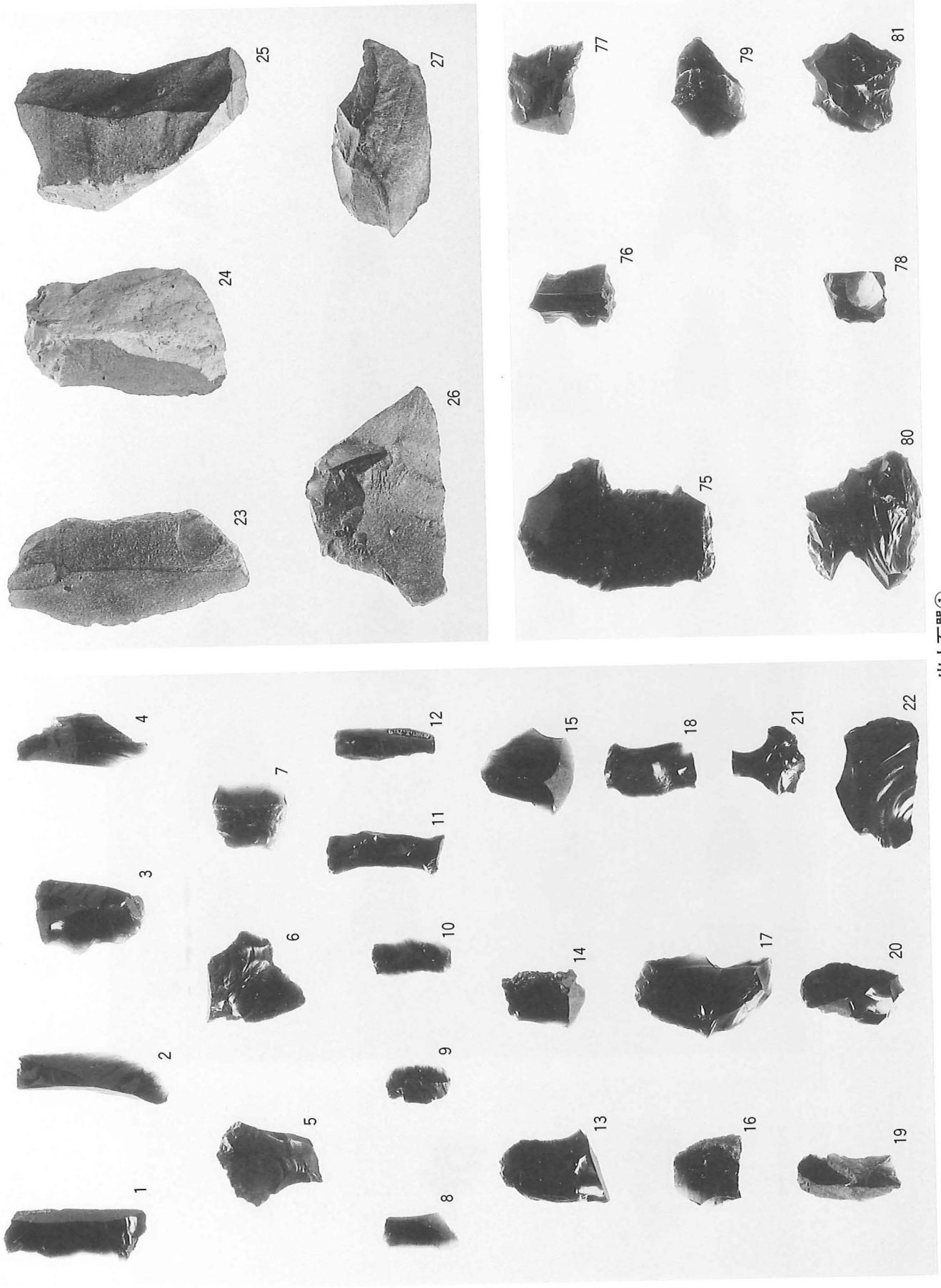

83
85
87
84
86
88
90
89
93
91
95
92
94
97
96
98

出土土器⑥


99
101
100
103
102
104
105
106
108
109
107
110
111

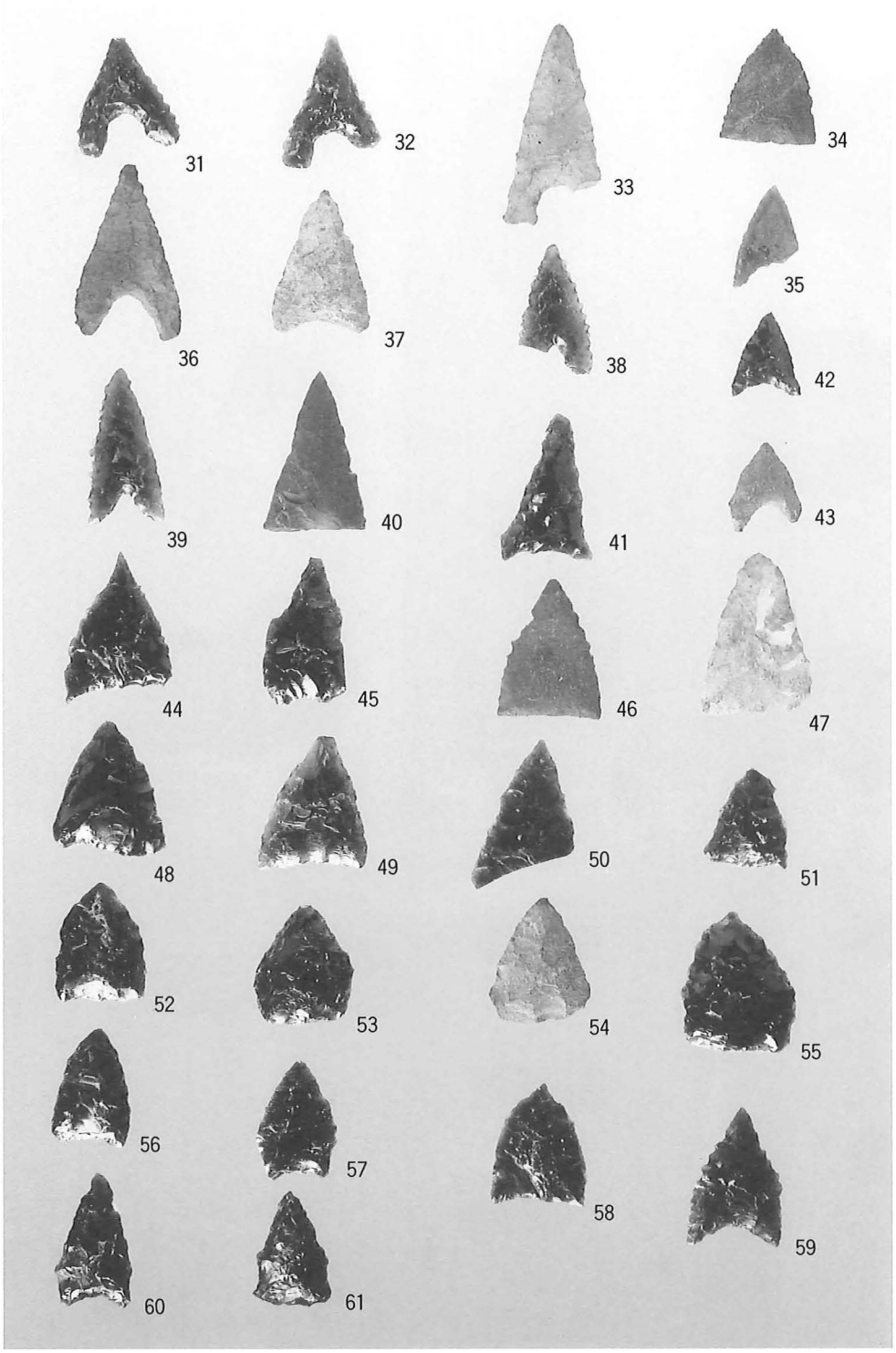

115
116
121
126
114
117
122
127
120
124
112
118
123
128
130
125
119
113
129
131
132
133

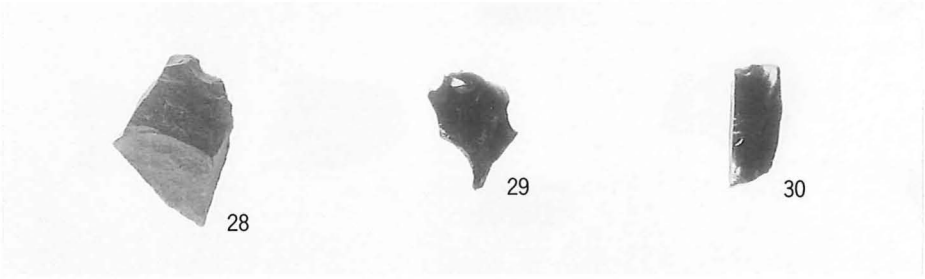
出土土器⑦


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
75
76
77
78
79
80
81

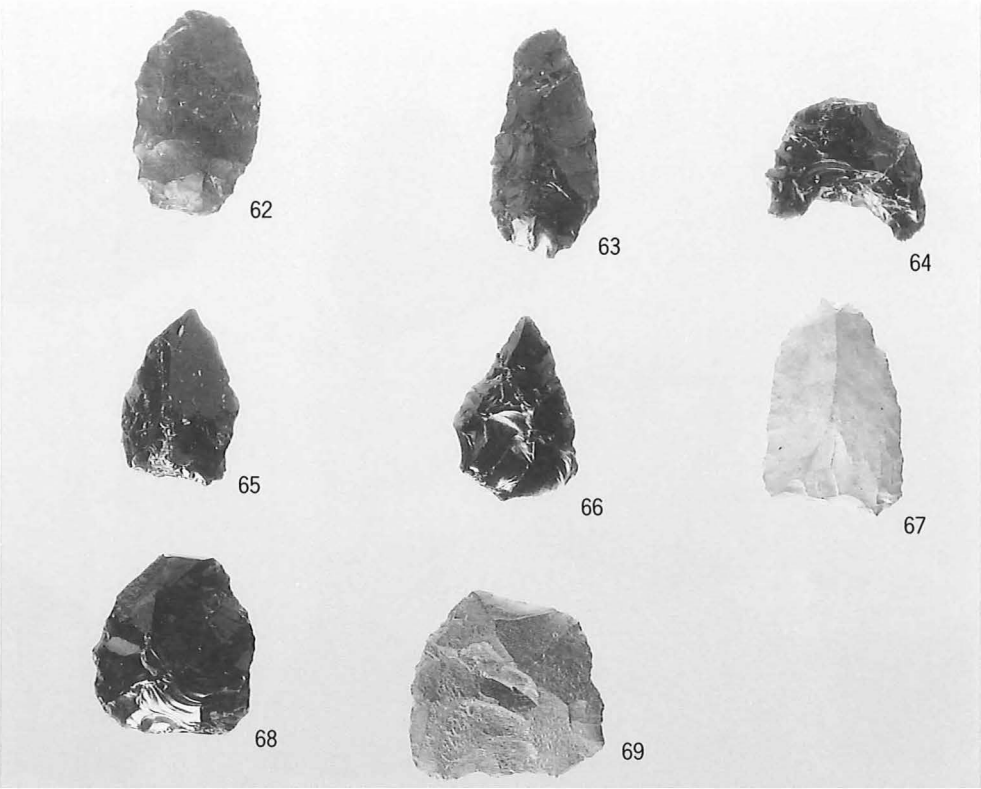
出土石器①

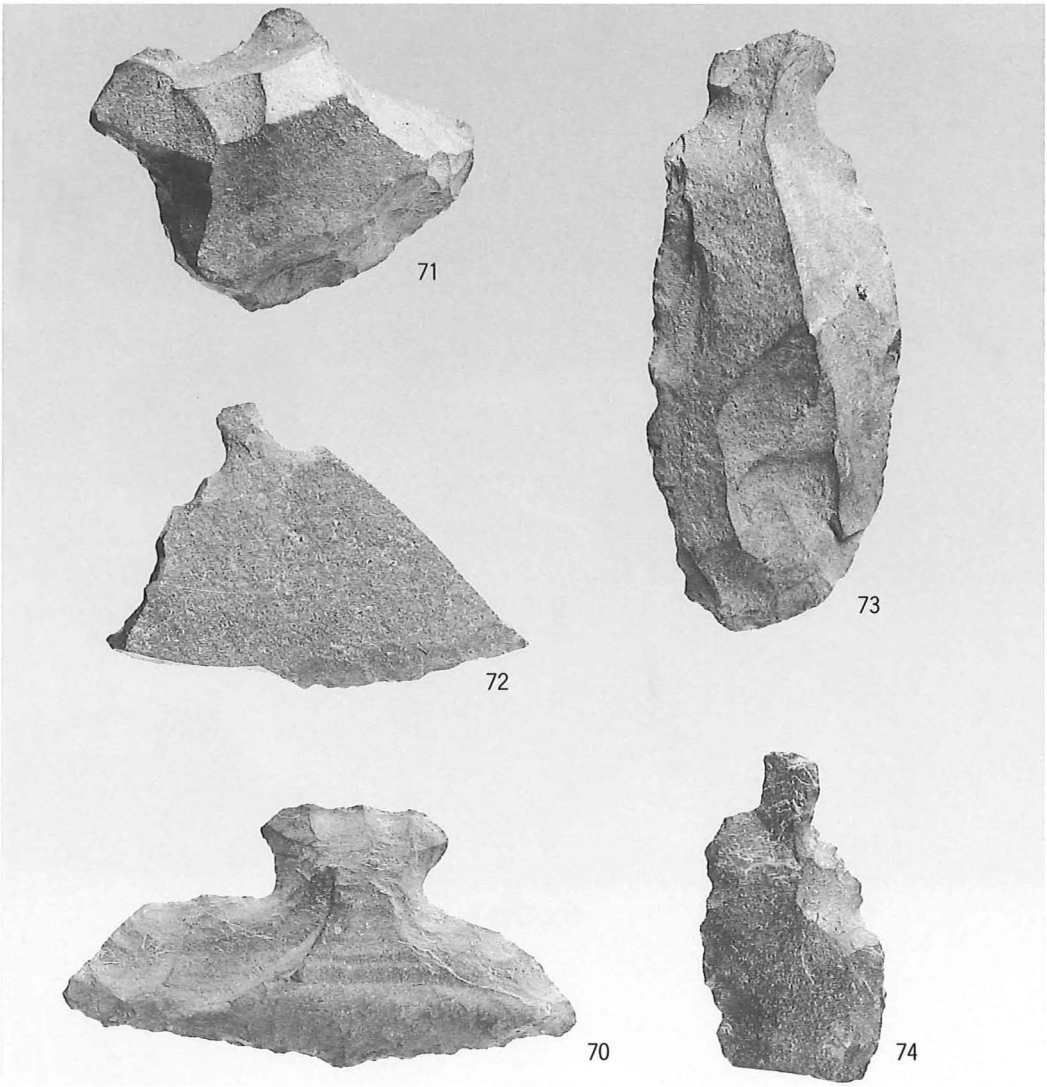
図版14


31
32
33
34
35
36
37
38
42
39
40
41
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61


28
29
30

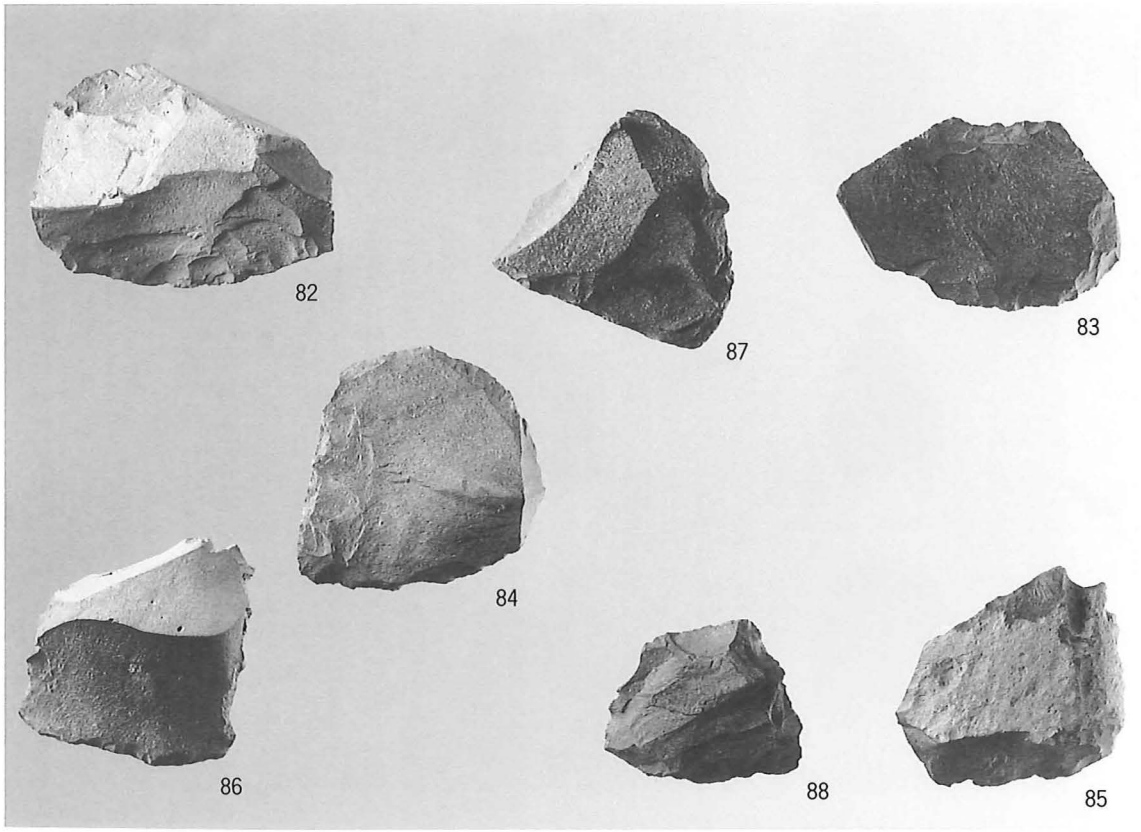
出土石器②

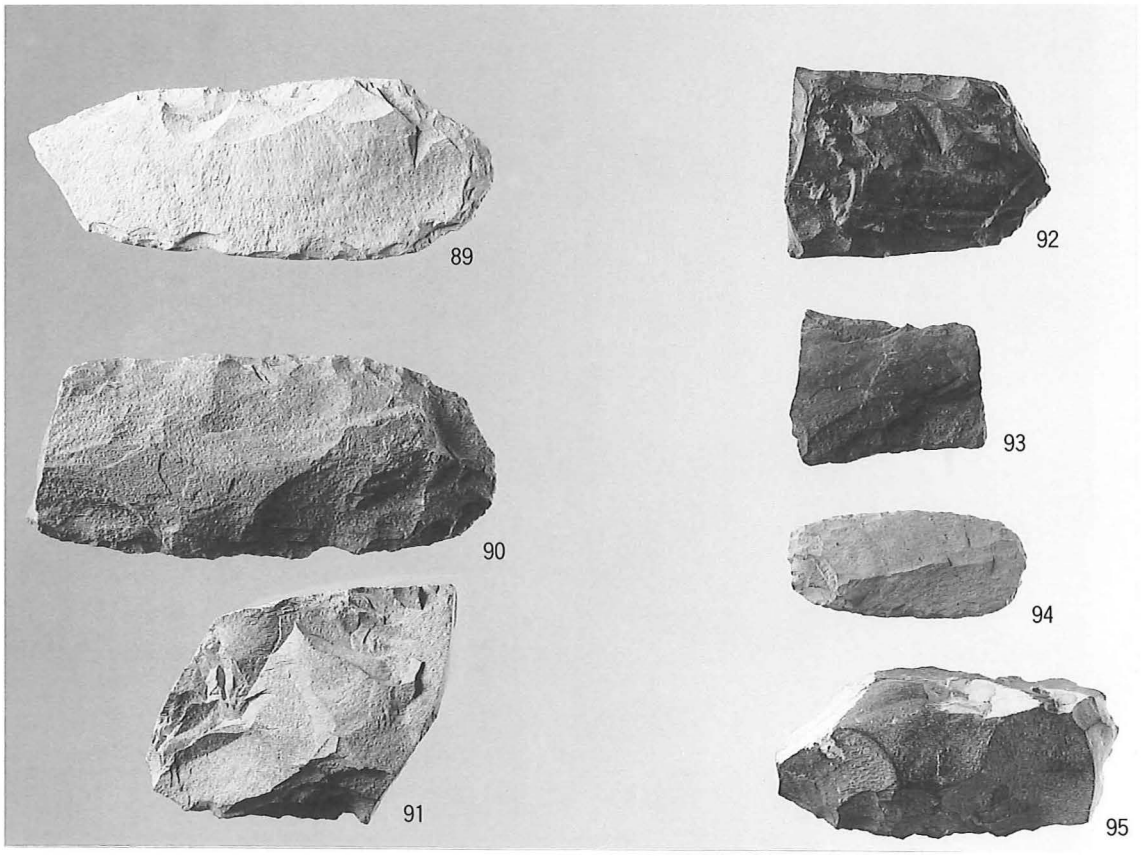




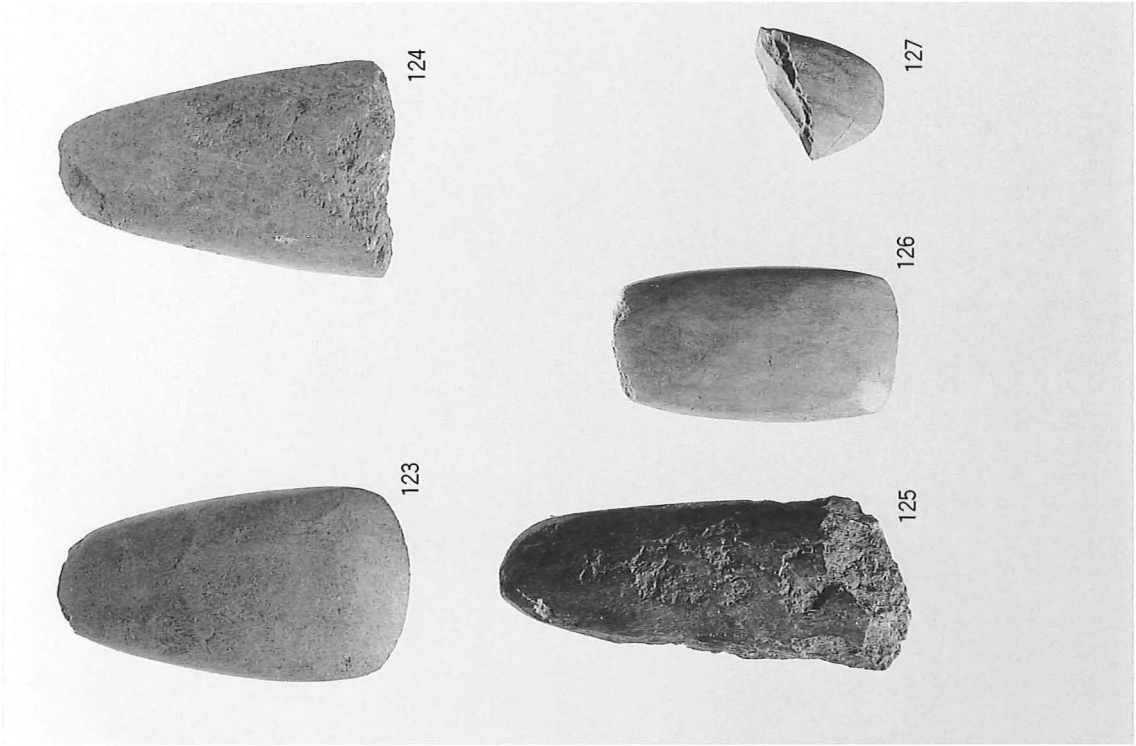
出土石器③

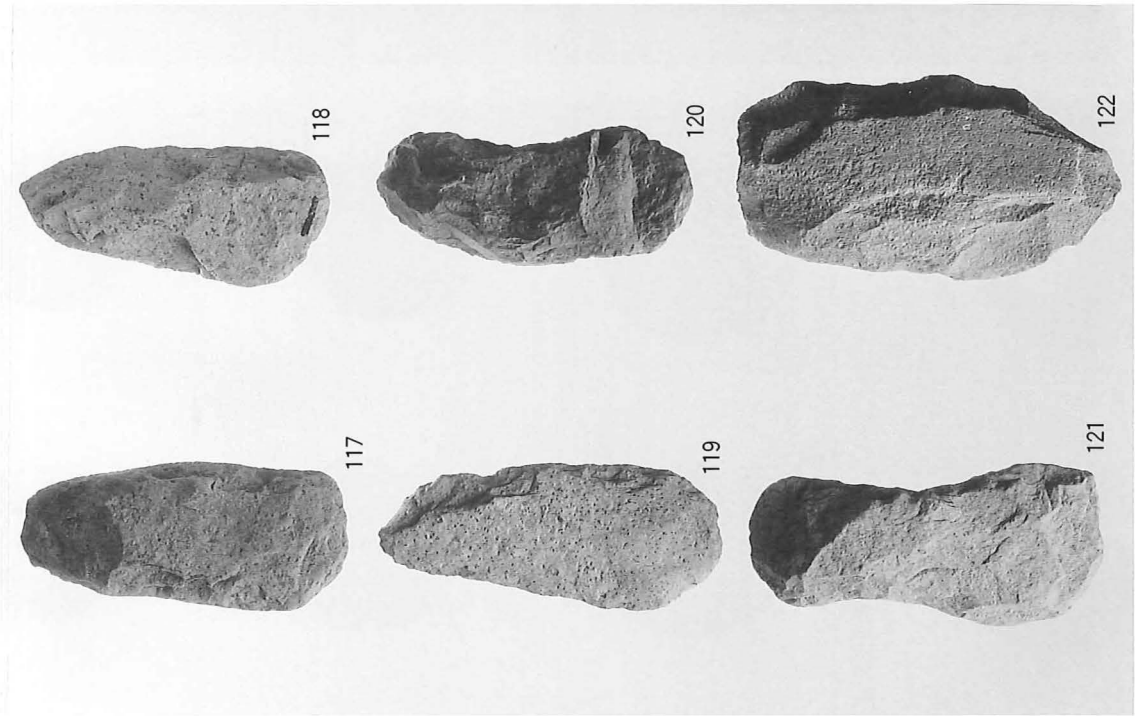
図版16





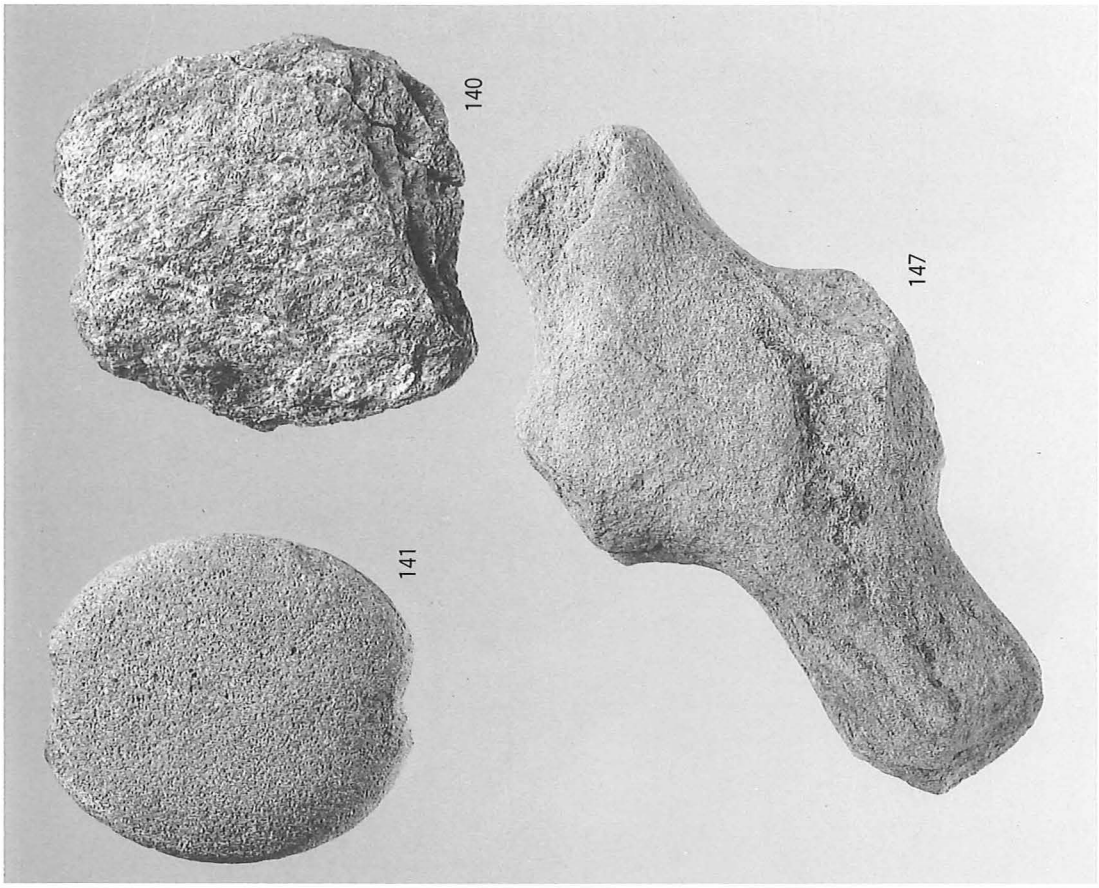
出土石器④

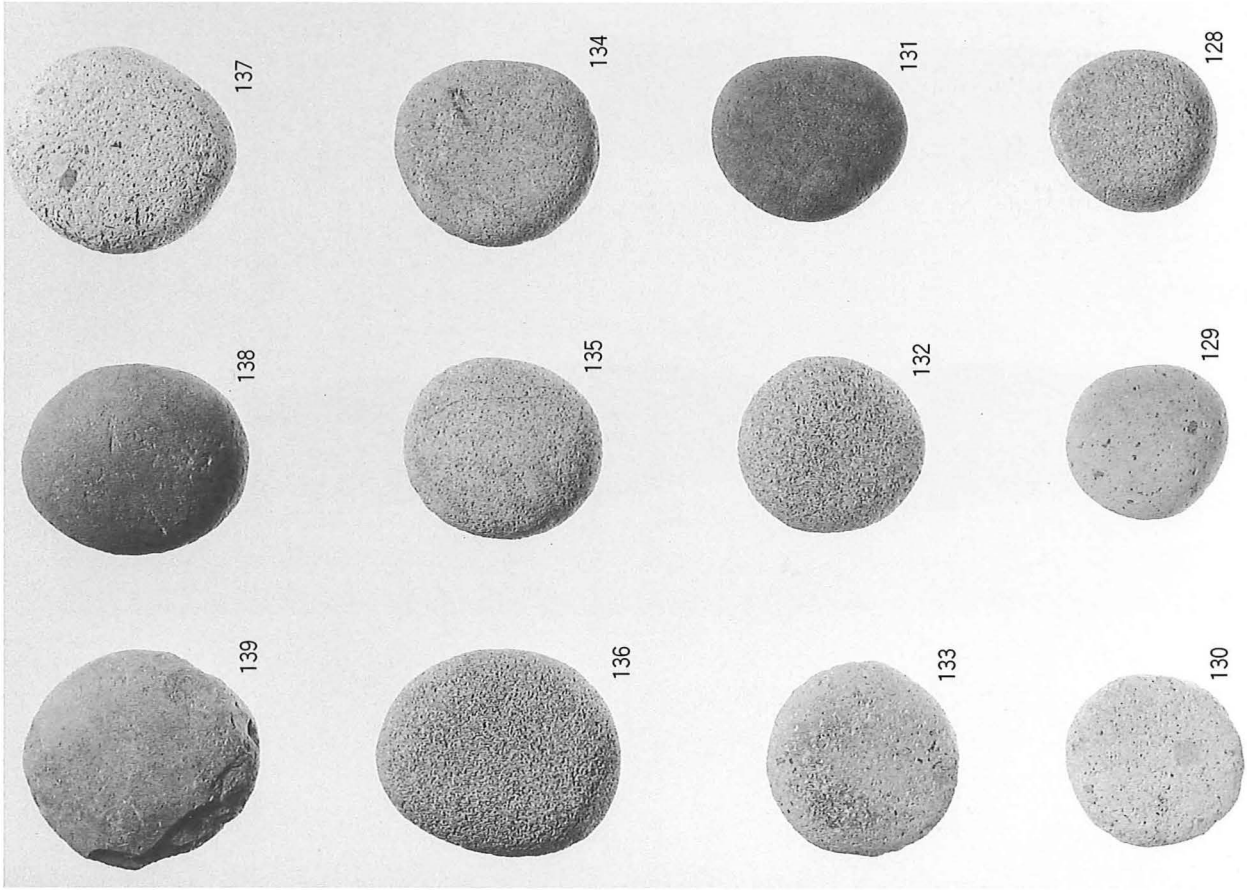




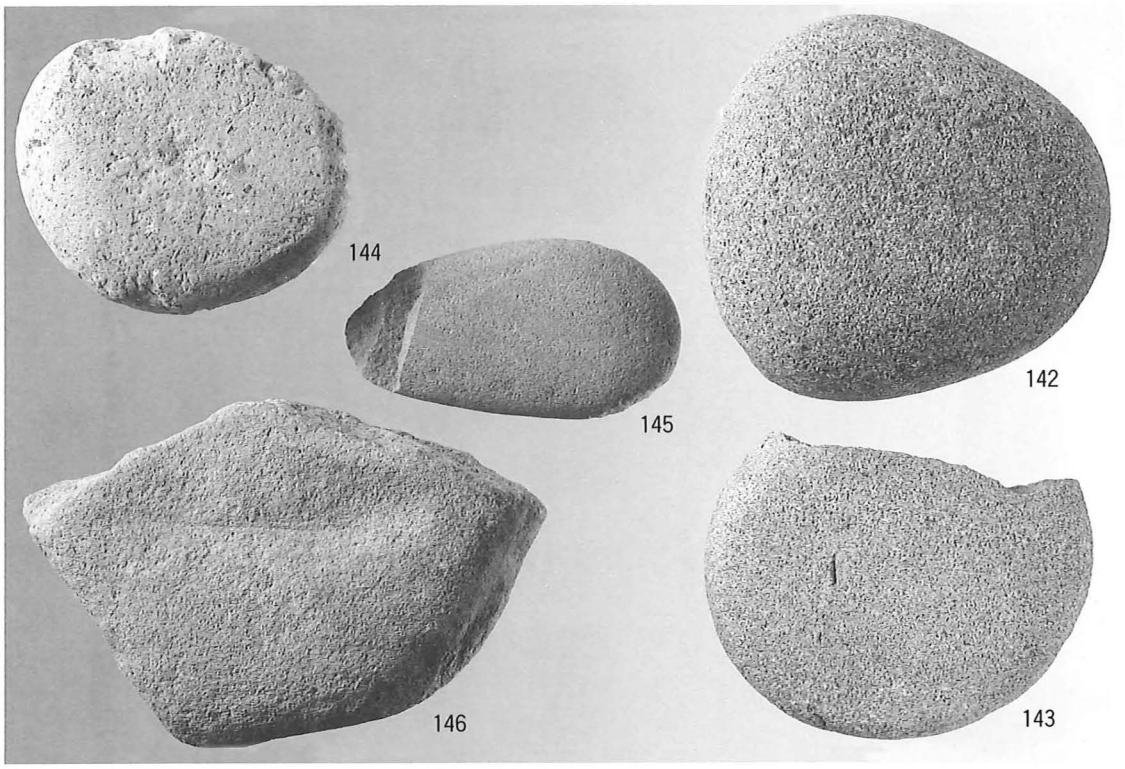
出土石器⑤

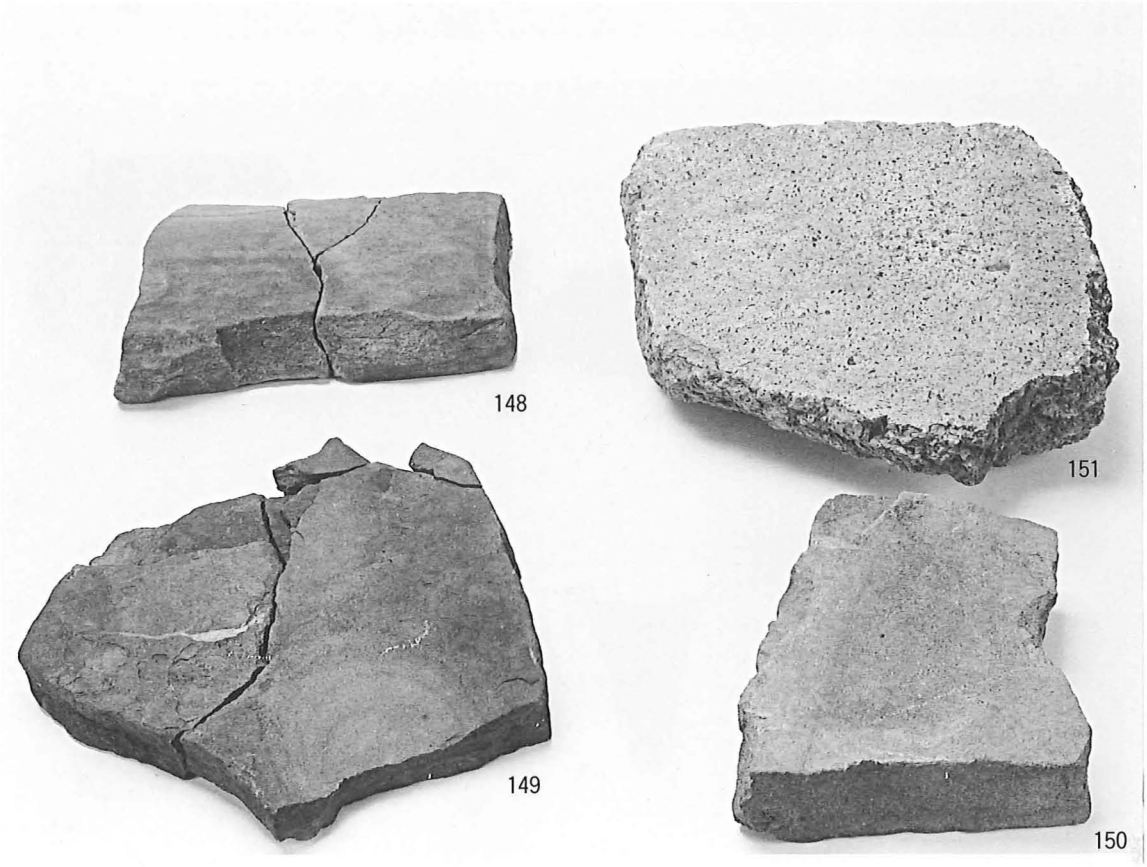
図版18





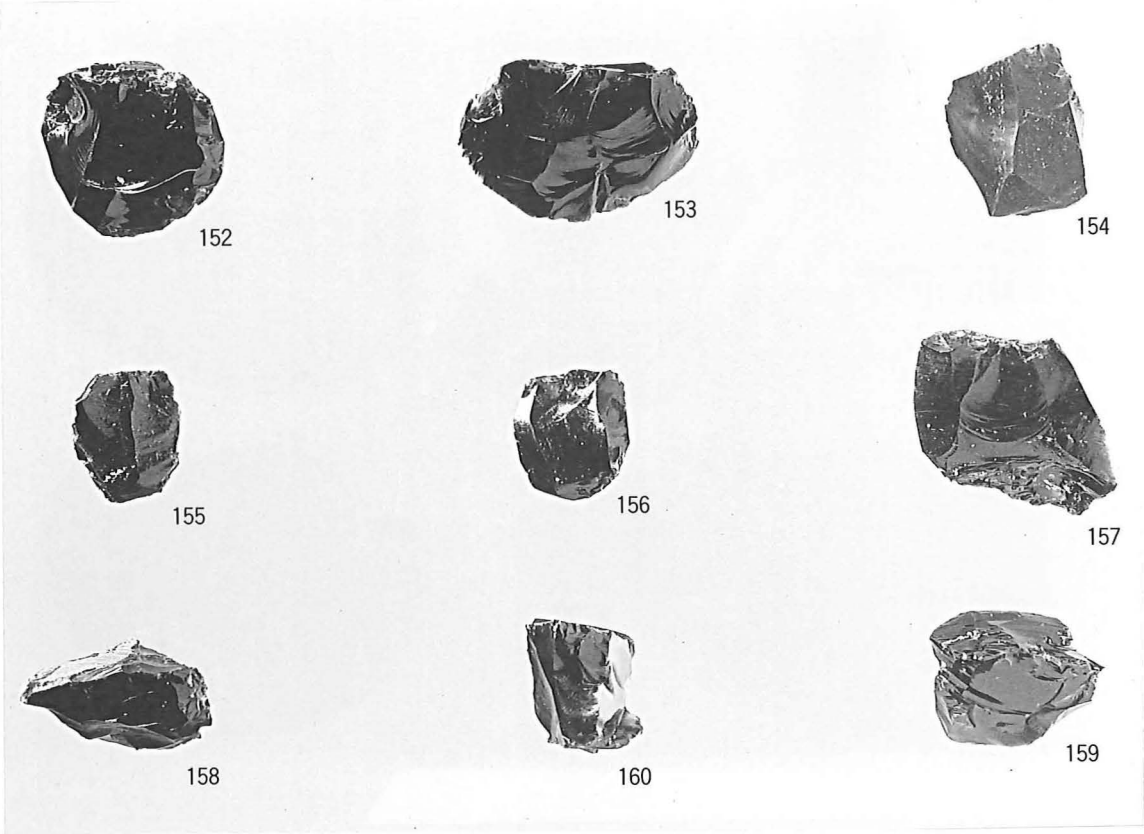
出土石器⑥

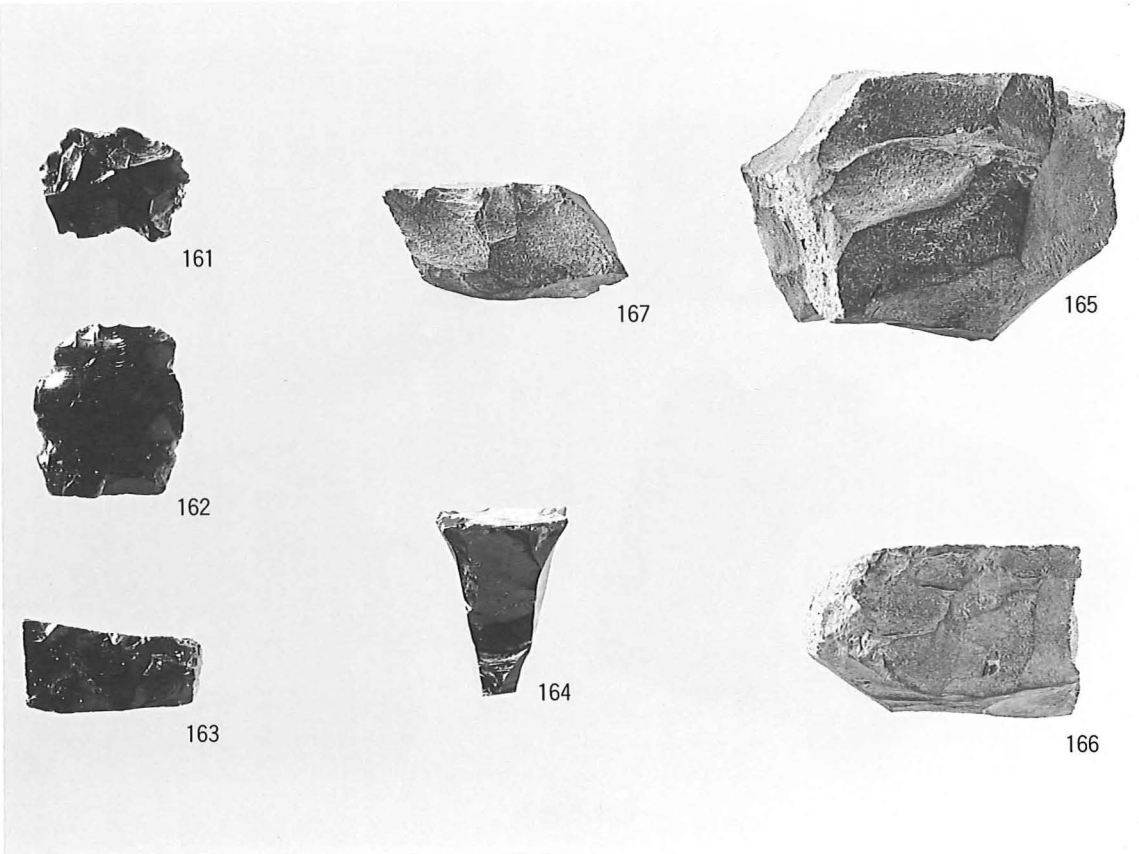




出土石器⑦

図版20





出土石器⑧

附篇：長崎県肥賀太郎遺跡における土器圧痕の検討

福 岡 市 教 育 委 員 会　山崎純男
福岡市埋蔵文化財センター　片多雅樹

1．はじめに

筆者等が土器についた植物種子等の圧痕研究を始めてから３年が過ぎた。契機は縄文農耕において，時期が決定できる確実な資料として土器についた種子圧痕に着目したからにほかならない。実際，種子圧痕を意識的に探索すると，一遺跡から数十例の圧痕資料を確認することができた。圧痕で確認した栽培植物にはイネ，オオムギ，アワ，ヒエ，ハトムギ，マメ類，シソ，エゴマ，ゴボウがあり，その他，カジノキ，イノコヅチ，キク類，かつて熊本県ワクド石遺跡で籾痕とされたワクド石タイプの種子圧痕やコクゾウムシ，コナラシギゾウムシないしはハイイロチョッキリの幼虫など雑草や昆虫類がある。これら土器に残された圧痕例を集めることによって，縄文時代の生業，特に農耕問題について，その実体に迫ることができると考えている。

ここで検討した圧痕資料は，長崎県島原市肥賀太郎遺跡の出土土器である。発掘担当者の中尾篤志氏から持ち込まれた圧痕資料は約100点ほどであったが，改めて実体顕微鏡で観察した結果，圧痕の可能性の高い31点の土器を選定した。これらの土器の圧痕についてレプリカを作成し，その後走査電子顕微鏡によって観察した。レプリカの作成，走査電子顕微鏡の観察は，以下の方法で実施した。①圧痕資料を超音波洗浄機により洗浄。②圧痕部にアクリル樹脂パラロイドＢ-72の５～10％溶液を塗布。③GE 東芝シリコーン TSE350と硬化剤 CE621を100：１の割合で混ぜたシリコーンを圧痕部に注射器で充塡。④シリコーンが硬化した後，レプリカを圧痕から取り出す。土器については最初に塗布したアクリル樹脂をアセトンでふき取る。⑤レプリカを走査電子顕微鏡で観察する。検眼に際しては対象をあらゆる角度から観察，倍率も15～1000倍の範囲で表面の組織を観察し，特徴的な部分について写真撮影を行う。⑥写真を元に同定を行う。圧痕の同定は圧痕の遺存状態に左右され，特徴的な部分が遺存しているとは限らず，きわめて困難である。同定については今後さらに検討を加えていくので，変更するものがあることを断っておく。

2．圧痕資料の観察

・資料１（遺物番号115・Fig. 1-1）

土器：粗製深鉢形土器の胴部破片。外面は幅1.2cm前後の板状工具による削り状の条痕を斜位と横位に施している。ススの付着が顕著である。内面はやや粗い横位のヘラナデ調整。胎土に石英・長石・赤色鉱物の砂粒を多く混入。焼成は良好。色調は外面が黒褐色，内面が黄褐色～黒灰色をなす。Ⅱ層出土。

圧痕：内面の左下の隅に近い部分に存在する。圧痕は胎土中に深く入り込み，表面に4.0mm×1.5mmの不整形の穴があいている。圧痕内側は圧痕主体の燃焼による二次加熱によってまだら状に黒変している。実体顕微鏡の観察では，頭部と前胸背板と上翅の境が節状に，また，全体に点刻列が観察でき，小さい昆虫の圧痕であることがわかった。圧痕のレプリカを作製し，走査電子顕微鏡で観察した。写

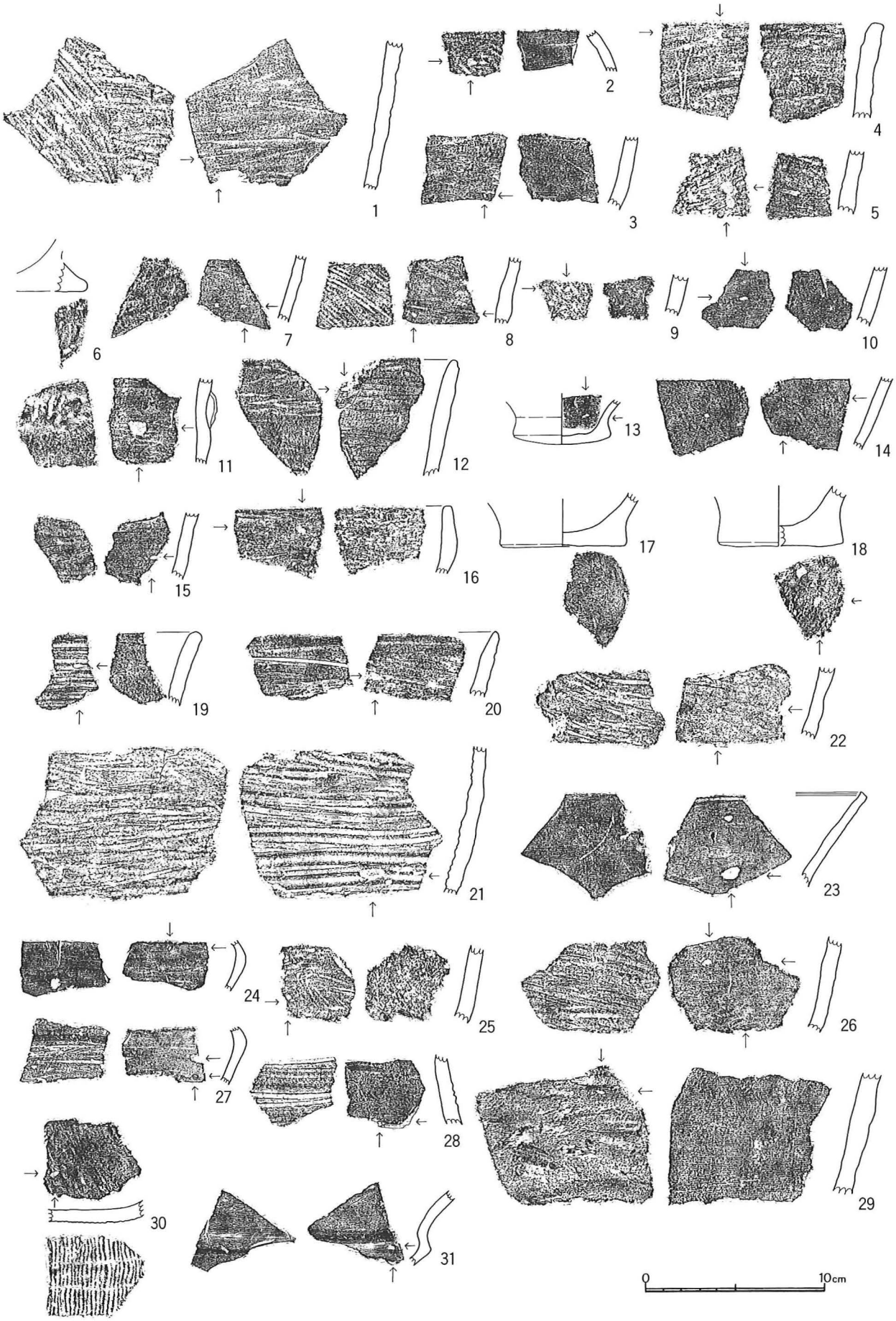
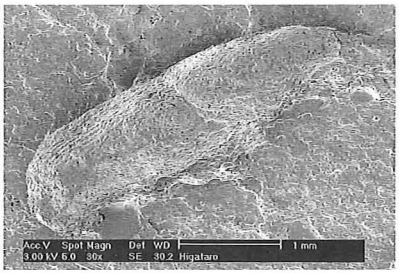
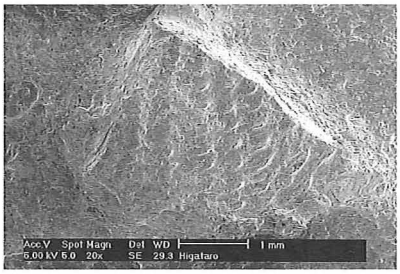
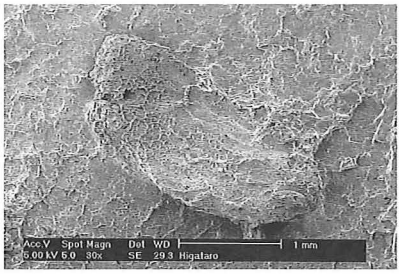
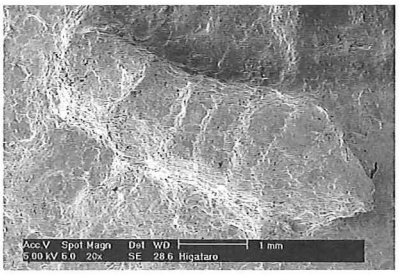


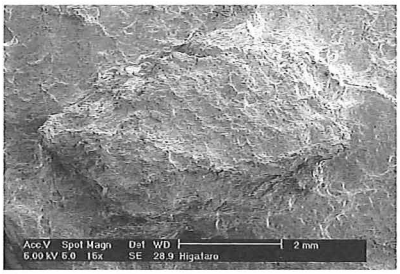
Fig. 1　肥賀太郎遺跡出土圧痕土器実測図（S＝1／3）

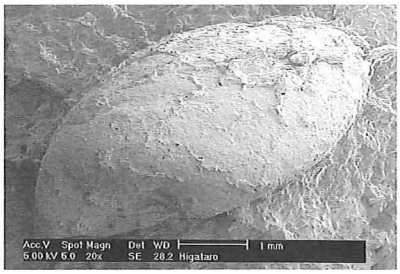

資料１　115-01

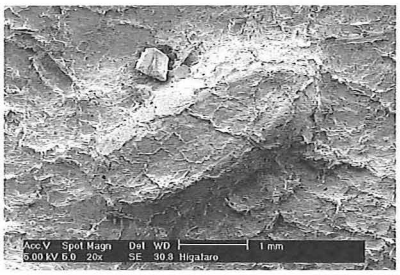

資料２　354-01

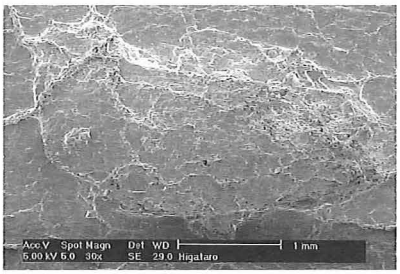

資料３　390-01

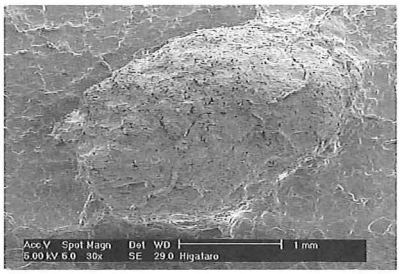

資料４　582-01

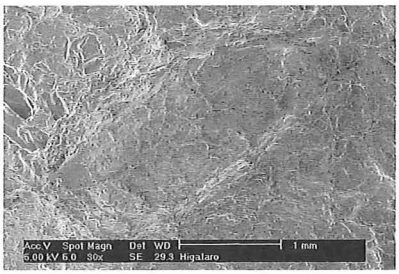

資料５－１　1748A-01

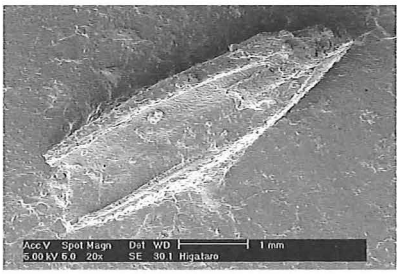

資料５－２　1748B-01

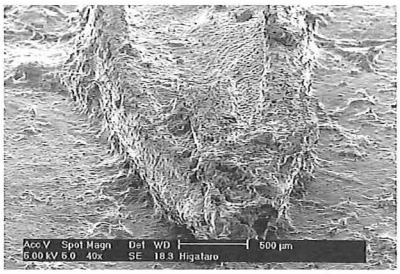

資料６　1879-01

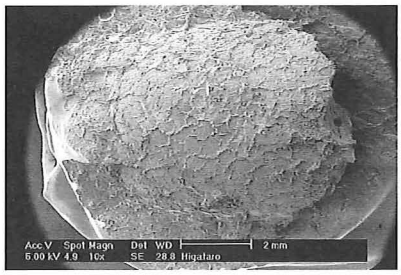

資料７　1919-01

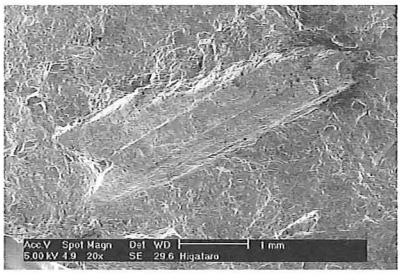

資料８　2604-01

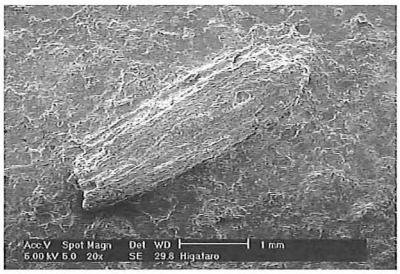

資料９　2630-01

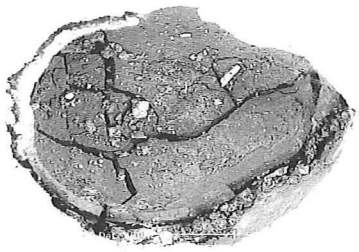

資料10－１　4791-01

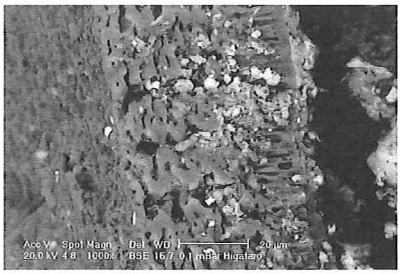

資料10－２　4791-09


資料11　5082-01


資料12　5714-01


資料13　5837-01


資料14－１　6538-07


資料14－２　6538-01

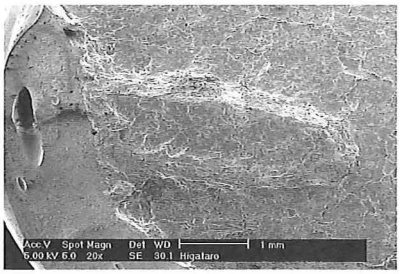

資料15　6966-01

Fig. 2　土器圧痕写真①

真はFig.2に示した。写真では吻と前・中・後肢の計6本を欠損しているが，頭部から尾節板まで体部の主要部分は良好な状態で遺存している。全身の形状や点刻列の状態，石の本遺跡や柊原貝塚例との比較検討からコクゾウムシと同定できる。吻の欠損部分を除いた現存長は3.5㎜を測る。吻は圧痕としては残存しているものと考えられるが，中に土が詰まっているなどの理由でレプリカとして取り出せないものと考えられる。前・中・後肢の欠損は他遺跡と共通した現象である。後章において検討を加えることにする。

・資料2（遺物番号354・Fig.1-2）

土器：精製浅鉢形土器の胴部小破片。全体に摩滅している。上縁は粘土接合部で擬口縁をなす。外面はスリップが剥落し，下地の調整である斜位の貝殻条痕が観察できる。内面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整。粘土接合部が細かい沈線として残存している。胎土には細かい砂粒を混入しているが，精製され良質である。焼成は良好。色調は外面が赤褐色，内面は黄褐色～黒褐色をなす。Ⅱ層出土。

圧痕：外面の中央部よりやや下方に存在する。圧痕は不整台形をしたやや大型の圧痕である。実体顕微鏡の観察の結果，組織文様が明瞭に残っている。種子圧痕等の圧痕主体の焼成による二次的な変色は認められない。貝殻破片の圧痕とみられる。Fig.2に走査電子顕微鏡の写真を示した。これからも貝殻圧痕であることは明瞭であるが，種の同定はできない。

・資料3（遺物番号390・Fig.1-3）

土器：粗製深鉢形土器の胴部小破片。外面は横位のケズリ状のヘラナデ調整。ススの付着が顕著である。内面は横位のヘラナデ調整。胎土には石英・長石等の細かい砂粒を混入するが精製され良質。焼成は良く，色調は外面が黄褐色，内面は黒灰色をなす。Ⅱ層出土。

圧痕：外面の右下隅に存在する。小さな楕円形（2.0㎜～1.1㎜）の圧痕である。二次加熱等による変色はみられない。Fig.2に走査電子顕微鏡写真を示した。圧痕はやや曲がり変形しているとみられるが，組織等は観察できない。形状等からも種子とは認められない。

・資料4（遺物番号582・Fig.1-4）

土器：粗製深鉢形土器の口縁部破片である。内外面ともに横位のヘラ削り状の調整。口縁部の内外面の一部に黒斑がある。胎土には石英・長石・雲母の砂粒を混入するが良質。焼成は良く，色調は内外面ともに明るい黄褐色をなす。Ⅱ層出土。

圧痕：外面の口縁直下に存在する圧痕である。圧痕は胎土中に半分ほど入り込んでいる。開口部は5.8㎜×2.2㎜の長楕円形をなし，圧痕内部は他の圧痕のような変色はなく，土器の色調と大差ない。最初から開口していたと考えられる。実体顕微鏡の観察では，長軸に直行する節状の線がいくつも確認でき，昆虫の幼虫の可能性が読みとれる。レプリカの走査電子顕微鏡写真はFig.2に示した。この写真からも紛れもなく昆虫の幼虫であることが判明するが，全形を保ったものではなく途中から切れている。頭部と考えられる部分はやや幅が広くなり三角形をなす。節は6カ所にみられる。長さ5.1㎜，幅1.42㎜～2.02㎜をはかる。成虫である昆虫の特定はできない。

・資料5（遺物番号1748・Fig.1-5）

土器：粗製深鉢形土器の胴部小破片。外面は横位～斜位の貝殻条痕，内面は横位のヘラナデ調整である。胎土にはやや大きめの砂粒を混入しやや質が悪い。焼成はやや不良。色調は外面が黄褐色，内面が黄灰色をなす。外面にススが付着する。Ⅱ層出土。

圧痕：外面のやや右に偏った中央部に大型の圧痕があるが，周辺の土器の表面が剥落しているので見かけはさらに大きい圧痕にみえる。圧痕内面には色調の変化は認められない。実体顕微鏡では小型のドングリ類の圧痕のように見えるが特定できない。レプリカの走査電子顕微鏡写真はFig.2に示した。長さ5.18㎜，幅は斜に入り込んでいるため正確でないが2.68㎜以上。表面の組織等観察できないので断定できないが，大型の種子の可能性が強い。

・資料6（遺物番号1879・Fig.1-6）

土器：深鉢形土器の底部小破片。底部端が大きく外側に張り出した部分が遺存している。外面はヘラ削り状の調整。胎土には細かい砂粒を混入するが良質。焼成は良く，色調は黄褐色をなす。Ⅱ層出土。

圧痕：底部端にある圧痕である。圧痕としては比較的浅い。圧痕主体の燃焼による二次的加熱のため黒褐色に変色している。実体顕微鏡では先端がやや尖り，長軸の中央に隆線が走り，ワクド石タイプの圧痕に類似するものであることが確認できた。レプリカの走査電子顕微鏡写真はFig.2に示した。長さ3.6㎜，幅1.8㎜。先端部が尖り，体部は細長く，基部は丸みをもつ種子で，中央に長軸に沿って沈線が走り，両側は内側に向かって傾斜する。一見，ワクド石タイプに類似するのは先に指摘した通りであるが，形態的に若干の差異がある。カモジグサ属に極めて近い種子である。

・資料7（遺物番号1919・Fig.1-7）

土器：浅鉢形土器の胴部小破片。外面は横位のヘラ削り状の調整後，荒い横位のヘラナデ調整を加えている。ススの付着が顕著である。内面は横位の丁寧なヘラナデ調整を加えている。胎土には石英等の細かい砂粒を多量に混入しているが精製され良質。焼成は堅緻，色調は外面が黄褐色，内面は黒褐色をなす。器壁は5㎜前後で薄い。Ⅱ層出土。

圧痕：内面の右下方に偏って存在する。圧痕は比較的浅い。圧痕内面は土器表面と大差ない。実体顕微鏡の観察では圧痕の主軸に沿って走るスジが数条観察できる。また，一部に炭化物が付着しているが，圧痕主体のものかどうかは不明。Fig. 2は走査電子顕微鏡写真である。形が不整形で，主軸に沿って走るスジも土器表面の状況と大差はなく，種子等の圧痕ではないとみられる。

・資料8（遺物番号2604・Fig.1-8）

土器：粗製深鉢形土器の胴部小破片。外面に斜位の貝殻条痕を施し，内面は横位のヘラナデ調整。器面の凹凸が著しい。胎土には石英・長石・黒雲母の細かい砂粒を混入しているが精製され良質。焼成は良く，色調は外面は黄褐色，内面が灰白色をなす。Ⅱ層出土。

圧痕：内面の左下隅に近い部分に存在する。圧痕内面は圧痕主体の燃焼による二次加熱によって黒変している。レプリカの走査電子顕微鏡写真はFig.2に示した。長さ2.9㎜，幅1.8㎜の不整楕円形をなす。表面の凹凸が大きく，拡大しても組織の観察はできない。種子圧痕とは考えがたい。

・資料9（遺物番号2630・Fig.1-9）

土器：粗製深鉢形土器の胴部小破片。全体に摩滅している。外面には斜位の貝殻条痕を施し，内面はヘラナデ調整とみられるが定かでない。胎土には多量の砂粒を混入しやや不良。焼成はあまく，色調は外面が赤褐色，内面は白黄色をなす。Ⅱ層出土。

圧痕：外面の上端中央部に存在する。圧痕の内面は圧痕主体の燃焼による二次加熱により黒褐色に変色している。実体顕微鏡では，長軸に平行して側辺に条線が観察でき，また，底面が丸くなっていることから，種子圧痕の可能性が強いと考えられた。レプリカの走査電子顕微鏡の写真はFig.2に示し

た。長さ2.8㎜，幅1.4㎜，芒と考えられる部分が尖り，基部は平坦，全形は丸みをもった楕円形状になる。組織等が明瞭でないため確実性を欠くがイネ科植物の穎果の可能性が強い。

・資料10（遺物番号4791・Fig. 1-10）

土器：精製浅鉢形土器の胴部破片。内外面ともに横位の丁寧なヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の細かい砂粒を大量に混入しているが，精製され極めて良質である。焼成は堅緻，色調は内外面ともに黒色をなす。いわゆる黒色磨研土器である。器壁は６㎜前後で薄い。Ⅳ層出土。

圧痕：外面の中央部にある圧痕である。胎土中に深く入り込み，遺存状態は極めて良好である。圧痕主体の燃焼による二次加熱によって黒変し固く締まっているが，内外面ともに黒色であるため，二次加熱の状況は明らかでない。実体顕微鏡では，圧痕が全形を保たず，半折していることがわかる。圧痕の周囲に溝が巡り，基盤側の中央にも浅い直線的な溝があることが確認できる。レプリカの走査電子顕微鏡写真はFig.2に示した。穎果の２/３を残す資料で，芒を含んだ先端部分を欠損する。遺存状態は極めて良好で，穎果の組織の状態も完全に観察することができる。圧痕は内穎側が下になっており，小軸突起も完全な形で遺存する。小軸突起は長さ1.1㎜，径0.4㎜。内穎部分には小さな顆粒状の突起列がやや不規則に並び，外穎側には内穎と同様の小さな顆粒状の突起列があり，その間に稃毛がトゲ状にのびている。現存長4.9㎜，幅1.6㎜を測る。カモジグサ属の穎果の圧痕である。

・資料11（遺物番号5082・Fig. 1-11）

土器：粗製深鉢形土器の頸部破片。頸部に長楕円形の粘土帯の貼り付けがあり，刻目が施されている。頸部はわずかに屈曲し，口縁に向かってわずかに外反する。外面は横位のヘラナデ調整，ススの付着が顕著である。内面は横位のヘラ削り状の調整の上に研磨を加えているが，横位の条線が残る。胎土には砂粒を混入，焼成は良好。色調は外面が黒褐色，内面が赤褐色をなす。Ⅳ層出土。

圧痕：内面の中央部にある大型の圧痕である。圧痕内面には色の変化はない。レプリカの走査電子顕微鏡の写真はFig.2に示した。ドングリ類等の大型種子の圧痕と考えられるが，判断する材料はない。レプリカでも完全な形を示していない。

・資料12（遺物番号5714・Fig. 1-12）

土器：粗製深鉢形土器の口縁部破片。口縁は直線的に外反する。外面は横位のヘラ削り状の調整の上に横位のヘラナデを加えている。内面は横位のヘラ研磨で仕上げている。胎土には砂粒を混入しているが良質。焼成は良好，色調は内外面とも黄褐色で内面に黒斑がみられる。Ⅲ層出土。

圧痕：内面の左上方隅の割れ口の断面に存在する。圧痕主体の燃焼による二次加熱によって圧痕内側とその周囲の胎土１㎜が黒変している。実体顕微鏡の観察では繊維質のスジが長軸方向に走っているのが判明した。木片である可能性が強かったが，レプリカを作成し，走査電子顕微鏡による観察を行った。Fig.2に写真を示した。形状が不整形であり，種子ではなく実体顕微鏡で観察した通り木片であると考えられる。

・資料13（遺物番号5837・Fig. 1-13）

土器：精製浅鉢形土器の底部破片。底部径5.4㎝，平底であるが丸みを持ち安定が悪いので蓋になる可能性もある。体部は底部から直線的に立ち上がり，１㎝くらいで大きく外傾しながら立ち上がる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精製され極めて良質。焼成は堅緻，色調は外面が黒褐色，内面が黄褐色をなす。器壁は薄く，0.3㎝前後である。Ⅲ層出土。

圧痕：内面の胴下半部に存在する。圧痕内面は圧痕主体の燃焼による二次焼成によって黒褐色に変色している。実体顕微鏡では長軸に平行した条線が無数に観察され，木片の圧痕かと推測された。レプリカの走査電子顕微鏡写真はFig.2に示した。同写真でも木片の圧痕の可能性が強い。

・資料14（遺物番号6538・Fig.1-14）

土器：精製浅鉢形土器の胴部破片。内外面ともに斜位の丁寧なヘラ研磨調整。胎土にはやや大きい砂粒を混入しているが良質。焼成は堅緻，色調は外面は黒褐色，内面は黄褐色をなす。器壁は薄く，4㎜前後である。Ⅲ層出土。

圧痕：外面に2カ所，内面の左上隅近くに1カ所の圧痕が存在する。3カ所ともに胎土中に深く入り込み，内面は圧痕主体の燃焼による二次加熱によって黒変している。実体顕微鏡の観察の結果，表面の圧痕はいずれも木片によるものと考えられた。内面の圧痕は保存状態が極めて良好であり，種子の果皮が炭化して残存している。走査電子顕微鏡写真はFig.2に示した。資料14-1は種子の全体写真，資料14-2は果皮断面をさらに拡大した写真である。福岡市周船寺遺跡出土の土器内にある種子と比較し，本資料はシソ・エゴマと同定できる。なお，実体顕微鏡で果皮のない圧痕部分を観察すると明瞭な網目文様を確認することができる。長径2.0㎜，短径1.4㎜を測る。

・資料15（遺物番号6966・Fig.1-15）

土器：粗製深鉢形土器の胴部小破片。外面は横位のヘラナデ調整，内面は横位の丁寧なヘラ研磨調整。胎土には石英・長石・黒雲母の砂粒を混入するが良質。焼成は良好，色調は外赤褐色，内面は黒灰色をなす。Ⅲ層出土。

圧痕：内面の右端中央部にある。一部，土器の割れ口にあたっているため一部を欠失している。平面形は長楕円形をなすと考えられる。圧痕は比較的浅いが遺存状態は良好。圧痕主体の焼成による二次加熱のため黒褐色に変色している。実体顕微鏡による観察では圧痕周囲に浅い溝が巡り，中央部に浅い溝が走り，ワクド石タイプの圧痕とみられる。レプリカの走査電子顕微鏡写真をFig.2に示した。レプリカでは明瞭でないが，実体顕微鏡の観察を加味するとワクド石タイプの圧痕と判断して良いと考えられる。長さ3.9㎜＋α，幅1.6㎜を測る。

・資料16（遺物番号7129・Fig.1-16）

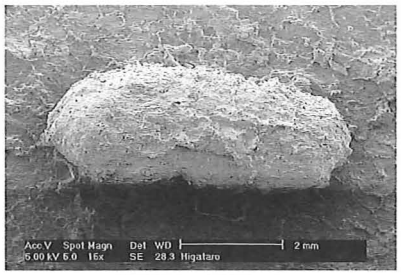
土器：粗製浅鉢の口縁部。内外面ともに横位の丁寧なヘラ削り状の調整。胎土には多量の石英・長石の砂粒を混入している。焼成はやや不良，色調は外面が黄褐色，内面が黒色をなす。Ⅳ層出土。

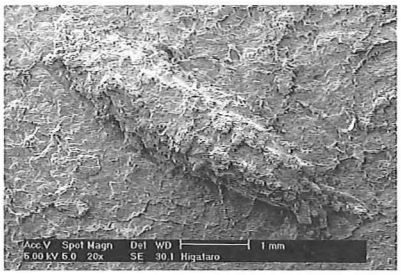
圧痕：外面の右端の口縁直下にある。圧痕は胎土の中に深く入っている。圧痕内面は圧痕主体の燃焼による二次加熱によって黒く変色している。実体顕微鏡の観察では内面の凹凸が著しく，種子として判断することはできなかった。レプリカの走査電子顕微鏡の写真はFig.3に示した。圧痕は長さ5.9㎜，幅2.3㎜，丸みをもった長楕円形をなすが，表面の凹凸が著しく，また，組織も観察できないので種子の圧痕とはみれないものである。

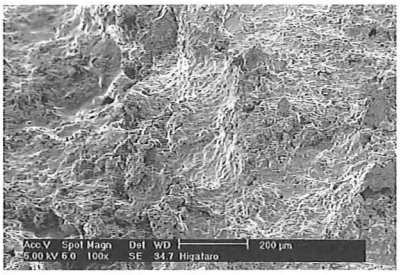
・資料17（遺物番号7432・Fig.1—17）

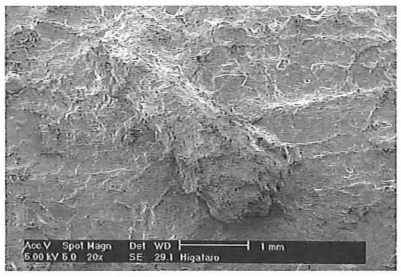
土器：深鉢形土器の底部破片。平底で底部復元径6.9㎝，底部端の張り出しは小さい。外面は横ナデ調整。内面には部分的に貝殻条痕が残る。外面にはススが付着する。胎土には多量の砂粒が混入される。焼成はややあまい。色調は外面が黒褐色，内面は赤褐色をなす。Ⅲ層出土。

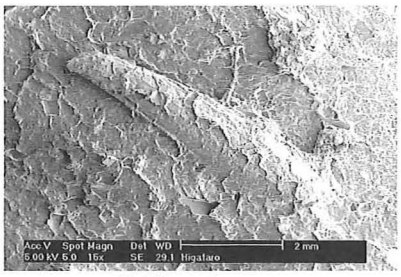
圧痕：底部端に近いところに存在する圧痕である。全形は細長い紡錘形をなす。他の圧痕に比較し浅

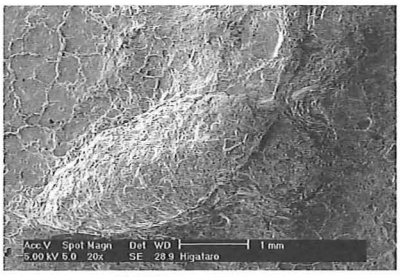

資料16　7129-01

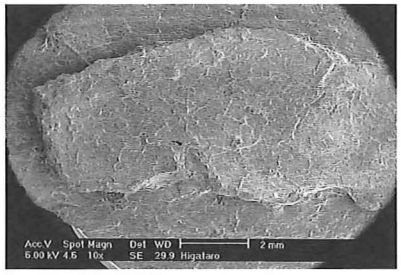

資料17-1　7432-01

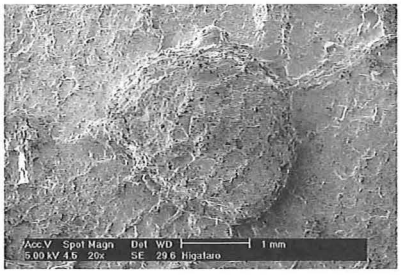

資料17-2　7432-08

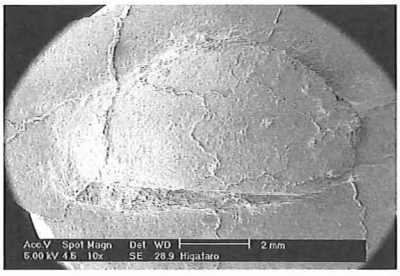

資料18　7767-01

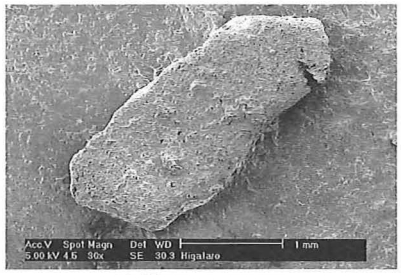

資料19　7836-01

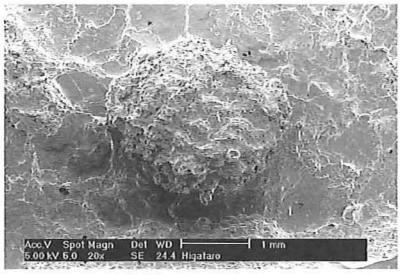

資料20　7922-01

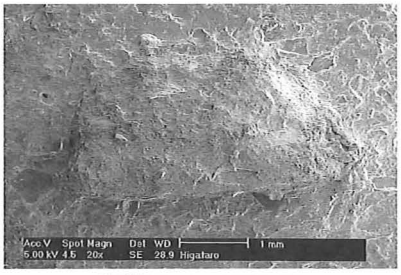

資料21　7935-01

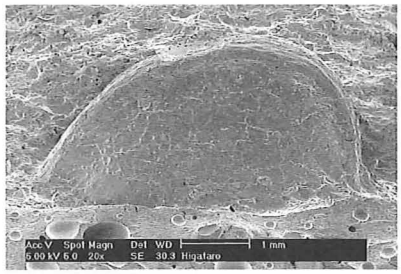

資料22　7942-01

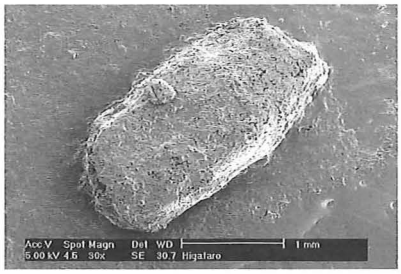

資料23　8133-01


資料24　9277-01

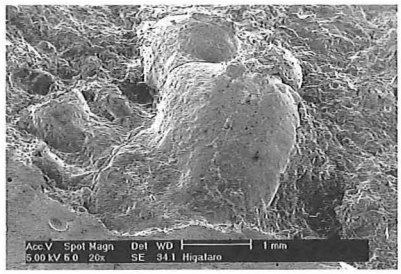

資料25　9485-01

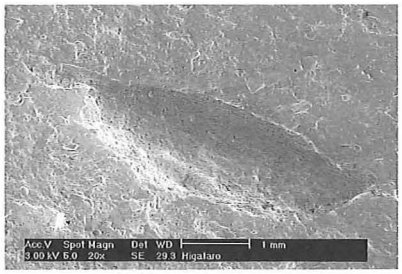

資料26-1　9621-01


資料26-2　9621B-02


資料27-1　9790A-01

資料27-2　9790B-01


資料28　10145-07


資料29　10381-03

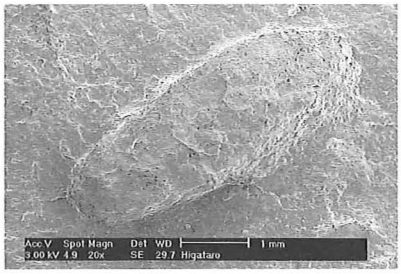

資料30　10546-01

Fig. 3　土器圧痕写真②

い。圧痕内面も二次加熱等による色調の変化はない。実体顕微鏡の観察では，内面は小さな剥離が多く，凹凸が著しい。側面の一部に圧痕の元来の面が残っているように見える。レプリカの走査電子顕微鏡の写真はFig.3に示した。資料17-1は全形長さ4.8㎜，幅1.3㎜の細長い紡錘形をなす。表面の大部分は器面の剥離のため不整形の突起が付着したように見えるが，部分的に表面が遺存している部分がある。資料17-2は遺存状態が良好な部分である。顆粒状の突起列が観察できる。形状や突起列からするとイネに近い種子であることがわかる。今後さらに検討を加え判断したいと考えている。

・資料18（遺物番号7767・Fig.1-20）

土器：粗製深鉢形土器の口縁部破片。外面は横位のヘラ削り状調整の上に横位のヘラ研磨調整を加える。一部にススが付着する。内面は横位のヘラ削り状の調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入するが良質，焼成は良好。色調は外面が赤褐色，内面が黄褐色をなす。Ⅲ層出土。

圧痕：内面の左下隅近くに存在する圧痕である。圧痕は胎土中に深く入り込み，内面は圧痕主体の燃焼による二次加熱によって黒く変色している。実体顕微鏡では内面には凹凸が顕著で種子圧痕とは考えられなかったが，長軸に沿って条線が観察できたため，レプリカを作成した。レプリカの走査電子顕微鏡写真はFig.3に示したが，この観察でも種子圧痕ではなく，木片等の圧痕と考えられた。

・資料19（遺物番号7836・Fig.1-19）

土器：粗製深鉢形土器の口縁部小破片。外面は横位の貝殻条痕調整，一部にススが付着する。内面は横位のヘラナデ調整。胎土には多量の石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好，色調は外面が黄赤色，内面が黒色をなす。Ⅳ層出土。

圧痕：外面の右端中央部に存在する。圧痕は比較的浅い。周辺部が黒褐色に変色しているが，圧痕主体の燃焼による二次加熱によるものかどうかは不明。実体顕微鏡による観察では圧痕の長軸の側辺部の両側に段状の条線が確認できる。レプリカの走査電子顕微鏡の写真はFig.3に示した。全体形は下ぶくれ状の細長い円柱状をなし，両側に小さな段がつく。拡大（200倍）では長軸に平行して条線が走るが明瞭でない。種子圧痕であることは疑いないが，種の同定はできない。長さ6.0㎜，幅0.5㎜～1.4㎜を測る。

・資料20（遺物番号7922・Fig.1-18）

土器：深鉢形土器の底部破片。底部復元径6.8㎝，底部が円筒状に高くなり，体部は外傾しながら立ち上がる。外面は横位のヘラナデ調整，胎土には砂粒を混入し，やや不良。焼成はややあまい。色調は内外面ともに赤褐色をなす。Ⅲ層出土。

圧痕：底部の中央部近くにある圧痕である。胎土中に深く入り込んでいるが，圧痕主体の燃焼はなかったとみられ，圧痕内面の変色は認められない。実体顕微鏡の観察では，顆粒状突起は確認できないが，形態的には籾（？）に近い形状をしている。他の判別の不能な圧痕と重なり合っているため複雑である。レプリカの走査電子顕微鏡写真はFig.3に示した。長さ4.0㎜，幅1.6㎜の紡錘形をした圧痕である。表面は土器のヒビ等によって凹凸がひどく，一見網目状組織痕に見えるが判断できない。種子であることは判別できるが，種等については不明。

・資料21（遺物番号7935・Fig.1-21）

土器：大型の粗製深鉢形土器の胴部破片。外面は横位の貝殻条痕を施した後，ヘラによる条線を加える。内面は横位の貝殻条痕調整。胎土には石英・長石の砂粒を多く混入するが，中にはやや大きめの

砂粒も含んでいる。焼成は良好。色調は外面が黄～黒褐色，内面は黒色をなす。Ⅳ層出土。

圧痕：内面の下隅近くに存在する大型の種子圧痕。ポジティブな圧痕である。実体顕微鏡の観察では，長軸に平行して走る条線が確認できる。レプリカの走査電子顕微鏡写真はFig.3に示した。ポジティブな圧痕であるため，レプリカは表皮の部分の内側にあたると考えられる。大きさや条線の状態からすればドングリ類の圧痕と考えられる。

・資料22（遺物番号7942・Fig.1-22）

土器：粗製深鉢形土器の胴部破片。外面は横位～斜位の貝殻条痕による調整。内面は横位のヘラ削り状の調整，炭化物が付着している。胎土にはやや大きめの砂粒を混入している。焼成は良好，色調は外面が黄褐色，内面は黄～黒褐色をなす。Ⅳ層出土

圧痕：内面のやや左に偏った中央部（圧痕１）とその下位の端部（圧痕２）の２カ所に存在する。共に胎土に深く入り込んでいるが，最初から開孔していたとみられる。圧痕１は3.2㎜×2.8㎜の楕円形の穴があいている。内面には圧痕主体の燃焼による二次加熱によって褐色に変色しているが，加熱は低かったとみられる。実体顕微鏡の観察では内側に楕円押型文様の粒が全面にみられ，表面に円形の凹みを持つ種子であると判断できた。また，圧痕内面には炭化物の付着がみられるが，この炭化物は圧痕主体に由来するものではなく，後の使用によって付着したものとみられる。圧痕２は圧痕主体の燃焼による二次加熱によって灰色に変色している。実体顕微鏡の観察では特徴がなく，種子であるか否かは判別できない。レプリカの走査電子顕微鏡の写真はFig.3に示した。圧痕１は実体顕微鏡で観察したように，表面に楕円形の凹みが全面にある種子と考えられる。長さ2.8㎜，幅2.4㎜の楕円形をなす。圧痕２は種子であるか否かは判別できない。

・資料23（遺物番号8133・Fig.1-23）

土器：精製浅鉢形土器の口縁部破片。口縁部は大きく外反する。口縁端部は平坦に仕上げ，口縁直下の内側に細かい沈線一条を巡らす。内外面共に横位の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精製され極めて良質である。焼成は堅緻，色調は内外面共に黒色～黒灰色をなす。Ⅲ層出土。

圧痕：内面の下半中央部に存在する大型の圧痕である。内面は圧痕主体の燃焼による二次加熱によって黒変するが，圧痕中央部が顕著で，周辺になるにつれて色が薄くなる。圧痕の平面形は隅丸の三角形をなす。レプリカの走査電子顕微鏡写真はFig.3に示した。表面には長軸に沿って細かい条線がみられるが，ほかに特徴はない。ドングリ類の部分的な圧痕とみられる。長さ8.8㎜，幅4.4㎜を測る。

・資料24（遺物番号9277・Fig.1-24）

土器：精製浅鉢形土器の肩部破片。肩部は丸みをもって胴下半部に移行する。内外面共に横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精製され極めて良質。焼成は堅緻。色調は内外面共に黒色をなす。Ⅲ層出土。

圧痕：内面の中央部端にある圧痕である。圧痕内部には変色はみられない。実体顕微鏡の観察では面が平滑で，形態的に種子に近いと考えたが，レプリカの走査電子顕微鏡の観察では，種子にある組織が確認できず，また，形態的にもいびつであることから種子ではないと考えられるが，何であるかは不明。

・資料25（遺物番号9485・Fig.1-25）

土器：粗製深鉢形土器の胴部破片。外面は条痕状の痕跡があるが詳細は不明。ススが付着する。内面は保存状態が悪く詳細は不明。胎土には細かい砂粒を混入，焼成はややあまい。色調は外面が赤褐色，

内面が黄褐色をなす。Ⅲ層出土。

圧痕：外面の左端下方に存在する。胎土に深く入り込んでいる。圧痕内面には色調の変化はない。実体顕微鏡の観察では内面に円形の突起が数多く確認できる。走査電子顕微鏡写真はFig.3に示した。全体に遺存状況が悪く，鮮明でないが表面の全面に円形の突起がある。種の同定はできないが種子圧痕とみられる。圧痕は長さ2.7㎜，幅2.5㎜を測る。

・資料26（遺物番号9621・Fig.1-26）

土器：粗製深鉢形土器の胴部破片。外面は横位の貝殻条痕調整，ススが付着している。内面は丁寧な横ナデ調整。胎土には多量の砂粒を混入する。焼成は良好，色調は外面が褐色，内面黄白色をなす。Ⅲ層出土。

圧痕：内面の左上方と下端中央の断面中の２カ所にある。共に圧痕内面は圧痕主体の燃焼による二次加熱によって黒変している。実体顕微鏡による観察では，圧痕１は不整楕円形をなし，圧痕内面の凹凸が著しく種子であるとは見えない。圧痕２は断面中に半分を残すのみであるが，圧痕の周囲に沿って浅い溝が巡り，種子圧痕であろうと思われた。Fig.3に走査電子顕微鏡写真を示した。圧痕１は長さ4.5㎜，幅2.1㎜の不整楕円形をなす。表面に凹凸があり，組織も観察できないので種子圧痕とはみられない。何であるかは不明。圧痕２は半円状をなし，縁取りがあり，全体に円盤形をなし，中央部がややふくらんでいる。全体形が明らかでなく種の同定はできない。長さ4.9㎜，幅2.6㎜＋α，厚さ1.2㎜を測る。

・資料27（遺物番号9790・Fig.1-27）

土器：精製浅鉢形土器の肩部から胴下半の小破片。肩部と胴下半の境に緩やかな稜線ができる。肩部は横位の丁寧なヘラ研磨調整，胴下半は横位の貝殻条痕調整の上に横位のヘラ研磨調整を加えている。内面も横位の丁寧なヘラ研磨調整である。胎土は少量の砂粒を混入するが精製され極めて良質。焼成は堅緻。色調は外面が黄褐色，内面は黒色をなす。Ⅳ層出土。

圧痕：内面の右下方隅に２カ所存在する。上方の圧痕は土器の割れ口にかかり全形を知ることはできないが大型，下方の圧痕は小型で楕円形をなす。共に圧痕の内側は圧痕主体の燃焼による二次加熱で黒く変色している。レプリカの走査電子顕微鏡写真はFig.3に示した。共に長軸に走る繊維状の線が観察されるが，形状等からは種子とは考えがたい。木片の圧痕と考えられる。

・資料28（遺物番号10145・Fig.1-28）

土器：粗製深鉢殻土器の頸部破片。外面は横位の貝殻条痕調整，３本の横方向の沈線を施す。部分的にススが付着する。内面は丁寧な横ナデ調整。胎土に砂粒を混入しているが良質。焼成は良好。色調は内外面共に黄褐色をなす。Ⅳ層出土。

圧痕：内面の下辺中央部の断面に確認した圧痕である。割れ口の断面にあるため全形を残していない。完全に胎土中に入っていて元来は表面には現れていなかったと考えられる。圧痕部は圧痕主体の燃焼による二次加熱によって黒変し，圧痕の周囲の胎土も１～２㎜にわたって黒変している。圧痕の保存状態は極めて良好，実体顕微鏡では楕円形の凹みが３カ所接して存在し，凹みの中にさらに小さい円形の点刻が観察できるが，何の圧痕かは判別できず，昆虫あるいはそれに類似したものの圧痕と考えた。圧痕のレプリカを作成して走査電子顕微鏡で観察した。写真はFig.3に示した。写真からは見慣れない生物の部分と考えられる姿が現れ，何であるか苦慮したが，眼と考えられる複数の円形の隆起

部の存在や脚の状態からクモ類の圧痕という考えにいたり，検討した結果，紛れもなくクモ類の圧痕であることが判明した。圧痕として遺存している部分は上顎，頭胸部，脚部の一部である。上顎は強大で基部は丸くふくらむ。先端部を欠失しているが，現存長1.3㎜。眼は前列は４カ所が完存している。わずかに前曲，前中眼は前側眼より小さい。後列は剥離している。頭胸部は現存長2.8㎜。脚部では触肢と第１脚，第２脚の歩脚基節部分が残っている。現存する特徴はフクログモ科フクログモ属ハマキフクログモに近いが断定はできない。ハマキフクログモは５～６月頃，イネなどイネ科植物の細い葉を三つ折りに曲げ産室を作る。草原，あぜ道，水田に多くみられるもっとも普通なフクログモである。なお，東京大学大学院の馬場友希氏からは，ナミハグモ科あるいはガケジグモ科のクモの可能性もあることを教示していただいた。

・資料29（遺物番号10381・Fig. 1-29）

土器：大型の粗製深鉢形土器の胴部破片。外面は横位のヘラ削り状の調整，器面の凹凸が著しい。内面は横位のヘラ削り状の調整の上に丁寧な横位のヘラ研磨調整を加える。胎土には少量の砂粒を混入するが良質。焼成は良好。色調は内外面共に黄褐色をなし，外面の一部に黒斑がある。Ⅳ層出土。

圧痕：外面の右上の隅近くに確認した圧痕である。圧痕には胎土中に入り込み，圧痕主体の燃焼によってわずかに黒変している。開口部は長さ4.6㎜，幅1.7㎜の細長い紡錘形をしている。実体顕微鏡の観察では長軸に沿って細かい条線が確認できる。圧痕のレプリカを作製し，走査電子顕微鏡で観察した。写真はFig.3に示した。全体に遺存状態が悪く判然としないが，左側に吻と思われる突起部があり，頭部・前胸背板・上翅がかすかに判別でき，拡大写真では点刻列と考えられる部分が観察でき，他の例と比較し，コクゾウムシの圧痕である可能性が強い。吻まで含めた全長4.8㎜，幅1.4㎜を測る。

・資料30（遺物番号10546・Fig. 1-30）

土器：粗製浅鉢形土器の底部付近の破片。外面には蓆状の圧痕が明瞭に残る組織痕土器である。内面はヘラナデ調整。胎土には砂粒を多量に混入し良質ではない。焼成は良好。色調は外面が黄土色，内面が赤褐色をなす。Ⅳ層出土。

圧痕：内底部中央部に存在する。圧痕は胎土中に深く入り込んでいる。開口部は長さ4.7㎜，幅2.3㎜。端部がやや丸みをもった紡錘形をなす。実体顕微鏡で圧痕の内側を見るとかなりの凹凸がみられ，何であるか確定できなかったので，レプリカを作製し走査電子顕微鏡で観察した。写真はFig.3に示した。写真からもわかるように，形状的には種子に見えるが，組織等は観察できず，何であるかは不明。

・資料31（遺物番号10824・Fig. 1-31）

土器：精製浅鉢形土器の頸部付近の破片。胴下半部と肩部の境に稜線を作り出し，肩部は短く内傾し，頸部で屈曲し，口縁に向かって大きく外反する。内外面共に横位の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精製され極めて良質。焼成は堅緻。色調は外面が赤褐色～黒色，内面が黒褐色をなす。Ⅳ層出土。

圧痕：内面右側の屈曲部直下に存在する。圧痕は胎土中に深く入り込み，表面には3.7×2.0㎜の不整楕円形の穴があいている。圧痕内面は圧痕主体の燃焼による二次加熱によって黒変している。実体顕微鏡の観察では内面に凹凸があり種子等の圧痕ではないと考えたが，念のためレプリカを作製した。走査電子顕微鏡で観察したが，圧痕は土器表面の研磨によりかなり変形していて，また，拡大しても組織が確認できない。何の圧痕であるかは不明。

3．まとめ

レプリカを作製し，走査電子顕微鏡で観察した圧痕の一覧表はFig.4に示した。これらの中で明らかに圧痕とみられるのは20例で，15例は木片あるいは不明としたものである。

20例の圧痕の内訳を示すと，コクゾウムシ２例，昆虫の幼虫１例，クモ類１例，ドングリ類４例，イネ（？）１例，イネ科植物４例，ワクド石タイプ１例，シソ・エゴマ１例（実物），その他５例である。いずれも晩期・黒川式土器に伴う例であり，極めて興味深い。

コクゾウムシはイネ・ムギ・トウモロコシなど貯蔵された穀類の害虫で，世界共通種とされている。コクゾウムシの存在は，縄文農耕の存在を示す有力な資料である。縄文時代の遺跡でコクゾウムシの圧痕が確認されているのは，本遺跡を含めて，熊本県石の本遺跡，鹿児島県柊原貝塚等５遺跡である。いずれの場合も脚がもげている。これはコクゾウムシが粘土に入った後，生地づくりのため粘土を練る時に手足がもげたと考えられ，土器とコクゾウムシの同時性を示していると考えている。種子圧痕については，遺存状態が悪くイネとは同定できないが，極めてイネに近い圧痕例（資料17）があることは注目されよう。この他イネ科植物の中で，カモジグサ属とみられる圧痕やワクド石タイプの圧痕は他遺跡においてもみられ，その出現率は高い。今後検討を必要とする圧痕である。珍しい圧痕例として昆虫の幼虫やクモ類があるが，いかなる理由によって圧痕となったかは明らかでない。

Fig.4　肥賀太郎遺跡出土土器圧痕一覧表

No.	土器番号	層位	器形部位	圧痕面	圧痕	長幅
1	115	Ⅱ	深鉢胴部	内	コクゾウムシ	長3.5㎜
2	354	Ⅱ	浅鉢胴部	外	貝殻	
3	390	Ⅱ	深鉢胴部	外	不明	
4	582	Ⅱ	深鉢口縁	外	昆虫の幼虫	長5.1㎜　幅1.4～2.0㎜
5	1748	Ⅱ	深鉢胴部	外	ドングリ類	長5.18㎜　幅2.68㎜
6	1879	Ⅱ	深鉢底部	外	イネ科（カモジグサ属）	長3.6㎜　幅1.8㎜
7	1919	Ⅱ	浅鉢胴部	内	不明	
8	2604	Ⅱ	深鉢胴部	内	不明	
9	2630	Ⅱ	深鉢胴部	外	イネ科	長2.8㎜　幅1.4㎜
10	4791	Ⅳ	浅鉢胴部	外	カモジグサ属	長4.9㎜　幅1.6㎜
11	5082	Ⅳ	深鉢	外	ドングリ類	
12	5714	Ⅲ	深鉢	内	木片	
13	5837	Ⅲ	浅鉢	内	木片	
14	6538	Ⅲ	浅鉢	外	木片	
				外	木片	
				内	シソ・エゴマ	長2.0㎜　幅1.4㎜　実物
15	6966	Ⅲ	深鉢	内	ワクド石タイプ	長3.9㎜　幅1.6㎜
16	7129	Ⅳ	浅鉢	外	不明	
17	7432	Ⅲ	深鉢底部	外	イネ(？)	長4.8㎜　幅1.3㎜
18	7767	Ⅲ	深鉢口縁	内	木片	
19	7836	Ⅳ	深鉢口縁	外	種子	長6.0㎜　幅0.5～1.4㎜
20	7922	Ⅲ	深鉢底部	外	イネ科	長4.0㎜　幅1.6㎜
21	7935	Ⅳ	深鉢胴部	内	ドングリ類	
22	7942	Ⅳ	深鉢胴部	内	種子	長2.8㎜　幅2.4㎜
					不明	
23	8133	Ⅲ	浅鉢口縁	内	ドングリ類	
24	9277	Ⅲ	浅鉢肩部	内	不明	
25	9485	Ⅲ	深鉢胴部	外	種子	長2.7㎜　幅2.5㎜
26	9621	Ⅲ	深鉢胴部	内	不明	
				断面	種子	長4.9㎜　幅2.6㎜　厚1.2㎜
27	9790	Ⅳ	浅鉢肩部	内	木片	
28	10145	Ⅳ	深鉢頭部	内	クモ類	
29	10381	Ⅳ	深鉢胴部	外	コクゾウムシ	長4.8㎜　幅1.4㎜
30	10546	Ⅳ	浅鉢底部	内	不明	
31	10824	Ⅳ	浅鉢頭部	内	不明	

報告書抄録

ふりがな	ひがたろういせき
書名	肥賀太郎遺跡
副書名	県道愛野島原線上流付替工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第189集
編著者名	中尾篤志・山崎純男・片多雅樹
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850－8570　長崎市江戸町２－13　TEL095－824－1111
発行年月日	西暦2006年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
肥賀太郎遺跡（ひがたろう）	島原市（しまばらし） 北千本木町（きたせんぼんぎまち）	203	92－84	32° 47′ 11″	130° 19′ 6″	050920 ～ 051220	1,700	県道付替 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
肥賀太郎遺跡	遺物包蔵地	縄文晩期		縄文土器・石器	

要約	標高約270mの緩斜面に立地する縄文時代晩期の遺跡。縄文土器・石器併せて約12,000点が出土。黒川式併行期の土器がまとまって出土している。また，土器圧痕ではコクゾウムシなどを検出し，島原半島におけるこの時期の穀物の存在が明確となった。石器ではスクレイパー類・石鏃・打製石斧・石皿などが出土している。

長崎県文化財調査報告書　第189集

県道愛野島原線上流付替工事に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

肥賀太郎遺跡

平成18年（2006）３月発行

発行者　長崎県教育委員会
〒850-8570　長崎市江戸町２番13号
☎095－824－1111

印刷所　株式会社　昭和堂
長崎県諫早市長野町1007-２
☎0957－22－6000